

田村西遺跡

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書V

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書X)

2013.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

田村西遺跡

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ)

2013.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成16年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局の業務委託を受けた一般国道55号自動車専用道路(高知東部自動車道)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しております。この事業は、高知南国道路と南国安芸道路にわかれますが、今回報告する田村西遺跡は前者の計画路線上に位置するものです。

田村西遺跡は、高知県教育委員会が実施した試掘確認調査により新たに発見された遺跡です。調査では弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物跡などがみつかりました。近接する田村遺跡群の弥生時代の集落は中期末から後期初頭に最盛期を迎え、その後急速に衰退していき、人々は長岡台地上に拡散していくと考えられています。今回の調査結果により、田村遺跡群周辺にも継続して居住したことが明らかとなりました。

永く土の中に眠っている埋蔵文化財は発掘調査を行うことにより先人の知恵や文化を語り出します。本報告書が多くの人々に埋蔵文化財や歴史により関心と理解をもたらし、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたってご配慮とご協力を頂いた地域の皆様方や関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

公益財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 森田尚宏

例言

1. 本書は(財)高知県文化財団(現、公益財団法人 高知県文化財団)が高知県教育委員会の委託を受けて平成22年度に実施した田村西遺跡の発掘調査報告書(『田村西遺跡』)である。
2. 発掘調査は、高知東部自動車道高知南国道路建設に伴うもので、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 田村西遺跡は高知県南国市大楠乙に所在する弥生時代から近世の遺跡である。
4. 調査面積は8,700㎡、調査期間は平成22年5月26日から平成23年1月28日であった。整理作業及び報告書作成は平成23・24年度に実施した。
5. 発掘調査・整理作業は以下の体制で行った。

平成22年度

総括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏, 同総務課長 里見敦典, 同主任 弘末節子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三, 同調査第一班長 山本哲也, 同主任調査員 久家隆芳,
同技術補助員 坂本憲彦, 同測量補助員 岩原明美
事務補助員：奥宮千恵子

平成23年度

総括：埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 嶋崎るり子, 同総務課長 里見敦典, 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 出原恵三, 同主任調査員 久家隆芳
事務補助員：奥宮千恵子

平成24年度

総括：埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 嶋崎るり子, 同総務課長 里見敦典, 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第一班長 出原恵三, 同主任調査員 久家隆芳
事務補助員：奥宮千恵子

6. 本書の執筆、編集は久家が行った。現場写真は出原、山本、久家が撮影し、遺物写真は久家が撮影した。
7. 遺構については、ST(堅穴建物跡)、SK(土坑)、SD(溝跡)、SX(性格不明遺構)、P(ピット・柱穴)の略号を使用した。掲載している挿図の縮尺はそれぞれに記載しており、方位Nは世界測地系による座標北である。
8. 遺物の縮尺は1/4を基本としている。一部の遺物については、1/2(鉄器等)、1/1(石鏃等)に縮尺を変えており、各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は通し番号とした。
9. 発掘作業、整理作業は次の方々に行って頂いた。また、(公財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター諸氏より貴重な助言を頂いた。記して感謝する次第である。

発掘作業：現場作業員 大谷美恵子, 大原末廣, 岡上富子, 岡本隆夫, 荻谷和男, 荻谷和子,
久留米浩治, 小松喜美, 坂野奉宏, 澤本昌明, 島村孝男, 島村信子,
高田 修, 武内順一, 武内昌子, 田中 穰, 中谷智賀子, 濱口和子,
濱田友喜, 古谷八郎, 山本竹利, 吉田 司 (50音順)

整理作業：整理作業員 岡宗真紀, 川谷文香, 久家朋子, 小林貴美, 中西純子, 松田美香 (50音順)

10.調査略号は「10-4NTN」とし、遺物の注記もこれによった。また、出土遺物等の資料は高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 田村西遺跡周辺の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過と調査方法	
1. 調査に至る経過	5
2. 調査方法	5
第Ⅲ章 調査成果	
1. 基本層序と調査概要	7
2. ST	12
3. SK	20
4. SD	21
5. SX	59
6. P	60
7. 遺構外出土遺物	62
第Ⅳ章 自然科学分析	
1. 田村西遺跡の自然科学分析	63
2. 田村西遺跡出土土器の胎土分析	77
第Ⅴ章 まとめ	
1. 時期別の特徴	83
2. 土製支脚について	85
遺構計測表	93
遺物観察表	103

挿図目次

図 1	南国市位置図	1
図 2	田村西遺跡周辺の遺跡 (S=1/50,000)	3
図 3	調査区配置図 (S=1/800)	6
図 4	I A・B区北壁断面図	8
図 5	II C区西壁断面図	9
図 6	II G①・③区北壁断面図	10
図 7	遺構全体図	11
図 8	ST1・2平面図・断面図	13
図 9	ST1・2出土遺物実測図	14
図 10	ST3平面図・断面図・出土遺物実測図	15
図 11	ST4炭化材・炭化物出土状況図	16
図 12	ST4平面図・断面図	17
図 13	ST4出土遺物実測図	19
図 14	SK1平面図・断面図・出土遺物実測図	20
図 15	SK8出土遺物実測図	21
図 16	SK9出土遺物実測図	21
図 17	SD1・4～6断面図・出土遺物実測図	22
図 18	SD2断面図	24
図 19	SD2出土遺物実測図1	25
図 20	SD2出土遺物実測図2	27
図 21	SD2出土遺物実測図3	28
図 22	SD2出土遺物実測図4	29
図 23	SD2出土遺物実測図5	31
図 24	SD2出土遺物実測図6	33
図 25	SD2出土遺物実測図7	34
図 26	SD2出土遺物実測図8	35
図 27	SD2出土遺物実測図9	36
図 28	SD2出土遺物実測図10	36
図 29	SD3・7断面図	36
図 30	SD7断面図・出土遺物実測図	37
図 31	SD8断面図	37
図 32	SD14出土遺物実測図	37
図 33	SD16断面図・出土遺物実測図	38
図 34	SD17断面図・出土遺物実測図	38
図 35	SD18・21断面図	38

図36	SD18出土遺物実測図1	39
図37	SD18出土遺物実測図2	40
図38	SD18出土遺物実測図3	41
図39	SD19断面図・出土遺物実測図	42
図40	SD21出土遺物実測図	43
図41	SD22断面図・出土遺物実測図	43
図42	SD24～28断面図	44
図43	SD24～27断面図	45
図44	SD24出土遺物実測図	46
図45	SD25出土遺物実測図1	47
図46	SD25出土遺物実測図2	48
図47	SD25出土遺物実測図3	49
図48	SD25出土遺物実測図4	50
図49	SD26出土遺物実測図	51
図50	SD25・26出土遺物実測図	52
図51	SD27断面図・出土遺物実測図	53
図52	SD28断面図・出土遺物実測図	53
図53	SD34出土遺物実測図	54
図54	SX2平面図	55
図55	SX2断面図	56
図56	SX2エレベーション図1	57
図57	SX2エレベーション図2	58
図58	SX2出土遺物実測図	59
図59	SD33出土遺物実測図	59
図60	SX3出土遺物実測図	59
図61	P29～31平面図・エレベーション図・出土遺物実測図	60
図62	遺構外出土遺物実測図	61
図63	田村西遺跡の試料採取地点位置図	66
図64	SD2・26断面図および試料採取層準の柱状図	66
図65	花粉分析群集	69
図66	植物珪酸体含量	70
図67	炭化材サンプル採取位置	72
図68	遺跡出土土器の比較 (K-Ca 散布図)	79
図69	遺跡出土土器の比較 (K-Ti 散布図)	79
図70	各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較 (K-Ca 散布図)	79
図71	各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較 (K-Ti 散布図)	79
図72	支脚形態分類	85

表目次

表 1	田村西遺跡周辺の遺跡一覧	3
表 2	珪藻分析結果	67
表 3	花粉分析結果	68
表 4	植物珪酸体含量	69
表 5	種実同定結果	71
表 6	樹種同定結果	73
表 7	田村西遺跡出土ヒビノキ式土器の胎土分析結果 (Si ~ P : %, Rb ~ Zr : ppm)	80
表 8	田村西遺跡組成比率	83
表 9	介良野遺跡・伏原遺跡Ⅱ組成比率	84
表 10	A類支脚一覧	89
表 11	B類支脚一覧	89
表 12	C類支脚一覧	89
表 13	D類支脚一覧	90
表 14	E類支脚一覧	90
表 15	F類支脚一覧	90
表 16	G類支脚一覧	90

写真図版目次

- | | | |
|-------|--|---|
| 図版 1 | 空中写真 西方向から
空中写真 北方向から | II D 区 ST4 炭化材出土状況 |
| 図版 2 | 調査前風景
I A 区東 完掘状況 | 図版 12 II D 区 ST4 炭化材出土状況 |
| 図版 3 | I A 区西 完掘状況
I C 区 完掘状況 | 図版 13 II D 区 ST4 炭化材出土状況
II D 区 ST4_P4 炭化物検出
II D 区 ST4 断面 |
| 図版 4 | II A 区 完掘状況
II B 区 完掘状況 | 図版 14 II D 区 ST4_中央P1 断面
II D 区 ST4_中央P2 断面
II D 区 ST4_中央P1 遺物出土状況 |
| 図版 5 | II C 区 完掘状況
II E 区 完掘状況 | II D 区 ST4_SD3 断面
II F 区 SK9 遺物出土状況 |
| 図版 6 | I A 区西 北壁
II C 区 東壁 | 図版 15 I A 区 SD1・4～6バンク (E35-21-13)
I A 区 SD1・4～6バンク (F35-1-3 他) |
| 図版 7 | II G①区 西壁
II G③区 北壁 | 図版 16 I A 区 SD2バンク 1 断面 (E34-25-10)
I A 区 SD2バンク 2 断面 (E35-21-1) |
| 図版 8 | II E 区 ST1・2完掘状況
II E 区 ST1_中央P1・ST1_P22 断面
II E 区 ST1_中央P2 断面
II E 区 ST2_中央P1 断面
II E 区 ST2_中央P1 炭化物検出 | 図版 17 I B 区 SD2完掘状況
I A 区 SD2 遺物出土状況 |
| 図版 9 | II E 区 ST1_SD1 断面
II E 区 ST1_SD2・ST2_SD6 断面
II E 区 ST1_SD3 断面
II E 区 ST1_SD5 断面
II E 区 ST2_SD1 断面
II E 区 ST2_SD3 断面
II E 区 ST2_SD4 断面
II E 区 ST2_SD5 断面 | 図版 18 I A・B 区間 SD2 遺物出土状況
I A 区 SD2 遺物出土状況
I B 区 SD2 遺物出土状況
I A 区 SD3 断面 (E35-16-11)
I B 区 SD3 断面 (E34-20-6)
I C 区 SD3 断面 (E34-18-10)
I C 区 SD3 断面 (E34-19-1) |
| 図版 10 | II E 区 ST3完掘状況
II F 区 ST3東西断面
II E 区 ST3東西断面
II E 区 ST3_P1・3 断面
II E 区 ST3_P5 断面 | 図版 19 I C 区 SD3・7 断面 (E34-23-10)
I C 区 SD7 断面 (E34-14-22)
I C 区 SD7完掘状況
I C 区 SD9完掘状況
II D 区 SD16 遺物出土状況
II D 区 SD16 断面 (E35-23-10)
II D 区 SD16 断面 (E35-23-9)
II D 区 SD17 断面 (F35-8-4) |
| 図版 11 | II D 区 ST4完掘状況 | 図版 20 II C 区 SD18 遺物出土状況 (F35-4-12)
II C 区 SD18・21 断面 (E35-24-22) |

	II C区 SD19断面 (F35-4-21)	図版 27	出土遺物 (15・25・31・70・72)
	II C区 SD20断面 (F35-4-17)	図版 28	出土遺物 (73・74・83・105・133・134)
図版 21	II B区 SD22完掘状況	図版 29	出土遺物 (135～138・143・163/223)
	II A区 SD22完掘状況 (F35-10-9)	図版 30	出土遺物 (171・172・189・190・191・192)
	II A区 SD22断面 (F35-10-9)	図版 31	出土遺物 (216・217・238・240・272・273)
	II B区 SD22断面 (E35-25-20)	図版 32	出土遺物 (24・26・27・52・102・205・ 1/235/274/289)
図版 22	II B・C区間 SD24～26 (E35-24-19・ E35-24-20)	図版 33	出土遺物 (6・9・10・18・22・23・28・41)
	II B区 SD25・26完掘状況	図版 34	出土遺物 (42・57・106～108・110・ 115～117・125)
図版 23	II B・C区間 SD25遺物出土状況	図版 35	出土遺物 (126・128・130・132・139・141・ 146・147)
	II B・C区間 SD25・26完掘状況	図版 36	出土遺物 (148～152・154・178・180)
図版 24	II B区 SD27完掘状況	図版 37	出土遺物 (183・196～198・225・227・ 250・251)
	II B区 SD27断面 (F35-4-5)	図版 38	出土遺物 (252・255/256・266～270)
	II B区 SD28完掘状況	図版 39	出土遺物 (283・293・294・300・302～304)
	II B区 SD28断面 (F35-5-1)	図版 40	出土遺物 (庄内式土器集合・打製石鏃集合)
	II B区 SX2完掘状況	図版 41	花粉化石
図版 25	II B区 SX2完掘状況	図版 42	植物珪酸体・珪藻化石
	II B区 SX2断面 (E35-25-16)	図版 43	炭化材(1)
図版 26	II B区 SX2断面 (E35-25-16)	図版 44	炭化材(2)
	II G①区 SD32断面 (E35-25-14)	図版 45	種実遺体
	II E区 P29～31	図版 46	田村西遺跡出土ヒビノキ式土器の胎土 観察写真
	II E区 P31遺物出土状況		
	II F区 P35完掘状況		
	II F区 P35断面		

付図目次

付図	田村西遺跡遺構平面図 (S=1/300)
----	----------------------

第 I 章 田村西遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

田村西遺跡が所在する高知県南国市は、高知市に隣接する。面積約 125km²、人口約 50,000 人であり、高知市につぐ人口規模である。物部川右岸沿いに南北に長く、南は太平洋に面し、北は四国山地へと続き、異なった地勢が複合的に組み合わさり、それぞれの自然環境を活かした文化を育んできている。市域の南半部は物部川により形成された高知県下最大規模の沖積扇状地である香長平野がひろがっている。この沖積扇状地は縄文時代前期には形成されていたと考えられている。当地域では温暖な気候のもと、沖積地内の名残川を灌漑等に利用した水田耕作が行われてきた。現在ではハウス園芸が増加しているが、広大な水田がひろがり高知県の穀倉地帯であることに変わりはない。一方、工場団地の造成などハイテク産業の育成にも力が注がれている。また、高知龍馬空港があり、空の玄関口の役割も果たしている。

2. 歴史的環境

(1) 旧石器時代

県中央部では、高間原 1 号墳(高知市)の石室からチャート製の細石刃核が発見されているのみであった。その後、岩陰遺跡である奥谷南遺跡からナイフ形石器、細石刃がまとまって出土している。他にも、新改西谷遺跡(香美市)からナイフ形石器、林田遺跡(香美市)から珪質頁岩の角錐状石器が出土している。高間原 1 号墳を除くと国分川水系、物部川水系の河岸段丘上に遺跡は立地している。

(2) 縄文時代

草創期では奥谷南遺跡、早期では飼古屋岩陰遺跡(香美市)、奥谷南遺跡、刈谷我野遺跡(香美市)、新改開キ丸遺跡(香美市)、美良布遺跡(香美市)が物部川等の河岸段丘上に認められ、旧石器時代と同様の立地を示す。中期以降では奥谷南遺跡、田村遺跡群、祈年遺跡で確認され、低位段丘、沖積平野でも遺跡がみられるようになる。

中期の奥谷南遺跡では、ドングリピットが検出されている。後期の田村遺跡群では鐘崎Ⅱ式がまとまって出土しており、九州島との関連が認められる。また、栄エ田遺跡では、後期から晩期の遺物が出土し、蛇紋岩の磨製石斧が多数出土している。

(3) 弥生時代

田村遺跡群に前期初頭の集落が出現し、高知平野の弥生時代が始まる。弥生文化は田村遺跡群から周辺部へ



図1 南国市位置図

浸透していく。前期前葉では介良遺跡(高知市), 介良野遺跡(高知市), 前期末では岩村遺跡群, 中期初頭ではミトロ遺跡(高知市)等, 放棄流路周辺部の沖積平野に遺跡が展開する。中期末から後期初頭にかけては田村遺跡群が大規模集落へと発展し, 周辺に西野々遺跡等の中規模集落が営まれ, 高知平野の弥生文化は最盛期を迎える。田村遺跡群には銅鏡, 銅矛, 銅鐸, 銅釧など多種類の青銅器がもたらされ, その求心力の強さを示している。しかし, 後期中葉になると田村遺跡群は急激に衰退し, 高知平野全体でも遺跡数が減少していき, 集落の再編成が始まる。その後, 後期末から古墳時代初頭にかけて遺跡数は増加し, 台地上, 沖積平野に中規模から小規模な集落遺跡が営まれ, 再び活況を呈する。台地上には小籠遺跡, 祈年遺跡, 東崎遺跡, 伏原遺跡(香美市), ひびのき遺跡(香美市), ひびのきサウジ遺跡(香美市)が, 沖積平野には介良野遺跡(高知市), 西野々遺跡, そして田村西遺跡が営まれる。しかし, ほとんどの集落遺跡は古墳時代前期まで継続せず廃絶され, 高知平野の弥生時代は終焉を迎える。

(4)古墳時代

高知平野には前期古墳は確認されていないが, 中期古墳は狭間古墳と長畝2号墳の2基のみである。古墳時代後期になると香長平野を取り巻く丘陵上に多くの古墳が築かれ, 高知県内でも古墳の密集地域を形成する。土佐三大古墳に数えられている明見彦山1号墳, 小蓮古墳が所在し, 当地域一帯を代表する地域首長の墳墓として位置づけられている。また, 県下最大規模の群集墳である舟岩古墳群(TK43～TK217型式)が築造されている。一方, 集落遺跡数は古墳数の増減と軌を一にした動態を示す。古墳時代前期以降, 竪穴建物跡はごく僅かである。小籠遺跡, 介良遺跡などで初期須恵器が出土しているものの集落跡の実態は不明である。後期になると国衙跡では40軒以上, 祈年遺跡では約30軒の竪穴建物跡が検出される等, 高知平野での調査例は増加する。

(5)古代

国分川が南への流れを西方向へ変換させる場所に国衙跡, 国分寺, 比江廃寺の中核施設が集まっている。他にも野中廃寺, 式内社の植田神社, 国史蹟在社の祈年神社が所在する土佐の中心地である。国衙跡は周辺に残るホノギ等から比定されているものの, 31次を数える国衙跡の発掘調査で政庁跡と確定できる建物跡は確認されていない。また, 香長平野にはN-12°Eを基本とする香長条里が基盤目状に残っている。田村遺跡群では, 75棟の建物跡が検出され, 8世紀中頃～9世紀前半, 10世紀～11世紀の2時期に機能していた。826年に田村庄が神護寺の荘園となったことが史料にみえ, 上記の建物群と関連付けられている。西野々遺跡でも, 約100棟の掘立柱建物跡が検出されている。これらの建物群は8世紀中頃に出現し, 8世紀後半～9世紀に最盛期を迎え, 10世紀までは維持されていた。「コ」の字形の配置も認められ, 官衙的な建物跡と推測される。下ノ坪遺跡(香南市)は, 物部川左岸に位置する遺跡である。8世紀中頃～9世紀中頃まで存続する遺跡である。9世紀前半～中頃にかけて最盛期を迎える。桁行16.4m, 梁行8.4mの規模を有する, 県下でも最大規模の掘立柱建物跡をはじめ, 多くの掘立柱建物跡が検出され整然とした配置が認められる。四仙騎獣八稜鏡片, 緑釉陶器の火舎等の特筆すべき遺物が出土している。他にも, 製塩土器, 土錘が多量に出土していることも下ノ坪遺跡の特徴の一つである。田村遺跡群と下ノ坪遺跡は, 物部川を強く意識した立地であり, 物資の集積・集散の機能を果たすものと位置づけられている。祈年遺跡でも, 官衙関連の建物跡, 道路状遺構が発



図2 田村西遺跡周辺の遺跡(S=1/50,000)

表1 田村西遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	西野々遺跡	弥生～近世	16	住吉山3・4号墳	古墳	31	上岡北遺跡	弥生・近世
2	関町田遺跡	弥生	17	吾岡山古墳	〃	32	上岡遺跡	弥生・平安
3	田村遺跡群	縄文～近世	18	吾岡山南遺跡	古墳～平安	33	下ノ坪遺跡	弥生～古代
4	里改田遺跡	弥生～中世	19	カントマリ遺跡	縄文～平安	34	北地遺跡	弥生～中世
5	中組遺跡	〃	20	大篠遺跡	弥生	35	西野遺跡群	弥生～古代
6	秋葉山南平古墳	古墳	21	介良野遺跡	弥生・古墳	36	深淵遺跡	弥生～中世
7	井川山1・2号墳	〃	22	狸岩1～3号墳	古墳	37	深淵北遺跡	〃
8	馬背古墳	〃	23	明見彦山1～3号墳	〃	38	岡豊城跡	中世
9	馬背東1・2号墳	〃	24	竹ノ後遺跡	弥生・古墳	39	小蓮古墳	古墳
10	馬背西1号墳	〃	25	小籠遺跡	弥生～近世	40	国分大塚古墳	〃
11	丸山古墳	〃	26	越戸1・2号墳	古墳	41	土佐国分寺跡	古代
12	坂ノ松古墳	〃	27	野中廃寺跡	平安	42	土佐国府跡	〃
13	丸山五輪塔	〃	28	折年遺跡	縄文～近世	43	比江廃寺	〃
14	住吉山1号墳	〃	29	年越山1～3号墳	古墳	44	金地遺跡	弥生
15	住吉山2号墳	〃	30	東崎遺跡	弥生～中世	45	岩村土居城跡	弥生～中世

見されている。田村西遺跡は長岡郡大埴郷に属し、遺跡の東には長岡郡と香美郡をわける南北道が走っている。

(6)中世

田村城館は守護代である細川氏の居館とされ、その南側には溝で囲まれた33ヵ所の家臣団屋敷が形成されている。田村城館は約200m四方以上の規模を有し、二重の堀で囲まれた構造を持ち、外堀は幅約4m、深さ約3.5m、内堀は幅約7m以上の規模を有する。内郭部は南北約130m、東西約120mの規模を持つ。特筆すべき遺物として李朝青磁が出土している。田村城館を中心に千屋城跡、岩村土居城跡などと連携しながら土佐国の統治を行っていた。岩村土居城跡は二重の堀跡に囲まれ、堀は物部川と連結し、河川交通を意識した立地・構造を有している。中世後期になると長宗我部氏の台頭により岡豊城跡へと拠点は移るが、田村周辺の重要性はなお継続している。

(7)近世・近代

田村遺跡群では、近世後期の屋敷跡、墓が検出されている。中世までとは異なった農村がひろがり、近現代の景観が形成されたと考えられる。

向山戦争遺跡では、塹坑、交通壕、退避壕、重機関銃の銃座、貫通坑、横穴が検出され、尾根上に築かれた観測所と防空陣地と坑道で構成された陣地跡が復元されている。カスガイ、ガイシ、薬莖等が出土している。戦争遺跡単独での発掘調査は、初めてのことであり画期的な調査である。また、高知龍馬空港周辺には7基の掩体壕遺構が残され、南国市の史跡に指定されている。

主な参考文献

1979『南国市史』南国市

1991『東崎遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団

1996『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

池澤俊幸2000「土佐における古代前期の建物群」『古代文化』52-6

1997『介良遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

1997『岩村遺跡群Ⅱ』南国市教育委員会

1999『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会

荻慎一郎・森公章・市村高男・下村公彦・田村安興2001『高知県の歴史』山川出版社

2004『田村遺跡群Ⅱ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

2006『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学人文学部考古学研究室

2007『介良野遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

2008『土佐国衙跡発掘調査報告書 第13集』高知県南国市教育委員会

2008『田村城跡 平成16～18年度南国市重要遺跡確認調査』南国市教育委員会

2011『西野々遺跡Ⅱ』『西野々遺跡Ⅲ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

2012『祈年遺跡Ⅳ』(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

第Ⅱ章 調査に至る経過と調査方法

1. 調査に至る経過

高知東部自動車道は、高知市を起点に安芸市までの約 36 km の高規格幹線道路である。他の自動車道、高速道路、高知龍馬空港、高知新港と連結することで広域の交通ネットワークを形成する。陸路輸送が主体を占める現在の状況では、道路が重要な要素であり、道路網の整備は人・文物の交流を活発にし、観光産業を含めた地域の産業振興にも欠くことができないものである。また、災害等による緊急時には救命救急活動、救援物資の輸送を円滑に推進させることができる、「命の道」としての役割も期待される。

田村西遺跡は、高知東部自動車道の建設予定地内において高知県教育委員会が平成 20・21 年度に実施した試掘確認調査により新たに発見された遺跡である。その後、高知県教育委員会と国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所が協議し、事前の発掘調査を行い記録保存することとなった。(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターは高知県教育委員会の委託を受け、平成 22 年度事業として発掘調査を実施した。発掘調査は、調査対象地 8,700m² を平成 22 年 5 月 26 日から平成 23 年 1 月 28 日まで行った。

2. 調査方法

調査区は鎗野川を挟み、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。また、調査区の北側の用水路から南の水田への導水目的の仮設水路が設置されていたため、この水路を避けて調査区を細分し(図 3)、Ⅰ区は東からⅠA区からⅠC区に、Ⅱ区は東からⅡA区からⅡF区とし、Ⅱ区北辺の仮設道路をⅡG区として調査を行った。水田耕作終了後に仮設水路下(ⅠA区、ⅠA区とⅠB区の間、ⅡB区とⅡC区の間の一部)の調査を行った。

調査前の状況は水田であった。試掘確認調査の結果をもとに表土は重機で掘削し、遺構検出及び遺構掘削については人力により掘削した。一部の調査区では、遺構完掘後、高所作業車により全景写真を撮影した。遺構平面図は 20 分の 1 の縮尺で実測した。その他、必要に応じて断面図、遺物出土状況図を作成した。

グリッドの設定は世界測地系に基づく公共座標により 100m 四方の大グリッド、20m 四方の中グリッド、4m 四方の小グリッドを設定した。このグリッドは西野々遺跡からの一連のものであり、測量は世界測地系第 4 座標系(Ⅳ系)の基準点を使用し、 $X = 62,500\text{m}$ 、 $Y = 11,000\text{m}$ (北緯 $33^{\circ} 33' 49''$ 、東経 $133^{\circ} 37' 07''$ 、真北方向角 $-0^{\circ} 03' 56''$)を原点とし、A0(100mグリッド:大グリッド)を組んだ。大中小グリッドの間は「-」で区切って表記している。このグリッド、座標を使用して遺構の平面図、遺物出土状況等の実測、出土遺物の取り上げを行った。

遺構名は、検出及び調査順に連番を付した。基本的には調査時に使用した遺構名で報告を行っているため、欠番が発生している。竪穴建物跡をST、土坑跡をSK、溝跡をSD、性格不明遺構をSX、ピット・柱穴をPの略号としてそれぞれ使用した。

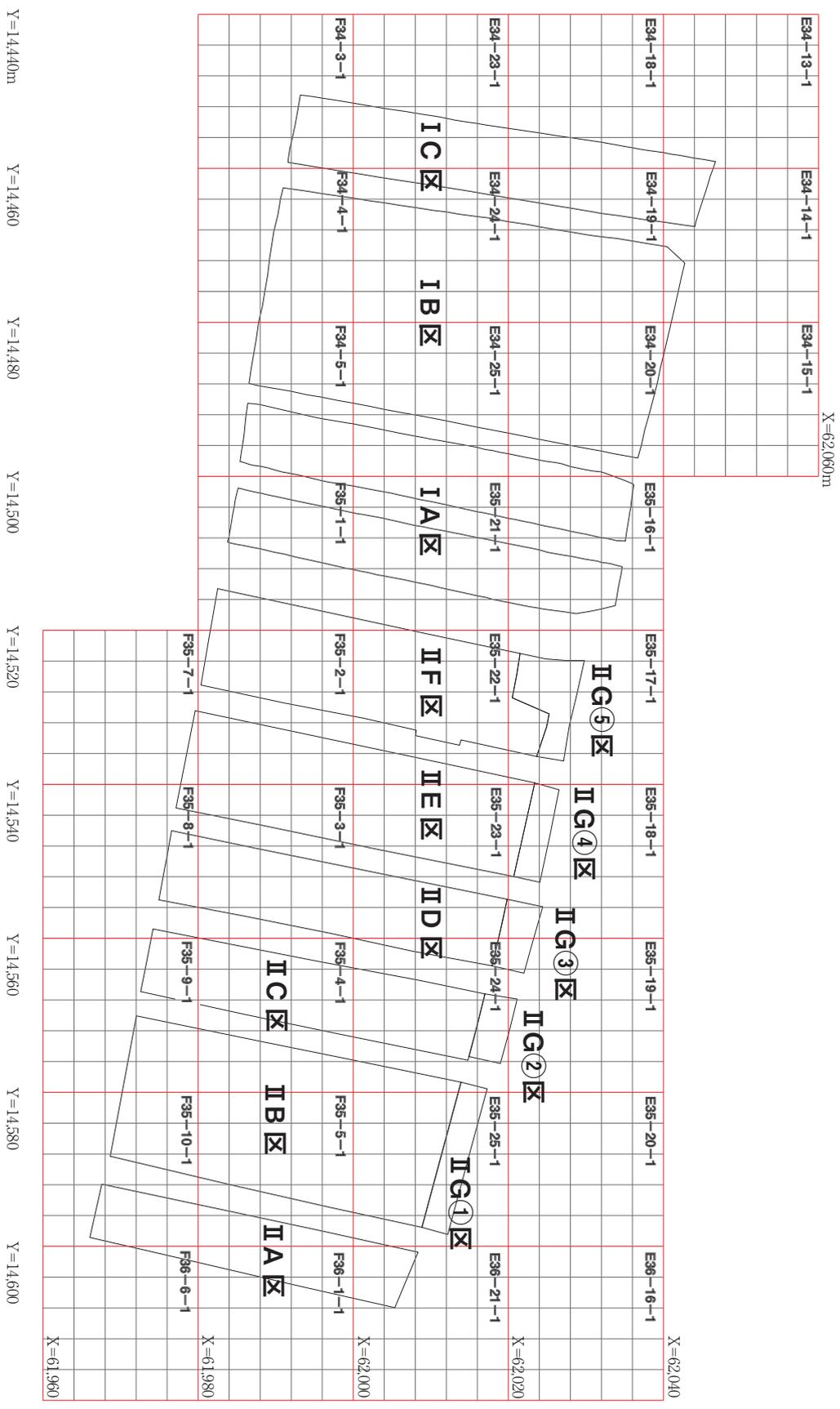


图3 调查区配置图(S=1/800)

第Ⅲ章 調査成果

1. 基本層序と調査概要

基本層序は、ⅠA区とⅠB区の北壁、ⅡC区の西壁、ⅡG区の北壁で確認した。(図4～6)

ⅠA区の基本層序は、①層は黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じりシルト層の耕作土である。②層は褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト層であり、この層の上面で遺構を検出した。③層は浅黄色(2.5Y7/3)細粒砂層、④層は浅黄色(2.5Y7/4)シルト層、⑤層は黄灰色(2.5Y5/1)砂礫層である。

ⅠB区の基本層序は、①層は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じりシルト層の耕作土である。②層は黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト層であり、この層の上面で遺構を検出した。③層は黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂層、④層は灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂混じりシルト層、⑤層は黄灰色(2.5Y5/1)砂礫層である。

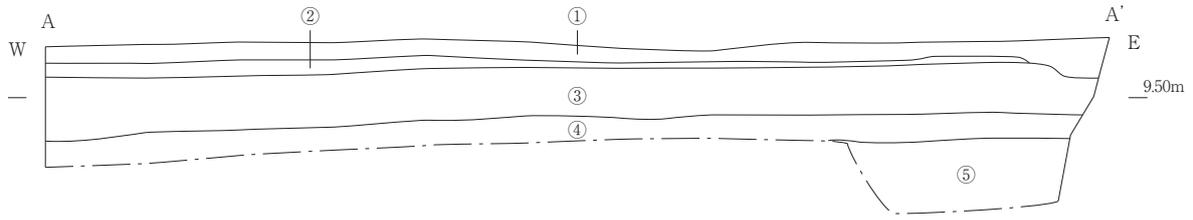
ⅡC区の基本層序は、①層は耕作土である。②層は黒褐色(10YR3/2)粘土層であり、この層の上面で遺構を検出した。③層は黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じりシルト層、④層は灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂層、⑤層は浅黄色(2.5Y7/4)シルト層、⑩層は灰色(5Y5/1)細粒砂層～シルト層である。②層、③層はほぼ水平堆積を示すが、④層、⑤層は北方向から南方向へ向けて標高が下がる。

ⅡG①区の北壁はSX2が存在するため図示した。断面図での土層はSX2に関連するものである。①層は、にぶい黄橙色(10YR7/2)細粒砂混じりシルト層の耕作土である。⑩層は灰白色(2.5Y7/1)微細粒砂層、⑪は浅黄色(2.5Y7/4)～明黄褐色(2.5Y7/6)細粒砂～中粒砂層である。

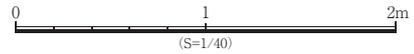
以上のように、すべての調査区において、耕作土以下は細粒砂混じりシルト層、シルト層、砂層、礫層等の河川堆積物で構成されている。遺構は耕作土を除去した面で検出することができ、遺物包含層は存在しなかった。遺構検出面の標高は9.4～9.2mであり、東方向から西方向へ向かって標高が緩やかに低くなる。周辺部の現標高を参考にすると北方向から南方向へ向かって標高が低くなっており、概ね北東方向から南西方向に向かって標高が低くなっていく傾向が認められる。

発掘調査では、弥生時代中期中葉の土坑、中期末の溝跡、後期末から古墳時代初頭の竪穴建物跡、溝跡、自然流路跡、古代から中世の溝跡、近世以降の土坑、性格不明遺構を検出した。検出した竪穴建物跡は床面しか残存していないものもあり、古墳時代以降に比較的大規模な削平を伴った土木工事が行われたものと推測される。弥生時代は現況よりも起伏に富み、竪穴建物跡は北からのびている微高地上に立地していたと考えられる。この微高地を挟んで東側に溝跡が掘削され、西側には溝跡、自然流路が流れていたと推測される。

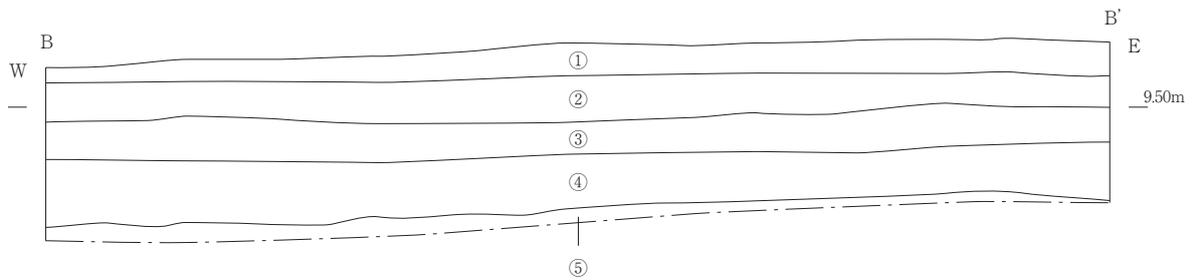
I A区北壁



- ① 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト [耕作土]
- ② 褐灰色 (10YR4/1) 細粒砂混じりシルト [地山]
- ③ 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂 [地山]
- ④ 浅黄色 (2.5Y7/4) シルト [地山]
- ⑤ 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫層 [地山]



I B区北壁



- ① 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細粒砂混じりシルト [耕作土]
- ② 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト [地山]
- ③ 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂 [地山]
- ④ 灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒砂混じりシルト (やや粘性有り) [地山]
- ⑤ 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫層 [地山]

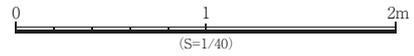


図4 I A・B区北壁断面図

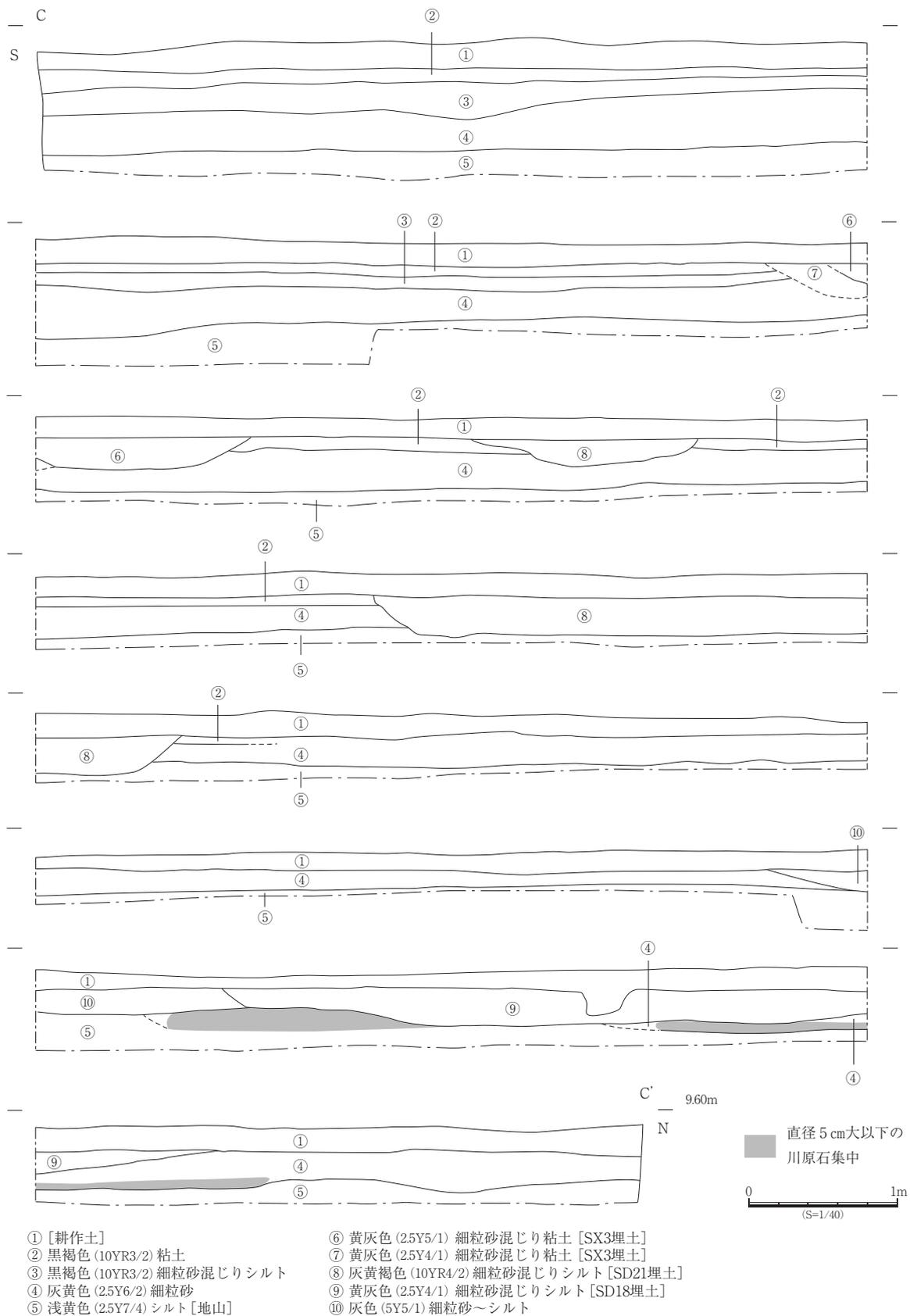
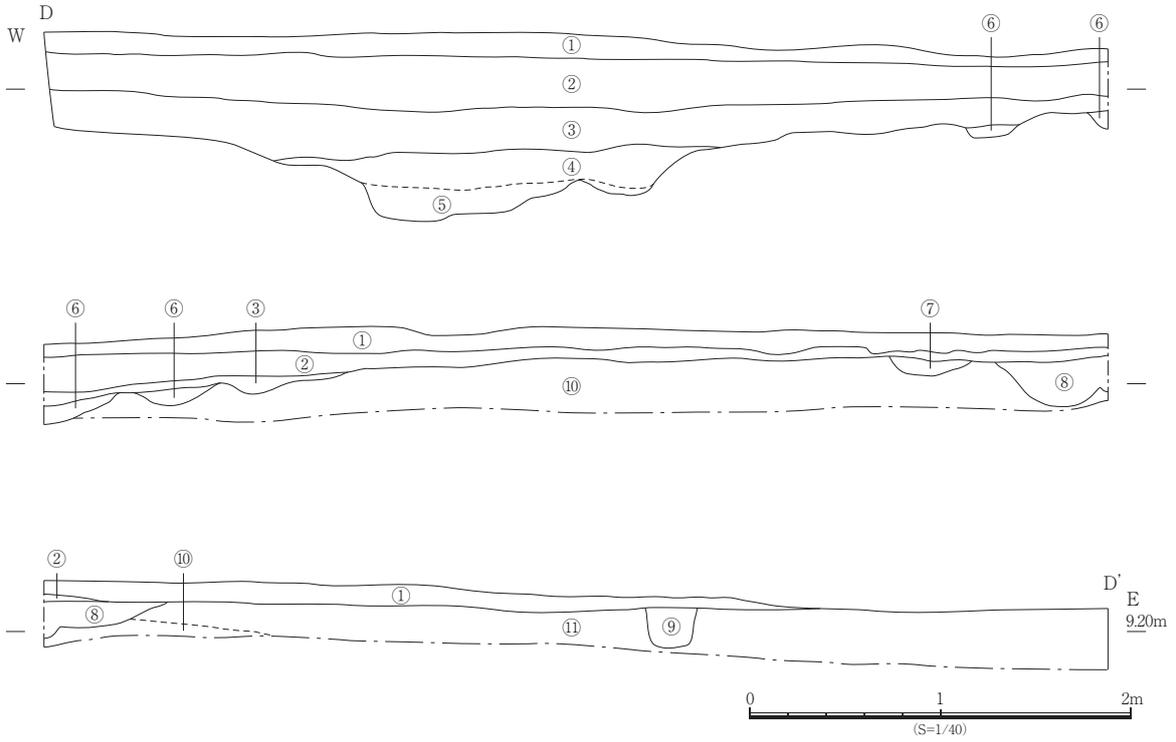


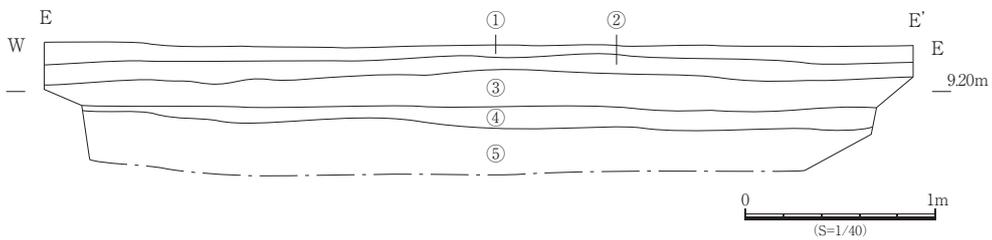
図5 II C区西壁断面図

II G①区北壁



- ① にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細粒砂混じりシルト [耕作土]
- ② 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト (黄色味がかる) [SD24埋土]
- ③ 暗灰色 (N3/0) 粘土 [SX2埋土]
- ④ 黄灰色 (2.5Y5/1) の直径2mm大～中粒砂を多量に含んだシルト (鉄分により褐色を帯びる部分あり) [SX2埋土]
- ⑤ 灰色 (N4/0) 微細粒砂, 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂, 暗青灰色 (5B4/1) 微細粒砂が上から層状に堆積 [SX2埋土]
- ⑥ にぶい黄橙色 (10YR6/3) 微細粒砂 [SX2埋土]
- ⑦ 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト [遺構埋土]
- ⑧ 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト [遺構埋土]
- ⑨ 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じり粘土 [SD22埋土]
- ⑩ 灰白色 (2.5Y7/1) 微細粒砂 [地山]
- ⑪ 浅黄色 (2.5Y7/4)～明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂～中粒砂 [地山]

II G③区北壁



- ① 灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒砂混じりシルト [盛土か]
- ② 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルト [旧耕作土]
- ③ 灰白色 (5Y7/1) 微細粒砂 (黄色味がかる) [地山]
- ④ 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂混じりシルト (褐色がかる) [地山]
- ⑤ 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂礫層 [地山]

図6 II G①・③区北壁断面図

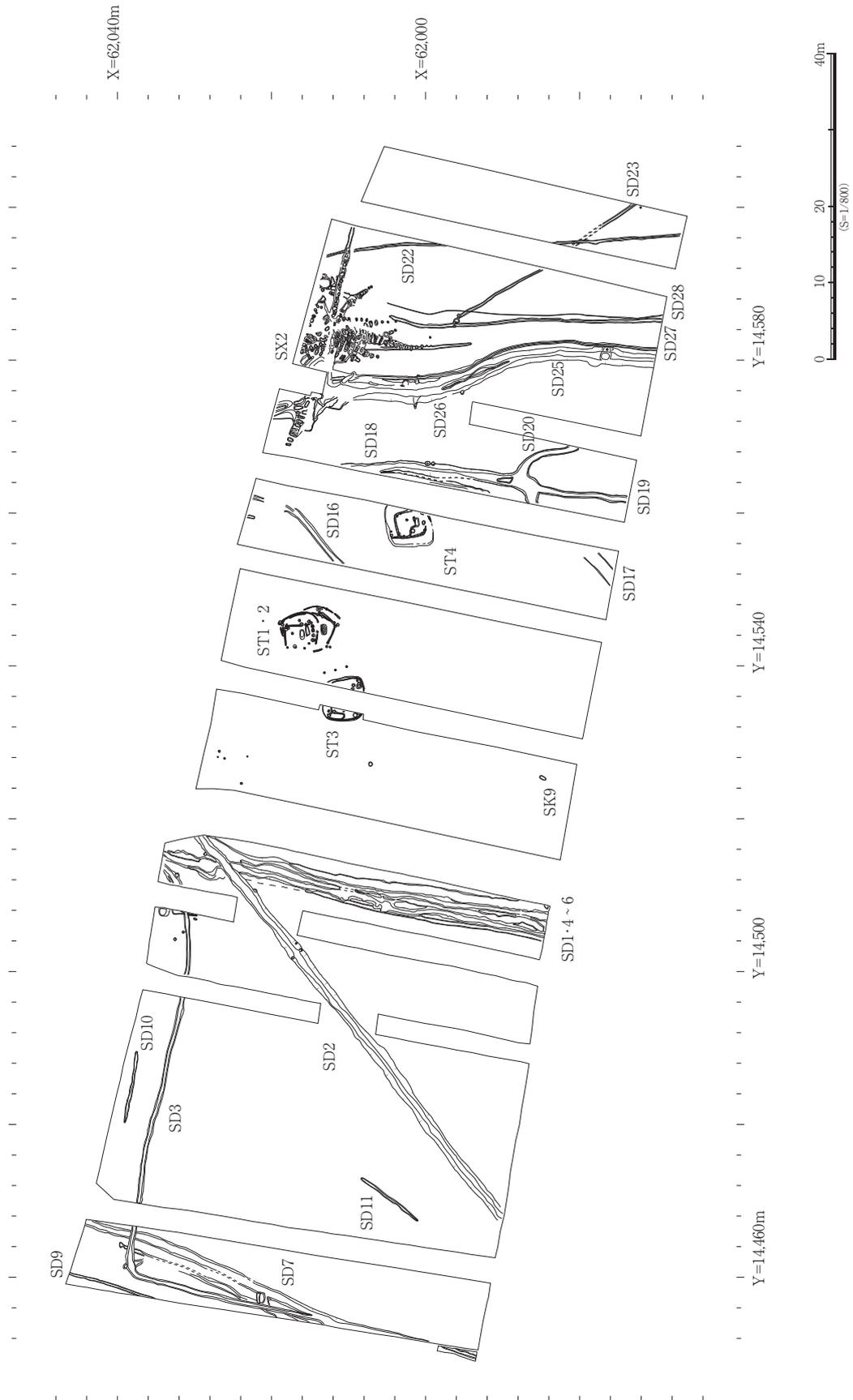


図7 遺構全体図

2.ST

(1)ST1・2(図8・9)

ST1・2は、ⅡE区の北部で検出した竪穴建物跡である。遺構検出時に弥生時代終末～古墳時代初頭の土器片が集中して出土した。精査の結果、壁溝、中央ピット、支柱穴等を検出した。検出状況から2軒の竪穴建物跡が重複しているものと考えていたが、掘削及び精査した結果3軒以上が重複していることが判明した。調査時にはその対応関係を完全に把握することができなかったため、調査時の遺構番号で図示しているため、同一ST番号が付された遺構でも異なった竪穴建物跡を構成する床面遺構の場合もあり、また異なったST番号が付された遺構でも同一のSTに伴うこともある。中央ピットを基準に壁溝等を考慮して4軒の竪穴建物跡の復元を試みたが、復元に使用していない支柱穴等があることから中央ピットを共有する住居跡が存在する可能性がある。

中央ピット、壁溝の配置等から多角形建物跡2軒と隅丸方形建物跡2軒が重複していたものと推測される。多角形を呈するものは、ST2_中央ピット1(共有)、壁溝(ST2_SD1)、支柱穴(ST1_P6、ST2_P4、ST2_P13)で構成される建物跡、ST2_中央ピット1(共有)、壁溝(ST2_SD3)、支柱穴(ST1_P8、ST2_P5、ST2_P7、ST2_P8、ST1_P16)で構成される建物跡の2軒である。隅丸方形を呈するものは、ST1_中央ピット1、壁溝(ST1_SD2)、支柱穴(ST1_P4、ST1_P2、ST1_P15、ST1_P9)で構成される建物跡、ST1_中央ピット2、壁溝(ST1_SD1、ST1_SD5)、支柱穴(ST1_P3、ST1_P21、ST1_P22)で構成される建物跡の2軒である。これら以外にも、復元案から漏れる遺構があることから、さらに1軒乃至2軒の竪穴建物跡が存在していた可能性がある。

ST2_中央ピット1は、長軸約1.4m、短軸約0.8mの平面形が隅丸長方形を呈する。深さは、検出面から約30cm残存していた。埋土は、3層に分層でき、薄い炭化物層を挟む。この中央ピットに対応する支柱穴は、2セット存在することから、建て替えが行われた可能性が高い。

出土遺物

1・2は壺である。1は口縁部片である。口唇部を上下に拡張し、わずかに凹面状をなす。櫛描波状文を施し、竹管円形浮文を貼付する。2はST1_P7から出土した口縁部片である。口縁端部で大きくひらき、口唇部は平坦面をなす。刻目文を施している可能性がある。内外面とも一部は摩耗し、調整等は観察しづらいが、外面にはハケメが認められる。3はST1_P14から出土した甕の口縁部である。「く」の字状に屈曲し、口唇部は丸くおさめる。外面には右上がりの叩き目が残存する。内面及び口縁部内外面はナデ調整である。被熱により変色する。4は底部である。やや突出気味の丸底である。器壁は薄い。全体的に摩耗しており、調整は不明である。5はST2の中央ピット1から出土した鉢であり、口唇部は尖らせる。6は砂岩製の叩石である。四周は使用により、大きく欠損する。

(2)ST3(図10)

ST3は、ⅡE区とⅡF区にまたがり検出した竪穴建物跡である。一辺約5.5mの隅丸方形を呈する。埋土は、灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂混じりシルトである。検出面から床面までの深さは約14cmである。床面で壁溝、ピットを検出した。壁溝(ST3_SD1)は幅約10cm、深さ約10cmであり北辺を除く3辺で検出した。他に小溝(ST3_SD2)を検出したがシミである可能性がある。ピットは12基を検出し、そのうち支柱穴の可能性があるものは配置等からST3_P5、ST3_P9である。

出土遺物

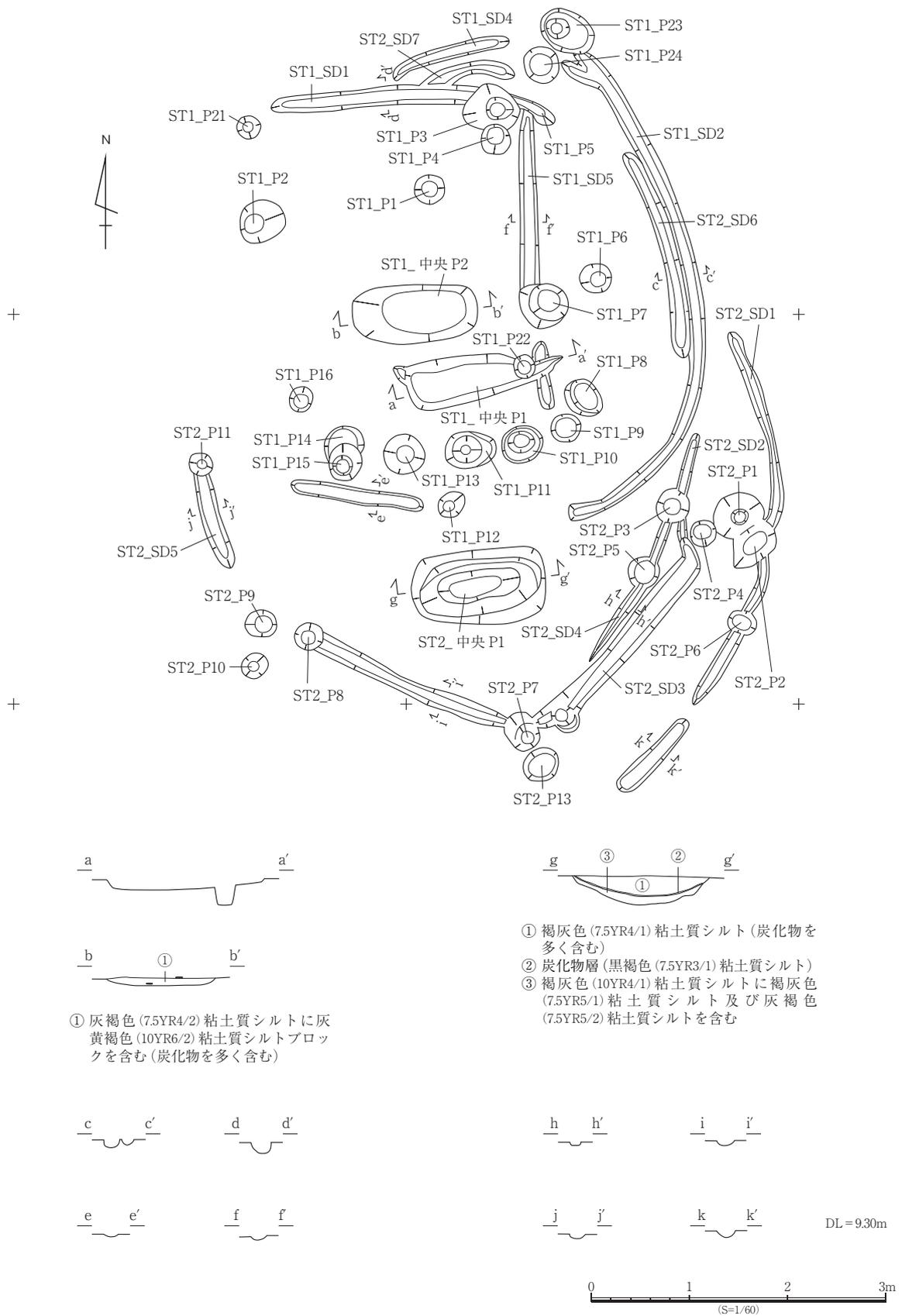


図8 ST1・2平面図・断面図

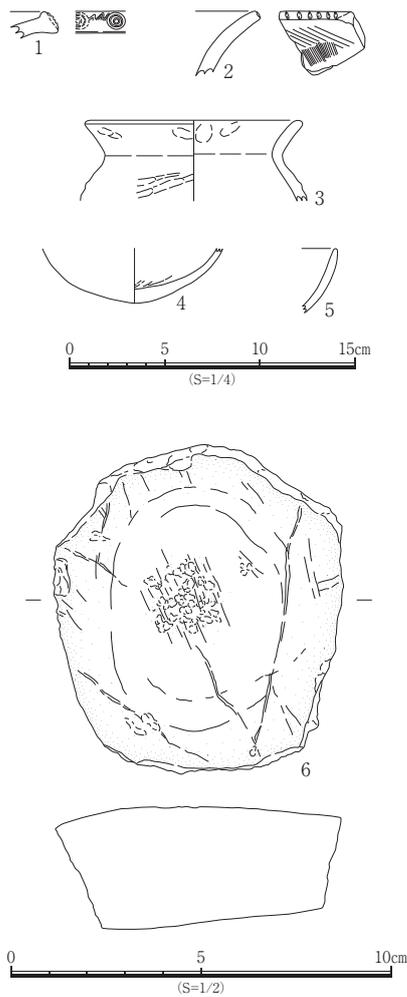


図9 ST1・2出土遺物実測図

7は甕である。口縁部は「く」の字状を呈し、外面には口縁部まで右上がりの叩き目が残存している。外面の叩き目の方向は体部最大径部付近を境に変化する。最大径部から口縁部まで一気に叩き上げ、口唇部を軽くつまみ上げる。内面はナデ調整であり、肩部以下は縦方向の強いナデのため凹凸がある。8はST3_P1から出土した底部である。内底面から押し出すことで丸底にする。外面は、水平方向からやや右下がり方向の叩き調整後、ナデ調整を施す。9はST3_P10から出土したミニチュア土器である。口縁部は内傾し、口は狭まり、体部は扁球形を呈する。完形である。10は、ST3_P10から出土した叩石である。砂岩製で、やや小型である。中央部と側縁の一部に敲打痕跡が認められる。

(3)ST4 (図11～13)

ST4 は、ⅡD区の中央部付近(E35-23-20)で検出した竪穴建物跡である。炭化材等が多量に残存しており焼失建物と考えられる。検出面から床面までの深さは約40cmである。一部は、調査区外であるが、一辺約6mの隅丸方形を呈している。付属施設としては、ベッド状遺構、中央ピット、小溝、土坑、壁溝、ピットを検出した。ベッド状遺構は、盛土により形成されている。幅約1m、低床部との比高差約0.15mで四周に巡ると推測される。中央ピットは床面の南寄りで2基(ST4_中央ピット1、ST4_中央ピット2)検出した。ST4_中央ピット1は、平面形は楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.6m、深さ約16cmである。埋土は、褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト層である。炭化材・炭化物・焼土ブロックは上半部のみであることから焼失時にはすでに下半部は埋没していた可能性がある。ST4_中央ピット2は、平面形は円形を呈し、直径約0.5m、深さ約5cmである。埋土は、褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト層であり、炭化物粒をごく少量含む。壁溝(ST4_SD1)は、幅約25cm、深さ約19cmであり南東部を除き、ベッド状遺構下端で検出した。また、小溝(ST4_SD3)は、床面をクランク状に屈曲しながら、北壁西部で建物外部とST4_中央ピット1を接続する。この溝は幅約20cm、深さ約15cmであり、断面形は「U」字状のしっかりとしたものである。支柱穴は、ST4_P2・ST4_P5・ST4_P7が該当し、低床部四隅の四本柱である。すべて支柱穴は壁溝(ST4_SD1)と重複している。

炭化材の残存状況は、竪穴建物跡の東半部よりも西半部の方が良好であった。西半部では中心部に向かい炭化材は放射状に倒れ込んでいた。北半部の炭化材は西半部と同様、放射状と認識できるが、西半部ほど明確ではない。ST4_中央ピット1上では、板材が南北方向に分布し、中央ピットに落ち込むように残存していた。北西部の分布状況とは明らかに異なっていた。八尾南遺跡の竪穴建物跡9の中央土坑を板材で覆っていた状況と類似している⁽¹⁾。また、炭化材のうち13点について樹種

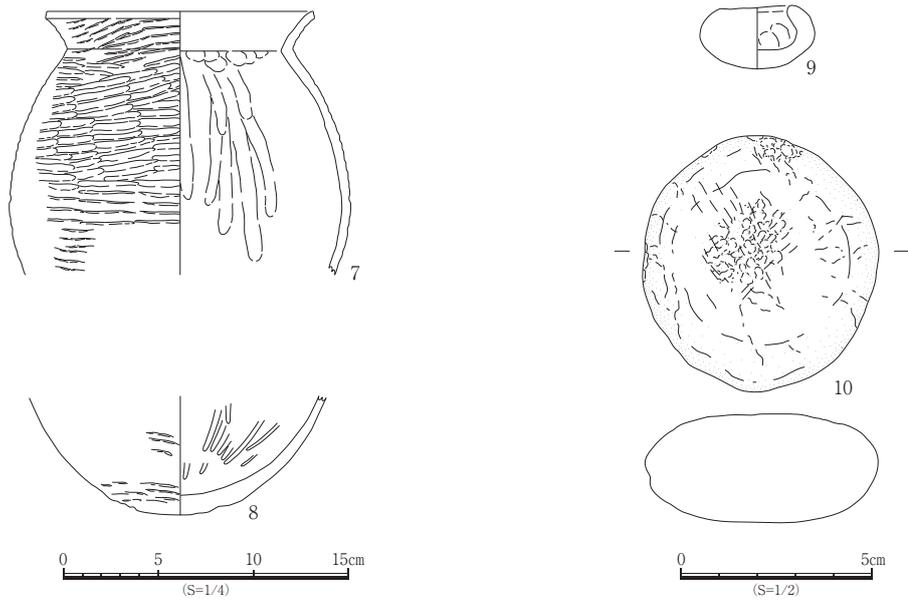
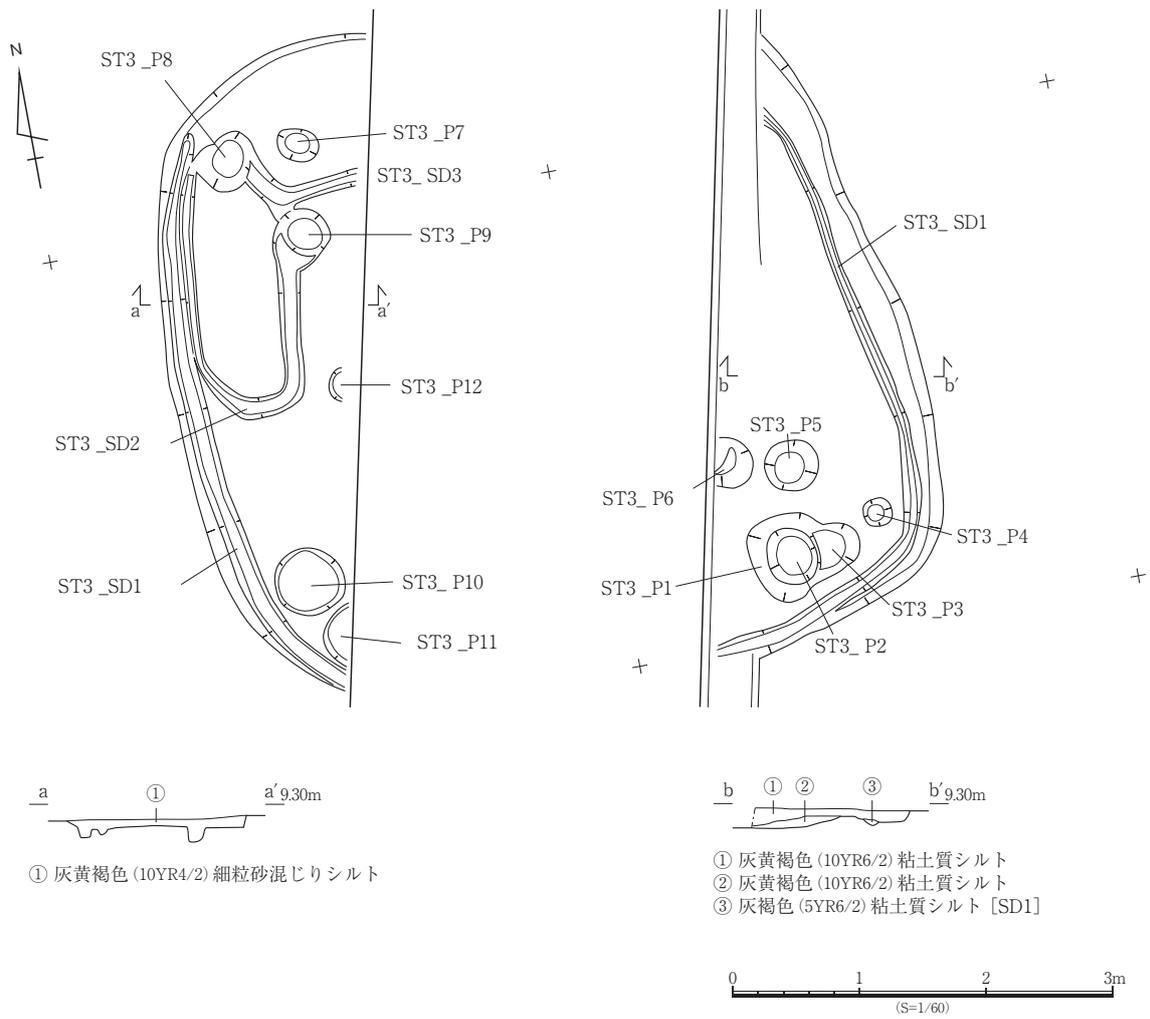


図10 ST3平面図・断面図・出土遺物実測図

同定を行った結果、コナラ属コナラ亜族クヌギ節が最も多かった。(詳細は第四章 自然科学分析, 参照。)

出土遺物

出土土器の組成比率は、壺 6.45 %、甕 34.41 %、鉢 38.71 %、高杯 5.38 %、その他 1.08 %、器種不明 13.97%である⁽²⁾。

11～13は壺である。11は口縁部片である。直立気味の短い頸部から口縁部が大きくひろく。口唇部はやや丸みを持つ。やや摩耗しており、調整は不明である。12は口縁部から肩部にかけての破片である。短く直立した頸部から口縁部は外上方へのびる。口唇部は面取りされ、上下にわずかに拡張され、上端をつまみ上げる。内面の体部と頸部、頸部と口縁部の境は比較的稜が立つ。体部外面は斜め方向のハケメ調整であり、内面は横方向のハケメ調整である。13は複合口縁壺の口縁部である。ST4下層(E35-23-25)とSD18(F35-4-2)から出土した破片が接合した。ST4から出土した破片には煤が付着し、SD18から出土したものには付着していなかったことから、ST4が焼失する前にすでにこの破片がST4に遺棄されていたか、焼失中にST4に入り込んだものと考えられる。二次口縁が内傾して付き、口唇部は凹面状を呈する。内面はやや粗いハケメ調整であり、外面はミガキ調整か。14・15は甕である。14の器壁は薄い。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は凹面状を呈する。外面には

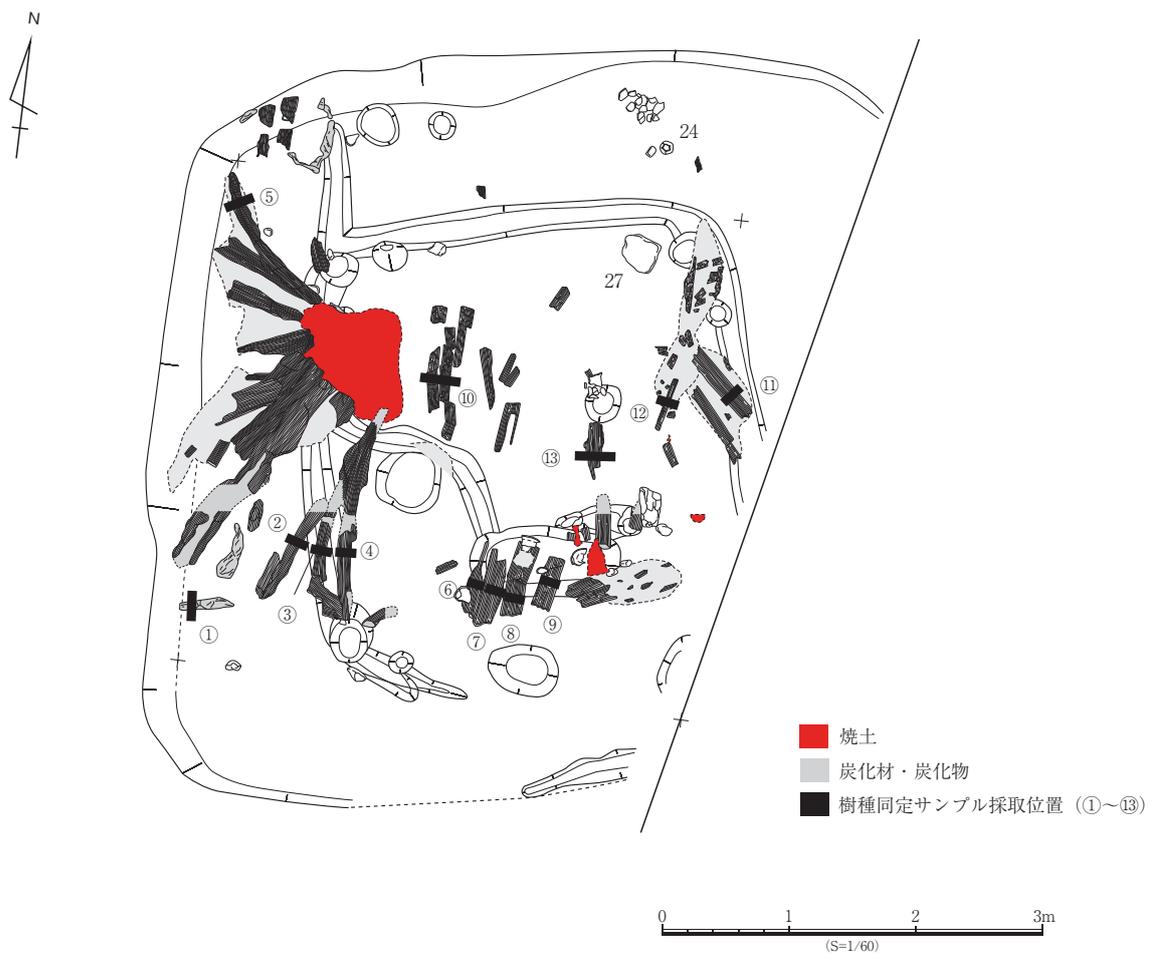


図11 ST4炭化材・炭化物出土状況図

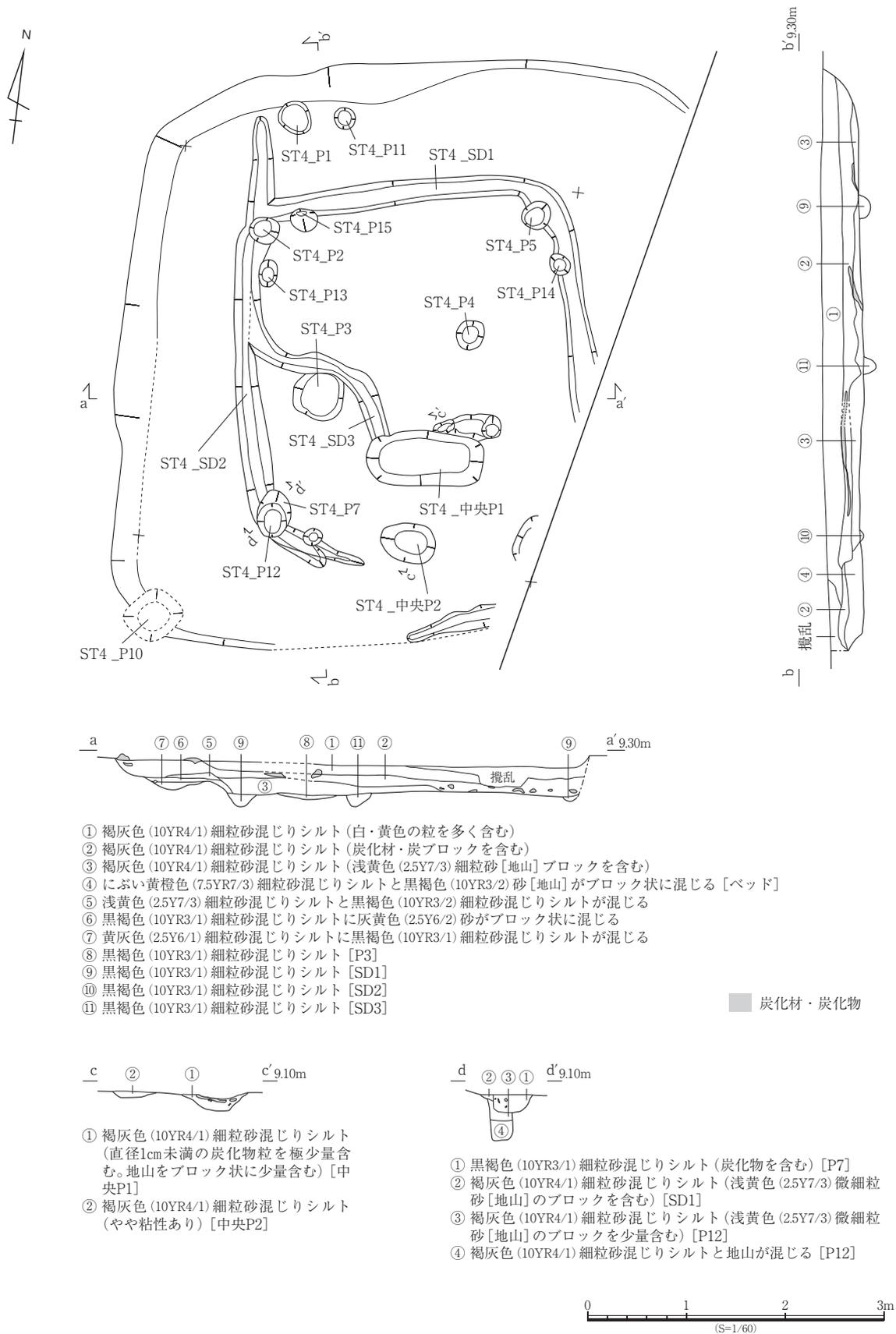


図12 ST4平面図・断面図

水平方向から右上がり方向の叩き目が残存する。体部最大径付近で分割成形される。下半の一部は、叩き調整後、ミガキ調整が疎らに施される。口縁部は叩き調整後、縦方向のハケメ調整を施す。口縁部内面は粗いハケメ調整を施し、体部には工具によるナデ調整の痕跡が認められる。内外面に煤が付着するが、建物の焼失時に付着した可能性がある。15の体部は長胴であり、最大径を中位付近に持つ。底部は丸底である。口縁部はやや内湾気味であり、短い。体部外面には右上がり方向の叩き目が残存し、二分割あるいは三分割で成形される。下半部は叩き調整後、ハケメ調整を疎らに施す。口縁部は叩き調整後、ナデ調整を施す。また、口縁部上端には粘土紐の接合痕跡が残存している。内面上半部はハケメ調整、下半部はナデ調整である。16・17は底部片である。16の内面には尖底化に伴う絞り目が認められる。外面はハケメ調整を密に施す。内面はハケメ調整後、ナデ調整である。被熱により変色する。17は大型壺の底部である。劣化が激しいが、外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。18～25は鉢である。18は中央ピット1上面から出土したものである。体部は底部から外上方へのび、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は尖らせる。底部はやや平らな部分を残している。不明瞭ながら若干直立した底端部を持つ。外面は水平方向から右上がりの叩き調整後、ナデ調整を施す。ナデ調整は比較的丁寧に施される。内面底部付近には不定方向に工具の静止痕跡が認められ、口縁部付近には粗いハケメが残存している。建物焼失時に付着したと考えられる煤が認められる。19の体部は平底から内湾気味に立ち上がり、口唇部は尖らせる。外面はナデ調整であり、内面には斜め方向のハケメ調整を密に施す。建物焼失時に付着したと考えられる煤が認められる。20は口径が大きく、体部は丸みを帯びる。底部はハケ状原体を不定方向に施すことで丸く仕上げる。外面はナデ調整、内面上半部はハケメ調整、下半部はナデ調整である。21の体部は丸みを持ち、口唇部は尖らせる。外面は叩き調整後、丁寧にナデ調整を施す。内面はハケメ調整を密に施す。内面の一部には赤色顔料が付着し、外面には煤が付着している。22は中央ピット1から出土したものである。体部は半球形を呈する。内面のハケメは螺旋状に施される。内底面から押し出すことで丸底とする。外面はハケメ調整後、丁寧にナデ調整を施す。23は中央ピット1から出土したものである。口縁部は内湾気味にわずかに外反し、口唇部は丸くおさめる。体部下半部は丸みを帯び、体部の上胴部に最大径を持つ。体部外面の下半部には指頭圧痕が認められ、上半部はハケメ調整である。内底面中心部からハケメ調整を施す。建物焼失時の煤が付着している。24は上胴部に最大径を持ち、口縁部は短く外反し、口唇部は丸くおさめる。底部は尖底状を呈する。内外面ともナデ調整で仕上げられているが、部分的にミガキ、あるいはケズリ状に見える部分がある。内面には赤色顔料が、外面には煤が付着している。煤は胴部最大径付近に帯状に多く付着する。一方、内面の赤色顔料は体部最大径より上部、特に口縁部に多く付着する。ほぼ完形にまで復原することができた。25は上胴部に最大径を持ち、外反する口縁部が付く。内面には主としてナデ調整を施すが、光沢を持つ部分、ハケメがみられる部分がある。外面は荒れており、調整不明である。内面の底部から頸部にかけて赤色顔料が付着している。外面には煤が付着する。26は中央ピット1の北東部、建物床直上から出土した砥石である。脆く剥片状に剥離していくため、使用面はほとんど残存していない。27は台石である。ベッド直上から出土しており、原位置を保持していると考えられる。赤色顔料がうっすらと付着しており、その部分は平滑となっている。24の出土位置と関連する。28は鉢の先端部である。

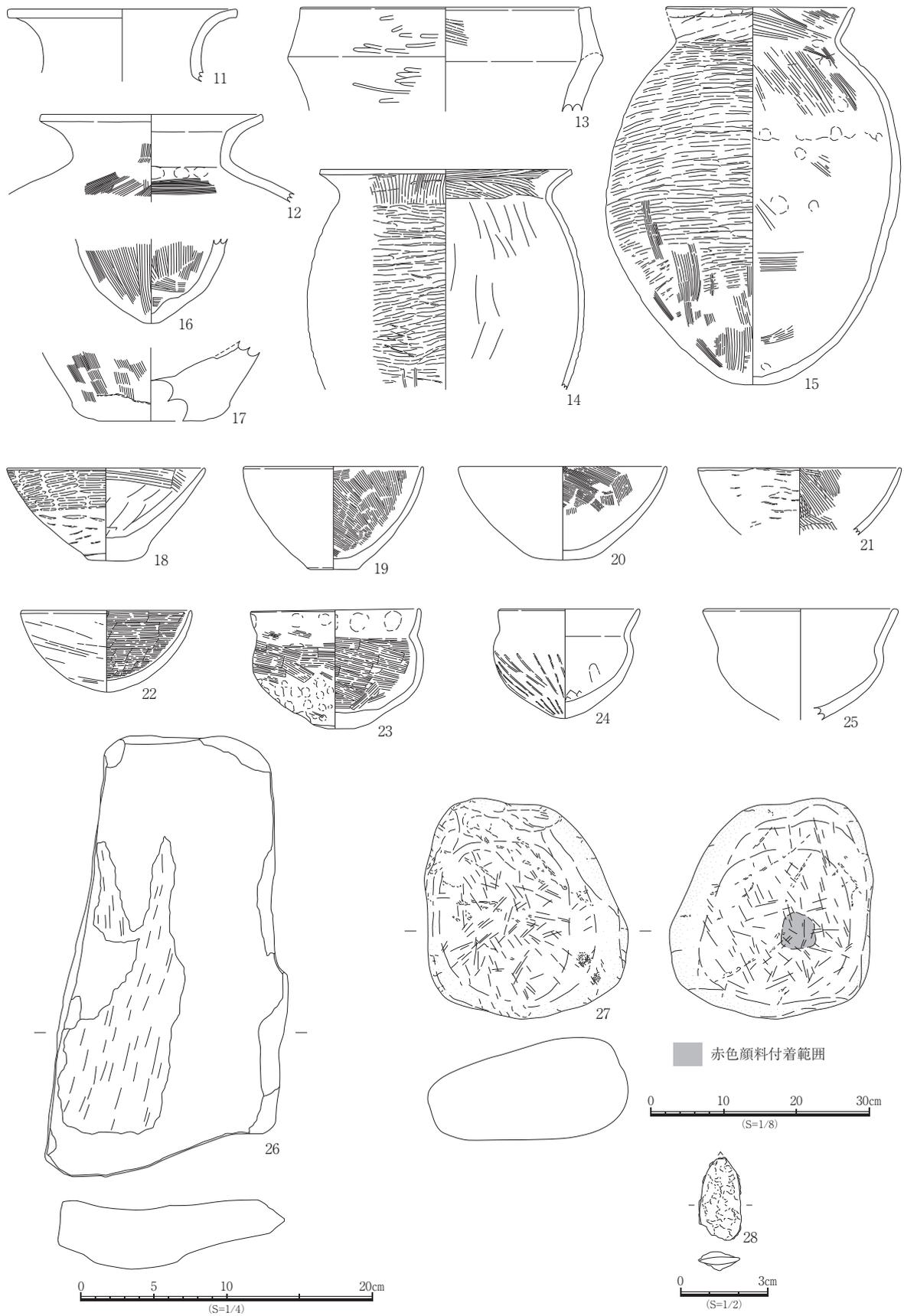


図13 ST4出土遺物実測図

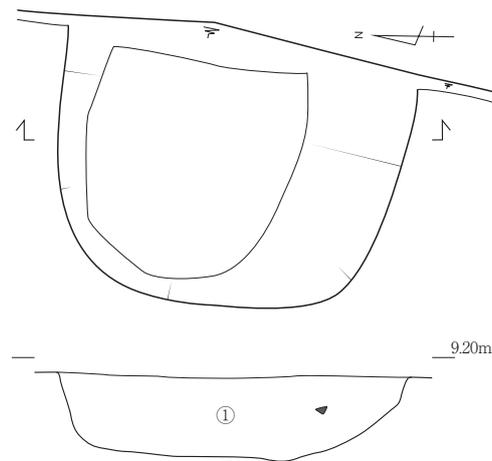
3.SK

(1)SK1 (図14)

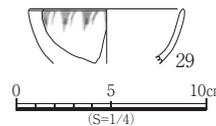
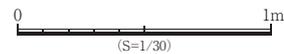
SK1はI A区の北端部で検出した土坑である。一部は調査区外にひろがる。南北方向は約1.4m，東西方向は1.1m以上である。検出面からの深さは約40cmである。埋土は褐灰色(7.5YR5/1)細粒砂混じりシルトである。

出土遺物

29は陶磁器の碗であり，外面には雨降り文が描かれている。



① 褐灰色(7.5YR5/1)細粒砂混じりシルト



(2)SK8 (図15)

SK8はII C区で検出した円形の土坑である。図示した鉢(30)の縁部を輪状に確認したことから遺構と認識することができた。直径約0.6m，検出面からの深さは約12cmである。埋土は

黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルトであり，検出面の土層と遺構埋土の峻別が困難であった。

出土遺物

30は口径が大きく，器高が低い形態である。口縁部直下に一条のヨコナデ調整を施し，口唇部を丸く仕上げる。外底面にはナデ痕跡，指頭圧痕が認められ，内底面から押し出すことで底部を丸く仕上げています。外面は叩き調整後，ナデ調整を施す。上半部は丁寧に叩き目をナデ消す。内面にはハケメ調整を放射状に施す。

(3)SK9 (図16)

II F区の南部で検出した土坑である。弥生土器の破片が分布していたことから遺構と認識できたが，検出面の土層と遺構埋土を峻別することは困難であった。平面形は楕円形を呈する。規模は，長軸約0.9m，短軸約0.4m，検出面からの深さは約10cmである。

出土遺物

31は弥生土器の甕である。上胴部から頸部にかけて緩やかに窄まり，口縁部は大きく外反する。口縁部径と胴部の最大径はほぼ等しい。器壁は非常にうすい。頸部には頸部幅一杯の縦方向の沈線群と短い沈線群を交互に巡らせる。短い沈線群は口縁部にも配置する。沈線下には微隆起突帯を一条巡らせ，さらに楕円形浮文を配置する。口唇部下端には刻目文を施す。

図14 SK1平面図・断面図・出土遺物実測図

4.SD

(1)SD1 (図17)

SD1は、I A区東半部で検出した溝であり、香長条理の方向に概ね一致する。検出時は幅約4.5mの1条(SD1)の溝跡として検出した。南は調査区外へと伸びるが、調査区北端部では削平のため検出できなかった。2カ所に設定したサブトレンチの断面観察で4条の溝跡が重複していることが判明した。SD1は溝として機能していたかどうかは疑わしく、溝というよりはむしろ標高の低い溝状を呈した部分に土が堆積したものと考えられる。

F35-1-3に設定した土層観察用のアゼではSD5がSD6に切られる(SD5→SD6)。SD1は最も新しい溝跡である。E35-21-13に設定した土層観察用のアゼではSD5はSD4に切られる(SD5→SD4)。SD4とSD6の新旧関係は不明である。つまり、SD5が最も古く、次にSD4・SD6、そしてSD1が最も新しい。

出土遺物

32は瓦器碗の口縁部片である。口縁部に一条のヨコナデ調整が入る。33は土師器あるいは土師質土器の口縁部である。内外面ともナデ調整である。34は須恵器の口縁部片である。内外面とも回転ナデ調整である。35は須恵器の底部である。外面にはヘラ切り痕跡が認められる。内外面とも回転ナデ調整である。36は凹基式の打製石鏃である。サヌカイト製であり、一部は欠損する。37は平基式の打製石鏃である。サヌカイト製であり、側縁に調整剥離を施す。

(2)SD4 (図17)

SD4は、SD1を掘削して検出した。SD1と一部重複し、SD5を切る。南北方向に直線的に走り、南は調査区外へと伸びるが、調査区北端部は削平のため不明瞭である。SD1とSD4の埋土は、よく似ているために断面観察でも両者の新旧関係は不明瞭である。幅約0.5m、深さ約20cmであり、長さ約31.6mを検出した。

(3)SD5 (図17)

SD5は、幅約1m、深さ約30cmである。検出長は約50mであり、南北端とも調査区外へと伸びる。埋土は2層に分層できる。上層は、黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘土であり、下層は黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂混じり粘土であり、上層の方が厚く堆積する。断面形はE35-21-13・14に設定した土層観察用のアゼではレンズ状を呈し、F35-1-2・3に設定した土層観察用のアゼでは逆台形を呈する。

出土遺物

38は土師器の杯である。折り込み口縁の可能性はある。内外面とも回転ナデ調整を施す。39は土

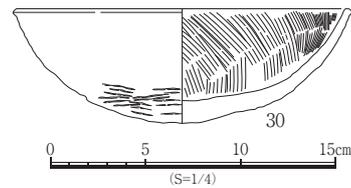


図15 SK8出土遺物実測図

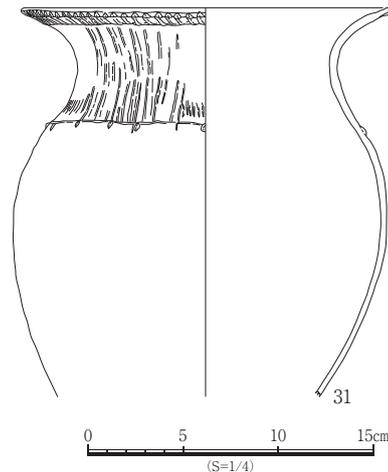
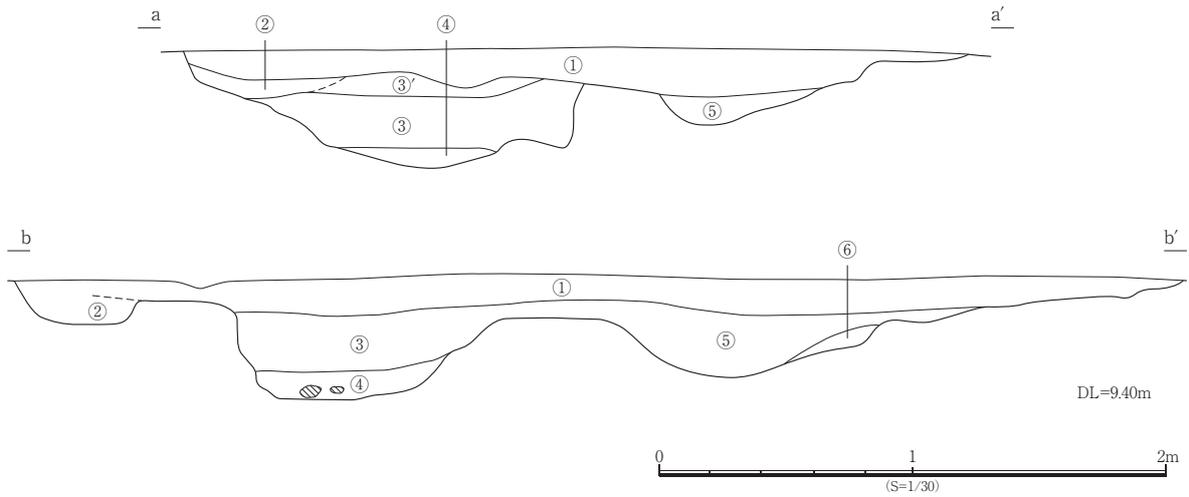


図16 SK9出土遺物実測図



SD1・4～6

- ① 浅黄色 (2.5Y7/4) 細粒砂混じりシルトと灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルトが混じる [SD1]
- ② 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂混じりシルトと黒褐色 (2.5Y3/1) 細粒砂混じりシルトがブロック状に混じる [SD4]
- ③' やや黄色味がかかる黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じりシルト [SD5]

- ③ 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じりシルト [SD5]
- ④ 黄灰色 (2.5Y4/1) 中粒砂混じりシルト [SD5]
- ⑤ 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂混じりシルト [SD6]
- ⑥ 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト [SD6の埋土か]

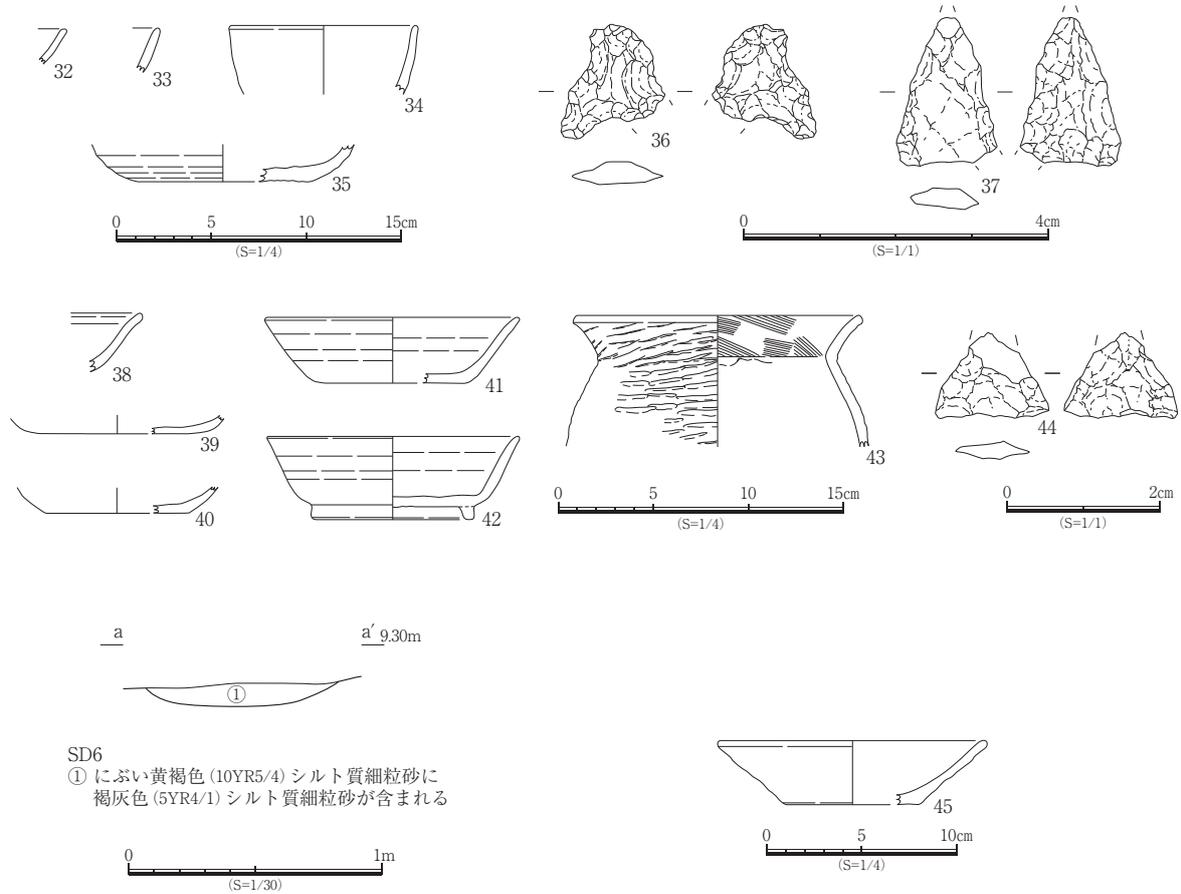


図17 SD1・4～6断面図・出土遺物実測図

師質土器の皿である。内外面とも摩耗しており、調整は不明である。40は土師器の杯である。内外面とも摩耗しており、調整は不明である。41はSD5の底から出土した須恵器の杯である。内外面とも回転ナデ調整である。外底面はヘラ切り後、ナデ調整を施す。残存率は良好である。42は須恵器の杯である。断面形が方形の高台を貼付ける。内外面とも回転ナデ調整である。焼成不良であり、にぶい橙色に発色する。43は弥生土器の甕である。頸部から口縁部にかけて右上がりの叩き目が残存している。口唇部は面取りされる。44はサヌカイト製の打製石鎌である。平基式と考えられる。

(4)SD6(図17)

SD6は、幅約1.5m、検出長は約47mであり、南北端とも調査区外へのびる。深さは調査区北端部から中央部では約10cm、調査区南半部では約30cmである。調査区北端部では北東から南西方向の向きであるが、南北方向へ向きを変え、直線的に走り調査区外へのびる。E35-21-4付近を境に幅、断面形が変化する。北側は幅が広く浅いが、南側は幅が狭く深い。SD6の埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂混じりシルトである。断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物

45は土師質土器の杯である。内外面とも摩耗しているが、外面にはロクロ目が認められる。

以上の溝跡群は、長岡郡と香美郡の境から約一町西に位置し、概ね香長条理の方向と一致している。出土土器は小破片でローリングを受けているものが多く、明らかに混入品考えられるものも含まれていることから出土遺物から各溝跡の時期を決定することは困難である。ただし、41はSD5の溝底からの出土であり、残存率も良好なことから、SD5の埋没時期は古代と考えられ、香長条理の施行時期を考えるうえでは重要である。

(5)SD2(図18～28)

SD2は、I A・B区で検出した溝跡である。I A区では、SD1・4～6に切られる。北東から南西方向へ直線的に掘削されていた。また、E35-21-1では、溝の肩部でピット状の遺構(P4～6)を検出したが、判然としない。I区東半部(E35-16-15, E35-16-19, E35-16-23)では、検出面から底までの深さは約20cmと浅い。一方、II区では約50cmである。底の標高は、I区北東部では8.8mであり、II区の南端部では8.5mと南西方向へいくにしたがい標高は低くなっており、周辺の微地形をも考え合わせると、北東方向から南西方向へ水を流すために掘削されたものと考えられる。

埋土は、3ヵ所に土層観察用のアゼを設定し、堆積状況の確認を行った。埋土は4層に分層でき、①層は黒色(10YR2/1)細粒砂混じり粘土、②層は褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じり粘土、③層は黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じり粘土、④層は褐灰色(10YR4/1)砂である。

出土遺物はI区の④層から多く出土した。調査時に出土遺物は、小グリッド(4m四方)と5～10cm厚さ毎の人工層位で取り上げたが、検出面から10cmまでを上層、10～20cmを中層、20～30cmを下層、30cm～底までを最下層として報告する。出土遺物の接合状況を水平距離と垂直距離で表した。水平方向の接合状況では、同一グリッドあるいは隣接するグリッドで接合できたものが62%を占める。さらに3グリッドまでの範囲内で接合できたものは全体の79%を占める。一方、垂直方向の接合状況は同一層、及び上下層間での接合は全体の69%を占める。上層のものと最下層のものが接合したものが10%を占めている。遺物の出土状況では、最下層からの出土も多いことから、溝跡が埋没す

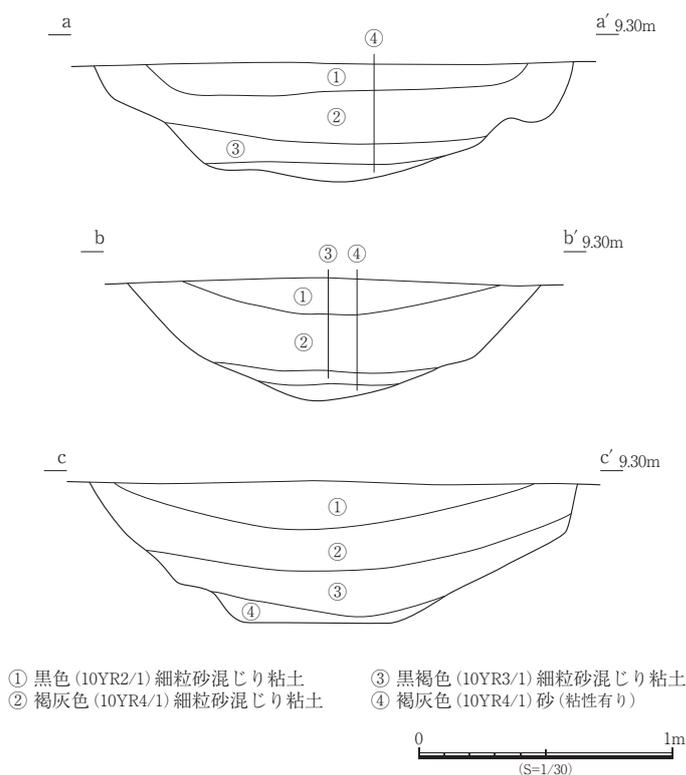


図18 SD2断面図

を呈し、口唇部は面取りされる。口縁部は内外面ともハケメ調整を施す。肩部外面は叩き調整後、ハケメ調整を施す。内面には指頭圧痕が認められる。48は肩部から口縁部にかけての破片である。口縁部は「く」の字状を呈し、端部はつまみ上げ風に仕上げる。口縁部には内外面ともナデ調整を施す。肩部外面には叩き目が残存する。内面はナデ調整が主体であるが、一部にハケメが認められる。49は肩部から口縁部にかけての破片である。口縁部は直立気味で長く、口唇部は丸くおさめる。肩部外面には右下がりの叩き目が残存し、頸部には縦方向のハケメが認められる。50は頸部から口縁部にかけての破片である。短く直立する頸部から口縁部は外反する。口唇部は面取りされる。外面にはハケメ調整を施す。51は頸部から口縁部にかけての破片である。短く直立する頸部から口縁部は外反し、口唇部は丸くおさめる。外面は粗いハケメ調整を施す。52は肩部から口縁部にかけての破片である。頸部から口縁部は大きく外反し、口唇部は面取りされる。頸部外面にはハケメ調整を施すが、口縁部までは及ばない。肩部外面には叩き目が残存する。肩部内面には指頭圧痕が認められる。53は頸部から口縁部にかけての破片である。短く直立する頸部から口縁部は外反する。口唇部は面取りされ、つまみ上げ風に仕上げる。頸部外面にはハケメがみられる。54は上胴部から口縁部にかけての破片である。直立気味の頸部から口縁部は大きく外反する。肩部外面は叩き調整後、ハケメ調整を施す。口縁部の一部にもハケメが認められる。胴部内面はナデ調整である。55は頸部から口縁部にかけての破片である。直立するやや長めの頸部から口縁部は外反し、口唇部は面取りされる。摩耗のため調整を観察することは難しいが内面にはハケメが認められる。56は口縁部の破片である。口縁部は大きく外反し、口唇部は平坦面をなす。外面は縦方向のハケメ調整である。57は頸部から口縁部にかけての破片である。内傾した頸部から口縁部は外上方へひろがる。口唇部を上下に拡張し、凹面状を呈する。

る過程で最下層に遺棄された遺物とともに堆積していた土を削りながら下流へ押し流していったと推測される。I A区の最下層の遺物とI B区の上層の遺物が接合、E35-16-23の上層とE34-25-14の最下層の遺物が接合したことから移動の状況が推測できる。

出土遺物

出土土器の組成比率は、壺6.23%、甕54.75%、鉢24.10%、高杯2.70%、支脚5.08%、その他1.07%、器種不明6.07%である。甕が最も多く50%以上を占め、鉢を合わせると両方で80%近くを占め、当該期の組成比率の特徴を表している。46～71は壺である。46は口縁部片であり、「く」の字状を呈し、口唇部は丸くおさめる。内外面ともハケメ調整を施す。47は肩部から口縁部にかけての破片である。口縁部は「く」の字状

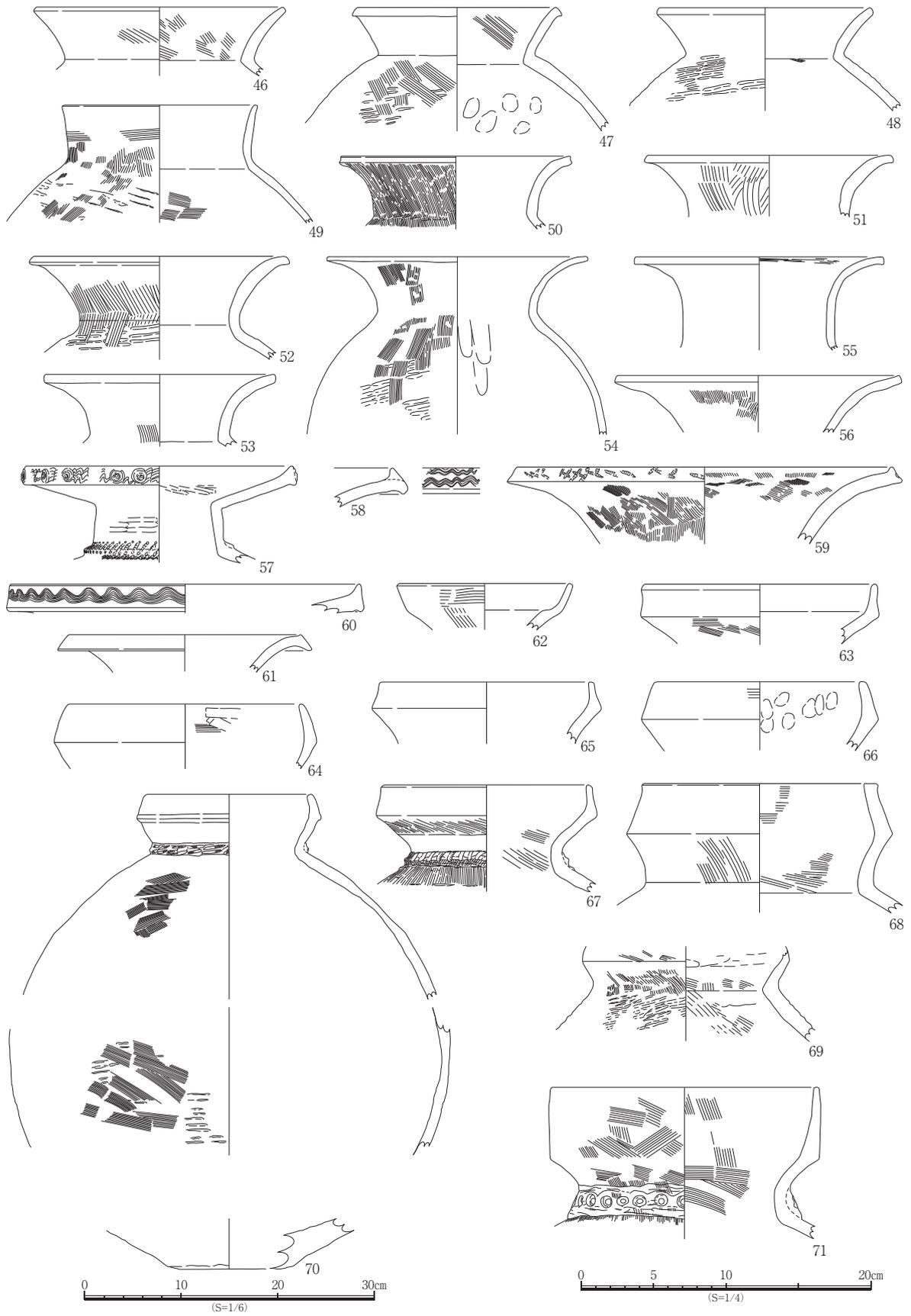


图19 SD2出土遺物実測図1

口唇部には上下二段に櫛描波状文を巡らせ、二個一対の竹管円形浮文を配置する。頸部には突帯を貼付し、さらに貝殻による刻目文を施す。また、肩部には櫛描波状文を施す。口縁部内面はハケメ調整後、ミガキ調整か。外面は主としてナデ調整を施す。58は口縁部片である。口縁端部上面に粘土紐を貼付けるとともに下方へ拡張させることで口唇部を上下に拡張する。口唇部には3条1単位の櫛描波状文を上下二段に配置する。59は口縁部の破片である。口唇部を上方へ拡張し、ハケ状原体により斜格子文を施す。内外面ともハケメ調整を施す。60は口縁部片である。口唇部を上下に拡張させ、櫛描波状文を施す。内面はミガキ調整である。61は口縁部片である。口唇部は下方へ拡張させる。62は口縁部片である。外側へ押し出すようにして口縁部を作り出し、二重口縁状を呈する。頸部外面にはハケメ調整、内面にはナデ調整を施す。63～71は複合口縁壺である。63は二次口縁部に強いヨコナデ調整を施し、やや内傾させる。口唇部は丸くおさめる。64の一次口縁と二次口縁の接合部は段状を呈するが屈曲は弱い。内面は緩やかな弧を描き、二次口縁部外面には波状文を施す。65の二次口縁は短く内傾し、口唇部は丸くおさめる。66の二次口縁は内傾し、口唇部は丸みを帯びる。67の二次口縁は短く、口唇部は丸くおさめる。頸部には刻目文を施した突帯を巡らせる。胴部外面は叩き調整後、ハケメ調整を施す。内外面とも一次口縁部はハケメ調整である。68の二次口縁はやや内傾させ、口唇部は平坦面をなす。一次口縁と二次口縁の接合部は突出させる。一次口縁部には内外面ともハケメ調整を、二次口縁部にはナデ調整を施す。69の一次口縁と二次口縁の接合部は丸みを帯びる。体部外面には右上がりの叩き目が残存している。口縁部はハケメ調整である。内面はハケメ調整及びナデ調整である。頸部には粘土紐接合痕跡が認められる。70の二次口縁部は内湾気味に付き、下端は若干外方へ出る。口唇部は丸くおさめる。頸部に刻目文を施した突帯を巡らせる。体部は中位に最大径を持つと考えられる。内外面とも摩耗しているため調整の観察は難しいが、外面は叩き調整後ハケメ調整を施す。接点はないが同一個体と推測される底部は、底端部は丸みを帯びるが若干平坦部を残す。71は長めの二次口縁が直立気味に付き、口唇部は丸みを持つ。頸部には竹管文を施した突帯が巡る。内外面ともハケメ調整を基本とする。72～85は甕である。72の口縁部は短く外反し、胴部は中位付近に最大径を持つ。底端部は丸みを帯びるが底面には若干平坦部を残す。外面底部付近には右上がりの叩き目が、上胴部付近は右下がりの叩き目が残存している。全体的に摩耗している。73は長胴である。底部は丸底であり外底面には叩き目が認められる。叩き調整は三分割で施されている。叩き目の方向は底部では右上がり方向、下半部では水平方向、上半部では右上がり方向であり、口縁部まで連続して施されている。また、底部は叩き調整後、ハケメ調整を施す。内面はナデ調整である。74は長胴であり、胴部中位に最大径を有する。口縁部は「く」の字状に外反させる。底部はほぼ丸底である。外面には叩き目が残存しており、下半部は叩き調整後ハケメ調整を比較的密に施す。内面は主としてナデ調整である。75は体部中位に最大径を持ち、やや長胴形を呈する。口縁部は「く」の字状に外反させる。外面には叩き目が残存する。最大径付近より上は右上がり方向の叩き目であり、口縁部まで一気に叩き上げている。一方、下半部は右下がり方向の叩き目であり、分割して成形あるいは調整している。胴部内面は縦方向のナデ調整、上胴部から口縁部にかけてはハケメ調整である。外面下半部には煤が付着する。76は長胴の胴部から口縁部は短く外反するが、屈曲度合いは弱い。外面全面に叩き目が残存する。叩き目の方向等から三分割で成形されたと考えられる。下半部にはハケメ調整をきわめて疎に施す。口縁部外面には上胴部から一連の叩き目が認められる。内面は上半部がハケメ調整、下半部がナデ調整である。77の口縁部は緩やかに外反し、口唇部には軽くナデ調整を施す。

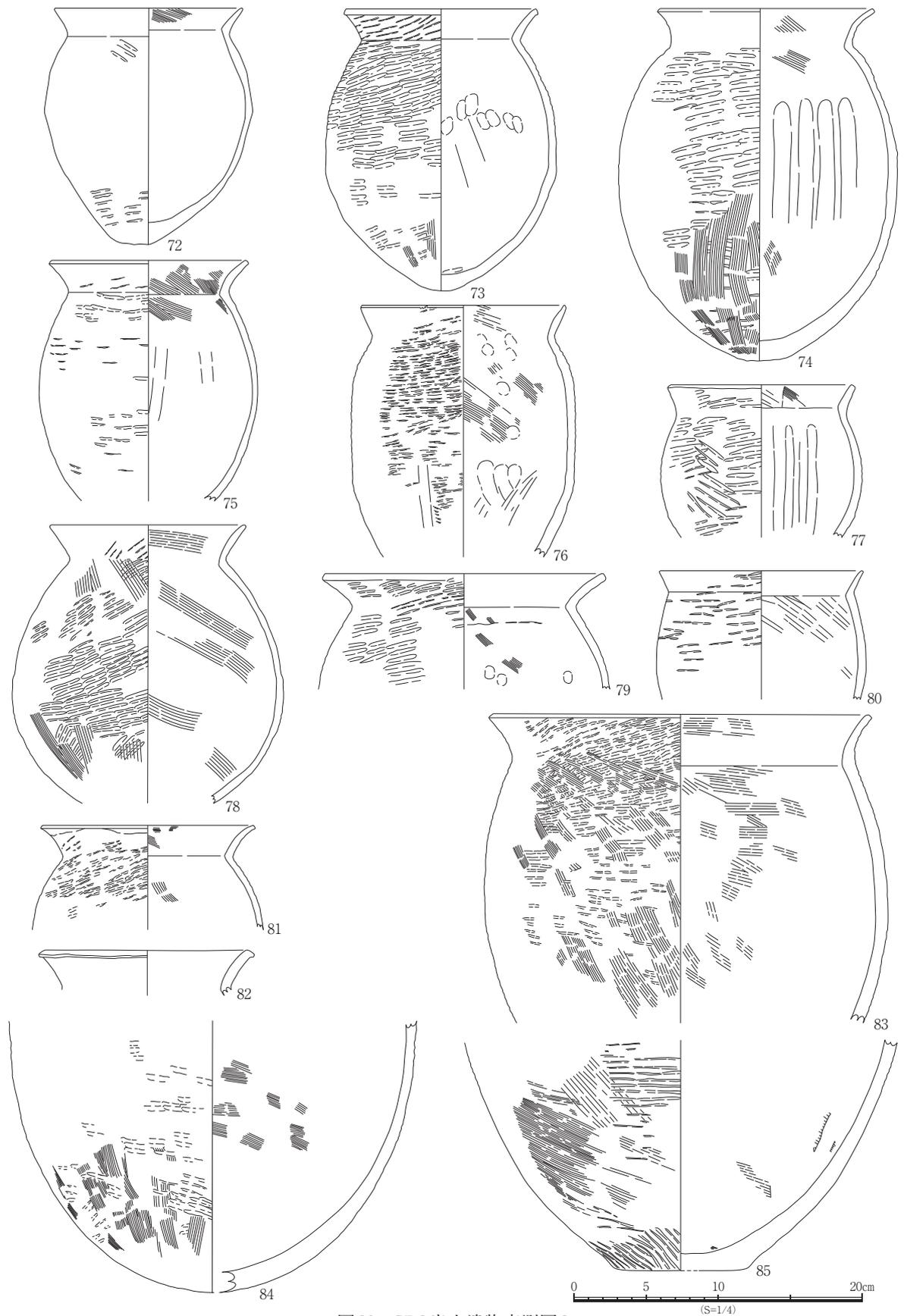


图20 SD2出土遺物実測図2

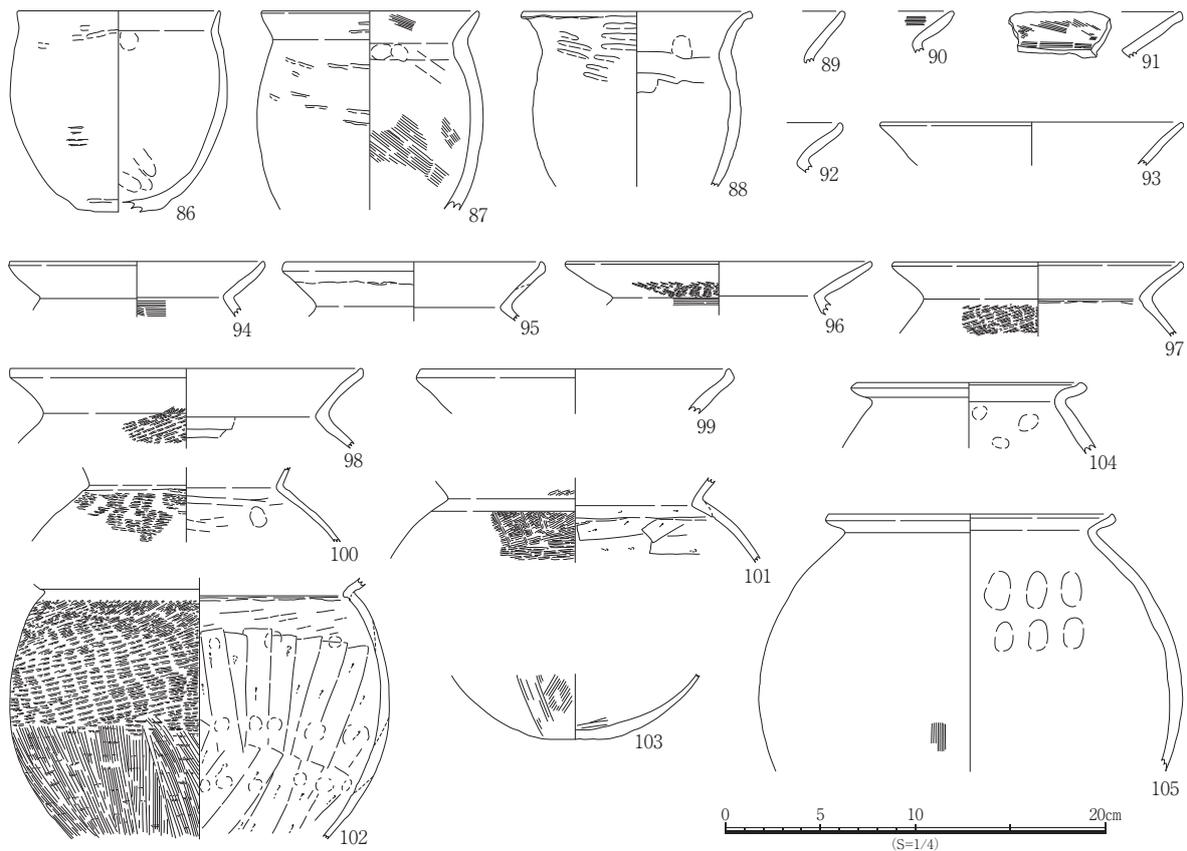


図21 SD2出土遺物実測図3

外面には叩き目が残存する。右上がり方向に叩いた後、右下がり方向の叩き調整を施す。内面は縦方向のナデ調整である。78の胴部は最大径を下半部に持つ下膨れの形態を呈する。外面上半部の叩き目は口縁部に向かうほど角度が急になる。底部付近は右上がりの叩き調整後ハケメ調整を施す。頸部には叩き調整後粗いハケメ調整を施す。肩部内面はハケメ調整であり、下半部はナデ調整である。頸部には粘土紐接合痕跡が認められる。79の口縁部は「く」の字状を呈する。口縁部まで連続して叩き上げる。内面はハケメ調整である。肩部内面には粘土紐接合痕跡が認められる。80の口縁部は短く、外反度合いも弱い。外面には水平方向からやや右上がりの叩き目が口縁部にまで残存している。内面は粗いハケメ調整である。81の口縁部は「く」の字状に外反させ、口唇部にはナデ調整を軽く施す。外面には右上がりの叩き目が口縁部にまで残存している。口縁部は叩き上げた後ナデ調整を施す。また、口縁部上端には粘土帯の接合痕跡が認められる。内面はハケメ調整を主として施す。82は口縁部の破片である。口唇部はナデ調整により平坦面をなす。内外面ともナデ調整である。胎土に火山ガラス、雲母片を含むことから搬入品の可能性がある。83は体部から口縁部にかけての破片である。口唇部は平坦面から凹状を呈し、一部にはハケメが認められる。外面には叩き目が残存している。全体的にハケメ調整を施す。肩部は斜め方向のハケメが連続して認められる。内面はハケメ調整後、ナデ調整を施す。84は底部の破片である。完全な丸底であり、外底面にはナデ調整が施される。外面は叩き調整後、ハケメ調整である。黒斑が大きく残る。内面は主としてナデ調整である。85は底部の破片である。底端部は丸みを帯びるが平底である。外面は叩き調整後、ハケメ調整である。底部付近は急角度の右下がりの叩き目が全周にわたり施されている。ハケメは右下がりである。内面はナデ調整

である。86～88は小型の甕である。86の底端部は丸みを帯びるが平底である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。叩き目は口縁部にまで及ぶ。内面はナデ調整である。87は体部から口縁部にかけての破片である。やや丸みを帯びた胴部から口縁部は短く外反する。外面は叩き調整後ナデ調整、内面はハケメ調整である。叩き目の方向は右下がりである。88は体部から口縁部にかけての破片である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。頸部内面に粘土紐接合痕跡が認められる。

89～105は搬入品である。89は庄内式の甕である。口縁端部のつまみ上げはほとんどない。90は甕である。口唇部は尖らせる。内外面ともナデ調整である。91は庄内式の甕である。内外面ともナデ調整であり、口縁端部をつまみ上げる。頸部付近にはハケメが認められる。92は口頸部の破片である。「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げる。内外面ともナデ調整である。庄内式の甕の模倣品と考えられる。93は庄内式の甕である。口縁端部をつまみ上げはほとんど認められないが、ヨコナデ調整により尖らせる。94は甕である。「く」の字状を呈し、口唇部は尖らせる。90と同一個体の可能性がある。95は庄内式の甕である。「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げる。96は庄内式の甕である。「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げはほとんど認められないが、ヨコナデ調整により尖らせる。口縁部外面にはハケメ調整を施す。97は庄内式の甕である。「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げる。外面肩部には細い叩き調整を施す。口縁部の接合部は内面には粘土が少し突出する。内面は頸部直下までケズリ調整が及んでいない部分がある。98は庄内式の甕である。「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げる。内面は頸部直下までケズリ調整を施す。99は庄内式の甕である。口縁端部

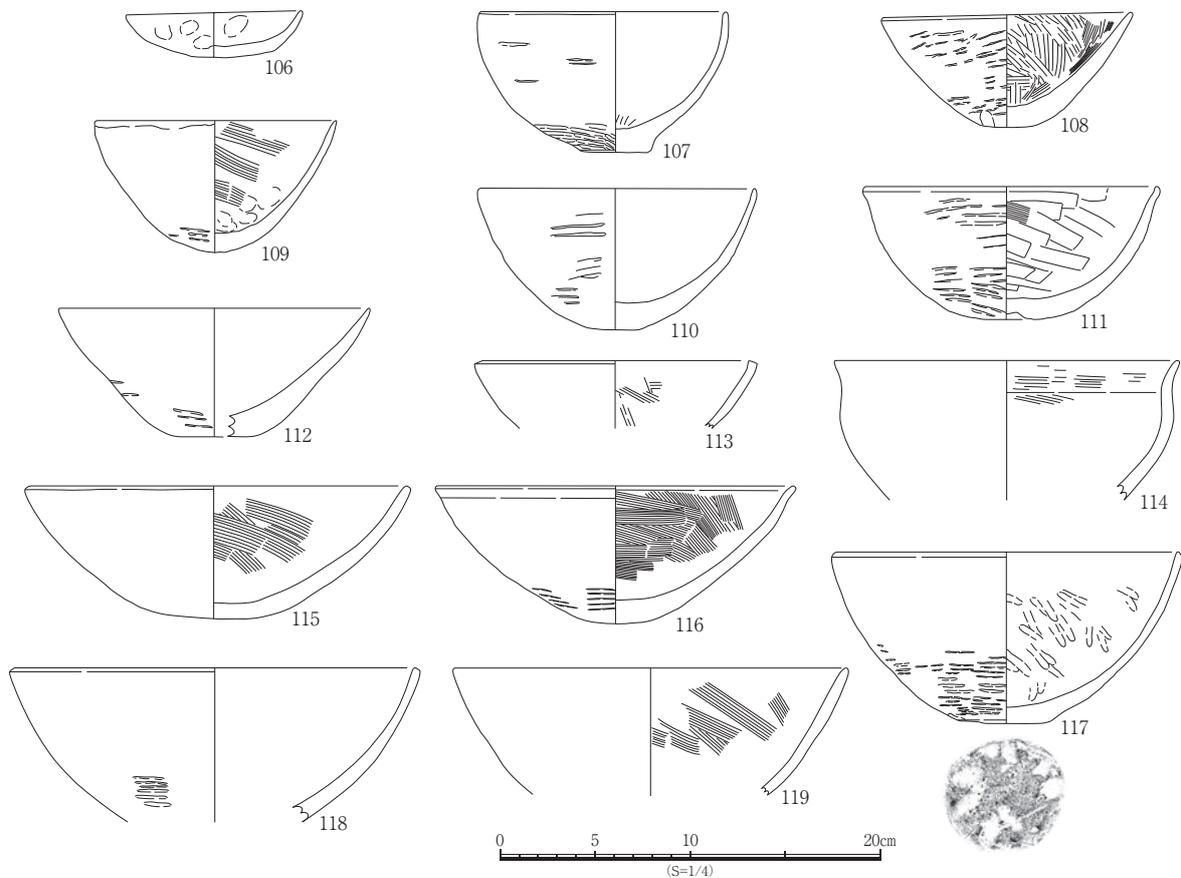


図22 SD2出土遺物実測図4

を明瞭につまみ上げる。100は甕である。外面には細い叩き調整を施す。内面はケズリ調整を施すが、頸部直下まで及んでいない。指頭圧痕が認められる。101は庄内式の甕である。内面肩部には粘土帯接合痕跡が認められる。外面は右上がりの叩き調整である。102は庄内式の甕である。外面は叩き調整後、下半部にはハケメ調整を密に施す。内面はケズリ調整を施し、口縁部を接合した時の痕跡が認められる。103は庄内式の甕である。丸底であり外面はハケメ調整である。内底面には工具ナデ調整の痕跡が認められる。104・105は東四国系の甕である。104の口縁部は短く、外反し端部をつまみ上げる。肩部内面には指頭圧痕が認められる。105は球形の体部から短い口縁部が付く。口縁端部をつまみ上げる。外面の上半部はナデ調整であり、下半部にはハケメが認められる。内面の上半部には指頭圧痕が顕著に認められ、下半部はケズリ調整である。

106～119は鉢である。106は皿状を呈する。手づくね成形であり、内外面とも指頭圧痕が顕著である。ほぼ完形まで復原できた。被熱により変色する。107は溝底から出土したもので、残存率は良好である。平底から直立する底部を持ち、体部は内湾気味であり、口唇部は尖らせる。底端部の一部はつぶれる。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。内面はナデ調整である。また、外面には亀裂が認められる。この鉢の中から直径6cm大と直径3cm大の川原石がそれぞれ1個ずつ出土したが、意図したものかは不明である。108の体部はやや直線的のび、口唇部は丸くおさめる。底部はほぼ丸底であり、底端部には主として上下方向に工具で抉った痕跡が認められる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はやや粗いハケメ調整である。若干、煤ける。残存率は良好である。109の体部は丸みを持ち、やや深めである。底部は内面から押し出すことで丸底にしており、内面と外面に指頭圧痕が認められる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はハケメ調整後、ナデ調整である。110は丸底で半球形を呈する。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面は摩耗のため調整不明である。底端部と内底面には丸底に成形するための指頭圧痕が認められる。残存率は良好である。111の体部は丸みを持ち、底部は上げ底である。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。特に上半部は丁寧にナデ調整を施す。内面はハケメ調整、ナデ調整である。底端部と内底面には指頭圧痕が認められる。112は底端部に丸みを持った平底である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内外面とも摩耗している。113の口縁端部はヨコナデ調整によりつまみ上げられ、口唇部は凹面状を呈する。シャープな作りである。114は口縁部をわずかに外反させ、口唇部は丸くおさめる。内外面とも摩耗している。口縁部内面にはハケメが認められる。115の体部は丸みを持って外上方へのび、口唇部は丸みを帯びる。底部は若干、平な部分もあるがほぼ丸底である。外面はナデ調整である。やや摩耗しているが、叩き目はみられない。内面はハケメ調整後、下半部にはミガキ調整を施す。116の体部は丸みを持って外上方へのびる。口縁部はヨコナデ調整により若干、外反させる。底部は丸底である。外面下半部には叩き目が認められる。内面はハケメ調整後、下半部にはナデ調整を施す。117は最下層から出土したものである。体部は球形を呈する。底端部に丸みを持たせるが、底面は平らな部分を残す。また、外底面には底部調整時のナデ痕跡あるいは工具痕跡が認められる。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。上半部は丁寧に叩き目を消す。内面はミガキ調整か。118は最下層から出土した。口唇部は丸みを帯びる。外面底部付近には叩き目が認められる。内面はナデ調整を施し、光沢を持つ部分がある。外面には亀裂が認められる。119は口縁部直下にヨコナデ調整を施し、口唇部は丸くおさめる。内面はハケメ調整である。

120～122は甑である。120の体部は長胴で丸底である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面

はハケメ調整である。底部には焼成前に1穴、穿孔される。121の底部には焼成前に1穴、穿孔される。底部は丸底である。外面は叩き調整、内面はハケメ調整、ナデ調整である。122の外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はナデ調整である。底部には焼成前に1穴、穿孔される。123は高杯である。柱状の脚部から裾部がのびる。裾部の4ヵ所に円孔が穿たれていると推測される。外面はミガキ調整、内面はナデ調整である。124～126は脚部である。124は内外面とも摩耗のため調整不明である。脚部は「ハ」の字状にのび、端部は丸くおさめる。125は最下層から出土した。脚部は「ハ」の字状にのび、端部は丸くおさめる。126の脚部は「ハ」の字状にのび、端部は丸くおさめる。127～131は手づくね土器である。127は手づくね成形で皿状を呈する。128の口縁部は指頭により外反させる。外面は叩き後、ナデ調整である。内面はナデ調整である。黒斑が認められる。ほぼ完形である。129の口縁部は指頭により外反させる。手づくね成形である。130の口縁部は指頭により外反させる。手づくね成形である。やや焼成不良で、橙色に発色する。ほぼ完形である。131の体部は筒状を呈し、底部はつまみにより突出させる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はナデ調整である。黒斑が認められる。132はミニチュア土器である。やや深めの鉢形を呈する。内外面ともナデ調整である。ほぼ完形である。133～145は支脚である。133は中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめる。断面長楕円形の指二本が両手をひろげたようにやや上方にのびる。上面からみると、指先から指先まで円弧を描くと推測される。1本の指、背部、脚部から裾部の一部が欠損する。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。脚部の両側面が上下に煤ける。134は中空の筒状の脚部から裾部は「ハ」の字状にひらく。接地部分は面をなす。断面長楕円形の指二本が両手をひろげたようにやや上方にのびる。上面からみると、指先から指先まで円弧を描く。背部にはやや長めのつまみが付される。外面脚部は叩き調整後、ナデ調整を施し、それ以外はナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。内面はナデ調整であり、指が届かない上部には絞り目が認められる。脚部から裾部の一部が欠損する。背部には煤が付着する。135は中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめ、一部は平坦面となる。断面円形の指二本が両手をひろげたようにやや上方にのびる。上面からみると、指先から指先まで円弧を描くと推測される。1本の指、背部のつまみ、脚部から裾部の一部が欠損する。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。脚部の両側面が上下に煤け、指の外側面及び内側面の一部が被熱変色してい

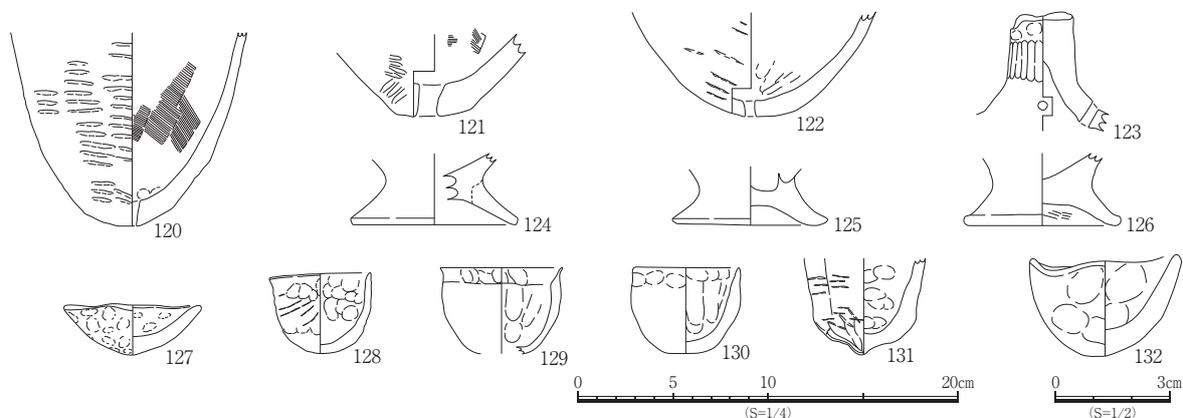


図23 SD2出土遺物実測図5

る。136は最下層から出土した。中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめる。断面楕円形の指二本が両手をひろげたようにやや上方にのびると推測されるが、1本は付け根から剥離し、もう1本は先端部が欠損する。付け根から剥離している破断面は擬口縁であり、体部に指を貼付け成形していることがわかる。背部にはつまみを付す。指の他に裾部と体部の一部が欠損する。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。全体的に被熱により変色している。137は最下層から出土した。中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめる。背部につまみを付す。両指、脚部から裾部の一部が欠損する。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。腹部の脚裾部、指の下側面に煤が付着している。また、内面体部上端付近は被熱により変色している。背部には帯状に黒斑が認められる。138は中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめる。上部は欠損している。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。腹部を中心に煤けている。139は断面楕円形の脚部であり中空である。上端を左右にひらくことで受け部を形成する。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。140は最下層から出土した。中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。全体的に煤ける。141は最下層から出土した。接地部分は面をなす。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。全体的に被熱により変色する。142は中空の筒状の脚部から裾部は短くひらき、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。全体的に被熱により変色する。143は最下層から出土した。中空であり、上下ともひらく。上面はやや傾斜を持たせる。一部欠損するが、ほぼ完形である。内外面ともナデ調整である。側面が煤ける。脚部しか残存していないものの中には、このタイプのものも含まれていると考えられる。144は最下層から出土した。半分以上が欠損しているが、器高の低い円柱状を呈する。上面はわずかに凹み、若干、傾斜する。内外面ともナデ調整である。全体的に被熱痕跡が認められる。145は144と同タイプの支脚と推測される。146～151は打製石包丁である。146は最下層から出土した。頁岩製で半分程度が欠損する。表面は自然面を残し、裏面は剥離面を残す。片刃である。短辺に挟りを入れる。147は砂岩製で表面は自然面を残し、裏面は剥離面を残す。片刃である。短辺に挟りを入れる。完形である。148は砂岩製である。表面は自然面を残し、磨いたかのように平滑である。裏面は剥離による凹凸を若干整えている可能性がある。片刃である。両端に紐掛け用の挟りを入れる。このタイプの打製石包丁では若干丁寧に作っている印象を受ける。完形である。149は最下層から出土した。頁岩製で両面とも剥離面を残す。片刃である。背部は刃潰し加工を施す。両端に紐掛け用の挟りを入れる。完形である。150は表面は自然面を残し、磨いたかのように平滑である。裏面は剥離面を残す。片刃である。両端には浅めの紐掛け用の挟りが認められる。151は砂岩製の大型品である。表面は自然面を残し、平滑である。裏面は剥離面を残す。表面の剥離部分に親指をあてがい持つと安定する。152・153は叩石である。152は楕円形の砂岩を使用する。両面中央部、側縁、特に両短辺は敲打により激しく欠損する。153は扁平な砂岩で両面中央部、側縁を使用する。いずれも使用痕跡は少ない。全体的に平滑である。被熱している。154は最下層から出土した柳葉式の鉄鏝である。155は須恵器の杯身である。立ち上がりは短く、内傾する。外底面は回転ヘラケズリ調整、その他の部分は回転ナデ調整である。混入品である。156は土師器の椀である。外底面には高台を貼付ける。全体的に摩耗している。混入品である。



图24 SD2出土遺物実測图6

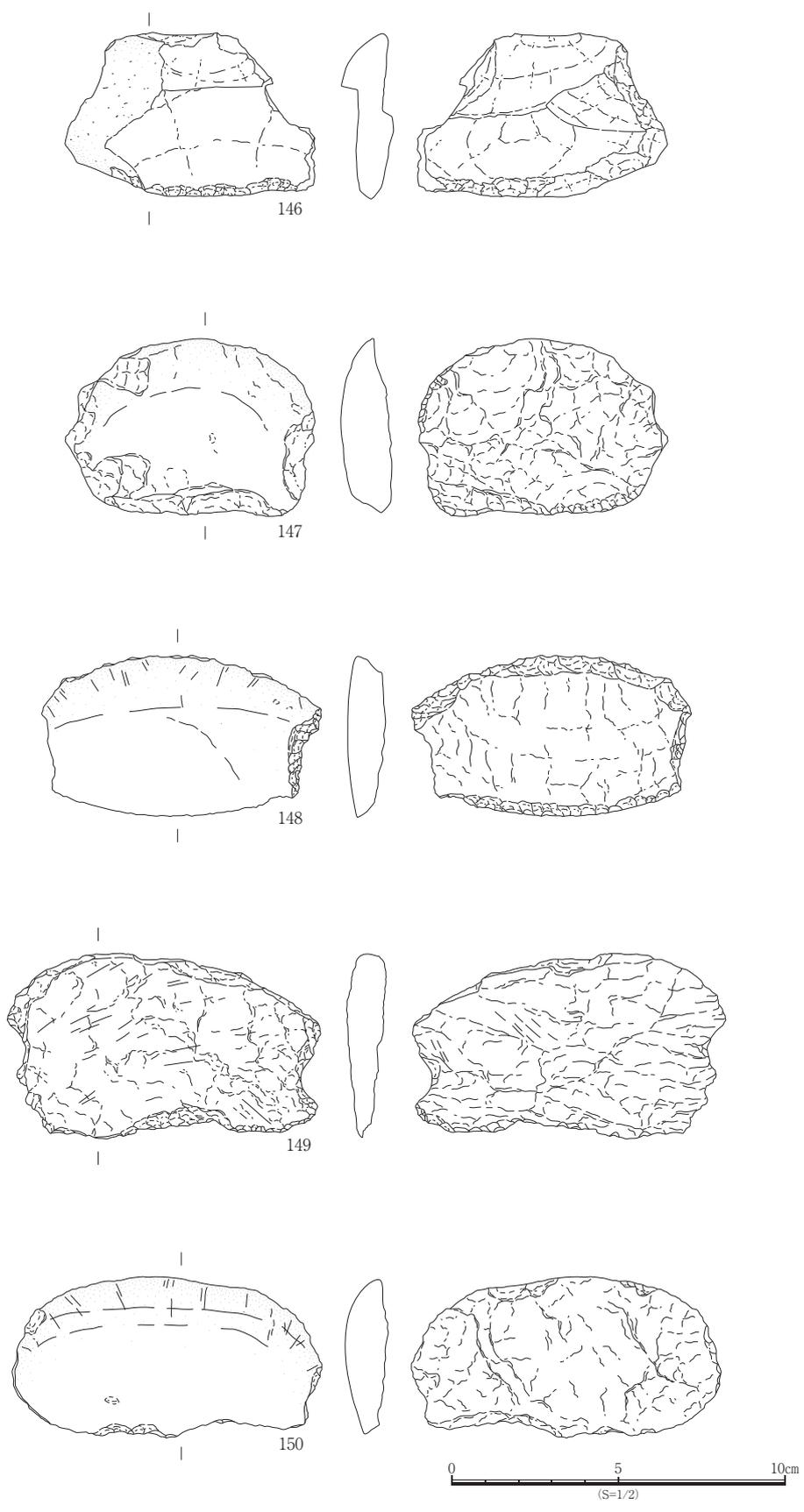


图25 SD2出土遺物実測図7

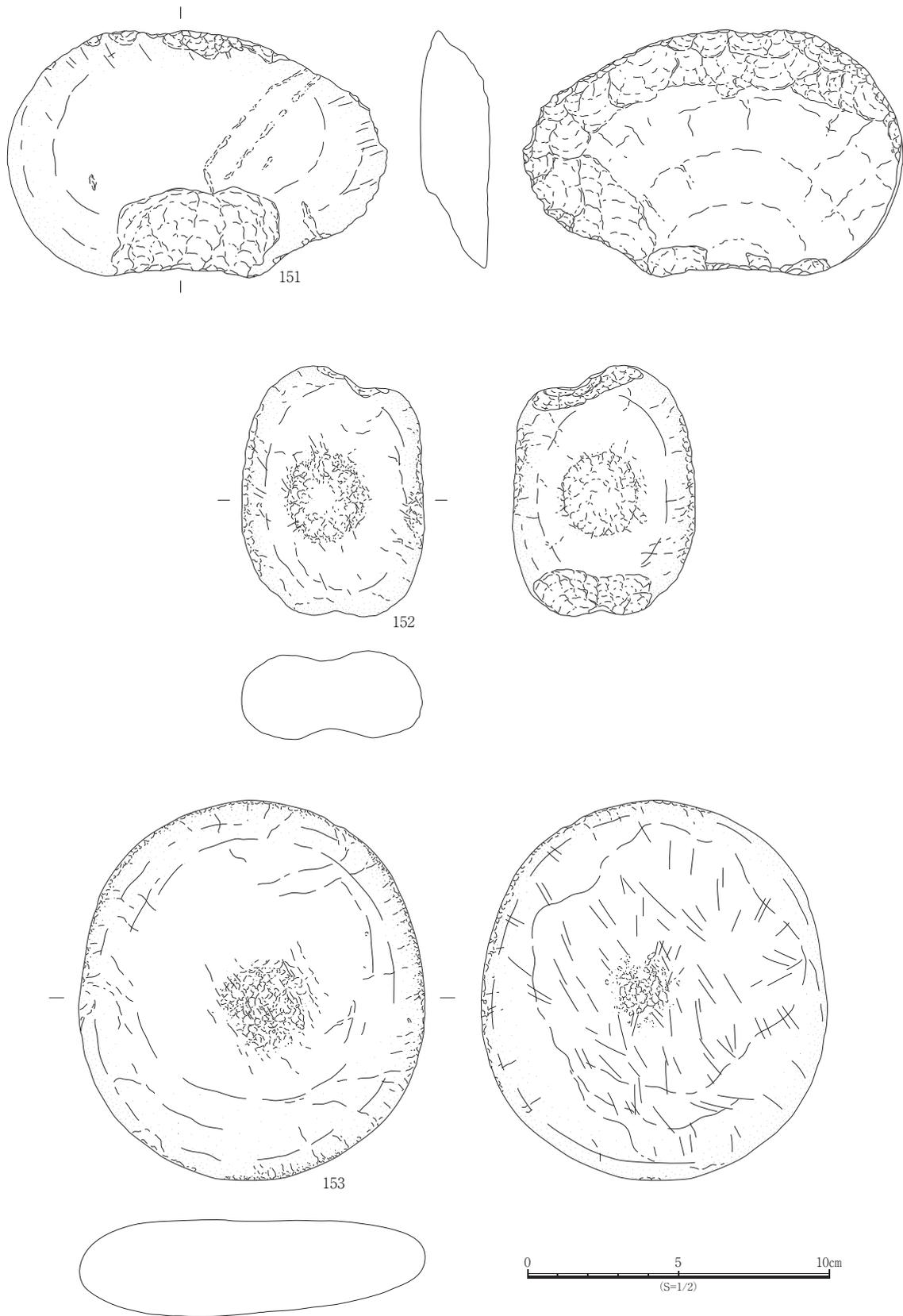


图26 SD2出土遺物実測図8

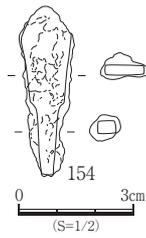


図27 SD2出土遺物実測図9

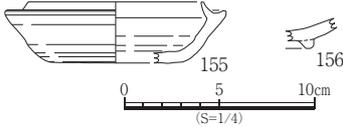


図28 SD2出土遺物実測図10

出土遺物

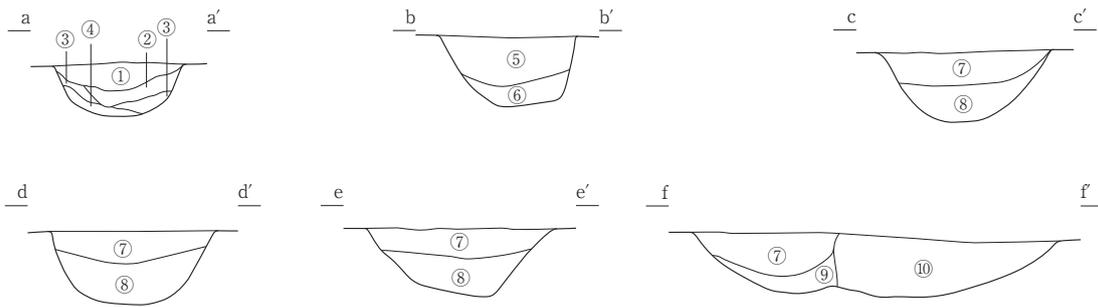
157は土師器の小皿である。外底面にヘラ切り痕跡が認められる。

(8)SD8 (図31)

SD8は、I C区で検出した南北方向(N-23°-E)の溝跡である。幅約0.8m、深さ約10cmである。検出長は約26mである。ほぼSD7に併行する。断面形は皿状を呈する。

(9)SD9

SD9は、I C区で検出した南北方向(N-17°-E)の溝跡である。幅約0.4m、深さ約10cmである。検出長は約11mであり、南北とも調査区外へのびる。ほぼSD7に併行する。断面形は皿状を呈する。

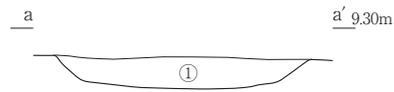


- ① におい黄橙色(10YR6/3)粘土質細粒砂に灰黄褐色(10YR5/2)粘土質細粒砂を含む[SD3]
- ② におい黄橙色(10YR6/3)粘土質細粒砂に褐灰色(7.5YR4/2)シルト質細粒砂を含む[SD3]
- ③ 灰黄色(2.5Y6/2)粘土質細粒砂に褐灰色(7.5YR5/1)シルト質極細粒砂を含む[SD3]
- ④ 灰黄色(2.5Y6/2)粘土質細粒砂[SD3]
- ⑤ 褐灰色(10YR5/1)細粒砂混じりシルト[SD3]
- ⑥ 黒褐色(10YR3/2)細粒砂混じりシルト[SD3]
- ⑦ 褐灰色(10YR6/1)細粒砂混じりシルト[SD3]
- ⑧ 褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト[SD3]
- ⑨ 灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂混じりシルト(粘性有り)[SD3]
- ⑩ 褐灰色(10YR5/1)細粒砂混じりシルト(やや粘性有り)[SD7]

図29 SD3・7断面図

(10)SD10

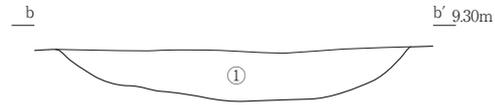
SD10は、I B区の北端部で検出した溝跡である。幅約0.4mであり、検出長は約9mである。深さ約10cm、断面形は皿状を呈する。溝跡の方向は、N-99°-Eである。



① 淡黄色(2.5Y8/4)・明黄褐色(10YR6/6)・褐灰色(10YR6/1)細粒砂混じりシルトが混じる

(11)SD11

SD11は、I B区の南西部で検出した溝跡である。幅約0.4mであり、全長約9mである。深さは約10cmと非常に浅く、断面形は皿状を呈する。溝跡の方向は、N-38°-Eである。



① 黒褐色(10YR3/2)粘土に淡黄色(2.5Y8/4)・明黄褐色(10YR6/6)・褐灰色(10YR6/1)細粒砂混じりシルトが混じる

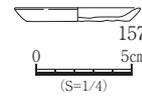
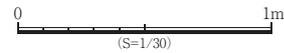


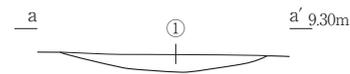
図30 SD7断面図・出土遺物実測図

(12)SD14 (図32)

SD14は、II E区で検出したものである。後世の攪乱と判断したが、青磁碗が出土した。

出土遺物

158は青磁碗である。内外面にはオリーブ灰色の釉薬を施し、外面には鎬蓮弁文を描く。



① 黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂混じりシルト

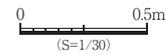


図31 SD8断面図

(13)SD16 (図33)

SD16は、II D区の北端部で検出した溝跡である。方向的には、SD2と概ね併行するが、出土遺物からは同時期とは考えられない。幅約0.8m、深さ約10cmである。検出長は約13mである。断面形は皿状を呈する。北端部は攪乱を受けている。隣接するII E区では検出できなかった。削平を受けているか、もしくは方向を変え仮設水路下を走る可能性がある。溝跡の方向は、N-51°-Eである。

出土遺物

159～161は壺である。159は直立する頸部から口縁部は大きく外反し、口唇部は面取りする。外面はハケメ調整である。内面は摩耗のため調整不明である。160の口縁部は頸部から大きく外反し、口唇部は面取りする。内外面ともハケメ調整である。全体的に摩耗する。161の口縁部は大きくひらき、口唇部は上方へ拡張させる。口唇部は凹面状を呈し、ハケ状原体により斜格子文を施す。外面はハケメ調整である。162は甕である。口縁部は「く」の字状を呈し、外面は叩き調整後、ハケメ調整を密に施す。口縁部は折り曲げて成形する。体部内面はハケメ調整である。163は庄内式の甕である。口縁端部はつまみ上げ、内面は頸部直下までヘラケズリ調整を施す。164は甗である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。叩き目の方向は上半部が右下がり、下半部が右上がりである。内面はハケメ調整、

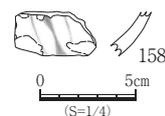


図32 SD14出土遺物実測図

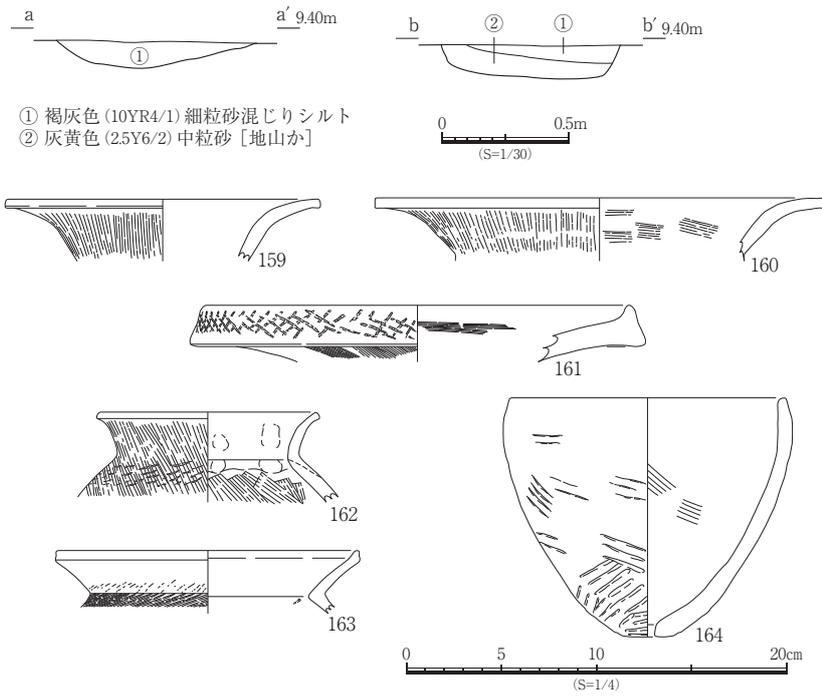


図33 SD16断面図・出土遺物実測図

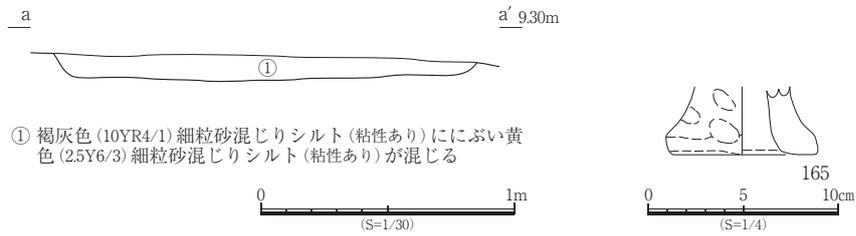


図34 SD17断面図・出土遺物実測図

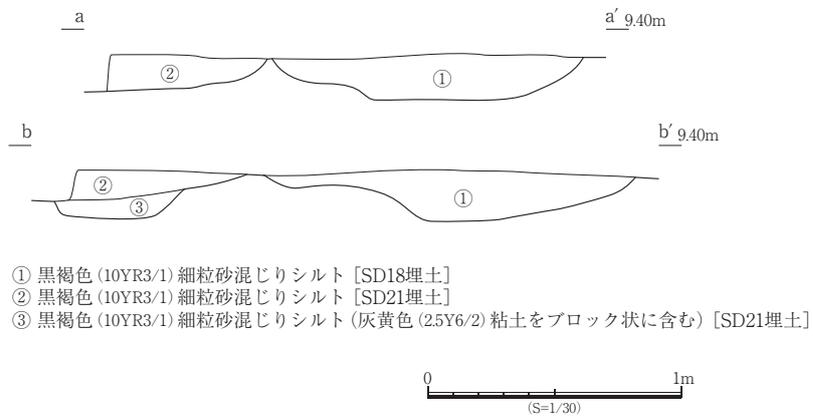


図35 SD18・21断面図

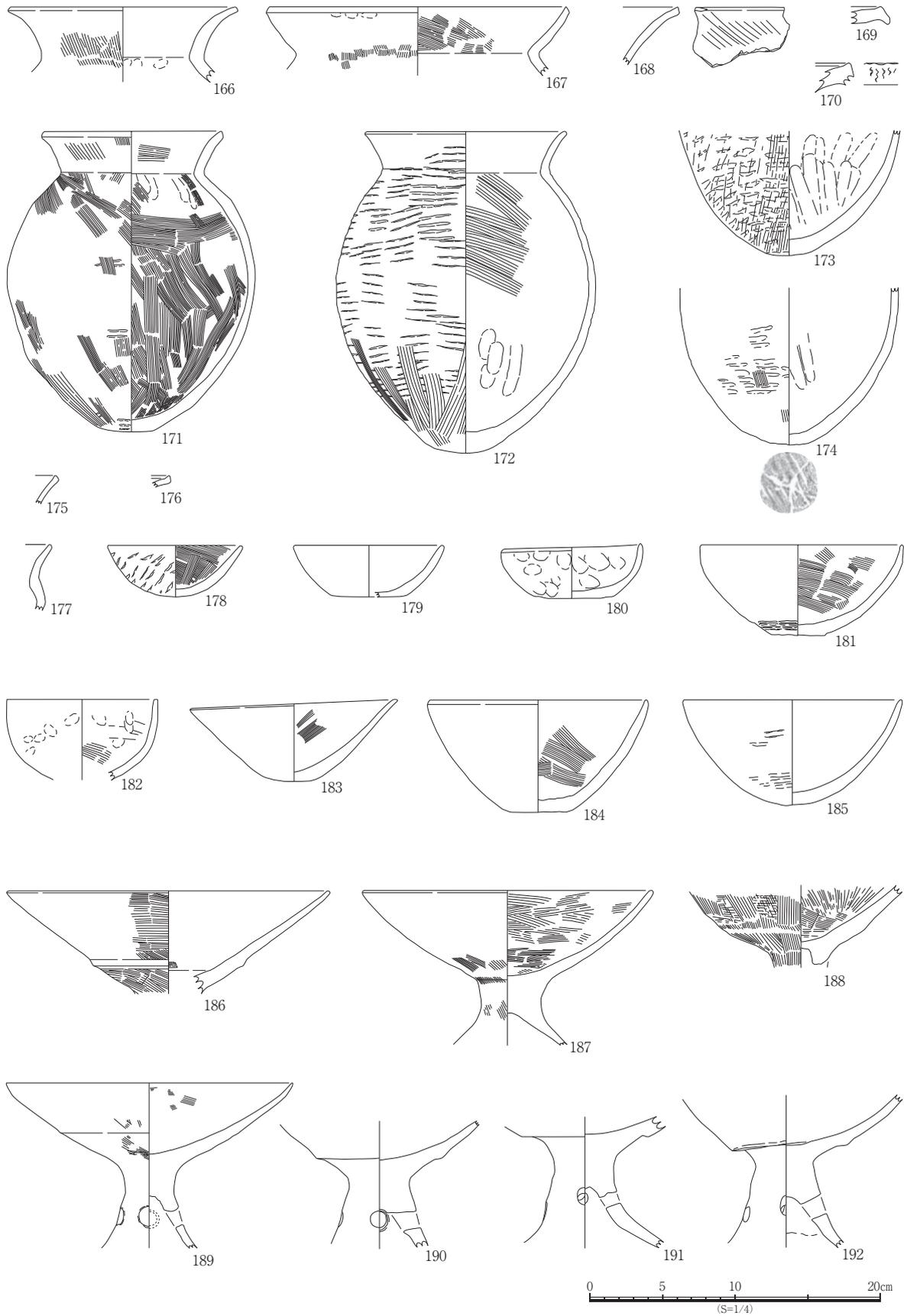


图36 SD18出土遺物実測图1

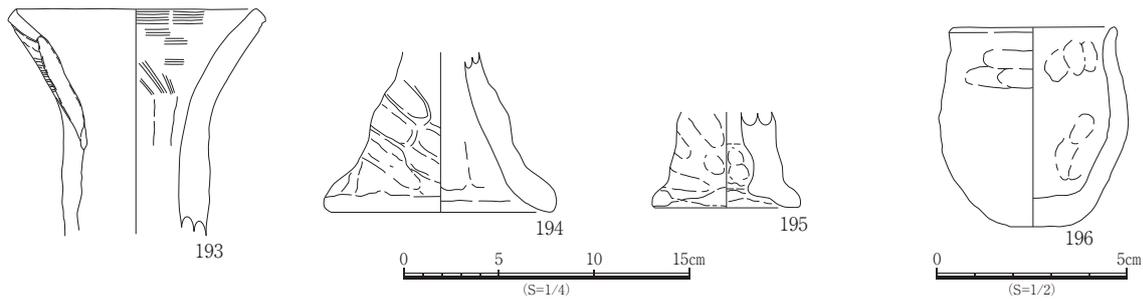


図37 SD18出土遺物実測図2

ナデ調整である。底部には焼成前に1穴、穿孔される。

(14)SD17 (図34)

SD17は、ⅡD区の南端部で検出した溝跡である。方向的には、SD2と概ね併行する。幅約1.7m、深さ約10cmである。検出長は約5mである。断面形は皿状を呈する。後述するⅡC区の溝と接続する可能性があるが、どの溝と接続するのかは特定できなかった。溝跡の方向は、N-46°-Eである。

出土遺物

165は支脚である。接地部は幅2cm弱の平坦面をなし、安定感がある。内外面ともナデ調整を施し、指頭圧痕、強いナデ調整による痕跡が認められる。若干、煤け、黒斑が認められる。

(15)SD18 (図35～38)

SD18は、ⅡC区で検出した溝跡である。F35-4-16、F35-4-17でSD19・20と重複するが、検出面での精査では、それぞれの平面形、また新旧関係を把握することができなかったため、重複し不整形な平面プランを呈している部分をSX3として、各遺構の平面形、新旧関係等を把握するために約5cmの掘削と精査を繰り返したが、判然としなかった。平面プラン、方向、埋土の特徴等から総合的に判断するとSD18は西方向へ折れる溝に接続する可能性が高い。しかし、ⅡD区では、その延長は検出していない。

幅約1.5m、深さ約20cmである。検出長は約24mである。断面形はレンズ状を呈する。比較的多くの遺物が出土している。

出土遺物

出土土器の組成比率は、壺3.33%、甕40.42%、鉢36.25%、高杯6.25%、支脚2.50%、その他0.83%、器種不明10.42%である。166～170は壺である。166は口縁部の破片である。外面はハケメ調整である。内面は摩耗のため調整不明である。167は口縁部の破片である。内湾し、口唇部はヨコナデ調整によりつまみ上げる。口縁部内面にはハケメ調整を施し、外面はナデ調整である。体部の外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。168は口縁部の破片であり、口唇部には面取りを施す。外面はハケメ調整、ナデ調整である。169は口縁部の破片である。口縁下端を引き出し、口唇部を拡張させる。170は口縁部の破片である。口唇部を拡張させ、刻目文を施す。171～177は甕である。171の体部は中位に最大径を持ち、やや張る。底端部は丸みを帯びるが、わずかに平らな部分を残すものの、ほぼ丸底である。口縁部は「く」の字状を呈する。口唇部には面取りを施す。外面は叩き調整後ハケメ調整を施す。口頸部のハケメ調整は密である。内面はハケメ調整であり、肩部には指頭圧痕が認められる。全体的にや

や摩耗するが残存率は良好である。172は球形指向の体部に屈曲度合いの弱い口縁部が付く。底部は叩き調整後、ナデ調整により丸底とする。外面は叩き調整後、下半部にはハケメ調整を施す。内面上半部はハケメ調整であり、下半部はナデ調整である。器壁はうすい。被熱により変色し、煤が付着している。173は底部の破片であり、内面から押し出すことにより丸底とする。外面は叩き調整後、ハケメ調整を密に施す。内面はナデ調整であり、一部にハケメが認められる。被熱により変色し、煤が付着する。174は底部の破片である。内底面から押し出し、ナデ調整により丸底とする。外面は叩き調整後、ハケメ調整を施す。被熱により変色し、煤が付着している。176は東四国系の甕と考えられる。口縁端部をつまみ上げ、口唇部は凹面状を呈する。177は小型甕の口縁部片である。口縁部はやや長めであり、屈曲度合いは弱い。外面は摩耗のため調整不明である。178～185は鉢である。178は丸底であり、半球形を呈する。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はハケメ調整である。残存率は良好である。179は端部に丸みを持った平底である。内外面ともナデ調整である。外底面には叩き目が認められる。また、外面には亀裂が認められる。180は端部に丸みを持った平底である。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕がみられる。歪む。残存率は良好である。181は端部に丸みを持った平底から内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はハケメ調整であり、底面はナデ調整である。また、外面には亀裂が認められる。182は深めの体部を持つ。外面には指頭圧痕がみられる。内面はハケメ調整である。また、外面には亀裂が認められる。183は丸底から体部は外上方へ直線的にのび、口唇部は尖らせる。外面は叩き調整後、丁寧にナデ調整を施し、叩き目はほとんどみられない。内面はハケメ調整、ナデ調整である。ほぼ完形である。また、外面に

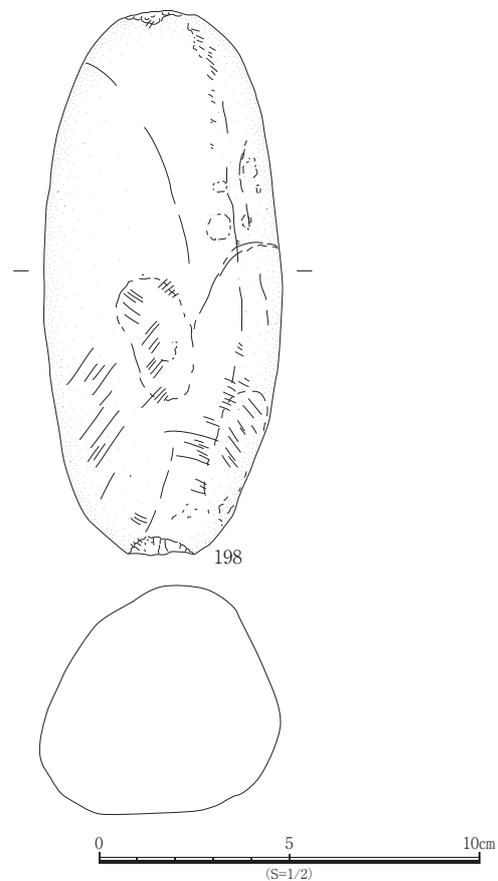
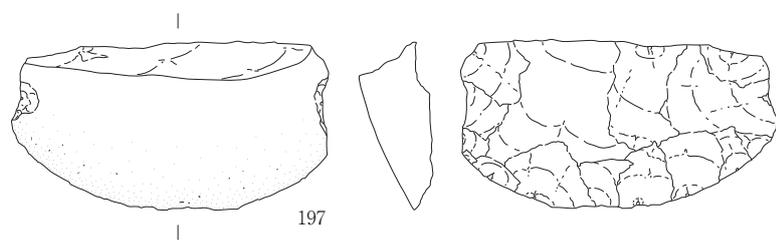


図38 SD18出土遺物実測図3

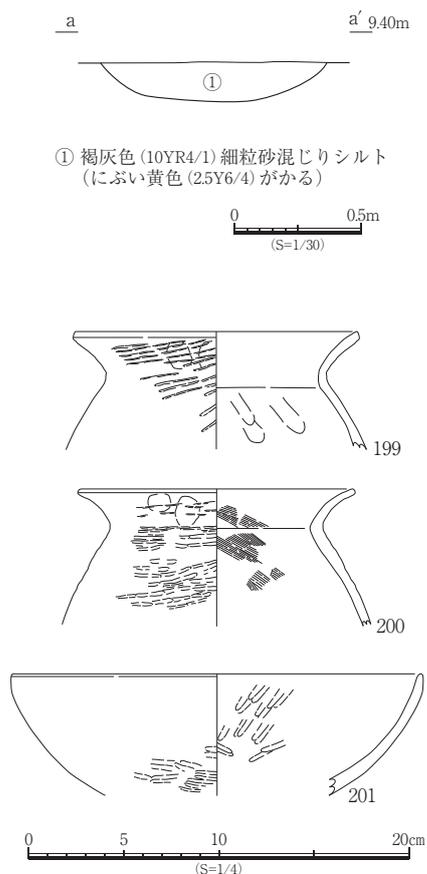


図39 SD19断面図・出土遺物実測図

は亀裂が認められる。184は端部に丸みを持った平底である。内底面には指頭圧痕が認められる。外面は摩耗により調整不明であるが、内面にはハケメが認められる。被熱により変色する。185の体部は半球形を呈し、底部は丸底である。内外面とも摩耗しているが、外面には叩き目が認められる。186～192は高杯である。高杯自体、それほど多く出土する器種ではないが、このSD18からはまとまって出土している。186は杯部から口縁部は直線的にのび、口唇部は丸くおさめる。杯部と口縁部の接合部は段を持つ。外面はハケメ調整を施す。被熱により変色する。187の杯部は碗形を呈し、口唇部は丸くおさめる。短い脚部から裾部が「ハ」の字状にのびる。杯部内外面、脚部外面はハケメ調整である。188は杯部と口縁部の境目は段部を形成する。外面はハケメ調整である。内面はハケメ調整後、ミガキ調整か。外底面は擬口縁状に剥離している。189は杯部と口縁部の接合部にわずかな段を持つ。杯部の内底面は凹む。内外面とも摩耗しているが、外面にはハケメが認められる。脚部に4カ所の円孔を穿つ。190は杯部と口縁部の接合部に段を持つ。脚部は「ハ」の字状にのび、4カ所に円孔を穿つ。内外面とも摩耗のため調整不明である。191の杯底面はわずかに凹む。口縁部との接合部は比較的明瞭な段となる。中実の短い脚柱部から裾部は大きくひらく。脚部の4カ所に円孔を穿つ。内外面とも摩耗のため調整は不明である。192の杯底面は中心部に向かってわずかに凹む。杯部と口縁部の接合部は明瞭な段となる。杯部は歪む。裾部は中実の短い脚柱部から「ハ」の字状にひらく。脚部の4カ所に円孔を穿つ。193～195は支脚である。193の上端を左右にひろげ、受け部とする。受け部内面はハケメ調整である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。194の脚部は「ハ」の字状にひらき、端部はさらに大きくひらく。接地部は平坦面となる。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。195は直立気味の脚部から端部がひろがる。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。196はミニチュア土器である。平らな部分を少し残した底部に丸みを帯びた体部、緩やかに外反する短い口縁部である。内外面ともナデ調整である。197は砂岩製の打製石包丁である。表面は自然面を全面的に残す。裏面は剥離面を残す。片刃であり、両端に紐掛け用の抉りを入れる。198は砂岩製の叩石である。棒状を呈し、上下端に明瞭な使用痕跡が認められる。

(16)SD19 (図39)

SD19はII C区の南で検出した溝である。北側の溝跡と接続すると考えられるが、特定することはできなかった。

出土遺物

199・200は甕である。199の口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部には軽くヨコナデ調整を施す。外面は口縁部まで右上がりの叩き調整を施す。200の口縁部は「く」の字状を呈する。外面は口縁部まで右上がりの叩き調整を施す。内面はハケメ調整である。201は鉢である。口径が大きく浅いタイプである。外面は摩耗しているが、叩き目が認められる。内面はミガキ調整である。

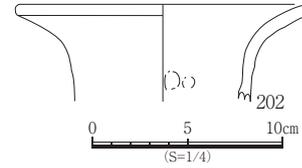


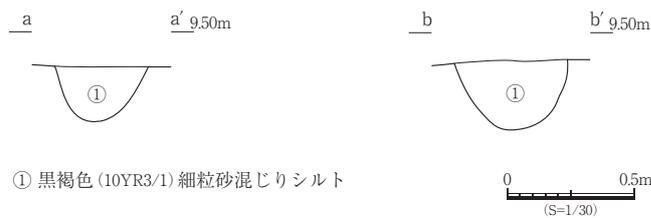
図40 SD21出土遺物実測図

(17)SD20

SD20は、II C区で検出した溝跡である。幅約0.8m、深さ約10cmである。SD18・19、SX3と重複するが、どの溝跡と接合するのかわ不明である。

(18)SD21 (図35・40)

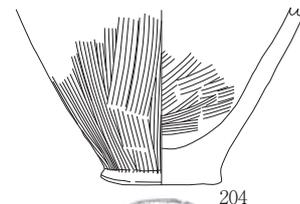
SD21は、II C区で検出した南北方向の溝跡である。大部分が仮設水路下である。SD18と一部重複していると考えられるが、サブトレンチを設定して新旧関係の把握に努めたが不明である。また、SD17と接続する可能性がある。検出面からの深さは約20cmであり、検出長は約14mである。



① 黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト

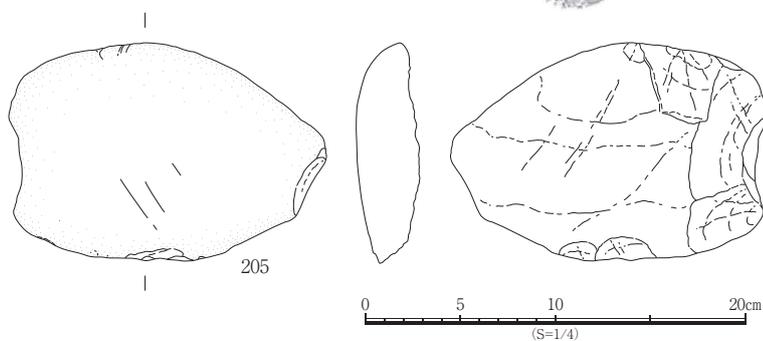
出土遺物

202は壺である。直立する頸部から口縁部は大きく外反する。口唇部には面取りを施す。内外面とも摩耗のため調整不明である。



(19)SD22 (図41)

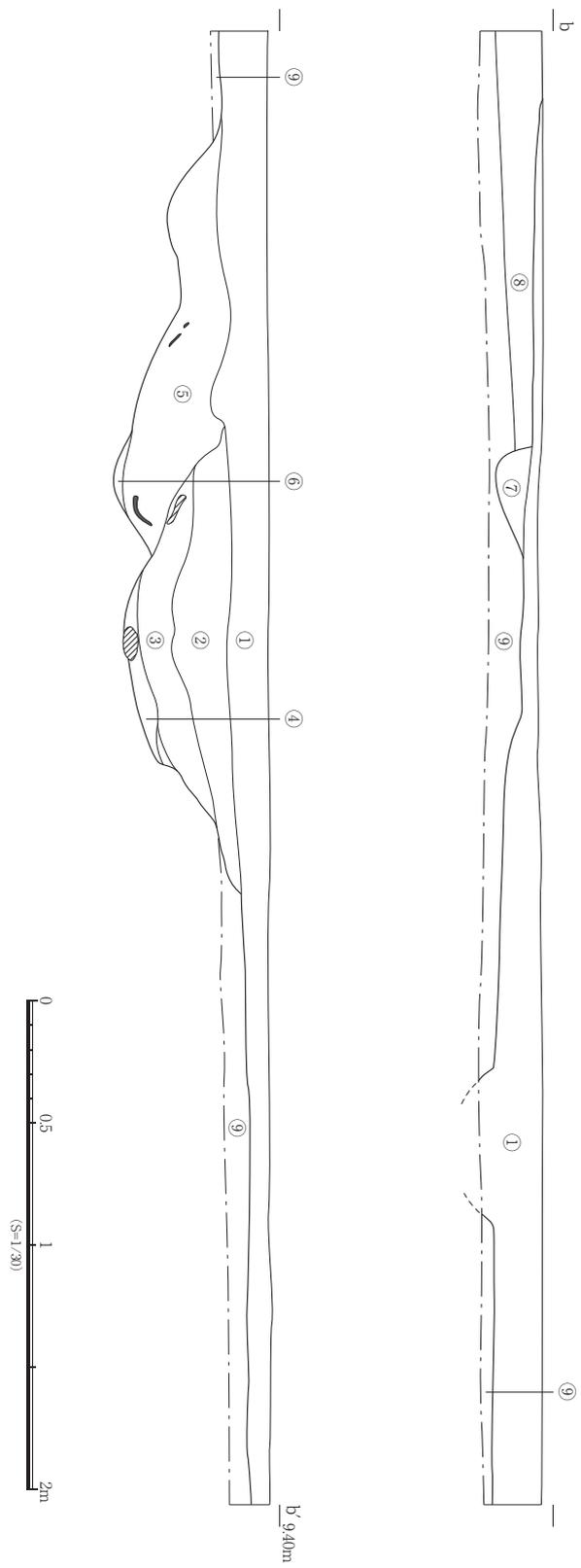
SD22は、II A・B区で検出した南北方向の溝跡である。ほぼ直線的にのびる。幅の割に深く、断面形は「U」字状を呈する。幅約0.4m、深さ約20cmである。検出長は約32mである。SD28とほぼ併行する。



出土遺物

203は平底の底部である。内外面とも摩耗のた

図41 SD22断面図・出土遺物実測図



- ① 暗灰黄色 (25Y5/2) 細粒砂混じりシルト [SD24埋土]
- ② 黄灰色 (25Y4/1) 中粒砂混じり粘土 (白色粒をやや多く含む) [SD26埋土]
- ③ 黒褐色 (25Y3/1) 粘土 [SD26埋土]
- ④ 黒色 (10YR1/1) 粘土 [SD26埋土]
- ⑤ 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト [SD25・27埋土]
- ⑥ 黄灰色 (25Y5/1) 細粒砂 [SD25埋土]
- ⑦ 黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂混じりシルト [SD28埋土]
- ⑧ 暗灰黄色 (25Y5/2) 細粒砂混じりシルト (上層)～暗灰黄色 (25Y4/2) シルト～微細粒砂 (下層)
- ⑨ 黄灰色 (25Y5/1) 微細粒砂 [地山]

図42 SD24～28断面図

め調整不明である。204 は底部である。底端部は若干突出する。体部は直線的に外上方へのびる。外面は縦方向のハケメ調整を密に施し、内面は斜め方向のハケメ調整を密に施す。外底面には不定方向のハケメ調整を施す。外面には煤が付着する。205 は大型の打製石包丁である。砂岩製であり、表面は自然面を残し、裏面は剥離痕跡を残す。片刃であり、両端には紐掛け用の袂りを穿つ。

(20)SD23

SD23は、II A・B区で検出した北西方向から南東方向へのびる溝跡である。ほぼ直線的にのびる。II B区では、検出面と埋土が類似しており、検出が難しかった。断面形は皿状を呈する。幅約0.4m、

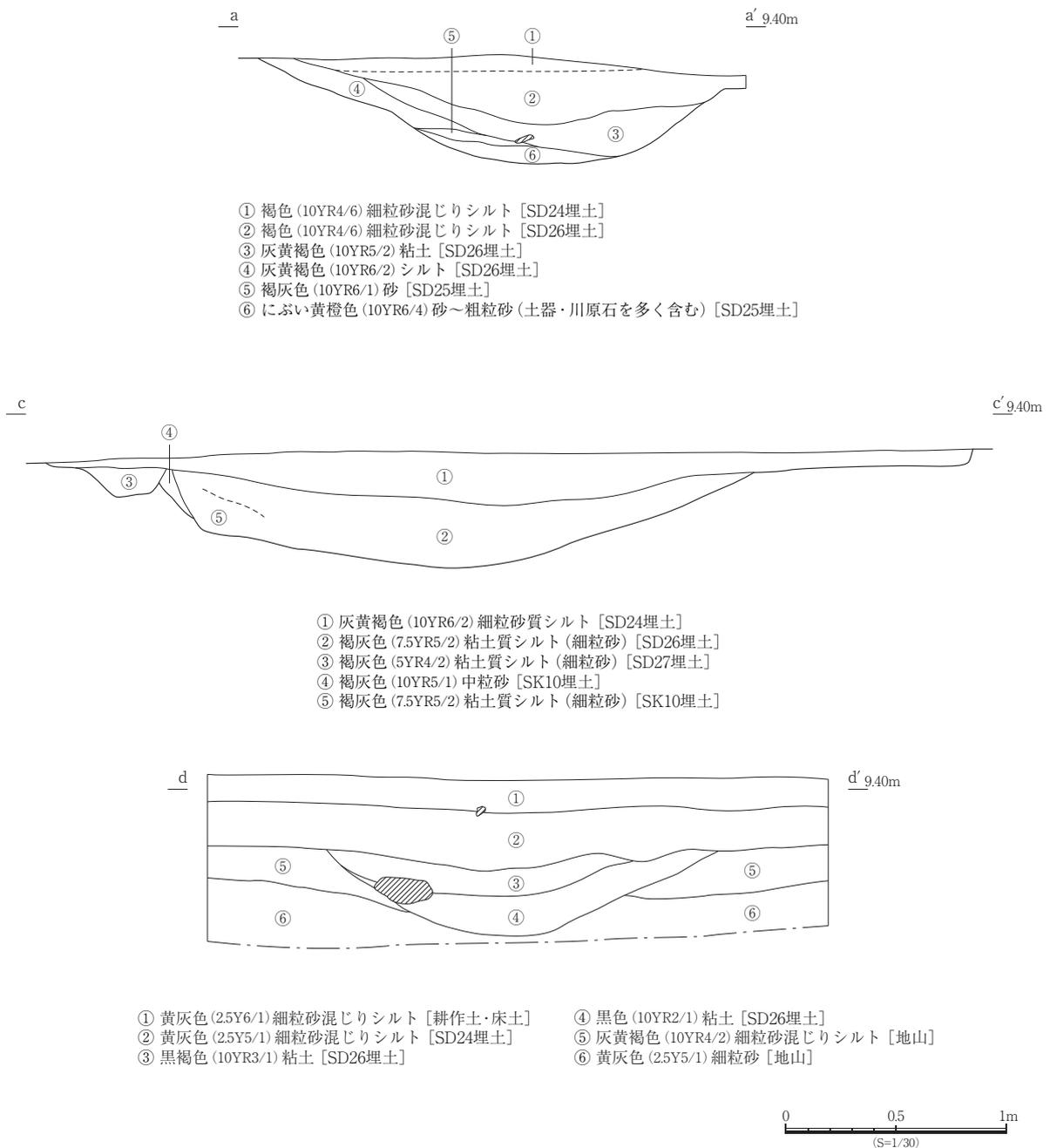


図43 SD24～27断面図

深さ約10cmである。検出長は約23mである。

(21)SD24 (図42～44)

SD24は、ⅡB区で検出した南北方向の溝跡である。溝跡が重複して走る相対的に低い地形に土が堆積し溝状にみえた可能性がある。東肩は検出できたが、西肩は不明瞭であった。削平を考慮に入れるとSD24の埋土とした土が広範囲に堆積していた可能性がある。幅約3.7m、深さ約20cmである。検出長は約36mである。F35-4-10、F35-5-6、F35-5-7に設定した土層観察用のアゼから、溝跡の新旧関係は、古いほうからSD25→SD26→SD27→SD24である。出土遺物は約2,000点で細片が多く、ローリングを受けたものが多い。時期比定が困難であるが弥生時代終末から古墳時代初頭の土器片が多くを占め、SD24の下層で検出したSD25あるいはSD26のものが含まれている可能性がある。また、微量ながら古代と推定される須恵器片、土師器片、近世以降の陶磁器片も含まれている。耕作土直下での検出であることと埋土の特徴がSD1のものと類似していることから、SD24の時期は古代と考えておきたい。

出土遺物

206は土師器の杯である。内外面とも摩耗のため調整不明である。207は須恵器の杯身である。受け部は外上方へ短くのび、端部は丸く仕上げる。立ち上がりは短く内傾し、端部は尖らせる。208は須恵器の脚部である。屈曲し、端部は丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整である。209は凹基式の打製石鏃である。側縁部には調整加工を行う。サヌカイト製である。一部を欠損する。210は凹基式の打製石鏃である。基部の抉りは深く、側縁部には調整加工を行う。サヌカイト製である。一部を欠損する。211は赤色チャート製の打製石鏃である。側縁部のみに調整加工を行う。一部を欠損する。

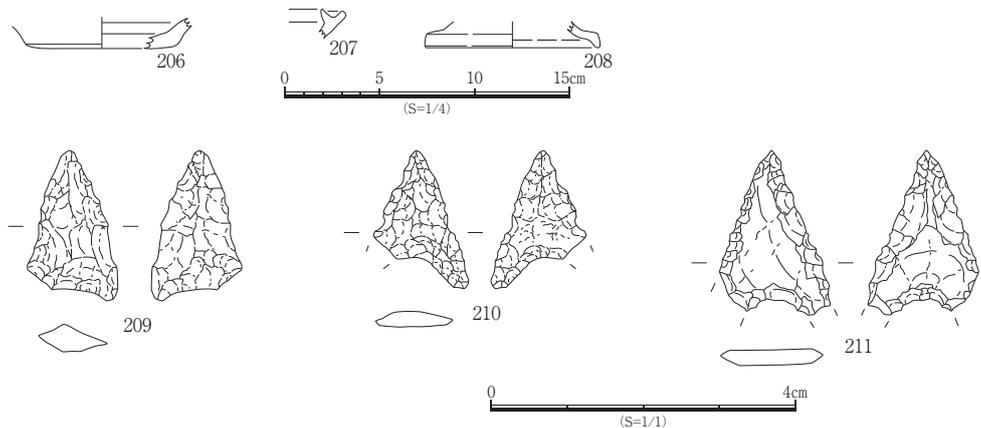


図44 SD24出土遺物実測図

(22)SD25 (図42・43・45～48)

SD25は、ⅡB区で検出した南北方向の溝跡である。SD26とSD27に切られる。もっとも古い溝跡である。底付近に弥生土器を多く含んでいる。SD26と同様の軌跡を描く。深さ約50cmであり、約50m検出している。

出土遺物

出土土器の組成比率は、壺5.31%、甕49.34%、鉢29.18%、高杯2.12%、支脚3.45%、その他0.27%、器種不明10.33%である。212～214は壺である。212の口縁部は「く」の字状を呈し、頸部から直線的にのび、口唇部に軽くヨコナデ調整を加える。内外面ともやや摩耗するが、外面には叩き目が認められる。内面はナデ調整である。肩部には粘土紐接合痕跡が認められる。213の口縁部は大きく外反し、

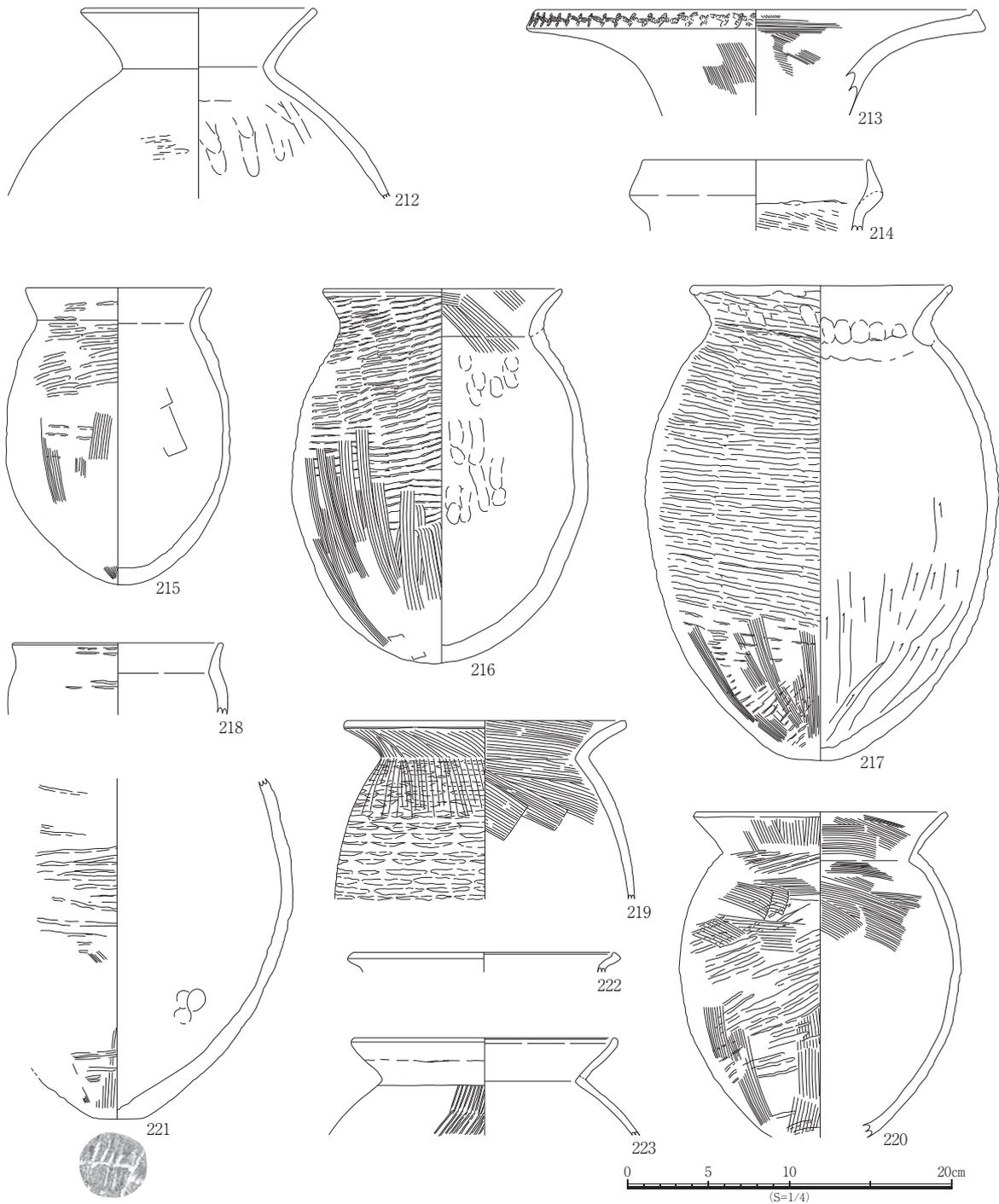


図45 SD25出土遺物実測図1

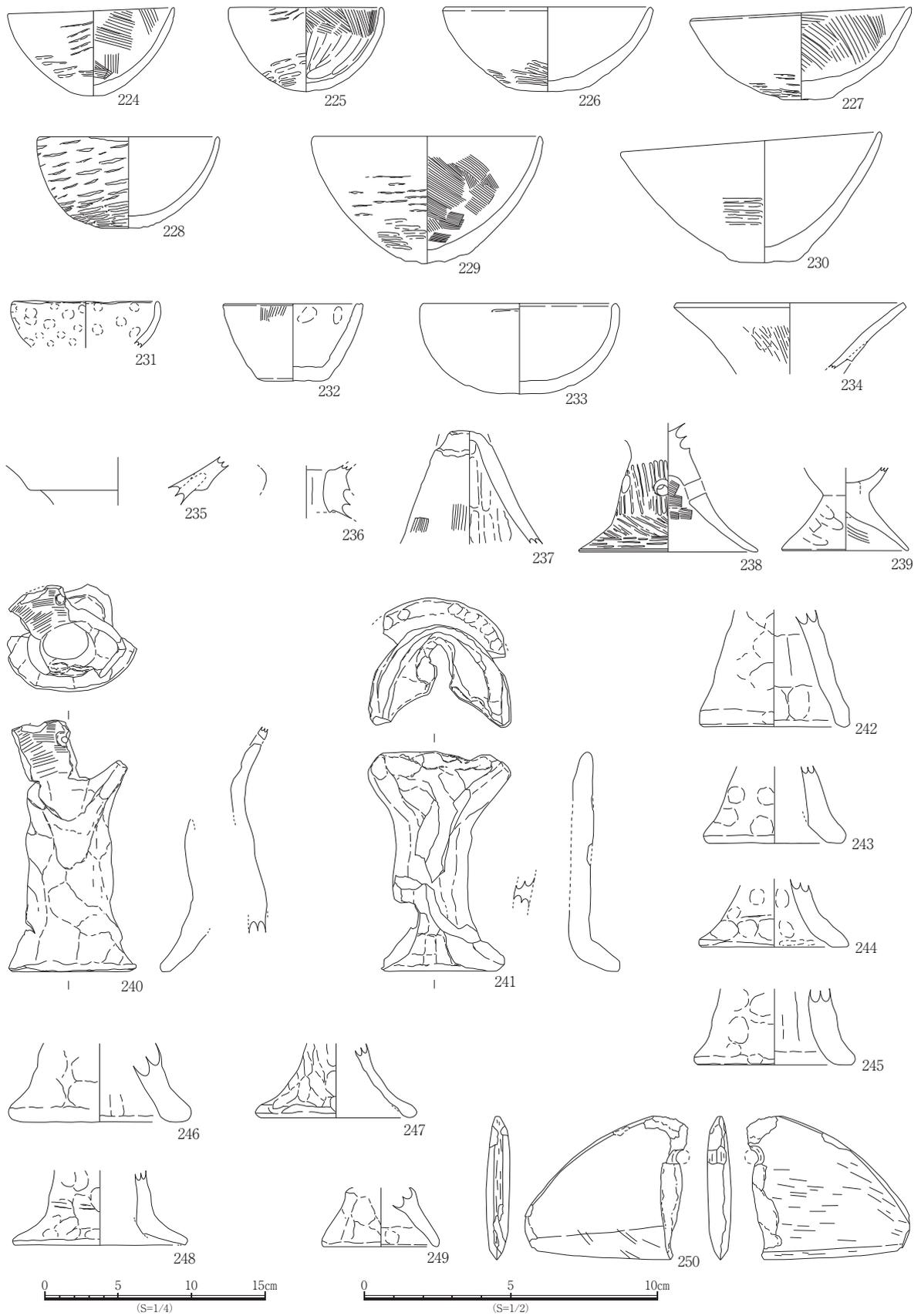


图46 SD25出土遗物实测图2

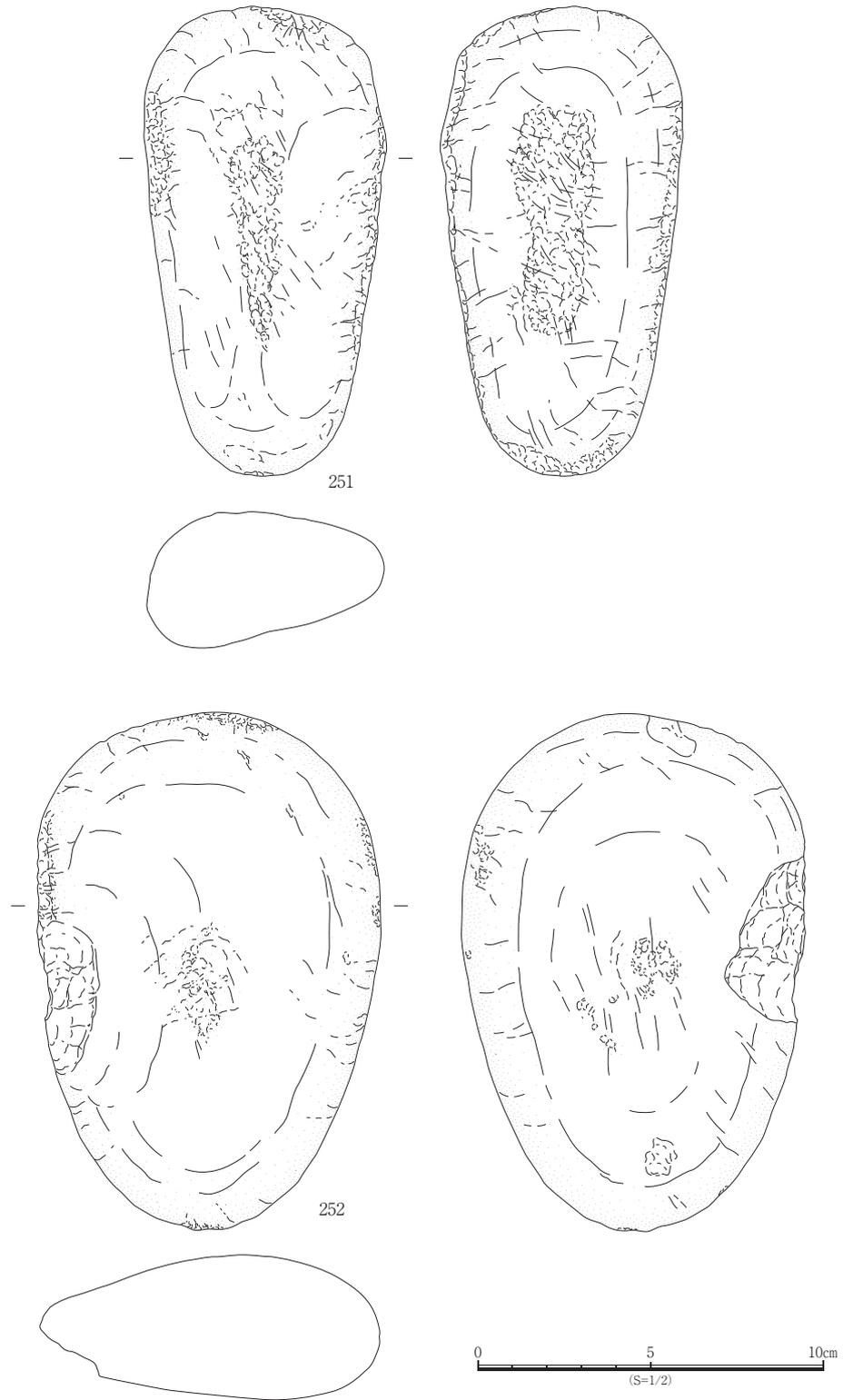


図47 SD25出土遺物実測図3

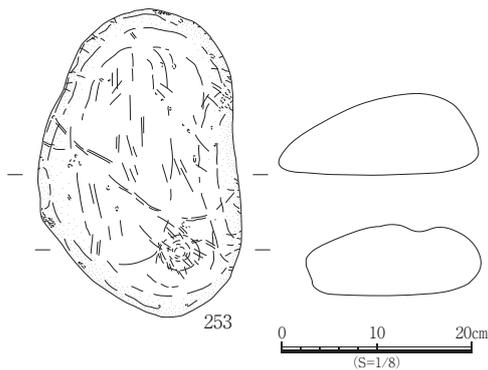


図48 SD25出土遺物実測図4

端部は上方向へ拡張する。凹面状の口唇部にハケメ状原体による斜格子文を施す。内面及び頸部外面にはハケメ調整を施す。214は複合口縁壺である。一次口縁部の上端に粘土紐を置き二次口縁部とし、口唇部は丸くおさめる。内面には粘土紐接合痕跡が認められる。一次口縁部内面にはハケメ調整を施す。215～223は甕である。215の体部は長胴であり、丸底である。口縁部は短く外反度合いは弱い。外底面には叩き目が認められるが、完全な丸底となる。外面は叩き調整後、下半部にはハケメ調整を施す。口縁部にも上半部から連続する叩き目がみられる。内面はナデ調整である。216の体部は中位がやや張る長胴である。底部は完全な丸底である。口縁部は「く」の字状を呈し、端部は尖らせる。外面は叩き調整後、下半部にはハケメ調整を密に施す。ハケメの中には器面から離さずに下から上へ、そして下へ連続して施されるものも含まれている。口縁部には体部上半からの連続した叩き目が認められる。217の体部は長胴であり、底部はほぼ丸底となる。口縁部は「く」の字状を呈する。口唇部はナデ調整により粘土が垂れる。全体的に歪む。外面は右下がりの叩き調整後、下半部には縦方向のハケメ調整を密に施す。底部付近の叩き目は右上がり方向である。叩き目の方向から三分割で成形されていると考えられる。口縁部の叩きは上半部から一連のものである。内面頸部直下には粘土紐接合痕跡が認められる。内面上半部はナデ調整、下半部はヘラケズリ調整である。218は小型の甕である。口縁部は緩やかに外反する。外面は叩き調整後、ナデ調整である。219の口縁部は「く」の字状を呈する。体部外面は叩き調整、口頸部はハケメ調整である。口縁部には叩き目がみられない。内面は口縁部から肩部にかけてハケメ調整を施す。220の体部は丸みを持ち、球形に近い。口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は平坦面をなす。外面は叩き調整後にハケメ調整を施す。ハケメ調整は中位付近を除いて施される。上胴部は斜め方向に施され、特徴的である。口縁部には丁寧にハケメ調整が施されているため、ほとんど叩き目はみられない。内面は口縁部から上胴部にかけては横方向のハケメ調整、下半部はナデ調整である。221の体部は中位が張る長胴である。外底面には叩き目がみられるが、ほぼ丸底化している。外面は叩き調整後、下半部を中心にハケメ調整を施す。器面は被熱により赤色に変色する。222は口縁端部をつまみ上げる。搬入品である。223は庄内式の甕である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部をつまみ上げる。内面は頸部直下までヘラケズリ調整を施す。224～233は鉢である。224は丸底で体部は内湾して立ち上がる。外面は叩き調整後ナデ調整であり、内面はハケメ調整である。225は丸底で体部は球形を呈する。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はハケメ調整後、下半部にはナデ調整を施す。ほぼ完形に復元できた。226は丸底であり、体部は丸みを持ちながら立ち上がる。外面は叩き調整後ナデ調整であり、亀裂が認められる。内面はナデ調整である。227は底端部に丸みを持つ平底で、体部は丸みを持ちながら立ち上がる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はハケメ調整を施し、底面のみナデ調整である。ほぼ完形に復元できた。228の底部はやや平らな部分を残すものの、ほぼ丸底である。体部は半球形を呈し、外面は叩き調整後ナデ調整である。内面はナデ調整である。残存率は良好である。229の体部は半球形を呈する。外面は叩き調整後ナデ調整を施す。内面はハケメ調整である。残存率は良好である。230は平底

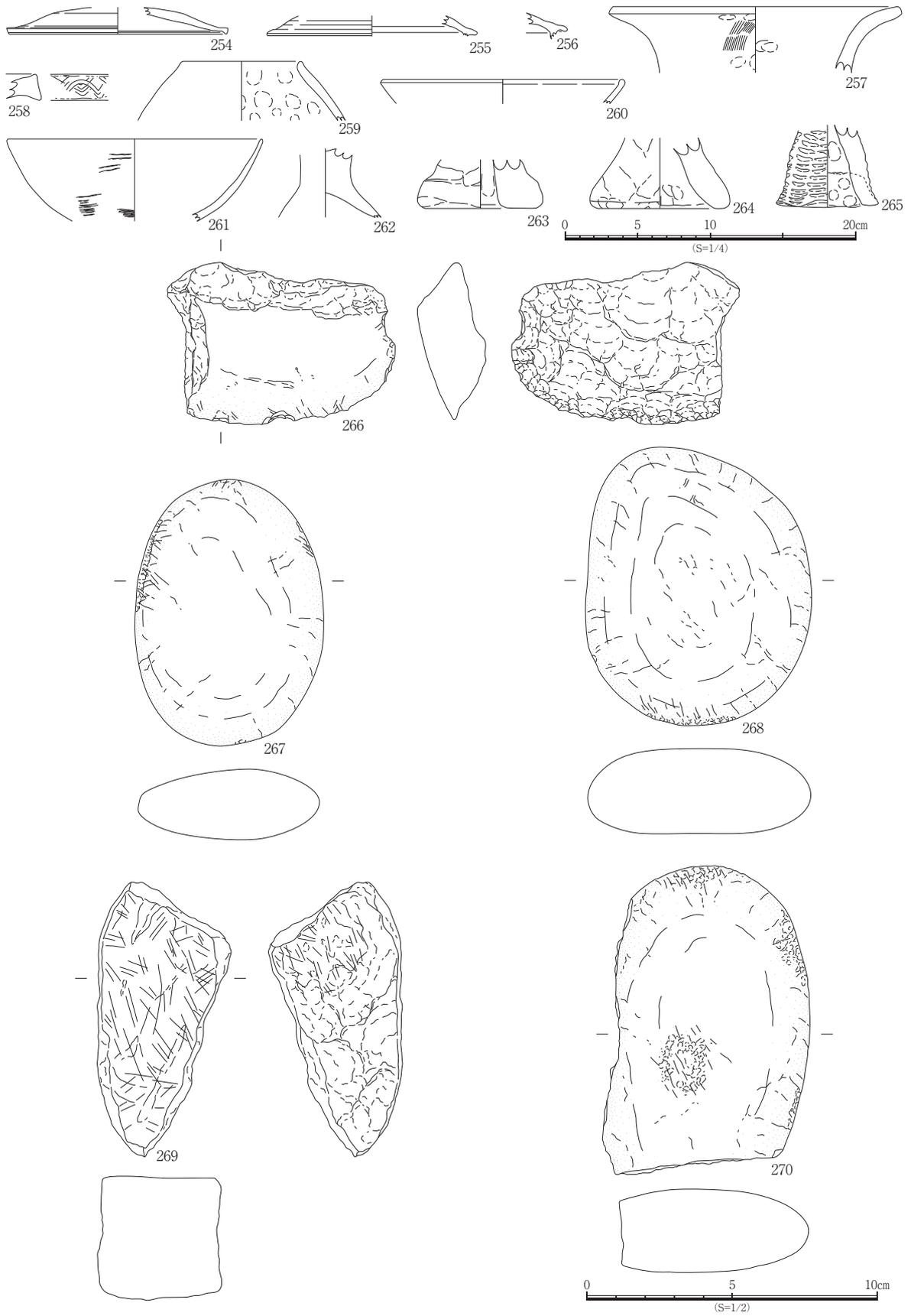


图49 SD26出土遺物実測図

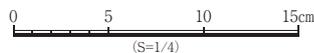
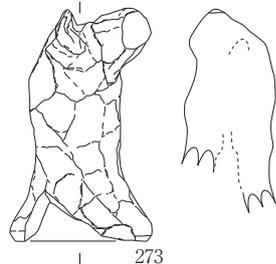
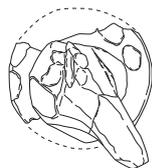
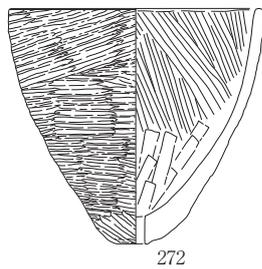
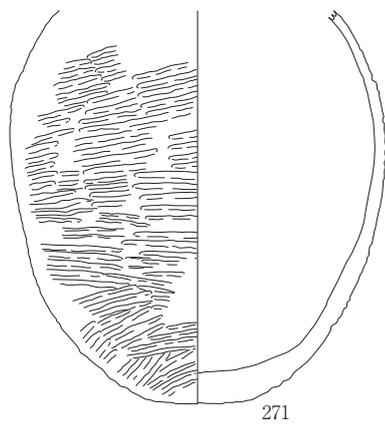


図50 SD25・26出土遺物実測図

であり、体部は丸みを持って立ち上がる。内外面とも摩耗しているが、外面には叩き目が認められる。残存率は良好である。231は皿状を呈する。手づくね成形である。232はやや小型のもので体部は平底から外上方へのび、口縁部を指頭により若干、直立させる。内外面とも摩耗しているが、外面の一部にハケメが認められる。233は完全な丸底であり、体部から口縁部にかけて内湾する。内外面ともナデ調整で仕上げる。口縁部外面に叩き目状の痕跡が認められる。残存率は良好である。234～238は高杯である。234の杯部は直線的にひろがり、口唇部は平坦面をなす。外面はハケメ調整、内面はミガキ調整か。235の接合部は突出する。内外面ともナデ調整か。二重口縁壺の可能性もある。236は脚柱部の破片である。中空である。237は脚部の破片である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。238は短い中実の脚部から裾部が「ハ」の字状にひろがる。脚部の4カ所に円孔を穿つ。外面はミガキ調整、内面にはハケメ調整を施す。239は脚部の破片であり、裾部は「ハ」の字状にひろがる。内外面とも摩耗のため調整不明である。240～248は支脚である。240の体部は断面楕円形の中空である。上部を左右にひらき受け部を形成する。内面にはハケメ調整を施し、円孔を穿つ。裾部は「ハ」の字状にひろがり、端部は丸くおさめる。受け部内面以外は、ナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整による痕跡が認められる。

残存率は良好である。煤が付着する。241は上部を左右にひらき受け部を形成する。受け部は厚く作られている。裾部は「ハ」の字状にひろがり、端部は丸くおさめる。内外面の調整はナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整による痕跡が認められる。煤の付着が認められる。242は「ハ」の字状を呈し直線的にのびる。内外面ともナデ調整である。煤が付着する。243～248は裾部を外反させ、端部は丸くおさめる。内外面の調整はナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整による痕跡が認められる。249はミニチュア土器である。脚部として図示したが、天地逆の可能性もある。250は磨製石包丁である。約半分が欠損する。直線刃の片刃である。背部近くに円孔を穿つ。混入品である。251は砂岩製の叩

石である。両面、側面、上下端など多くの箇所に敲打痕跡が認められる。252は砂岩製の叩石である。主として側縁を使用する。敲打により剥離している。253は砂岩製の台石である。使用により平滑となった部分、凹んだ部分が認められる。

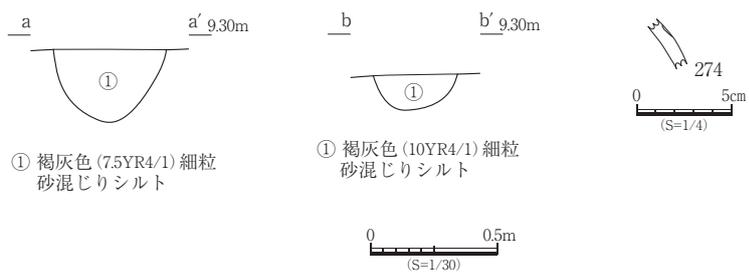


図51 SD27断面図・出土遺物実測図

(23) SD26 (図42・43・49)

SD26は、ⅡB区で検出した南北方向の溝跡である。SD25を切り、SD27に切られる。SD25とは対照的に遺物はほとんど含まれていない。両者の遺物の包含量の違いは、周辺部での人間活動の多寡が反映しているものと推測される。幅約1.9m、深さ約40cmである。検出長は約50mである。

出土遺物

254～256は須恵器の蓋である。254の口唇部は面取りされ、端部は下方へつまみ出す。焼成不良であり、摩耗している。若干、歪む。255の口縁部は外反させ、端部は丸くおさめる。内面にはかえりが付く。内外面とも回転ナデ調整である。256の口縁部は外反させ、端部は丸くおさめる。内面にはかえりが付く。内外面とも回転ナデ調整である。257は壺である。口縁部は外反し、口唇部には面取りを施す。外面はハケメ調整であり、内面はナデ調整である。258は壺である。口唇部は下方に拡張し、櫛描波状文を施す。259は無頸壺か。被熱により変色する。外面はハケメ調整か。内面には指頭圧痕が認められる。260は庄内式の甕である。口縁端部をつまみ上げる。261は鉢である。体部は丸みを帯びる。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。内面はナデ調整である。262は高杯である。短い中実の脚部から裾部が「ハ」の字状にひろがる。内外面とも摩耗のため調整不明である。263～265は支脚である。263の接地部は幅2.5cmの平坦面となる。内外面ともナデ調整であり、外面には指頭圧痕が認められる。264は「ハ」の字状にひろがる。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整による痕跡が認められる。265の外面には右下がりの叩き目が認められる。内面はナデ調整であり、粘土紐接合痕跡が認められる。266は砂岩製の打製石包丁である。表面は自然面を残し、裏面は剥離痕跡を残す。片刃である。両端には紐掛け用の抉りを入れる。完形である。267・268は叩石である。扁平な楕円形の砂岩を使用する。側面の一部に敲打痕跡が認められる。完形である。269は砥石である。大きく欠損する。被熱により変色し、煤ける。270は叩石である。扁平な砂岩を使用する。側面は敲打により大きく欠損する。線状の痕跡が認められる。

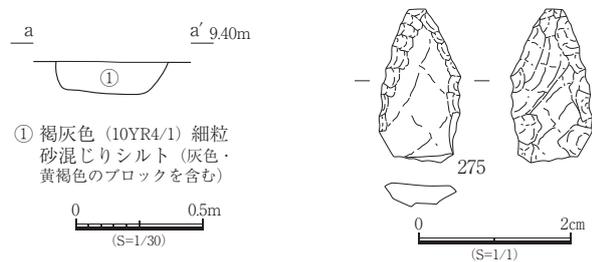


図52 SD28断面図・出土遺物実測図

271～273はSD25とSD26から出土した破片が接合したものである。271は甕である。底部は端部

に丸みを帯びるが平底である。外面は叩き調整である。叩き目の方向から二分割あるいは三分割で成形されていると推測される。272は甑である。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。内面上半部はハケメ調整、下半部はナデ調整である。外底面にも叩き目がみられる。底部には焼成前に一穴を穿孔する。273は支脚である。体部は筒状を呈し、頂部付近まで中空である。裾部は「ハ」の字状にひらき、端部は丸くおさめる。断面楕円形の指、背部につまみを付す。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕がみられる。煤が付着する。1本の指、もう1本の指の先端、脚部の一部が欠損する。

(24)SD27 (図42・43・51)

SD27は、ⅡB区で検出した南北方向の溝跡である。SD25, SD26を切る。SD26と同様の軌跡を描く。幅約0.5m, 深さ約30cmである。検出長は約41mである。断面形はレンズ状を呈する。

出土遺物

274は弥生土器の体部片である。外面にはハケ状原体により刻目文が施される。

(25)SD28 (図42・52)

SD28は、ⅡB区で検出した南北方向の溝跡である。断面形は逆台形を呈する。幅約0.4m, 深さ約10cmである。検出長は約36mである。SD22とはほぼ併行する。

出土遺物

275はサヌカイト製の打製石鏃である。鏃身は細い。先端部と基部が欠損する。両面とも主要剥離面を残し、調整加工は縁辺部にのみ施す。

(26)SD29

SD29は、ⅡB区で検出した南北方向の溝跡である。幅約0.4m, 深さ約10cmである。検出長は約14mである。SX2の一部の可能性はある。

(27)SD31

SD31は、ⅡB区の北端部で検出した溝跡である。幅約0.6m, 深さ約10cmである。検出長は約1mである。

(28)SD34 (図53)

SD34は、ⅡG②区で検出した南北方向の溝跡である。規模、埋土、遺物の包含状況等からSD26の延長と考えられる。

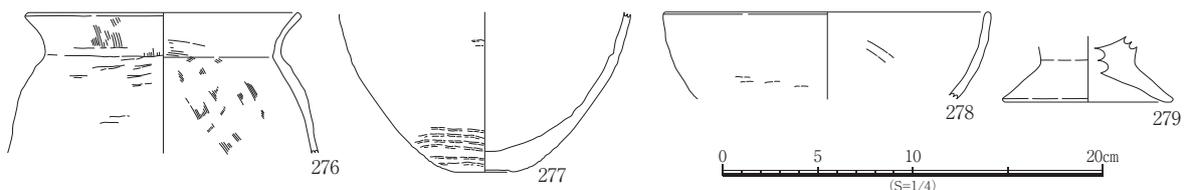


図53 SD34出土遺物実測図

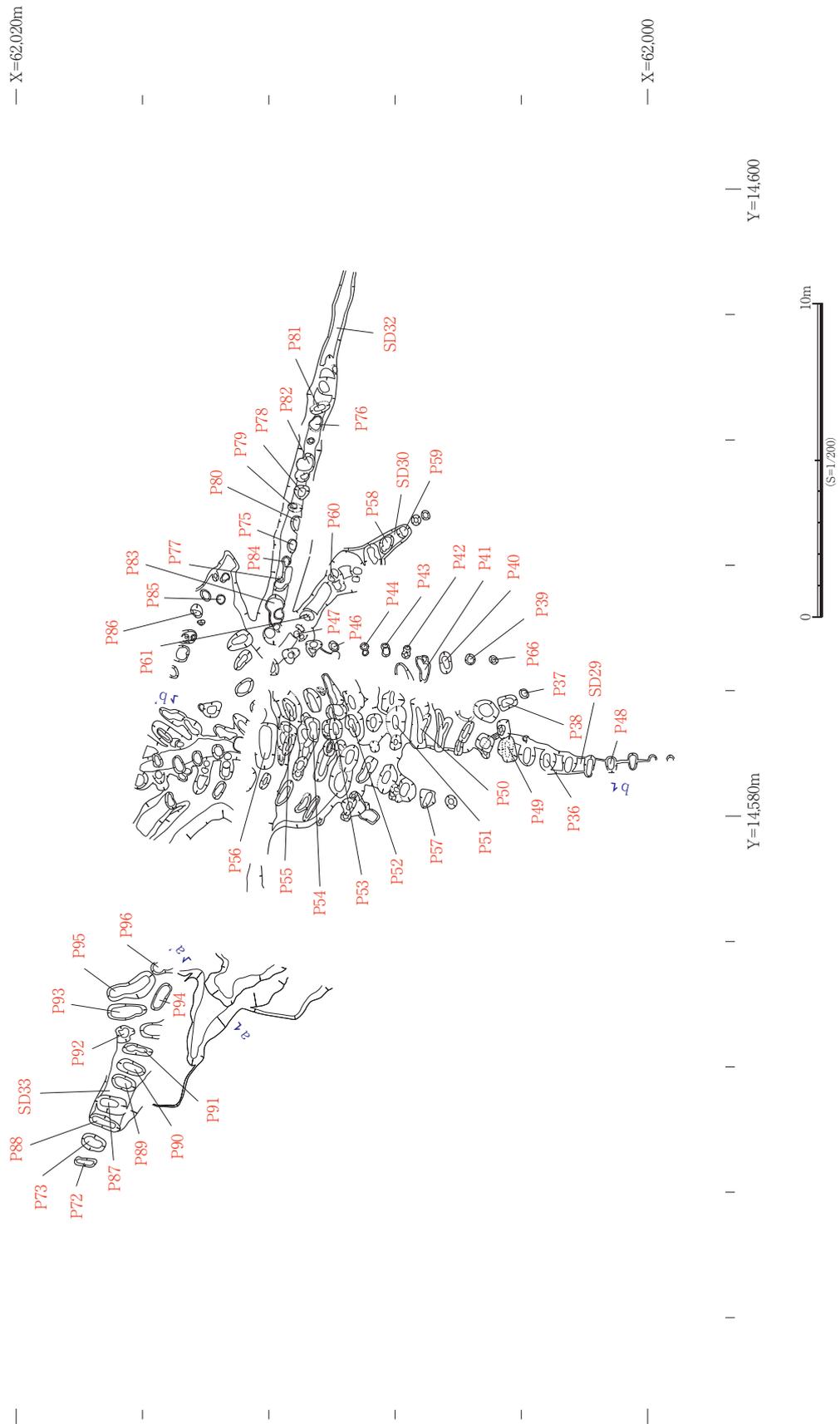
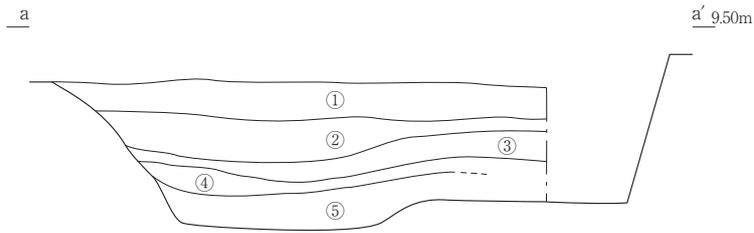
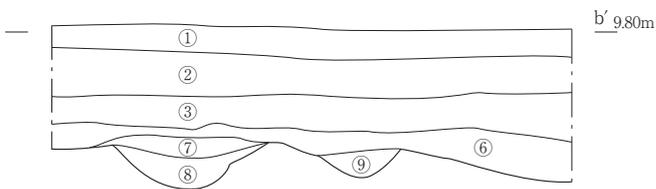
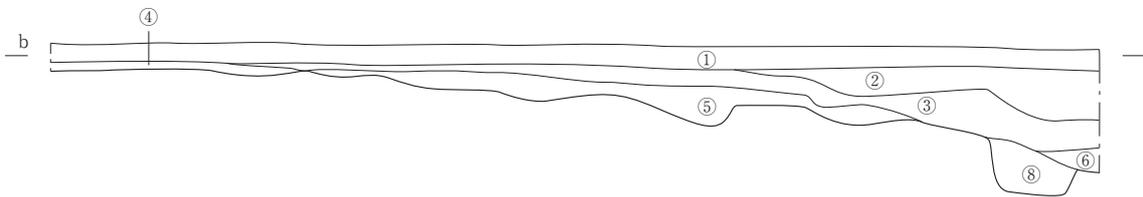


图54 SX2平面图



- ① におい黄色 (2.5Y6/3) がかかる黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト
- ② 黒褐色 (10YR3/1) 細粒砂混じりシルト粘土
- ③ 褐灰色 (10YR4/1) 粘土
- ④ 黒色 (10YR2/1) 粘土
- ⑤ 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂混じり粘土



- ① 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト (黄色味がかかる)
- ② 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト粘土
- ③ 灰色 (N5/0) 細粒砂混じり粘土
- ④ 黄灰色 (2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト
- ⑤ 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂混じりシルト, 黄灰色 (2.5Y5/1) 微細粒砂, 灰色 (5Y6/1) 微細粒砂が混じる
- ⑥ 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂～中粒砂
- ⑦ 鉄分が集中したような明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂, 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂, 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂が層状に堆積する
- ⑧ 褐灰色 (10YR6/1) 細粒砂
- ⑨ 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂

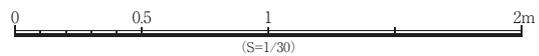


図55 SX2断面図

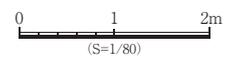
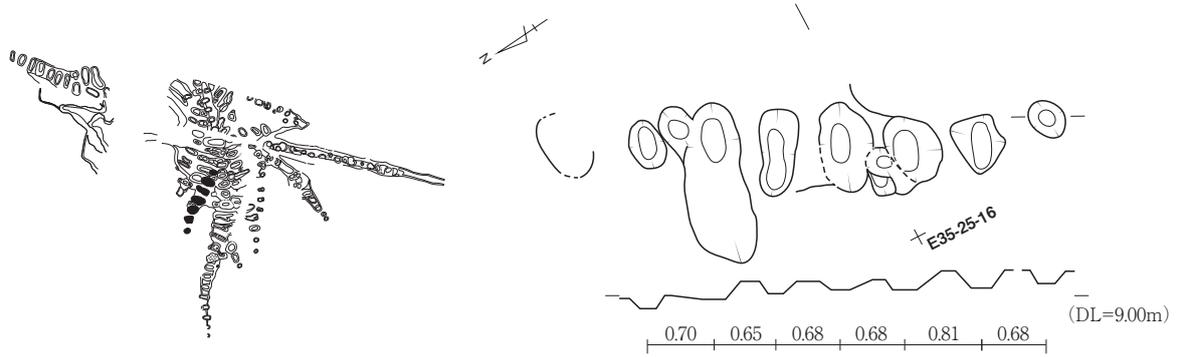
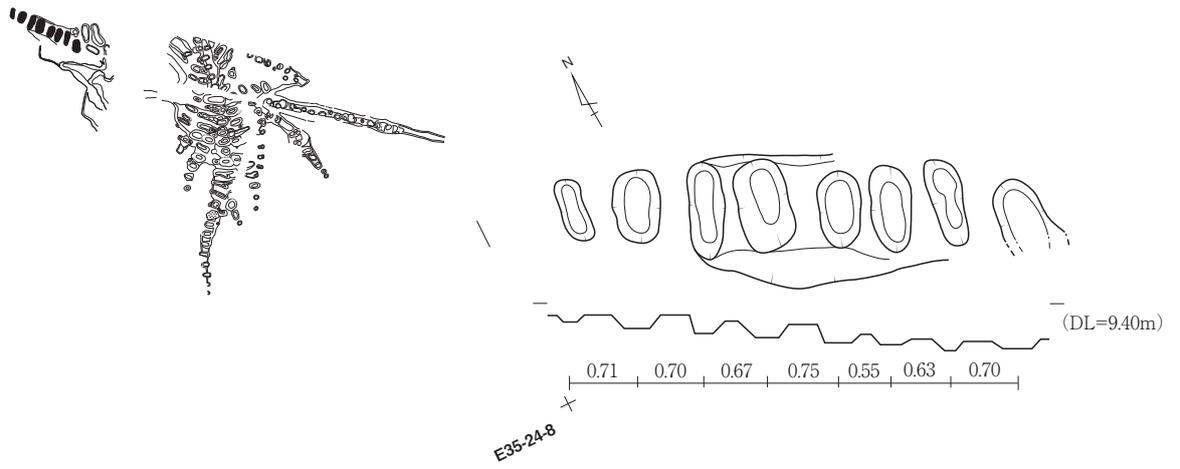


図56 SX2エレベーション図1

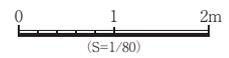
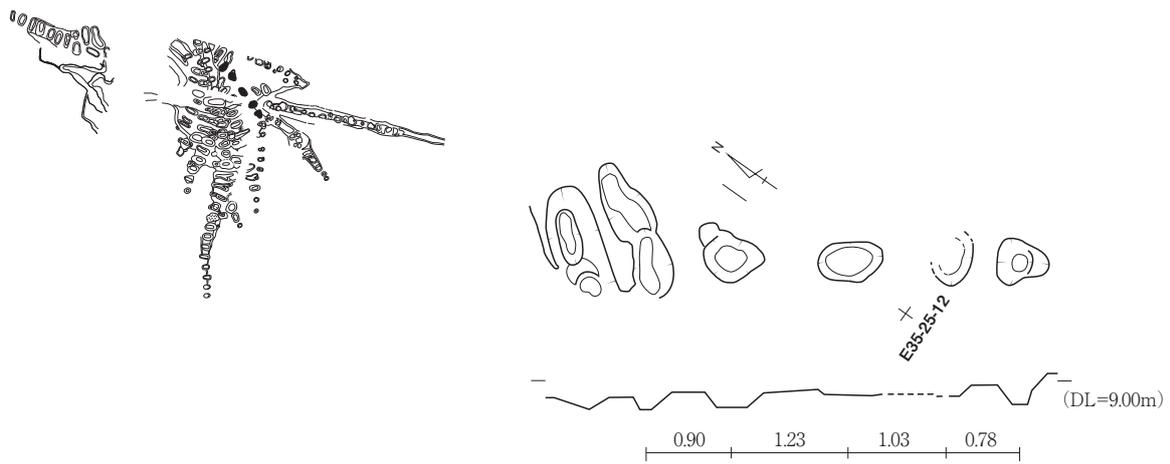
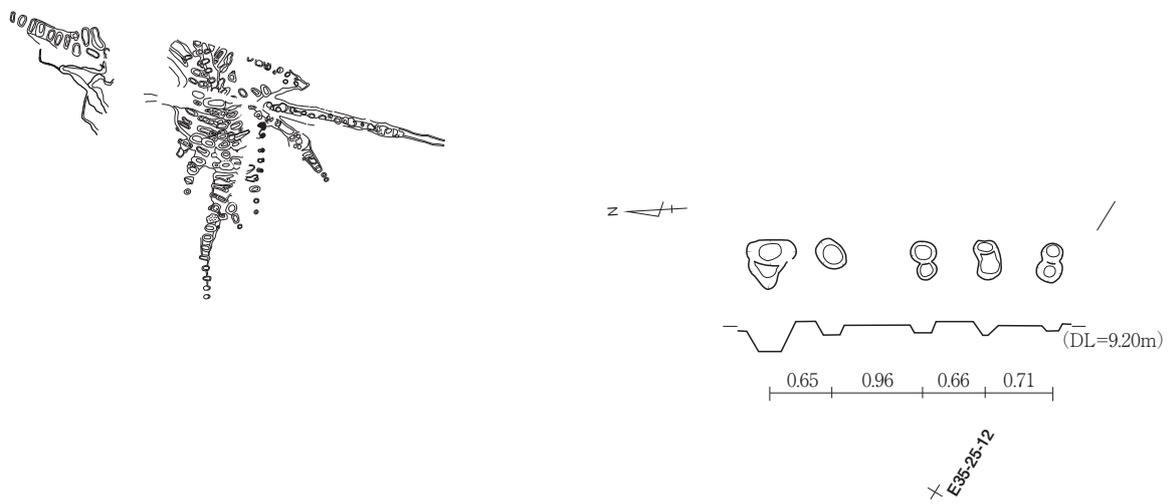
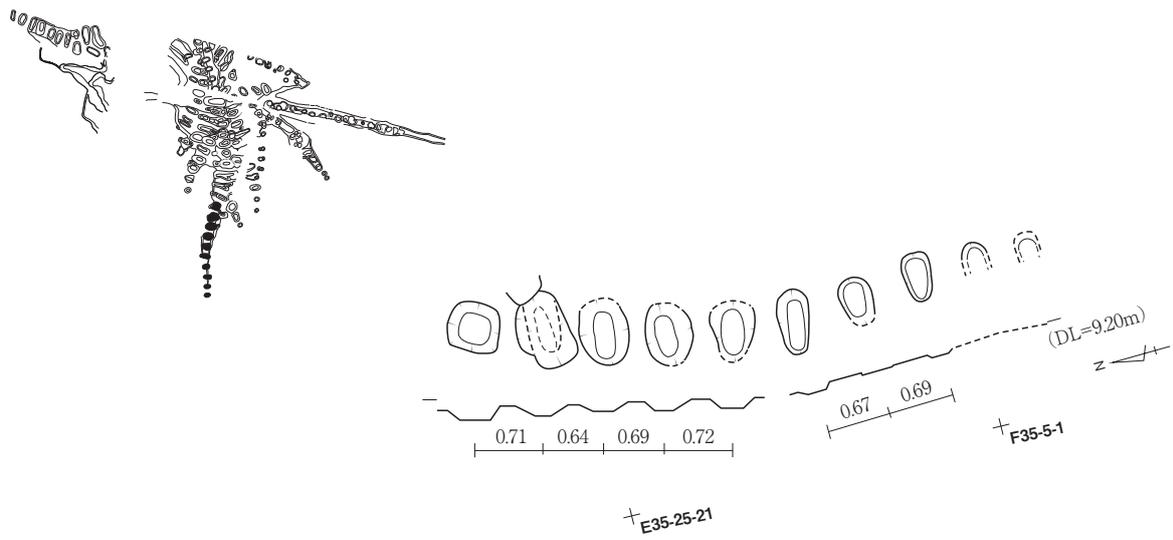


図57 SX2エレベーション図2

出土遺物

276は甕である。口縁部は「く」の字状を呈し、口唇部は丸みを帯びる。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。内面はハケメ調整である。277は底部である。外底面は若干上げ底となり、底端部は丸みを帯びる。外面は叩き調整後ナデ調整であり、内面はナデ調整である。278は鉢である。口唇部は丸くおさめる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。内面はナデ調整である。279は脚部である。短い中実の脚柱部から裾部はやや下外方にのび、端部は丸くおさめる。

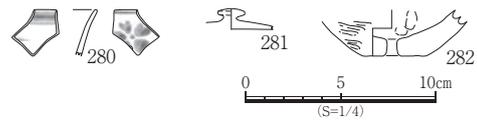


図58 SX2出土遺物実測図

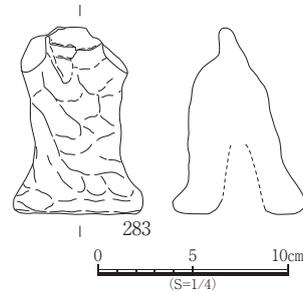


図59 SD33出土遺物実測図

5.SX

(1)SX2 (図54～59)

SX2は、ⅡB区、ⅡC区、ⅡG①区、ⅡG②区で検出した性格不明遺構である。ⅡB区の北西部からⅡC区北東部では不整形な土坑として検出した。この土坑内及びその周囲に多数のピット、土坑を検出した。ピット及び土坑の平面形は円形、楕円形、長楕円形、溝状、不定形等と様々であるが、これらの遺構は等間隔に並び、列として認識できるものもある。

中心部(ⅡG①区西部)に向かって標高が下がっていく不整形の大型土坑となっている。検出面からの深さは深いところで約50cmである。ピット列及びピットを伴った溝は、大型土坑から四方八方へのび、この大型土坑の底にもピット列の続きが認められた。大型土坑の埋土は黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じりシルト、黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂混じりシルト粘土、灰色(N5/0)細粒砂混じり粘土である。ピット列、土坑列の埋土は細粒砂と細粒砂混じり粘土の2つに大別できる。比較的把握しやすいピット列における、各ピット間の心々間の長さは約0.7mである。

出土遺物

280は磁器の小碗である。外面には花文が描かれる。281は陶磁器の蓋である。天井部に扁平なつまみを付す。露胎にオリーブ黄色と明青灰色の釉薬により文様が描かれる。282は甌である。焼成前に1穴、穿孔する。底部はほぼ丸底である。外面は叩き調整後、ナデ調整である。283はSD33から出土した支脚である。筒状の体部から裾部は

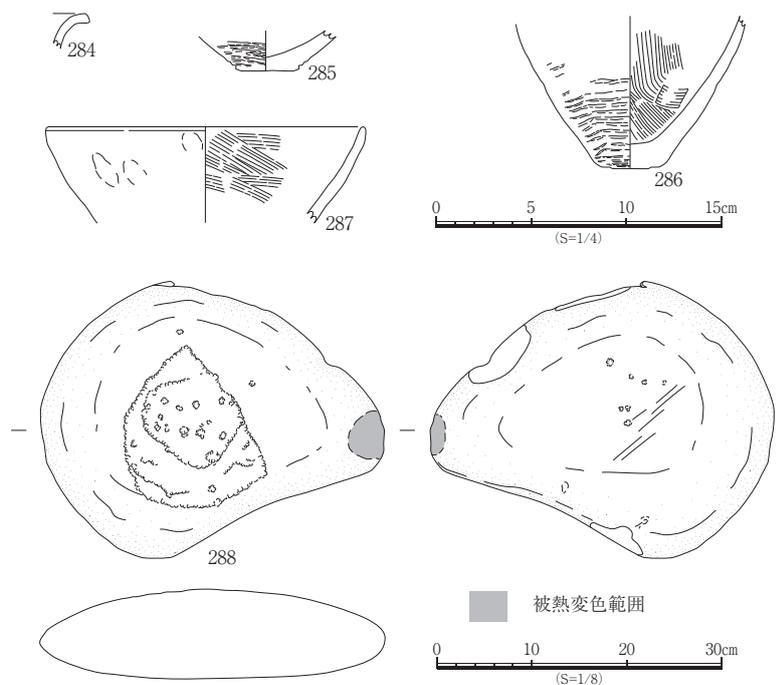


図60 SX3出土遺物実測図

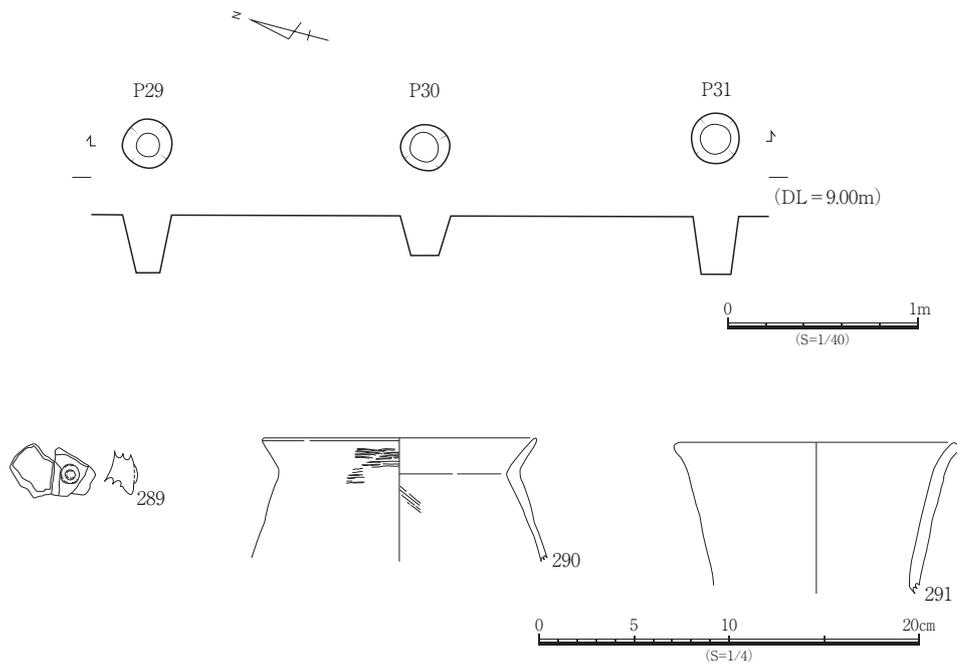


図61 P29～31平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

「ハ」の字状にひろがる。接地部は幅約2cmの平坦面となる。体部は頂部付近まで中空である。やや前傾する。2本の指と背部のつまみ部分は欠損する。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。

(2)SX3 (図60)

SX3は、ⅡC区南部で検出した性格不明遺構である。検出時には、台石(288)状の石が出土していたことや南東部が隅丸形状を呈していたことから、住居跡の可能性も想定していたが、調査の結果、2～3条の溝跡が重複していると判断した。ここで図示した遺物(284～288)も、SD18～20のいずれかのものであると考えられる。

出土遺物

284は甕の口縁部であり、内外面ともナデ調整である。外面には煤が付着する。285は平底の底部である。外面は叩き調整である。286は底部である。底面は丸みを帯びる。体部外面は叩き調整、内面はハケメ調整である。287は鉢である。外面は叩き調整後、ナデ調整を施す。内面はハケメ調整である。288は台石である。扁平な砂岩である。一部は平滑面となるが、顕著な使用痕跡はない。

6.P (図61)

P29～31は、ⅡE区北部で検出したピットである。約1.5mの間隔で並び、対になるピット列は精査したが検出できなかった。ST3の軸と同じ方向であり、両者の関連が推測される。

出土遺物

289はP29から出土した壺の破片である。竹管円形浮文を貼付する。二重口縁壺か。290はP30から出土した甕である。口縁部は「く」の字状を呈する。外面は口縁部まで叩き調整であり、内面はハケメ

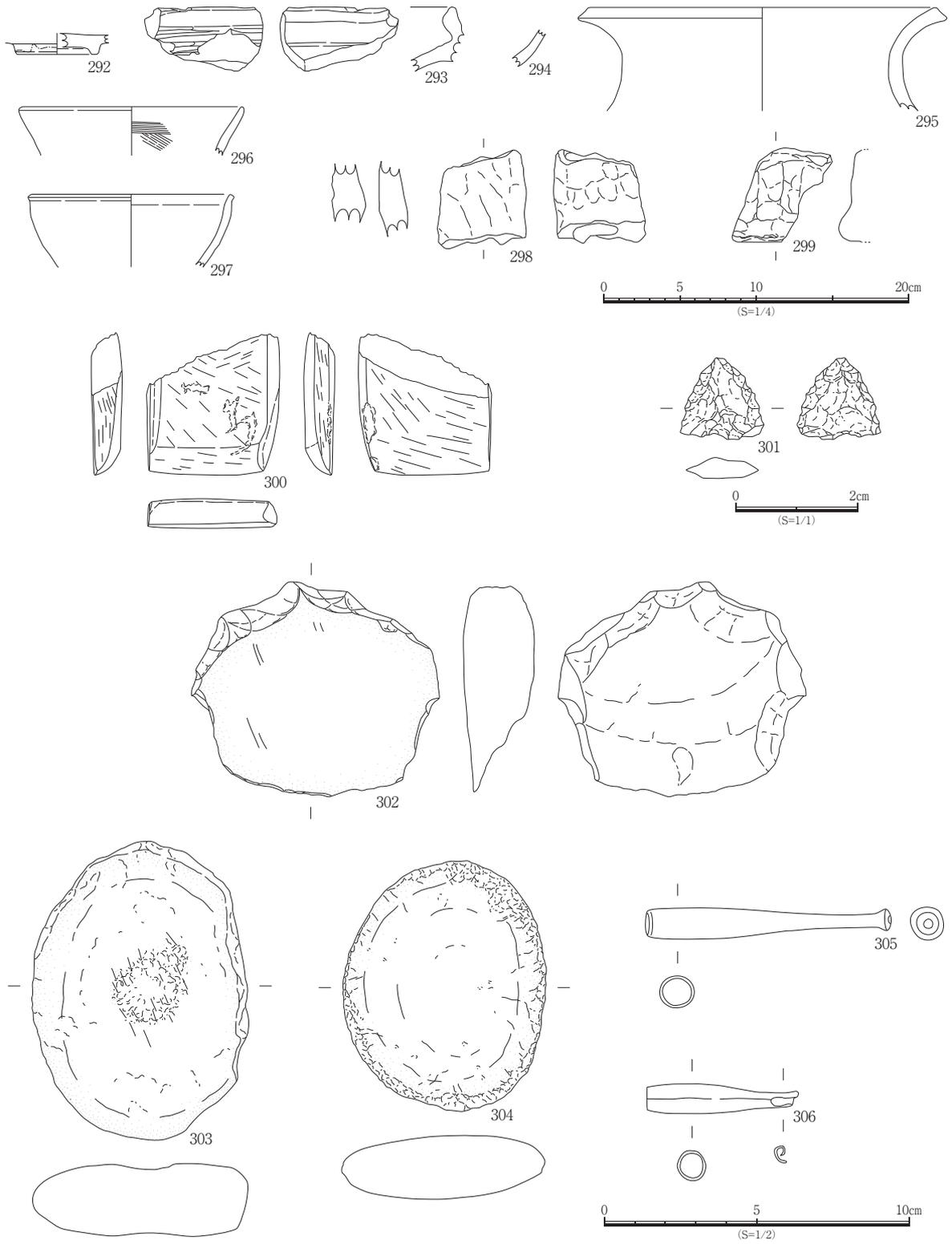


図62 遺構外出土遺物実測図

調整である。291はP31から出土した壺である。外上方へ直線的にのび、端部は外反させる。内外面とも摩耗のため調整不明である。

7. 遺構外出土遺物(図62)

292は青磁の底部である。高台は断面逆台形を呈し、削り出しによる。灰オリーブ色の釉薬を施すが、高台から外底面は露胎である。293は備前焼の鉢である。口縁部は「く」の字状に屈曲させ、端部は丸く仕上げる。片口とする。294は緑釉陶器の体部片である。オリーブ黄色の釉薬を薄く塗布する。295は壺である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部は下方へ拡張させる。内外面とも摩耗のため調整不明である。296は甕である。内湾気味に立ち上がり、口唇部はやや尖らせ気味に丸くおさめる。外面はナデ調整、内面はハケメ調整である。297は鉢である。口縁端部直下にヨコナデ調整を加え、口縁部をわずかに外反させる。内外面ともやや摩耗しており、調整不明である。298・299は支脚である。298の断面形は楕円形を呈し、中空である。内外面ともナデ調整であり、指頭圧痕、強いナデ調整の痕跡が認められる。外面の一部は煤ける。299は中位がくびれる円柱状を呈する。上面は若干傾斜を持つと推測される。一部は煤ける。300は扁平片刃石斧である。1辺は直線であるが他方は膨らむ。蛇紋岩製である。基部は欠損する。301は小型の打製石鏃である。平基式であり、側縁に調整剥離を施す。サヌカイト製である。302は砂岩製の打製石包丁である。表面は自然面であり、裏面は剥離面を残す。刃部は片刃であり、刃部付近の厚さはうすくなる。両端に紐掛け用の抉りを入れる。完形である。303・304は叩石である。303は両面中央部と側面に敲打痕跡が認められる。側縁の一部は敲打により激しく欠損する。304は扁平な砂岩を使用する。側縁には敲打痕跡が認められる。305・306は煙管の吸口である。305は1枚の青銅板を丸めて製作しており、継ぎ目が確認できる。306は1枚の青銅板を丸めて製作する。口が接する部分は欠損する。図示した以外にも吸口が1点出土している。

註

(1) 2008年『八尾南遺跡』(財)大阪府文化財センター

(2) 口縁部の破片、1cm以上を対象として、壺、甕、鉢、高杯、支脚、その他、不明に分類してカウントした。なお、高杯と支脚については、口縁部に限らずに破片数でカウントした。以下、同様である。

第Ⅳ章 自然科学分析

1. 田村西遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・松元美由紀・馬場健司

はじめに

本報告では、花粉分析、植物珪酸体分析、珪藻分析、種実遺体分析、炭化材同定による遺跡での植物利用と、人間活動の基盤となる古環境復原に関する自然科学分析結果を述べる。

(1) 試料

分析内容は、種実遺体分析5点、花粉分析7点、珪藻分析7点、植物珪酸体分析7点、炭化材同定13点である。種実遺体分析は、竪穴建物跡ST1、ST2、ST4の中央ピット埋土について実施する。花粉、珪藻、植物珪酸体分析は、SD2とSD26の溝埋土で実施する。分析層準は、SD2が①層、②層、③層の3点、SD26が①層、③層で各1点、④層で2点の4点である。炭化材は、焼失建物であるST4から検出された炭化材13点である。これらの分析試料の採取地点位置を図63に示す。また、SD2とSD26の分析試料採取層準と埋土の岩質について図64に示す。分析試料の時期は、SD2とST1・2・4が弥生時代後期末～古墳時代初頭、SD26が弥生時代後期末～古代である。

(2) 分析方法

① 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法(4時間放置)の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する)。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer & Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)、渡辺ほか(2005)、小林ほか(2006)などを参照し、分類基準はRound et al.(1990)に、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢(2000)に従う。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分はLowe(1974)に従い、真塩性種(海水生種)、中塩性種(汽水生種)、貧塩性種(淡水生種)に類別する。また、貧塩性種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能を示す。

② 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による

植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

③植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)。また、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

④種実同定

試料200gを常温乾燥後、水を満たした容器に投入し、容器を傾斜させて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20～30回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材(主に径4mm以上)、土器片などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、個数を数えて一覧表で示す。炭化材と土器は、最大径と70℃48時間乾燥後の重量と最大径を表示する。分析後は、抽出物を種類別に容器に入れて保管する。

⑤樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(3)結果

①珪藻分析

結果を表2に示す。各遺構とも珪藻化石はほとんど含まれていない。僅かにSD2の試料番号2・3から *Diadsmis contenta* や *Luticola mutica* などが認められたが、これらは陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好氣的環境に耐性の強い陸生珪藻A群(伊藤・堀内,1991)とされる。

②花粉分析

結果を表3, 図65に示す。花粉化石の産出状況・保存状態は、遺構により異なる。以下、遺構別に述べる。

・SD2

全体的に花粉化石の産出状況が悪く、保存状態も悪い。最上部の試料番号1から、かろうじて定量解析が行える程度の個体数が得られた。試料番号1の木本花粉をみると、ツガ属が最も多く産出し、モミ属、マツ属等を伴う。そのほかではスギ属、ヤマモモ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ属アカガシ亜属が検出される。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、セリ科、キク亜科、タンポポ科が認められる。

試料番号2・3は花粉化石の産出状況が悪く、僅かにモミ属、ツガ属、マツ属等の木本花粉、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科等の草本花粉が認められるのみである。

・SD26

いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出し、保存状態も普通~良好である。群集組成はいずれの試料も類似しており、木本花粉ではツガ属が最も多く、次いでモミ属、マツ属も多く認められる。そのほかではスギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、スイカズラ属等を伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、セリ科、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。また、僅かではあるが、オモダカ属、ミズオオバコ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、ミズワラビ属、サンショウモ等、水生植物に由来する花粉・シダ類胞子も検出される。

③植物珪酸体分析

結果を表4, 図66に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。以下に、各溝での産状を述べる。

・SD2

埋土試料の植物珪酸体含量は、試料番号3で約12,000個/g、試料番号1・2で約28,000個/g前後であり、上位の試料で多い。植物珪酸体の産状は、いずれの試料も同様であり、メダケ節やネザサ節などを含むタケ亜科の産出が目立ち、コブナグサ属やススキ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科が僅かあるいは稀に見られる。また、栽培植物であるイネ属も産出する。その含量は、葉部の短細胞珪酸体で100~200個/g程度、機動細胞珪酸体で200~300個/g程度である。試料番号2と3では、イネ属の糊(穎)に形成される穎珪酸体も認められる。この他、海綿骨針も検出される。

・SD26

埋土試料の植物珪酸体含量は、いずれも10,000個/g程度である。SD2試料と同様にタケ亜科の産出が目立ち、コブナグサ属やススキ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科も僅かあるいは稀に見られる。イ

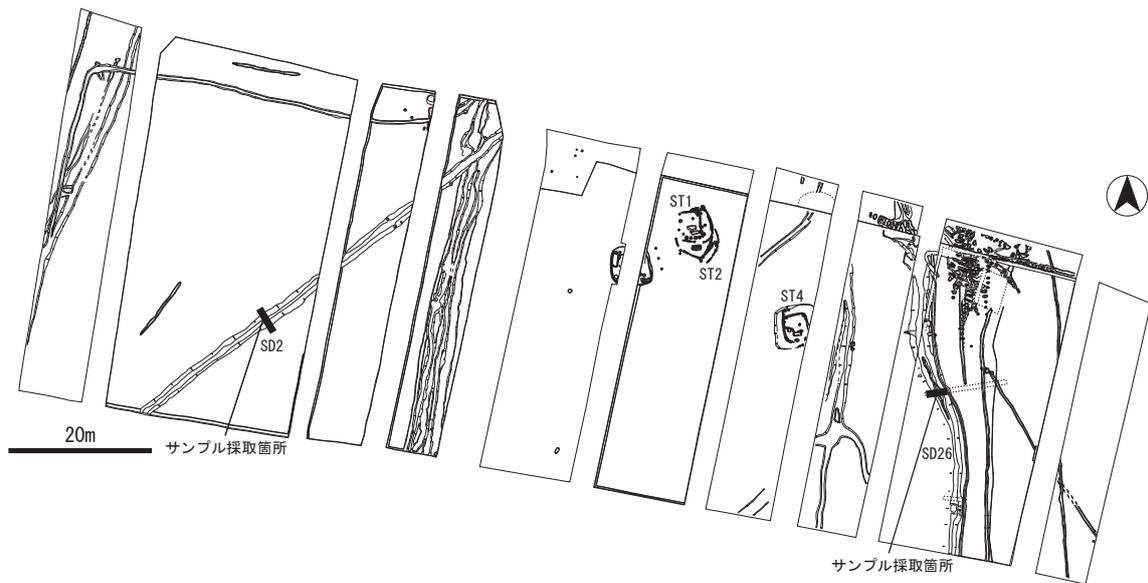


図63 田村西遺跡の試料採取地点位置図

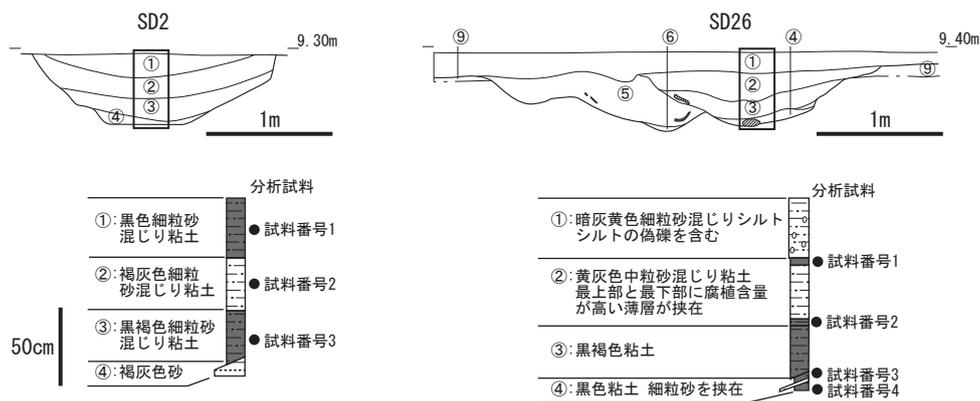


図64 SD2・26断面図および試料採取層準の柱状図

ネ属も各試料から産出し、その含量は短細胞珪酸体が100個/g未満、機動細胞珪酸体が100個/g未満～200個/g程度である。また試料番号3では、イネ属の穎珪酸体も認められる。この他に海綿骨針も検出され、SD2試料よりも概して多く検出される。

④種実同定

結果を表5に示す。試料200gの洗い出しで回収された種実遺体が少なかったため、さらに200～400gを追加分析した結果、草本2分類群(イネ、ミズアオイ属)9個の種実遺体を抽出同定した。

種実遺体には、炭化した栽培種のイネの穎(基部)の破片が2個(ST4_中央P1, ST2_中央P1)と胚乳の破片が6個(ST4_中央P1; 2個, ST1_中央P2; 4個)確認された。イネ以外では、ST1_中央P2より、水生植物のミズアオイ属の種子が1個確認された。ただし、炭化していないことから、後代の混入の可能性が高いと判断され、考察より除外している。形態的特徴等を以下に記す。

・イネ(*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳、穎(果)は炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体。胚乳は、完形ならば、長さ4～5.5mm、幅

2.5～3mm, 厚さ1～1.5mm程度で, 基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。破片は最大2.8mm程度(ST1_中央P2)。胚乳表面には2～3本の縦隆条が確認されるが, 発泡しており状態は不良である。

胚乳を包む穎(果)は, 完形ならば長さ6～7.5mm, 幅3～4mm, 厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し, その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈, 内穎は3脈を持ち, とともに舟形を呈し, 縫合してやや偏平な長楕円形の稲糊を構成する。果皮は薄く脆く, 表面には顆粒状突起が縦列する。破片は基部の果実序柄で, 大きさは0.7mm程度。

⑤樹種同定

結果を表6に示す。サンプルNo.1・2・5・6・12の5試料には, それぞれ2分類群が認められた。これらの試料の炭化材の採取位置を図67に示す。今回の分析で確認された炭化材は, 針葉樹1分類群(ヒノキ科またはマキ属)と広葉樹5分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ツブラジイ・クスノキ科・サカキ・モチノキ属)である。なお, サンプルNo.2に認められた2分類群のうち, 1分類群は針葉樹のヒノキ科またはマキ属である。残る1分類群は, 道管が認められることから広葉樹と確認できるが, 保存が悪く, 道管配列の特徴などが観察できないため, 種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ科またはマキ属(Cupressaceae and/or Podocarpus)

軸方向組織は, 観察した範囲では仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で, 晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は, スギ型あるいはヒノキ型であるが, 保存状態は悪い。放射組織は単列, 1～10細胞高。

仮道管にらせん肥厚が無いこと, 放射柔細胞の垂直壁に数珠状の肥厚が無いこと, 晩材部が狭いこと, 分野壁孔が窓状ではないこと等の特徴から, ヒノキ科とマキ属に絞られる。いずれも保存状態が悪く, ヒノキ科とマキ属を区別することはできなかった。

表2 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	SD2			SD26				
	塩分	pH	流水		1	2	3	1	2	3	4	
Bacillariophyta (珪藻植物門)												
Raphid Pennate Diatoms (有縦溝羽状珪藻類)												
Biraphid Pennate Diatoms (双縦溝羽状珪藻類)												
Diadensis contenta (Grun.ex Van Heurck) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	2	-	-	-	-	-
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	1	-	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
淡水生種					0	1	2	0	0	0	0	0
珪藻化石総数					0	1	2	0	0	0	0	0

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性

Ogh-ind: 貧塩不定性種 al-il: 好アルカリ性種 ind: 流水不定性種

環境指標種群

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)

R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI: 未区分, 伊藤・堀内, 1991)

表3 花粉分析結果

種 類	SD2			SD26			
	1	2	3	1	2	3	4
木本花粉							
マキ属	-	-	-	2	-	-	1
モミ属	8	2	-	40	33	36	56
ツガ属	75	7	-	96	93	110	96
マツ属複雑維管束亜属	-	-	-	5	13	31	3
マツ属(不明)	29	2	1	50	28	42	33
コウヤマキ属	-	-	-	2	1	5	-
スギ属	2	-	-	4	9	6	7
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	1	4	-
ヤマモモ属	1	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属	-	-	-	-	2	1	1
クマシデ属-アサダ属	2	-	-	-	-	1	-
カバノキ属	-	-	-	-	1	-	-
ハンノキ属	-	-	-	-	1	-	1
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	4	-	3
コナラ属アカガシ亜属	1	-	-	6	15	2	4
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	1	-
ブドウ属	-	-	-	-	1	-	-
スイカズラ属	-	-	-	2	1	3	-
草本花粉							
オモダカ属	-	-	-	-	-	-	1
ミズオオバコ属	-	-	-	-	1	-	-
イネ科	13	7	1	51	106	36	57
カヤツリグサ科	5	1	-	37	68	66	3
ミズアオイ属	-	-	-	1	4	10	-
クワ科	-	-	-	-	-	1	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	8	7	5	1
ナデシコ科	1	-	-	-	3	-	1
キンポウゲ属	-	-	-	-	1	-	-
キンポウゲ科	-	-	-	1	4	2	4
バラ科	-	-	-	-	1	-	1
ノアズキ属	-	-	-	-	-	-	1
フウロソウ属	-	-	-	3	4	1	19
キカシグサ属	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	1	-	-	3	14	9	12
ヨモギ属	-	1	-	-	9	1	26
キク亜科	3	3	1	3	9	3	7
タンポポ科	1	2	-	7	28	15	23
不明花粉							
不明花粉	9	1	-	10	13	6	11
シダ類孢子							
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	1	1	-	4
デンジソウ属	-	-	-	-	-	2	-
イノモトソウ属	4	1	-	2	10	9	9
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	1	-
サンショウモ	-	-	-	1	-	-	-
他のシダ類孢子	266	53	32	219	293	194	323
合 計							
木本花粉	118	11	1	207	204	242	205
草本花粉	24	14	2	114	260	149	156
不明花粉	9	1	0	10	13	6	11
シダ類孢子	270	54	32	223	304	206	336
合計(不明を除く)	412	79	35	544	768	597	697

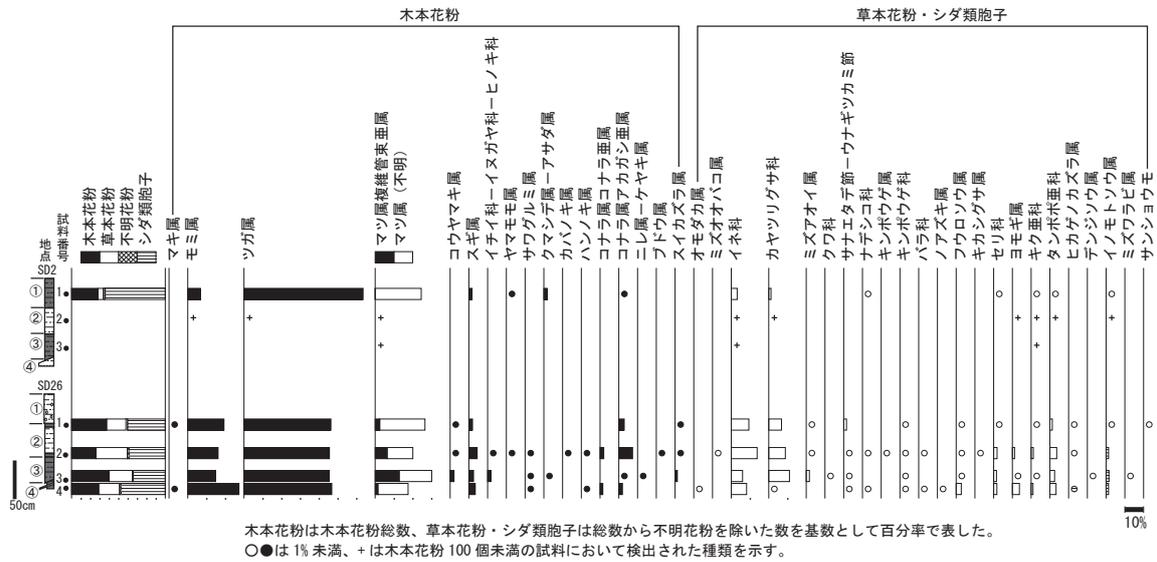


図65 花粉分析群集

表4 植物珪酸体含量

(個/g)

種類	SD2			SD26			
	1	2	3	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	100	200	200	<100	<100	<100	-
クマザサ属	200	200	100	<100	<100	-	<100
メダケ属ネザサ節	700	100	-	<100	<100	<100	-
メダケ属メダケ節	2,100	2,200	600	800	1,100	400	800
タケ亜科	6,500	6,700	2,200	2,500	2,800	2,300	2,700
ヨシ属	-	100	200	<100	<100	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	100	200	100	-	-	<100	-
ウシクサ族ススキ属	300	-	200	200	<100	-	-
イチゴツナギ亜科	200	100	100	100	<100	<100	<100
不明	2,600	3,800	2,000	2,600	900	2,200	1,300
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	300	200	200	<100	100	200	100
クマザサ属	200	400	<100	<100	<100	-	-
メダケ属ネザサ節	500	200	<100	<100	200	<100	<100
メダケ属メダケ節	2,800	2,000	600	500	400	800	800
タケ亜科	8,500	7,000	2,800	2,100	2,600	2,400	2,600
ヨシ属	-	200	<100	<100	<100	-	<100
ウシクサ族	200	-	200	300	100	-	<100
不明	2,000	4,800	1,600	1,600	1,800	1,500	1,700
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	12,900	13,600	5,800	6,300	5,300	5,300	5,000
イネ科葉身機動細胞珪酸体	14,600	14,800	5,700	4,800	5,300	4,900	5,400
合計	27,500	28,400	11,500	11,100	10,600	10,200	10,400
珪化組織片							
イネ属類珪酸体	-	*	*	-	*	-	*
その他							
海綿骨針	*	*	*	**	**	**	**

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

<100: 100個/g未満

-: 未検出, *: 検出, **: 多い

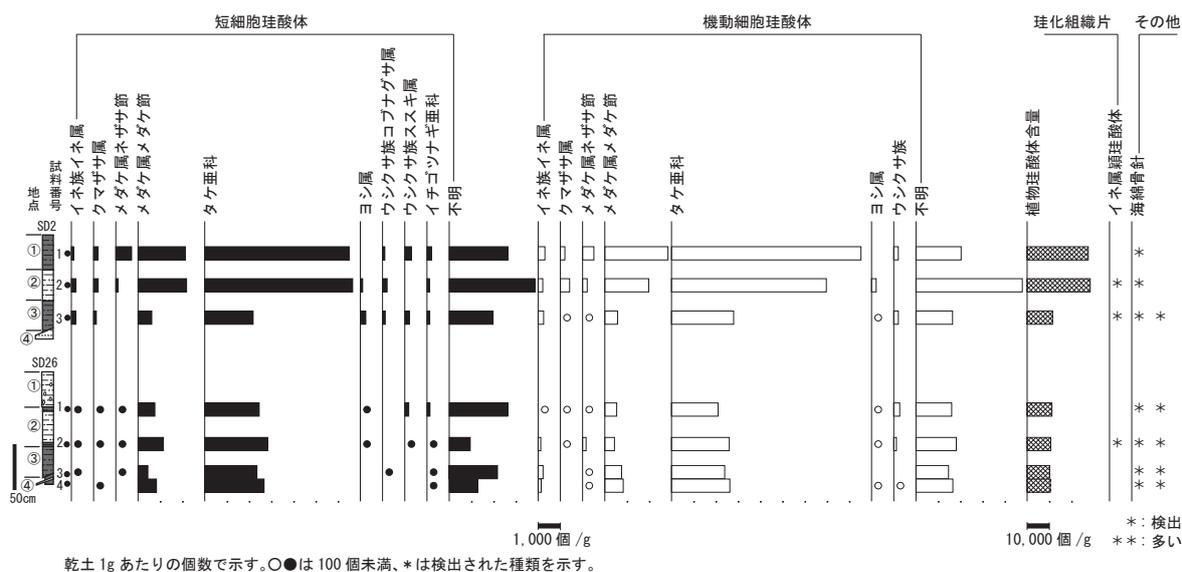


図66 植物珪酸体含量

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツブラジイ(*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1~2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと集合~複合放射組織とがある。

・クスノキ科(Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には大型の油細胞が認められる。

・サカキ(*Cleyera japonica* Thunb.) ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2~3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1~20細胞高。

・モチノキ属(*Ilex*) モチノキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2~6個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~5細胞幅、1~40細胞高。

(4)考察

①SD2の古環境

弥生時代後期末から古墳時代初頭のSD2では、埋土の記載と試料の岩質から、滞水を示唆するような層準が挟在しないと認識される。本試料では、いずれの試料でも珪藻化石がほとんど検出され

表5 種実同定結果

分類群	部位	状態	II D区		II E区			備考	
			ST4－ 中央P1	ST4－ 中央P2	ST1－ 中央P1	ST1－ 中央P2	ST2－ 中央P1		
草本									
イネ	穎	破片(基部)	炭化	1			1		
	胚乳	破片	炭化	2		4			
ミズアオイ属	種子	完形				1			
種実以外									
炭化材			炭化	0.11g 6mm	0.01g 2.5mm	0.04g 4mm	0.03g 5mm	0.12g 10mm	乾燥重量 最大径
	分析残渣			4.40g	7.06g	20.49g	2.74g	2.36g	乾燥重量
	分析量			409.02g	404.58g	602.08g	601.99g	502.15g	

ない。化学組成が類似する植物珪酸体も保存が悪いことから、珪酸分が風化しやすい環境下にあったものと推測される。不明な部分が多いが、珪藻化石については、一般的に好氣的土壤環境が維持されたり、水素イオン濃度が高かったり、乾湿を繰り返すといった条件において、風化しやすい傾向がある。

植物珪酸体は、その保存状態が珪藻同様に悪い。植物珪酸体は、土壤発達に伴う風化によって溶解する可能性が指摘されている(近藤, 1988)ほか、pH値が高い場所や乾湿を繰り返すような場所において風化が進みやすいと考えられている(江口, 1994・1996)。分析結果では、明るく乾燥した土地条件を好むメダケ節やネザサ節などを含むタケ亜科の産出が目立ち、湿潤地を好むコブナグサ属やススキ属、ヨシ属、イチゴツナギ亜科が僅かあるいは稀にみられる。このような傾向は、本遺跡の南側に隣接する田村遺跡群でも確認される((株)古環境研究所, 2004)。また、本遺跡の北西に位置する西野々遺跡でも、弥生時代～中世に同様の植物珪酸体群集が得られている(パリノ・サーヴェイ(株), 2008)。これらのことから、本遺跡が立地する扇状地面では、弥生時代およびそれ以降において、広範囲で地下水位が低く、高燥な土地条件下において土壤発達が進行していたと考えられる。以上のことから、SD2の溝内は、常に滞水や過湿状態が維持されるのではなく、好氣的な土壤環境が継続するか、もしくは乾湿を繰り返すような状況下にあったと考えられる。

花粉化石をみると、産出状況は悪く、保存状態も花粉外膜が破損・溶解しているものが多い。産出した木本類についてみると、モミ属、ツガ属、マツ属など針葉樹に由来する花粉化石が多く認められ、シダ類胞子も多産した。一般的に花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(三宅・中越, 1998)。また、草本類においても比較的分解に強い花粉や、分解が進んでも同定可能な花粉が産出している。花粉が常に酸化状態に置かれている場所では、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている。今回産出した花粉外膜については、状況から分解の影響を受けていることがうかがえる。これらのことから、SD2埋土に含まれる花粉化石は、堆積後作用の影響を強く受けているとみなされる。

既往の高知県南部の花粉分析結果をみると、縄文海進最盛期以降には、アカガシ亜属やシイノキ属の花粉化石が優勢となり(山中ほか, 1992; 中村, 1965)、今回の組成とは異なる。これらのことから、今回産出した花粉・シダ類胞子化石は、堆積時に取り込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残されたと考えられる。このことから、検出されるツガ属をはじ



ST4 サンプル 1
ヒノキ科またはマキ属とモチノキ属 同じ炭化材範囲内から抽出

サンプル側面



ST4 サンプル 2
ヒノキ科またはマキ属と広葉樹 割れ目内の
同じ炭化材範囲内から抽出

サンプル側面



サンプル上面



サンプル側面

ST4 サンプル 5 A: ヒノキ科またはマキ属, B: サカキ

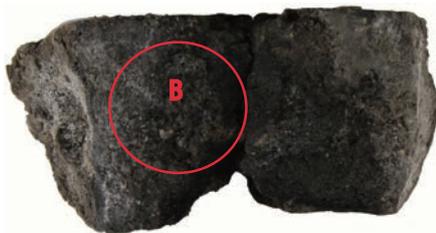


サンプル上面



サンプル側面

ST4 サンプル 6 A: コナラ属コナラ亜属クヌギ節, B: ツブラジ



サンプル上面



サンプル下面

ST4 サンプル 12 A: ヒノキ科またはマキ属, B: ツブラジ

5 cm

図67 炭化材サンプル採取位置

めとしモミ属, マツ属, スギ属等の針葉樹は, 周辺域に生育していたことは確かだろうが, 花粉化石の割合が示すほど多くはなかったと考えられる。その他, 随伴する花粉化石から, 遺跡周辺では, ヤマモモ属, コナラ属アカガシ亜属等の常緑広葉樹, クマシデ属-アサダ属等の落葉広葉樹の生育がうかがえる。また草本類では, イネ科, カヤツリグサ科, ナデシコ科, セリ科, キク亜科, タンポポ亜科等, 開けた明るい場所に群落を形成する「人里植物」が認められる。発掘結果をふまえると, 弥生時代後期末~古墳時代初頭にSD2周辺では, 樹木の分布密度が低く, 草地を中心とした植生景観が展開していたと推測される。

表6 樹種同定結果

地区	遺構	試料No.	樹種
II D区	ST4	サンプル1	ヒノキ科またはマキ属
			モチノキ属
		サンプル2	ヒノキ科またはマキ属
			広葉樹
		サンプル3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		サンプル4	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		サンプル5	ヒノキ科またはマキ属
			サカキ
		サンプル6	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ツブラジイ
		サンプル7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		サンプル8	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		サンプル9	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
サンプル10	コナラ属コナラ亜属クヌギ節		
サンプル11	クスノキ科		
サンプル12	ヒノキ科またはマキ属		
	ツブラジイ		
サンプル13	クスノキ科		

②SD26の古環境

弥生時代後期末~古代のSD26埋土の珪藻と植物珪酸体分析結果は, SD2と同様である。層相から, 分析試料の埋土は土壌の再堆積を中心とした堆積層からなると判断される。これらの結果から, SD26では, SD2と同様の埋没環境である。

一方, 花粉化石はSD2と異なり, 花粉化石の保存状態も比較的良好で, 産出状況も良い。群集組成はいずれの試料も類似しており, 木本類ではツガ属が最も多く, 次いでモミ属, マツ属などの針葉樹が多く検出される。高知県下において自然度の高い場所では, 沿岸地域にシイ・カシ類やタブノキなどの常緑広葉樹林, 山地上部付近にモミ属, ツガ属, スギ属などの温帯性針葉樹林が分布するとされている(宮脇編著,1982)。本遺跡は沿岸地域に位置するものの, 分析結果ではアカガシ亜属, シイ属の割合はそれほど高くない。

多産したマツ属については, 海岸沿いの砂丘上などにも生育する種群であるが, 伐採地などに二次林を形成する代表的な種類である。高知平野におけるこれまでの研究では, 2,000年前以降, 伐採などの影響でマツ属花粉が増加するとされてきた(山中ほか,1992)。また, 断片的な分析結果であり, 流域も異なるが仁淀川河口に位置する北ノ丸遺跡では, 弥生時代~古墳時代の層準でマツ属の増加が始まり, 古代にかけてマツ属花粉の増加とアカガシ亜属の減少が認められる(パリノ・サーヴェイ(株),2011b)。既存の結果と比べると, SD2と同様針葉樹花粉が多いが, これも堆積後作用による影響を受けているものとみられ, 花粉化石の割合が示すほど多くはなかったと考えられる。

これらのことから, 遺跡周辺の丘陵や山地斜面では, 伐採などによりアカガシ亜属などの常緑広葉樹林が減少し, 二次林としてのマツ属が増加したと考えられる。また, モミ属, ツガ属などの針葉樹についても, 遺跡周辺に多く生育していたことが推定される。なお, 遺跡の立地から, マツ属については, 南側に存在する浜堤などの海浜部の植生に由来する可能性も示唆される。

この他の種類としては, ブドウ属, スイカズラ属などが周辺に存在した森林の林縁に, サワグルミ属, ハンノキ属, コナラ属コナラ亜属, ニレ属-ケヤキ属等が, 調査区周辺を流下する名残川や物部川の分流路の河畔に生育していたと考えられる。

草本類ではイネ科、カヤツリグサ科が多く産出し、セリ科、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。これらは開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群である。発掘結果をふまえると、SD26周辺では、草地を中心とした植生景観が展開していたと推測される。この他の分析結果としては、僅かではあるが、オモダカ属、ミズオオバコ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、ミズワラビ属、サンショウモ等、水生植物に由来する花粉・シダ類孢子が産出することが着目される。上述したSD26の溝内の堆積環境をふまえると、これらが溝内に生育していた可能性は低いと考えられる。産出した種類は、水田雑草を構成する種類であることから、数百個/g程度産出するイネ属珪酸体を含め、周辺の水田から再堆積したものと考えられる。

③植物利用

・ 堅穴建物跡ST4の炭化材

炭化材が出土した堅穴建物跡ST4は、焼失家屋であることから、炭化材は上屋の建築部材に由来する可能性がある。炭化材は、1点が芯持丸木である他、分割状、板状などの形状を示すが、いずれも焼失時に破損していると考えられる。これらの炭化材には、針葉樹1分類群と広葉樹5分類群が確認され、少なくとも6種類の木材が利用されていたことが推定される。樹種については、いずれも調査区周辺の山地や丘陵・台地や氾濫原で獲得可能なものである。

各分類群の材質についてみると、針葉樹のヒノキ科あるいはマキ属は、ヒノキ科であれば木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工が容易であり、マキ属であれば重硬・緻密で強度・耐水性が高い。落葉広葉樹のクヌギ節、常緑広葉樹のツブラジイ、サカキ、常緑と落葉が混在するモチノキ属は、比較的軽硬で強度が高い。クスノキ科は、常緑と落葉が混在し、材質も重硬な種類からやや軽軟な種類まで幅広い。

樹種構成をみると、クヌギ節を中心とした広葉樹の利用が多く、強度の高い木材を選択したことが推定される。ヒノキ科またはマキ属は、マキ属であれば広葉樹と共に利用された可能性が考えられる。一方で、ヒノキ科であれば、板材など、広葉樹とは異なる部位に利用された可能性がある。

なお、サンプルNo.11(クスノキ科)は、直径約3cmの芯持丸木である。小径であることから、強度を要する垂木などの部位ではなく、あまり強度を必要としないような部位に利用された可能性がある。

・ 堅穴建物跡の炭化種実

建物跡の中央土坑埋土では、炭化した栽培種のイネの穎、胚乳が確認された。穀類のイネは、当時の田村西遺跡周辺域で利用された植物質食糧の可能性が高く、居住域内への持ち込みと何らかの理由により火を受け炭化残存したことが推定される。このようなイネの産出状況から、同時期の溝であるSD2から産出したイネ属についても、居住域内へ持ち込まれイネに由来することが推測される。田村遺跡群では弥生時代前期の環濠埋土でイネ属機動細胞珪酸体が2,800個/gを示す(古環境研究所,2004)。これに対し、SD2では数百個/g程度である。堆積後の消失も考慮する必要があるものの、これらの分析結果をふまえると、今回の分析地点では、イネが多く捨てられることがなかった、もしくは近傍に多量のイネが存在するような集積地が存在しなかったことが想定される。

なお、周辺遺跡における炭化種実の洗い出し事例では、介良野遺跡(高知市)の弥生時代終末期～古墳時代初頭とされる建物跡よりイネ、アワーヒエ、マメ類(パリノ・サーヴェイ(株),2007)、伏原遺跡(香美市)の弥生時代後期～古墳時代とされる堅穴建物跡の炉跡等より、イネ、アワーヒエ(パリノ・

サーヴェイ(株),2010), 西野々遺跡(南国市)の弥生時代中期の竪穴建物跡より, イネとコムギが確認される(パリノ・サーヴェイ(株),2011)。

引用文献

- 安藤一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- 江口誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究,2,19-27.
- 江口誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペドロジスト,40,81-84.
- 原口和夫・三友清史・小林弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類. 埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊藤良永・堀内誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌,6,23-45.
- (株)古環境研究所,2004,高知県, 田村遺跡群における自然科学分析. 田村遺跡群Ⅱ第 8 分冊自然科学編,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,283-288.
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.1巻,(株)内田老鶴圃,531p.
- 近藤鍊三,1988,植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代. ペドロジスト,32,189-202.
- 近藤鍊三,2010,プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati. 334p .
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究,6,15-30.

- 宮脇 昭(編著),1982,日本植生誌 四国.至文堂,539p.
- 中村 純,1965,高知県低地部における晩氷期以降の植生変遷,四紀研究,4,200-207.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 12,13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- パリーノ・サーヴェイ(株),2007,介良野遺跡の自然科学分析.介良野遺跡,(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,163-194.
- パリーノ・サーヴェイ(株),2008,西野々遺跡の自然科学分析(1).西野々遺跡 I,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,185-206.
- パリーノ・サーヴェイ(株),2010,伏原遺跡 II の自然科学分析.伏原遺跡 II,(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,271-280.
- パリーノ・サーヴェイ(株),2011,北ノ丸遺跡 II の自然科学分析.北ノ丸遺跡 II,高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター,21-41.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p.[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.,1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. Cambridge University Press, Cambridge. 747p.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 5集,60p.
- Vos, P. C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270,285-296.
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子,2005,淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃,666p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]
- 柳沢幸夫,2000,II-1-3-2-(5)計数・同定.化石の研究法-採集から最新の解析法まで-,化石研究会,共立出版株式会社,49-50.
- 山中三男・伊藤由美子・石川真吾,1992,高知平野の岡豊低湿地完新世堆積物の花粉分析.日本生態学誌,42,21-30.

2. 田村西遺跡出土土器の胎土分析

－周辺遺跡出土のヒビノキ式土器との胎土比較－

岡山理科大学

白石 純

(1)はじめに

この胎土分析では田村西遺跡より出土している「ヒビノキ式土器」の自然科学的な胎土分析を実施し、以前分析したミトロ、介良野、伏原、祈年の各遺跡出土のヒビノキ式土器の胎土と比較することで、この土器の生産地を推定する。そして、各遺跡におけるヒビノキ式土器の胎土の特徴などを検討し、今後のヒビノキ式土器の生産地と流通に向けての基礎データの蓄積を行うことを目的としている。

なお、これまでの各遺跡出土の「ヒビノキ式土器」の胎土比較では、ヒビノキ式土器は各遺跡内で個々に生産されていることが推定されている。

(2)分析方法と試料

分析は蛍光X線分析法で行い、胎土の成分(元素)量を測定し、その分量から分析試料の差異について調べた。測定した成分(元素)は、Si,Ti,Al,Fe,Mn,Mg,Ca,Na,K,P,Rb,Sr,Zrの13成分である。

なお、測定装置・条件・試料は以下のとおりである。

測定装置：SEA5120A(エスアイアイ・ナノテクノロジー社製)を使用した。

測定条件：X線照射径2.5mm，電流50～200mA，電圧50kV/15kV，測定時間300秒，測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：13成分の定量値は地質調査所の標準試料JA-1(安山岩)，JG-1a(花崗岩)，JR-1(流紋岩)，JB-1a(玄武岩)，JF-1(長石)の5個の試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、弥生土器表面の汚れを除去後(研磨機)、乾燥した試料を乳鉢(タングステンカーバイト製)で粉末(100～200メッシュ)にしたものを加圧成形機で約15トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較(差異)は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を描き、各遺跡にまとまりがあるか検討した。

デジタルマイクロスコープ(キーエンス社製VHX-1000)による土器表面の観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒(岩石・鉱物)の種類、大きさなどの大まかな含有量を調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、多量・中量・少量・まれに、の4段階で表した。

田村西遺跡出土ヒビノキ式土器の分析試料は、表7に示した100点である。試料の時期は「ヒビノキⅡ～Ⅲ式」で、器種は甕・壺・鉢・高杯である。また、比較したヒビノキ式土器の遺跡は高知市介良野遺跡、ミトロ遺跡、香美市伏原遺跡、南国市祈年遺跡の4カ所である。

(3)分析結果

①蛍光X線分析結果について

測定した13成分のうち、分析試料に顕著な差がみられたのは、Ti、Ca、Kの3成分であった。この3成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

図68 K-Ca散布図では、田村西遺跡内から出土したヒビノキ式土器の比較を行った。その結果、試料番号8(壺)・25(甕)・33(壺)・34(鉢)の4点以外の土器は、ほぼ一つのグループにまとまった。これら4点の土器は、K量がやや少ないところに分布している。

図69 K-Ti散布図でもほぼ同様に4点の土器が他のグループと胎土が異なった。

図70 K-Ca・図71 K-Tiの両散布図では、各遺跡との比較を行った。その結果、図70では田村西のヒビノキ式土器はミトロと介良野の間に分布することがわかった。つまり、この散布図ではK量の少ないところからミトロ、田村西、介良野の順に分布の集中区が移動している。そして、分布域が互いに重複する部分もあるが、分布の集中区(平均値)はほぼ一つのグループをなし、各遺跡とも識別が可能であった。また、伏原と祈年は、重なる部分が多いが、集中区が異なり、胎土的には異なっていた。

②デジタルマイクロスコープ観察結果について

田村西遺跡出土土器の胎土を観察した結果、ほぼ1種類の胎土であった。それは以下のような砂粒で構成されている。

・1mm以下の石英を多量～中量程度含み、3mm以下の円礫の岩片(チャート、砂岩、片岩)を少量含む。0.5mm以下の火山ガラスも含む。また素地土には0.5mm以下の石英を含む精緻な粘土が使用されている。(図版46-写真1・2、試料番号8・25)

なお、試料番号8(壺)・25(甕)・33(壺)・34(鉢)は他の土器と比較して片岩が観察されなかった。(図版46-写真1・2・3・4、試料番号8・25・33・34)

以上の観察結果から、田村西遺跡のヒビノキ式土器の胎土に含まれる砂粒は堆積岩、変成岩で構成されている。

(4)考察

蛍光X線分析とデジタルマイクロスコープにより田村西遺跡出土土器の胎土分析を行った結果、以下のことが推定された。

①蛍光X線分析では、ミトロ、介良野、伏原、祈年の各遺跡出土のヒビノキ式土器とは明確に分布領域が分かれず一部重なる領域もみられたが、田村西遺跡のほとんどの土器の分布集中区はほかの遺跡と判別が可能であった。

②マイクロスコープによる砂粒観察では、田村西遺跡出土のヒビノキ式土器の主体を占める胎土は1種類で、砂粒構成は堆積岩(チャート・砂岩)、変成岩(片岩)であった。これは田村西遺跡が立地する沖積層には、地質的に古生代末～中生代の秩父帯および中生代末～新第三紀の四万十層群に起源をもつ、砂岩・泥岩・チャートなどの砂礫や粘土が堆積していることから、同遺跡出土のヒビノキ式土器は遺跡周辺で生産されたと考えられる。

これまで分析した伏原、ミトロ、介良野、祈年の各遺跡は近接し、地質的によく似た構造であるが、胎土分析では異なることが推定された。これは、各遺跡で「ヒビノキ式土器」が生産されたことが想

定される。

以上のように今回の分析でも、近接した遺跡にもかかわらず「ヒビノキ式土器」の胎土が異なることがわかった。これら5遺跡の胎土が異なる結果より、これまで想定している遺跡ごとで、土器生産を行っていることが、改めて推定された。

この分析の機会を与えていただいた久家隆芳氏をはじめ、高知県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろとお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

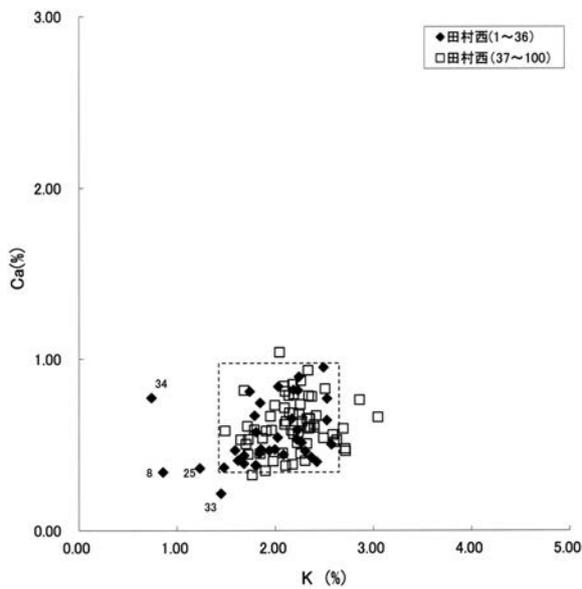


図68 遺跡出土土器の比較(K-Ca散布図)

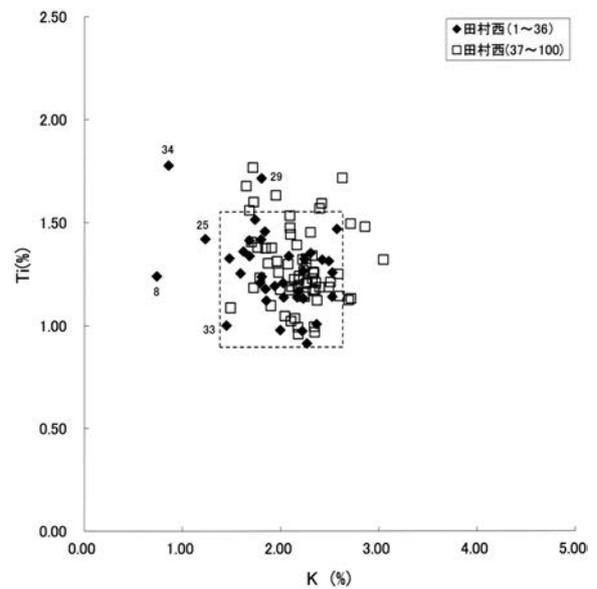


図69 遺跡出土土器の比較(K-Ti散布図)

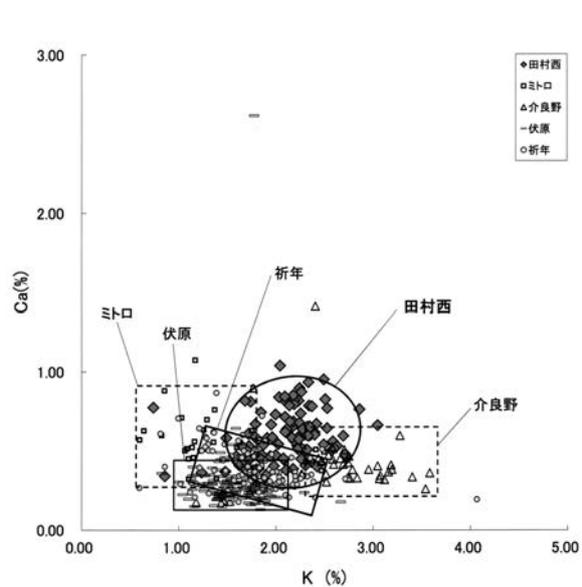


図70 各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較(K-Ca散布図)

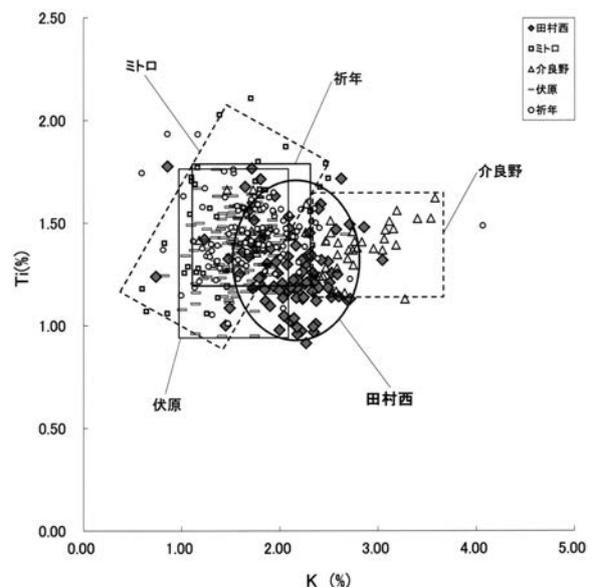


図71 各遺跡出土ヒビノキ式土器の比較(K-Ti散布図)

表7 田村西遺跡出土ヒビノキ式土器の胎土分析結果(Si~P: %, Rb~Zr: ppm)

試料 番号	遺物 番号	出土遺構	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	79	SD2	甕	68.80	1.26	19.93	6.02	0.00	0.17	0.77	0.16	2.53	0.24	37	144	299
2	72	〃	〃	70.90	1.33	19.37	3.44	0.00	2.33	0.37	0.66	1.48	0.04	7	78	337
3	82	〃	〃	69.86	1.13	19.01	5.89	0.00	0.68	0.82	0.20	2.23	0.07	15	159	339
4	53	〃	壺	74.92	1.19	16.84	3.88	0.00	0.17	0.47	0.39	1.94	0.09	10	97	273
5	76	〃	甕	72.97	1.17	17.13	4.86	0.01	0.49	0.82	0.22	2.19	0.05	25	98	292
6	69	〃	壺	70.73	1.47	19.35	4.11	0.00	0.23	0.50	0.68	2.57	0.19	41	182	329
7	87	〃	甕	74.65	1.14	17.58	2.77	0.00	0.21	0.64	0.27	2.53	0.09	35	111	309
8	55	〃	壺	60.47	1.78	25.13	6.65	0.03	4.38	0.34	0.14	0.86	0.07	7	21	422
9	74	〃	甕	75.81	1.21	18.14	1.85	0.00	0.12	0.67	0.03	1.79	0.27	10	135	390
10	52	〃	壺	69.73	1.31	20.41	4.77	0.00	0.14	0.95	0.01	2.49	0.07	29	138	339
11	70	〃	〃	72.34	0.97	16.91	6.68	0.00	0.19	0.53	0.01	2.22	0.04	21	129	324
12	216	SD25	甕	73.79	1.14	16.82	4.90	0.00	0.36	0.65	0.00	2.17	0.06	6	112	324
13	219	〃	〃	69.94	1.46	19.86	6.09	0.01	0.18	0.45	0.00	1.84	0.07	10	76	397
14	217	〃	〃	72.02	1.34	19.42	4.03	0.00	0.19	0.44	0.26	2.08	0.06	16	124	345
15	271	SD25・26	〃	71.86	1.14	18.01	5.04	0.01	0.47	0.84	0.42	2.03	0.07	33	149	337
16	229	SD25	鉢	70.74	1.26	17.73	6.90	0.00	0.10	0.59	0.31	2.23	0.04	23	113	334
17	212	〃	壺	67.25	1.41	20.74	4.73	0.00	2.69	0.39	0.95	1.68	0.05	7	165	366
18	215	〃	甕	69.65	1.36	20.50	4.66	0.00	1.39	0.41	0.29	1.62	0.03	6	97	424
19	233	〃	鉢	75.81	0.91	15.86	4.34	0.00	0.16	0.51	0.01	2.27	0.04	33	127	362
20	221	〃	甕	72.57	1.34	18.98	2.73	0.00	1.76	0.44	0.34	1.68	0.05	8	123	396
21	220	〃	〃	66.97	1.52	20.64	7.73	0.01	0.39	0.81	0.00	1.74	0.06	34	122	381
22	187	SD18	高杯	69.73	1.24	18.72	7.81	0.00	0.17	0.38	0.01	1.81	0.03	15	48	357
23	174	〃	甕	76.48	1.12	16.88	2.52	0.00	0.09	0.48	0.41	1.85	0.07	8	127	418
24	184	〃	鉢	73.02	1.01	16.42	6.40	0.00	0.23	0.43	0.00	2.37	0.05	28	58	319
25	173	〃	甕	61.43	1.42	22.72	12.43	0.01	0.20	0.36	0.00	1.23	0.05	10	98	374
26	181	〃	鉢	74.31	1.25	18.83	2.49	0.00	0.33	0.47	0.56	1.59	0.07	8	49	411
27	172	〃	甕	69.02	1.21	18.52	8.38	0.01	0.14	0.54	0.00	2.02	0.06	20	124	228
28	171	〃	〃	69.42	1.32	20.17	5.98	0.00	0.15	0.40	0.01	2.42	0.03	24	88	410
29	230	SD25	鉢	63.53	1.72	20.67	6.29	0.03	3.80	0.58	1.42	1.80	0.06	7	156	336
30	7	ST3	甕	61.14	1.42	20.48	14.41	0.05	0.14	0.38	0.00	1.80	0.06	7	85	297
31	14	ST4	〃	70.29	1.18	17.99	6.54	0.01	0.69	0.75	0.56	1.84	0.07	10	140	309
32	15	〃	〃	74.57	0.98	15.73	5.45	0.01	0.27	0.48	0.34	2.00	0.06	19	97	343
33	295	検出面	壺	75.90	1.00	15.65	5.23	0.01	0.40	0.22	0.00	1.45	0.05	3	46	246
34	30	SK8	鉢	51.27	1.24	20.83	23.00	0.14	1.79	0.77	0.00	0.74	0.05	17	83	346
35	160	SD16	壺	61.54	1.35	19.82	13.74	0.05	0.30	0.46	0.26	2.30	0.07	46	132	383
36	43	SD5	甕	68.25	1.32	21.99	4.53	0.00	0.28	0.90	0.00	2.24	0.34	41	177	429
37	-	SD2	-	75.53	0.96	15.63	3.66	0.00	0.63	0.69	0.41	2.18	0.22	15	117	320
38	-	〃	-	69.46	1.38	21.37	3.11	0.00	2.06	0.45	0.00	1.85	0.24	6	103	388
39	-	〃	-	71.52	1.26	18.66	5.12	0.00	0.14	0.79	0.02	2.34	0.05	34	149	391
40	-	〃	-	68.72	1.63	22.25	3.30	0.00	0.56	0.67	0.40	1.95	0.39	8	138	485
41	-	〃	-	71.12	1.21	19.12	4.34	0.01	0.30	0.83	0.27	2.51	0.20	44	145	324
42	-	〃	-	72.15	1.12	18.29	3.21	0.00	1.46	0.78	0.45	2.37	0.05	25	141	275
43	-	〃	-	72.38	1.59	19.14	3.28	0.00	0.11	0.67	0.00	2.42	0.28	39	102	399
44	-	〃	-	71.28	1.24	17.79	5.29	0.01	1.01	0.80	0.27	2.19	0.03	33	121	363
45	-	〃	-	75.10	0.97	17.36	2.39	0.00	0.23	0.66	0.58	2.35	0.24	27	95	348
46	-	〃	-	74.79	1.12	17.25	3.26	0.00	0.10	0.60	0.02	2.69	0.07	37	145	306
47	-	〃	-	69.77	1.26	18.67	4.95	0.01	1.15	0.94	0.75	2.33	0.03	51	184	274
48	-	〃	-	74.83	1.14	16.67	3.48	0.00	0.30	0.68	0.31	2.24	0.25	16	114	302
49	-	〃	-	73.11	1.22	18.12	3.81	0.00	0.57	0.57	0.00	2.19	0.32	29	69	339
50	-	〃	-	71.13	1.32	19.71	3.76	0.00	0.19	0.66	0.03	3.05	0.03	33	104	388
51	-	〃	-	68.90	1.57	19.44	5.43	0.00	1.06	0.62	0.22	2.39	0.26	34	111	287
52	-	〃	-	66.04	1.60	21.87	7.17	0.01	0.41	0.53	0.17	1.72	0.36	14	68	332
53	-	〃	-	72.59	1.19	17.53	3.07	0.00	1.64	0.85	0.81	2.18	0.04	37	174	255
54	-	〃	-	73.32	1.44	17.94	3.75	0.01	0.48	0.81	0.00	2.10	0.03	26	105	386
55	-	〃	-	69.78	1.18	19.43	4.33	0.00	2.19	0.45	0.75	1.72	0.07	9	121	357
56	-	〃	-	70.16	1.41	21.04	2.91	0.00	1.98	0.51	0.00	1.70	0.21	3	98	378
57	-	〃	-	72.06	1.33	18.26	4.04	0.00	1.00	0.87	0.02	2.26	0.07	21	83	347
58	-	〃	-	70.21	1.05	19.48	4.22	0.00	1.24	1.04	0.57	2.04	0.04	24	153	332
59	-	〃	-	69.44	1.48	21.05	3.88	0.00	0.13	0.76	0.03	2.86	0.27	42	134	353
60	-	〃	-	70.03	1.77	20.68	4.25	0.00	0.53	0.61	0.01	1.71	0.28	14	91	454
61	-	〃	-	73.16	1.13	18.35	3.60	0.00	0.41	0.47	0.00	2.71	0.04	32	113	343
62	-	〃	-	68.62	1.49	19.94	5.12	0.00	0.43	0.48	0.89	2.71	0.22	23	121	364
63	-	〃	-	70.93	1.20	19.06	3.84	0.01	1.17	0.74	0.62	2.25	0.05	18	160	295

第IV章 自然科学分析

試料 番号	遺物 番号	出土遺構	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
64	-	SD2	-	72.55	1.38	18.41	3.73	0.00	1.39	0.33	0.30	1.76	0.04	13	113	363
65	-	〃	-	70.11	1.23	19.58	4.52	0.01	0.84	0.65	0.59	2.32	0.03	15	141	257
66	-	〃	-	72.24	1.38	19.50	3.92	0.00	0.29	0.58	0.00	1.91	0.04	20	116	346
67	-	〃	-	71.17	1.25	19.82	4.02	0.00	0.16	0.56	0.01	2.58	0.23	37	128	362
68	-	〃	-	73.82	1.00	17.17	3.35	0.00	1.06	0.60	0.32	2.34	0.22	42	163	350
69	-	〃	-	71.60	1.17	18.30	4.43	0.00	1.08	0.84	0.30	2.09	0.07	31	154	242
70	-	〃	-	69.93	1.72	18.78	6.05	0.01	0.14	0.53	0.01	2.63	0.05	26	127	348
71	-	SD18	-	69.54	1.30	20.45	5.76	0.00	0.06	0.45	0.01	2.26	0.06	8	109	381
72	-	〃	-	77.00	1.10	16.61	2.63	0.00	0.20	0.35	0.02	1.90	0.08	6	58	385
73	-	〃	-	65.26	1.68	20.24	10.37	0.01	0.09	0.53	0.01	1.65	0.04	16	117	347
74	-	〃	-	72.46	1.26	19.50	3.48	0.00	0.24	0.41	0.51	1.98	0.07	14	184	331
75	-	〃	-	71.44	1.45	18.54	5.31	0.00	0.10	0.41	0.30	2.30	0.03	22	135	362
76	-	〃	-	62.17	1.23	20.67	12.74	0.04	0.27	0.59	0.35	1.79	0.07	15	139	337
77	-	〃	-	64.19	1.09	19.49	12.44	0.07	0.51	0.58	0.00	1.49	0.05	32	120	317
78	-	〃	-	70.61	1.30	18.68	6.47	0.00	0.20	0.54	0.17	1.87	0.05	29	84	390
79	-	〃	-	59.80	1.39	19.29	14.79	0.05	0.64	0.58	1.04	2.16	0.05	45	151	348
80	-	〃	-	69.08	1.26	19.44	6.04	0.00	0.17	0.57	0.72	2.23	0.34	50	141	324
81	-	SD25	-	67.29	1.56	19.52	8.10	0.01	0.89	0.82	0.00	1.68	0.03	42	121	343
82	-	〃	-	70.59	1.21	19.63	4.96	0.00	0.27	0.60	0.22	2.36	0.04	35	160	351
83	-	〃	-	65.26	1.53	21.70	8.25	0.01	0.29	0.72	0.00	2.09	0.03	44	112	353
84	-	〃	-	71.29	1.21	18.53	5.36	0.01	0.34	0.64	0.00	2.27	0.25	37	98	373
85	-	〃	-	70.93	1.19	17.39	6.29	0.03	1.26	0.64	0.00	2.11	0.06	44	85	316
86	-	〃	-	73.74	1.17	17.30	3.57	0.00	0.32	0.65	0.72	2.35	0.06	25	167	313
87	-	〃	-	67.95	1.32	20.07	6.60	0.01	0.35	0.51	0.63	2.22	0.23	26	66	284
88	-	〃	-	76.58	0.99	16.87	1.75	0.00	0.09	0.39	0.75	2.17	0.28	11	109	282
89	-	〃	-	70.77	1.17	20.19	4.88	0.01	0.09	0.73	0.02	1.99	0.05	29	184	269
90	-	〃	-	70.44	1.19	19.11	5.54	0.00	0.29	0.60	0.28	2.40	0.06	44	163	400
91	-	〃	-	68.34	1.22	20.99	5.04	0.00	0.29	0.79	1.00	2.14	0.05	36	166	326
92	-	〃	-	73.89	1.02	18.11	3.31	0.00	0.86	0.38	0.00	2.10	0.22	6	85	336
93	-	〃	-	73.11	1.30	19.22	3.49	0.00	0.12	0.45	0.00	2.08	0.07	19	98	424
94	-	〃	-	72.53	1.14	19.58	2.74	0.00	0.10	0.52	0.44	2.60	0.21	23	157	373
95	-	〃	-	73.12	1.34	19.67	2.49	0.00	0.11	0.51	0.00	2.32	0.28	16	100	411
96	-	〃	-	71.06	1.19	19.41	4.55	0.00	0.21	0.54	0.39	2.49	0.03	48	139	332
97	-	〃	-	71.53	1.17	18.69	5.13	0.00	0.29	0.60	0.00	2.33	0.16	35	79	318
98	-	〃	-	71.80	1.04	17.98	4.43	0.01	1.41	0.69	0.38	2.14	0.04	31	129	294
99	-	〃	-	66.19	1.48	19.61	8.99	0.02	0.60	0.62	0.00	2.09	0.23	21	114	349
100	-	〃	-	68.05	1.31	19.39	7.34	0.00	1.15	0.59	0.00	1.96	0.08	23	149	301

第V章 まとめ

1. 時期別の特徴

(1) 弥生時代中期中葉・弥生時代中期末～後期初頭

中期中葉の土坑が1基(SK9), 中期末～後期初頭の溝跡が1条(SD22)のみである。

(2) 弥生時代後期末～古墳時代初頭

竪穴建物跡6軒(ST1～4), 溝跡(SD2・18・25・26), 自然流路跡を検出した。調査区の北部で検出した竪穴建物跡は削平が著しいことから, 高低差は現地形よりも大きく, 微高地に居住域, 微低地に生産域がひろがっていたと推測される。田村西遺跡での遺構密度や現在調査中の田村北遺跡の状況から10軒ほどの竪穴建物跡で構成されるまとまりが, 数グループ展開する中規模の集落跡であったと推測される。隣接する田村遺跡群の弥生集落は後期初頭を最盛期として後期中葉以降衰退していく中で, 高知平野では集落の再編成が行われる。そして弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて安定期に入り再び人口が増加する時期を迎える。当該期は田村遺跡群のような核となる大規模な集落遺跡は認識されておらず, 中小規模の集落が並立している状況である。台地上での集落遺跡の存在が大きかったために, 後期後半以降は平野部から台地上へ集落が移動すると考えられてきたが, 里改田遺跡, 介良野遺跡, 西野々遺跡のように平野部においても集落は継続して営まれていたことが最近の調査で明らかとなっている⁽¹⁾。田村西遺跡も田村遺跡群に後続する平野部の集落の一つと位置づけることができる。

表8 田村西遺跡組成比率

ST4	壺	甕	鉢	高杯	支脚	その他	不明	合計
未実測遺物	3	30	28	5	0	1	13	80点
	3.75	37.50	35.00	6.25	0.00	1.25	16.25	100.00%
報告書掲載遺物	3	2	8	0	0	0	0	13点
	23.08	15.38	61.54	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00%
合計	6	32	36	5	0	1	13	93点
	6.45	34.41	38.71	5.38	0.00	1.08	13.97	100.00%
SD2	壺	甕	鉢	高杯	支脚	その他	不明	合計
未実測遺物	50	636	280	32	49	4	74	1125点
	4.44	56.53	24.89	2.84	4.36	0.36	6.58	100.00%
報告書掲載遺物	26	32	14	1	13	9	0	95点
	27.37	33.68	14.74	1.05	13.68	9.48	0.00	100.00%
合計	76	668	294	33	62	13	74	1220点
	6.23	54.75	24.10	2.70	5.08	1.07	6.07	100.00%
SD18	壺	甕	鉢	高杯	支脚	その他	不明	合計
未実測遺物	3	91	78	8	3	1	25	209点
	1.44	43.54	37.32	3.83	1.44	0.48	11.95	100.00%
報告書掲載遺物	5	6	9	7	3	1	0	31点
	16.13	19.35	29.03	22.58	9.68	3.23	0.00	100.00%
合計	8	97	87	15	6	2	25	240点
	3.33	40.42	36.25	6.25	2.50	0.83	10.42	100.00%
SD25	壺	甕	鉢	高杯	支脚	その他	不明	合計
未実測遺物	17	177	100	2	4	1	39	340点
	5.00	52.06	29.41	0.59	1.18	0.29	11.47	100.00%
報告書掲載遺物	3	9	10	6	9	0	0	37点
	8.11	24.32	27.03	16.22	24.32	0.00	0.00	100.00%
合計	20	186	110	8	13	1	39	377点
	5.31	49.34	29.18	2.12	3.45	0.27	10.33	100.00%

表9 介良野遺跡・伏原遺跡Ⅱ組成比率

	壺	甕	鉢	高杯	その他	不明	合計
介 ST1	15	83	184	0	0	61	343点
	4.37	24.20	53.64	0.00	0.00	17.79	100%
介 ST2	5	56	82	1	1	30	175点
	2.86	32.00	46.86	0.57	0.57	17.14	100%
介 ST5	21	97	116	3	0	52	289点
	7.27	33.56	40.14	1.04	0.00	17.99	100%
介 ST6	19	73	127	5	0	39	263点
	7.22	27.76	48.29	1.90	0.00	14.83	100%
介 ST16	19	95	153	4	0	44	315点
	6.03	30.16	48.57	1.27	0.00	13.97	100%
介 ST18	12	53	121	0	0	26	212点
	5.66	25.00	57.08	0.00	0.00	12.26	100%
介 ST19	7	64	67	3	0	15	156点
	4.49	41.03	42.95	1.92	0.00	9.61	100%
介 ST23	27	86	191	6	0	34	344点
	7.85	25.00	55.52	1.74	0.00	9.89	100%
介 ST24	16	42	90	4	0	11	163点
	9.82	25.77	55.21	2.45	0.00	6.75	100%
介 SK74	10	34	48	0	0	15	107点
	9.35	31.78	44.86	0.00	0.00	14.01	100%
伏 ST1	37	73	166	11	0	36	323点
	11.46	22.60	51.39	3.41	0.00	11.14	100%
伏 ST2	69	115	286	11	0	35	516点
	13.37	22.29	55.43	2.13	0.00	6.78	100%
伏 ST7	83	138	157	16	3	72	469点
	17.70	29.42	33.48	3.41	0.64	15.35	100%
伏 ST8	35	129	277	8	6	91	546点
	6.41	23.63	50.73	1.47	1.10	16.66	100%
伏 ST15	35	116	153	4	0	50	358点
	9.78	32.40	42.74	1.12	0.00	13.96	100%
伏 ST16	35	224	300	12	2	53	626点
	5.59	35.78	47.92	1.92	0.32	8.47	100%
伏 SK69	46	122	237	18	12	106	541点
	8.50	22.55	43.81	3.33	2.22	19.59	100%

竪穴建物跡(ST1・2)には壁溝、主柱穴の配置から多角形建物が含まれている可能性が高い。県下では20軒の多角形建物跡が報告されている。県内の多角形建物については徳平涼子氏がその特徴を以下のようにまとめている。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての時期に構築されること、集落内で複数認められること、ベッド状遺構の伴うものと同伴わないものが存在すること、香川県の検出例との類似性、円形建物跡の規模及び出土遺物等も類似していることから特殊な建物跡ではないとしながらも、伏原遺跡 I ST1 から杓子形土製品が出土していることから「集落内においてやはり特殊な立場の人物の存在を想定しなければならない」としている⁽²⁾。

当該期の竪穴建物跡には円形、多角形、隅丸方形、隅丸長方形のものが混在し、古墳時代初頭には隅丸方形、隅丸長方形の方形基調に統一されるものと考えられている⁽³⁾。多角形建物跡は1遺跡で数軒ずつ存在するが、祈年遺跡では10軒と突出して多い。規模は直径約8m(約50㎡)、約7m(約40㎡)、約5m(約20㎡)に大別でき、後期中葉段階と同様に規模の異なる建物跡がセットとなり集落を構成すると考えられ、弥生時代の集落構造を継承している。集落構造、建物規模、出土遺物等から多角形建物跡に特別な意味を付与することはできず、南四国においては他形のものと同様に竪穴建物の1類型として扱うのが適当と考えられる。

次に出土遺物は弥生土器、搬入土器、石器、鉄器が出土している。出土土器の遺構別の組成比率(表8)を比較的地点数の多いST4、SD2、SD18、SD25でみると、甕は3～5割、鉢は2～4割、壺、高杯、支脚がそれぞれ1割未満である。比較のためほぼ同時期の介良野遺跡と伏原遺跡Ⅱの組成比率(表9)を示した。一部の分類項目は異なるが、主要な器種の比率については概ね同じ傾向が認められる⁽⁴⁾。3遺跡とも遺構により若干ばらつきが認められ、遺構の性格、廃棄された状況等を反映していると推測される。搬入土器は庄内式土器、東四国系土器などが出土しているが在来系土器に占める割合は極めて低い。庄内式土器は破片点数で約180点を数え、搬入土器では最も多い。当該期の調査では出土点数に多寡はあるものの、ほとんどすべての遺跡から庄内式土器は出土している。石器は、砂岩製の打製石包丁と叩石が主体を占める。叩石の中には形状が変形するほど激しく敲打されたものの(6, 152)もあり、弥生時代前半に属する可能性がある。鉄器は鉄鏃と鉋がそれぞれ1点ずつ出土している。

(3)古代・中世・近世

古代・中世では溝跡を検出した。溝跡から遺物がほとんど出土していないため、時期比定は難しい。方向と位置から条里地割りに関連するものと考えられる。近世では、土坑を2基検出したのみである。

2. 土製支脚について

(1)はじめに

今回の調査では土製支脚がまとまって出土した。破片資料のみならず、全体の形態が判別できる個体も多い。高知県下では破片も含めると約260点が報告されており、そのうち残存率の良好な109点を対象に型式分類を行い、その特徴について述べてみたい。土製支脚は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての短期間しか存続しない器種である。器種組成に占める支脚の割合はせいぜい数%であり、主要な器種ではない。高知県内では浜田恵子氏が小籠遺跡の出土資料を中心に形態分類、変遷、特徴について述べている⁽⁵⁾。その後、山内英樹氏は愛媛県、香川県、高知県の土製支脚の集成、形態分類、特徴についてまとめている⁽⁶⁾。

(2)型式分類

形態

A類：背が高いもの。中空の筒状の体部を持ち、口縁部と底部がひろがる。

B類：背が高いもので、脚部は「ハ」の字状にひろく。口縁部は片口状に受け部を形成するもの。また、口縁部をひらき受け部を成形するもの。

C類：背が高いもので、脚部は「ハ」の字状にひろく。上部に2本の指をひろげ、受け部とするもの。

D類：背が低いもので、脚部は「ハ」の字状にひろく。上面はわずかに凹ませ、受け部とするもの。

E類：背が低いもので、口縁部と脚部がひろくもの。

F類：背が低いもので、円柱状の体部の上面に皿状の受け部が付くもの。

G類：背が低い円柱状を呈するもの。

外面調整

n：ナデ調整

t：叩き調整

h：ハケメ調整

体部形状

1：中空

2：下から約 $\frac{3}{4}$ まで中空

3：下から約 $\frac{1}{2}$ まで中空

4：下から約 $\frac{1}{3}$ まで中空

5：上げ底

6：中実

(3)各類型の特徴

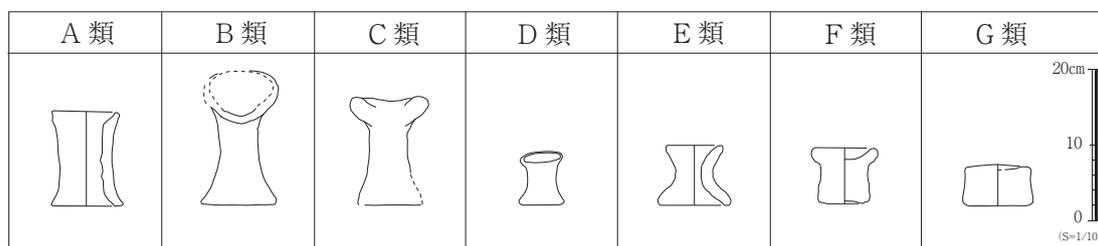


図72 支脚形態分類

A類に属するものは3点(表10)である。すべて久次遺跡の同一遺構から出土しており、形態、調整、法量など類似点が多く、同時期のものと考えられる。上面はやや傾斜させる。外面は叩き調整後、ナデ調整である。

B類に属するものは12点(表11)である。口縁部をひらき、受け部とするものである。受け部の形状

は片口状のものから上半部まで深くひらくものまであり個体差が大きい。介良野遺跡、田村西遺跡ではハケメ調整を施すものがみられる。支脚にハケメ調整を施すものはほとんどなく、この類型の特徴と考えられる。

C類に属するものは51点(表12)であり最も多い。全体的にやや内傾気味に作られ、指先2点で支える構造である。複雑な形態であるから個体差が大きい。外面の調整、体部の形状、つまみの有無を分類項目とし分類した。それぞれの組み合わせのバリエーションは多い。独特な形態を製作することにより目的を達成できることから、調整、その他の細部の形状については機能面での問題がないためにさまざまなバリエーションを生むことになった。つまみの形状も、鱗状を呈するもの、突出した円柱状を呈するもの、あるいは付さないものがある。各分類項目の組み合わせは遺跡毎によく似たものがみられる。支脚と土器の接点が小さいため、支脚により炎を遮断することも少なく、炎に接する面積をひろくすることができる。また、器高を高くすることで土器の直下で火を炊くことができる。複雑な形態であるが、機能的に優れた形態である。支脚の中で最も多くを占めていることも、このタイプの有用性を示している。一覧表では同じ調整毎に並べた。小籠遺跡、岩村遺跡群のように細別項目の組み合わせが様々あるものもあるが、遺跡毎でよく似た傾向が認められる。例えば田村西遺跡では外面調整は上半部、下半部ともナデ調整、体部の作りは上端付近まで中空である。つまみの有無が判別できるものはすべて、つまみが付されている。祈年遺跡では外面調整は上半部、下半部ともナデ調整、体部の作りは中実で上げ底を呈する。このことは機能に影響を与える形態には注意を払うが、調整など機能に直接影響しないことについては作り手の選択によるため、遺跡毎に類似したものとなっている。次に熱効率の点で少し考えてみたい。燃焼効率を上げるためには、火処と土器との空間(燃焼空間)、特に平面的にひろい方が土器に当たる熱量を増加させることができ有効である。つまり指が上方へのびるタイプは支脚間の間隔が狭くなり燃焼空間が狭くなるため、指が前方にひろがったほうがよいことになる。また指は横方向にもひろがれば、安定感が増し、2個で支えることも可能である。したがって指が支脚よりも前と横にひろがれば機能度が向上することになる。ただし安定性は減り、脚部がより重厚なものにする必要がある。さらに熱効率を上げるためには長胴形よりも最大部径の大きな球形のものの方がよく、甕の器形変化もそのような傾向を示している。

D類に属するものは11点(表13)である。伏原遺跡4点と小籠遺跡3点の両遺跡で大半を占める。上面に傾斜を持つものと上面がフラットなものがある。前者の単独使用は難しいと考えられ、複数の支脚を組み合わせ使用していたと推測される。上面に傾斜を持つものには向きが存在し、複数の支脚を組み合わせ使用すると推測される。また天地の確定が困難なものもある。

E類に属するものは5点(表14)である⁽⁷⁾。調整はすべてナデ調整である。体部は中空のものの中実で上げ底のものがある。ほとんどのものは上面が僅かに傾斜する。向きがあり、複数の支脚を組み合わせ使用すると推測される。また天地の確定が困難なものがある。

F類に属するものは6点(表15)である。調整はすべてナデ調整である。上面は凹み、傾斜を持つ。また、片口状を呈しているものがある。このタイプにも向きがあり、複数の支脚を組み合わせ使用すると推測される。

G類に属するものは21点(表16)であり、背の低いタイプでは最も多い。やや器高が高いくびれるタイプと器高の低いくびれないタイプに分類できる可能性がある。また上面が傾斜するものと水平なものがある。この類型も天地の確定が困難なものがある。

(4)まとめにかえて

形態から7類型に分類してきたが、各類型とも個体差が大きい。分類項目を増やせば、有用な情報を引き出すこともできると考えられるが、いくつかの属性を提示するに留めた。煩雑になることを回避するためと実用重視の器種であり、目的を達成できるかどうかには比重が置かれていると考えたためである。南四国の主要な支脚は出土量からいえば、C類とG類である。

具体的な使用方法については不明な点が多い。何かを支える器種であるということは大方の一致するところであろう。そのような用途を想定すると支え方と地面から支点までの高さが重要である。地面から支点までの高さは各類型により異なっていることから、それぞれの目的に合致した高さや形態であると考えられる。各遺跡での出土状況から複数の類型が同時併存し、それぞれの目的に合致した形態を選択して使用していたと推測される。背の低いタイプも上面に傾斜を持たせるものが多く、向き(置き方)があったと考えられる。また、片口状に作られているものもあることから単体で使用されるのではなく、背の高いタイプと同様に複数で使用されたものと考えられる。両者の違いは、接地面との高さである。

外面調整には叩き調整、ナデ調整、ハケメ調整である。器高の高いA～C類は叩き調整かナデ調整、また両者を基本とする。叩き目の方向は支脚を正位に置いた状態でみた場合、右下がり方向から水平方向である場合が多い。甕では右上がり方向が圧倒的であることと対照的である。五軒屋敷遺跡、久次遺跡、岩村遺跡群、東江曲遺跡などでは類型の枠を超えて叩き調整を使用する頻度が高く、遺跡毎に調整の特徴がみられる。このことから各遺跡の特徴が反映された支脚が製作されていたことが窺える。また、器高の低いD～G類のほとんどはナデ調整で仕上げられている。

さて土製支脚は伊予のものと類似し、南四国の壺形土器に複合口縁壺が占める割合も多い。さらに居徳遺跡群からは「西部瀬戸内系大型器台」が出土しているなど⁽⁸⁾、西部瀬戸内からの影響が認められる。また庄内式土器も弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺跡からは量は少ないが普遍的に出土するようになり、西部瀬戸内地域と河内地域からの影響が顕在化する。その一方で、弥生時代を通じて影響を受けてきた讃岐からの影響がみえにくくなる。弥生時代から古墳時代にかけて、南四国の土器変化は緩慢であるのと対照的に集落構造、建物の構造、祭祀形態などは各地域からの影響力の強弱によって、様々な状況みせる。南四国の弥生時代から古墳時代への過渡期は複雑な様相を呈している。

遺物見学では、門田由紀氏(安芸市歴史民俗資料館)、小林麻由氏(香美市教育委員会)、松村信博氏(香南市文化財センター)、油利 崇氏(南国市教育委員会)の各氏に便宜をはかっていただきました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

註

- (1) 2000『里改田遺跡 - 室ノ内・岩路地区 -』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2007『介良野遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2008『西野々遺跡Ⅰ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2011『西野々遺跡Ⅱ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2011『西野々遺跡Ⅲ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (2) 徳平涼子2010「第Ⅴ章 考察 5.多角形の竪穴式住居跡について」『伏原遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (3) 出原恵三2002「南四国の竪穴住居」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- (4) 介良野遺跡、伏原遺跡Ⅱとも田村西遺跡と同じ方法で筆者がカウントした。ただし、3遺跡のカウントした時期は異なっている。
- (5) 浜田恵子1996「小籠遺跡出土の支脚について」『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (6) 山内英樹2001「四国の支脚形土器」『庄内式土器研究XXV』庄内式土器研究会
- (7) 他の類型に分類したほうが妥当と考えられるものも含んでいる。
- (8) 2004『居徳遺跡群Ⅵ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
松村さを里2008「西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について - 伊予地方を中心に -」『愛媛県今治市大西町 妙見山一号墳』愛媛県今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室

支脚一覧表出典

1977『高知県ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会, 1984『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会, 1990『ひびのきサウジ遺跡』高知県土佐山田町教育委員会, 1991『東崎遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団, 1993『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会, 1994『柳田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 1994『金地遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 1995『小籠遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 1996『小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 1998『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会, 1999『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会, 2000『里改田遺跡 - 室ノ内・岩路地区 -』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2000『泉ヶ内遺跡』高知県南国市教育委員会, 2001『天神遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2002『田村遺跡群・緑の広場調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2003『東江曲遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2005『久次遺跡カリヤガノ地区』高知県土佐山田町教育委員会, 2007『比江廃寺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2007『ミトロ遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2007『介良野遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2010『伏原遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2010『伏原遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2011『河原田遺跡』安芸市歴史民俗資料館, 2012『祈年遺跡Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2012『祈年遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター, 2012『祈年遺跡Ⅳ』(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

図72出典

A類:2005『久次遺跡カリヤガノ地区』図44-4-56を改変, B類:2007『介良野遺跡』遺物番号100を改変, C類:『田村西遺跡』遺物番号135を改変, D類:2010『伏原遺跡Ⅱ』遺物番号190を改変, E類:2007『ミトロ遺跡』遺物番号165を改変, F類:1996『小籠遺跡Ⅱ』遺物番号491を改変, G類:『田村西遺跡』遺物番号144を改変

表10 A類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調整上半	調整下半	体部	報告書名	備考
1	久次遺跡	93A-ST4	図44-4-56	t	t	1	久次遺跡 カリヤガノ地区	
2	〃	〃	図44-4-57	t	t	1	〃	
3	〃	〃	図44-4-58	n	t/n	1	〃	

表11 B類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調整上半	調整下半	体部	報告書名	備考
1	久次遺跡	92A-ST1	図7-2-33	t	t	1	久次遺跡カリヤガノ地区	
2	岩村遺跡群	ST9	243	t	t	1	岩村遺跡群Ⅳ	
3	金地遺跡	ST1	26	t	n	1	金地遺跡Ⅱ	
4	東崎遺跡	ST2	56	h/n	欠損	1か	東崎遺跡Ⅰ	
5	〃	ST5	135	n	欠損	1	〃	
6	五軒屋敷遺跡	ST1	93	t	t	1	五軒屋敷遺跡調査報告書	未実見
7	〃	ST2	229	t	t	5	〃	未実見/他類型か
8	田村西遺跡	SD2	139	n	欠損	1か	田村西遺跡	
9	〃	SD18	193	t/n	欠損	1	〃	
10	〃	SD25	240	n	n	1	〃	
11	〃	〃	241	n	n	1	〃	
12	介良野遺跡	ST3	100	t/n	t/h	4	介良野遺跡	

表12 C類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調整上半	調整下半	体部	つまみ	報告書名	備考
1	ひびのき遺跡	D-Ⅰ住居跡	第57図56	n	n	2	有	ひびのき遺跡	未実見
2	岩村遺跡群	ST7	190	n	n	1or2	不明	岩村遺跡群Ⅳ	
3	比江廃寺跡	ST-1・2	図8-16	n	n	5	有	比江廃寺跡Ⅲ	
4	祈年遺跡	X区ST1	第33図29	n	n	4	無	祈年遺跡Ⅱ	
5	〃	Ⅷ区ST30	図2-65-17	n	n	5	有	祈年遺跡Ⅳ	
6	〃	Ⅷ区SX36	図6-34-36-7	n	n	4	有か	〃	
7	小籠遺跡	SK113	467	n	n	1	有	小籠遺跡Ⅱ	
8	田村西遺跡	SD2	133	n	n	2	不明	田村西遺跡	
9	〃	〃	135	n	n	2	有	〃	
10	〃	〃	136	n	n	2	有	〃	
11	〃	〃	137	n	n	2	有	〃	
12	〃	〃	138	n	n	1or2	欠損	〃	
13	〃	SD25・26	273	n	n	2	有	〃	
14	介良野遺跡	ST3	101	n	n	4	無	介良野遺跡	
15	〃	SK74	280	n	n	2	有	〃	
16	伏原遺跡	ST1	214	n	欠損	2	無	伏原遺跡Ⅰ	
17	〃	ST16	292	n	欠損	3or4or5	無	伏原遺跡Ⅱ	
18	岩村遺跡群	包含層	66	n	欠損	2	無か	岩村遺跡群Ⅲ	
19	〃	ST7	189	n	欠損	2	無	岩村遺跡群Ⅳ	
20	東崎遺跡	ST6	206	n	欠損	3or4or5	無	東崎遺跡Ⅰ	
21	〃	ST8	323	n	欠損	2	有	〃	
22	〃	包含層	471	n	欠損	3or4or5	有	〃	
23	祈年遺跡	Ⅷ区SX36	図6-34-36-6	n	欠損	欠損	有	祈年遺跡Ⅳ	
24	小籠遺跡	ST13	188	n	欠損	3or4or5	有	小籠遺跡Ⅱ	
25	〃	ST16	305	n	欠損	3or4or5	有	〃	
26	ミトロ遺跡	SD3	247	n	欠損	3or4or5	有	ミトロ遺跡	
27	〃	〃	248	n	欠損	3or4or5	有	〃	
28	〃	SK5	349	n	欠損	2	有	〃	
29	田村遺跡群	SD1	132	n	欠損	2	不明	田村遺跡群・緑の広場	
30	栄エ田遺跡	試掘TR-V層	469	n	欠損	3or4or5	無	栄エ田遺跡	
31	ひびのき遺跡	C-Ⅰ区	第45図4	n	t	不明	不明	ひびのき遺跡	未実見
32	久次遺跡	93A-ST4	図44-4-59	n	t	2	無	久次遺跡カリヤガノ地区	
33	五軒屋敷遺跡	ST2	228	n	t	4	有	五軒屋敷遺跡調査報告書	未実見
34	小籠遺跡	SD11	48	n	t	2	無	小籠遺跡Ⅰ	
35	〃	ST18	360	n	t	3	無	小籠遺跡Ⅱ	
36	田村西遺跡	SD2	134	n	t/n	3	有	田村西遺跡	
37	東江曲遺跡	I区遺物集中地点	175	n	t	3	有	東江曲遺跡	
38	〃	I区遺物包含層	223	n	t	2	無	〃	
39	〃	〃	224	n	t	3	有	〃	
40	伏原遺跡	ST25	434	t	t	1or2	有	伏原遺跡Ⅱ	
41	久次遺跡	93A-ST4	図44-4-60	t	t	2か	有	久次遺跡カリヤガノ地区	
42	岩村遺跡群	ST9	242	t	t	4	有	岩村遺跡群Ⅳ	

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調整上半	調整下半	体 部	つまみ	報告書名	備 考
43	岩村遺跡群	ST9	244	t	欠損	2	有	岩村遺跡群Ⅳ	
44	金地遺跡	ST3	162	t	欠損	2か	不明	金地遺跡Ⅱ	
45	五軒屋敷遺跡	ST2	230	t	t	3	有	五軒屋敷遺跡調査報告書	未実見
46	〃	〃	231	t	n	4	有	〃	〃
47	小籠遺跡	ST16	304	t	欠損	2	有	小籠遺跡Ⅱ	
48	介良野遺跡	SK74	281	n	t	2	有	介良野遺跡	
49	柳田遺跡	TR-F	Fig.6 - 11	t/n	t	2	不明	柳田遺跡	未実見
50	〃	V区SR501	Fig.136 - 55	t/n	t	1or2	不明	〃	〃
51	天神遺跡	SC-201	2249	n/h	t	1	有	天神遺跡Ⅱ	

表 13 D類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調 整	体 部	報告書名	備 考
1	伏原遺跡	ST1	159	n	1	伏原遺跡Ⅰ	
2	〃	ST7	341	n	-	〃	体部のみ中空
3	〃	SD2	413	t	2	〃	
4	〃	ST8	190	n	5	伏原遺跡Ⅱ	
5	五軒屋敷遺跡	ST2	232	t/n	6	五軒屋敷遺跡調査報告書	未実見
6	東崎遺跡	ST8	324	n	5	東崎遺跡Ⅰ	
7	小籠遺跡	ST18	358	n	5	小籠遺跡Ⅱ	
8	〃	〃	359	n	5	〃	
9	〃	P40	492	n	1	〃	
10	柳田遺跡	I区SR1	Fig.20 - 73	h	5	柳田遺跡	未実見
11	天神遺跡	SC-201	2250	n	1	天神遺跡Ⅱ	

表 14 E類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調 整	体 部	報告書名	備 考
1	小籠遺跡	ST18	357	n	5	小籠遺跡Ⅱ	D類か
2	ミトロ遺跡	SD1	165	n	1	ミトロ遺跡	
3	田村西遺跡	SD2	143	n	1	田村西遺跡	
4	東江曲遺跡	I区遺物集中地点	178	n	5	東江曲遺跡	F類か
5	〃	I区遺物包含層	222	n	1	〃	

表 15 F類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調 整	体 部	報告書名	備 考
1	拝原遺跡	ST11	84	n	2	拝原遺跡	
2	伏原遺跡	ST1	158	n	1	伏原遺跡Ⅰ	
3	〃	P6	431	n	5	〃	
4	祈年遺跡	VII区ST1	第7図25	n	4	祈年遺跡Ⅲ	
5	小籠遺跡	P22	491	n	5	小籠遺跡Ⅱ	
6	ミトロ遺跡	SD1	166	n	5	ミトロ遺跡	

表 16 G類支脚一覧

	遺跡名	遺構名	遺物番号	調 整	体 部	報告書名	備 考
1	河原田遺跡	ST3	第12図18	tか/n	5	河原田遺跡	
2	ひびのき遺跡	B 住居跡	第38図11	n	6	ひびのき遺跡	未実見
3	〃	D I 住居跡	第57図46	n	1	〃	未実見/支脚ではないか
4	伏原遺跡	ST1	202	t	2	伏原遺跡Ⅰ	
5	〃	ST26	448	n	2	伏原遺跡Ⅱ	
6	久次遺跡	93A-ST5	図46-5-82	n	5	久次遺跡 カリヤガノ地区	
7	泉ヶ内遺跡	ST1	151	n	5	泉ヶ内遺跡	
8	岩村遺跡群	ST8	224	n	5	岩村遺跡群Ⅳ	
9	東崎遺跡	ST6	212	n	1	東崎遺跡Ⅰ	E類か
10	〃	P2	405	n	5	〃	
11	祈年遺跡	VIII区ST2	図2-7-14	n	3	祈年遺跡Ⅳ	
12	〃	VIII区SB14	図3-21-14-1	n	5	〃	E類か
13	〃	VIII区SK41	図5-24-41-6	n	6	〃	
14	小籠遺跡	ST19	378	n	6	小籠遺跡Ⅱ	
15	栄工田遺跡	V層	456	n	2	栄工田遺跡	支脚ではないか
16	田村西遺跡	SD2	144	n	6	田村西遺跡	
17	〃	包含層	299	n	6	〃	
18	里改田遺跡	ST3	586	n	5	里改田遺跡 室ノ内・岩路地区	
19	介良野遺跡	ST12	159	n	5	介良野遺跡	
20	柳田遺跡	V区SR501	Fig.136-54	n	5	柳田遺跡	未実見
21	東江曲遺跡	I区遺物集中地点	177	n	5	東江曲遺跡	

遺構計測表・遺物観察表

凡例

()内は残存値
単位はmである。

調査区	遺構名		平面形	長軸/ 検出長	短軸/ 幅	深さ	グリッド	埋土	備考
II E区	ST1	中央P1	楕円形	(1.1)	0.5	0.1	E35-23-7他	黒褐色(10YR2/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	中央P2	〃	1.3	0.6	0.1	E35-23-6他	〃	
〃	〃	SK1	〃	0.6	0.4	0.1	E35-23-2	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P1	円形	0.3	0.3	0.1	〃	〃	
〃	〃	P2	楕円形	0.5	0.4	0.3	E35-23-1	〃	
〃	〃	P3	不整形円形	0.5	0.5	0.3	E35-23-2	〃	ST1-SD1・ST1-P4と切り合い。
〃	〃	P4	円形	0.3	0.3	0.3	〃	黒褐色(10YR2/2) 細粒砂混じりシルト	ST1-P3と切り合い。
〃	〃	P5	楕円形	(0.2)	0.2	0.2	〃	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P6	円形	0.3	0.3	0.3	〃	黒褐色(10YR2/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P7	楕円形	0.4	0.4	0.4	〃	〃	
〃	〃	P8	〃	0.4	0.3	0.3	E35-23-7	〃	
〃	〃	P9	円形	0.3	0.3	0.1	〃	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P10	楕円形	0.4	0.4	0.1	〃	〃	
〃	〃	P11	〃	0.5	0.4	0.1	〃	〃	
〃	〃	P12	〃	0.3	0.2	0.1	〃	〃	
〃	〃	P13	円形	0.4	0.4	0.2	E35-23-6	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P14	楕円形	0.4	(0.1)	0.1	〃	〃	P15と切り合い。
〃	〃	P15	〃	0.4	0.3	0.3	〃	〃	P14と切り合い。
〃	〃	P16	円形	0.3	0.2	0.4	〃	〃	
〃	〃	P21	〃	0.2	0.2	0.3	E35-23-1	〃	
〃	〃	P22	〃	0.3	0.2	0.3	E35-23-7	黒褐色(10YR3/1) 細粒砂混じりシルト	ST1-中央P1を切る。
〃	〃	P23	〃	0.2	0.2	0.1	E35-23-2	-	
〃	〃	P24	〃	0.4	0.4	0.1	〃	-	
〃	〃	SD1	-	3.0	0.2	0.1	E35-23-1他	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	ST1-P3と切り合い。
〃	〃	SD2	-	5.7	0.2	0.1	E35-23-2他	〃	

調査区	遺構名		平面形	長軸/ 検出長	短軸/ 幅	深さ	グリッド	埋土	備考
II E区	ST1	SD3	-	(1.4)	0.2	0.1	E35-23-6他	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD4	-	1.3	0.1	0.1	E35-23-2他	〃	
〃	〃	SD5	-	(1.7)	0.2	0.1	E35-23-2	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	ST2	中央P1	楕円形	1.4	0.8	0.3	E35-23-7	黒褐色(10YR2/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P1	楕円形か	0.5	(0.4)	0.2	〃	〃	ST2-P2・P4と切り合い。
〃	〃	P2	不整形	0.5	(0.3)	0.1	〃	〃	ST2-P1・ST2-SD1と切り合い。
〃	〃	P3	円形	0.4	0.3	0.4	〃	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	ST2-SD4と切り合い。
〃	〃	P4	〃	0.3	0.3	0.3	〃	〃	ST2-P1と切り合い。
〃	〃	P5	〃	0.3	0.3	0.1	〃	〃	ST2-SD4と切り合い。
〃	〃	P6	楕円形	0.3	0.3	0.1	〃	〃	ST2-SD1と切り合い。
〃	〃	P7	〃	0.4	0.3	0.3	E35-23-12	黒褐色(10YR2/2) 細粒砂混じりシルト	ST2-SD3と切り合い。
〃	〃	P8	円形	0.3	0.3	0.4	E35-23-6	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	〃
〃	〃	P9	楕円形	0.3	0.3	0.2	〃	〃	
〃	〃	P10	〃	0.3	0.2	0.1	〃	〃	
〃	〃	P11	円形	0.2	0.2	0.1	〃	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P12	楕円形	0.3	0.2	0.5	E35-23-12	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じりシルト	ST2-SD3と切り合い。
〃	〃	P13	〃	0.4	0.3	0.1	〃	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD1	-	4.0	0.2	0.1	E35-23-7	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	ST2-P2・P6と切り合い。
〃	〃	SD2・3	-	4.6	0.2	0.1	E35-23-6他	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD4	-	2.5	0.1	0.1	E35-23-7	〃	ST2-P3・P5と切り合い。
〃	〃	SD5	-	(1.0)	0.2	0.1	E35-23-6	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD6	-	2.3	0.2	0.1	E35-23-2他	黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD7	-	(0.9)	0.2	0.1	E35-23-2	暗オリーブ褐色(2.5Y3/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	ST-A		六角形	(3.0)	-	-	E35-23-6他	床面積約(23)㎡/床面標高9.1m	ST2-中央P1を燃焼施設とする。
〃	ST-B		隅丸方形	(5.0)	(5.0)	-	E35-23-1他	床面積約(25)㎡/床面標高9.1m	ST1-中央P1を燃焼施設とする。
〃	ST-C		〃	(4.0)	(4.0)	-	〃	床面積約(16)㎡/床面標高9.1m	ST1-中央P2を燃焼施設とする。

調査区	遺構名		平面形	長軸/ 検出長	短軸/ 幅	深さ	グリッド	埋土	備考
II E・F区	ST3		隅丸方形	5.5	5.5	0.1	E35-22-9他	床面積約30㎡ / 床面標高9.0m	
II E区	ST3	P1	楕円形	0.7	0.5	0.1	E35-22-15	灰黄褐色(10YR6/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P2	円形	0.5	0.4	0.1	〃	〃	
〃	〃	P3	楕円形	(0.3)	0.4	0.2	〃	〃	
〃	〃	P4	円形	0.2	0.2	0.1	〃	〃	
〃	〃	P5	〃	0.4	0.4	0.1	〃	〃	
〃	〃	P6	〃	0.4	(0.3)	0.4	〃	黒褐色(10YR3/1) 細粒砂混じりシルト	
II F区	〃	P7	楕円形	0.4	0.3	0.1	E35-22-9	灰褐色(5YR4/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	P8	〃	0.5	0.3	0.1	〃	〃	
〃	〃	P9	〃	0.5	0.4	0.4	E35-22-14他	〃	
〃	〃	P10	円形	0.5	0.5	0.1	E35-22-14	〃	
〃	〃	P11	-	0.5	(0.2)	0.1	〃	〃	
〃	〃	P12	-	0.3	(0.1)	0.1	〃	〃	
II E・F区	〃	SD1	-	9.5	0.1	0.1	E35-22-14他	灰黄褐色(10YR6/2) 細粒砂混じりシルト	
II F区	〃	SD2	-	3.4	0.2	0.1	E35-22-9他	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD3	-	1.0	0.2	0.1	E35-22-9	〃	

II D区	ST4		隅丸方形	5.8	(4.9)	0.4	E35-23-20他	床面積33.6㎡ / 床面標高8.9m	
〃	ST4	中央P1	楕円形	1.2	0.6	0.2	E35-23-25	褐灰色(10YR4/1) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	中央P2	〃	0.5	0.4	0.1	〃	〃	
〃	〃	P1	〃	0.4	0.3	0.1	E35-23-20	〃	
〃	〃	P2	〃	0.3	0.3	0.4	E35-23-25	〃	ST4-SD1と切り合い。
〃	〃	P3	円形	0.5	(0.5)	0.1	〃	〃	
〃	〃	P4	〃	0.3	0.3	0.1	〃	〃	
〃	〃	P5	〃	0.3	0.3	0.4	〃	〃	ST4-SD1と切り合い。

調査区	遺構名		平面形	長軸/ 検出長	短軸/ 幅	深さ	グリッド	埋土	備考
II D区	ST4	P7	楕円形	0.5	0.3	0.5	E35-23-25	褐灰色(10YR4/1) 細粒砂混じりシルト	ST4-SD1と切り合い。
〃	〃	P9	-	0.5	(0.1)	(0.2)	〃	〃	
〃	〃	P10	隅丸方形	0.5	0.5	-	F35-3-5	〃	
〃	〃	P11	円形	0.2	0.2	0.1	E35-23-20	〃	
〃	〃	P13	楕円形	0.3	0.2	0.3	E35-23-25	〃	ST4-SD1と切り合い。
〃	〃	P14	〃	0.3	0.2	0.4	〃	〃	〃
〃	〃	P15	〃	0.3	0.2	0.1	〃	〃	〃
〃	〃	P16	不整形	0.5	0.5	0.2	E35-23-20	黒褐色(10YR3/1) 細粒砂混じりシルト	
〃	〃	SD1	-	4.9	0.2	0.2	E35-23-25	褐灰色(10YR4/1) 細粒砂混じりシルト	ST4-P2・5・7・13～15と切り合い。
〃	〃	SD2	-	4.0	0.2	0.1	〃	〃	
〃	〃	SD3	-	1.9	0.2	0.1	〃	〃	

調査区	遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	グリッド	埋土	備考
I A区	SK1	不整形	1.4	(1.1)	0.4	E35-16-7他	褐灰色(7.5YR5/1) 細粒砂混じりシルト	
I C区	SK6	溝状	(1.4)	0.4	0.1	E34-18-25	-	
II C区	SK8	円形	0.6	0.5	0.1	F35-4-2	黒褐色(10YR3/1) 細粒砂混じりシルト	
II F区	SK9	楕円形	0.9	0.4	0.1	F35-2-17	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂混じりシルト	
II B区	SK10	不整形	(2.0)	1.4	0.6	F35-10-1他	褐灰色(7.5YR5/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	SK11	溝状	4.5	0.4	0.1	E35-24-25他	-	

調査区	遺構名	断面形	幅	検出長	深さ	グリッド	埋土	備考
I A区	SD1	皿状	4.5	50	0.1	E35-21-13他	浅黄色(2.5Y7/4)・黄灰色(2.5Y6/1) 細粒砂混じりシルト	SD2を切る。
I A・B区	SD2	レンズ状	1.5	63	0.5	E35-21-1他	黒色(10YR2/1)・褐灰色(10YR4/1) 細粒砂混じり粘土他	SD1・4-6に切られる。
I A-C区	SD3	「U」字状	0.5	73	0.3	E35-16-11他	褐灰色(10YR5/1)・黒褐色(10YR3/2) 細粒砂混じりシルト	SD7を切る。
I A区	SD4	レンズ状	0.5	31	0.2	E35-21-13他	明黄褐色(2.5Y7/6)・黒褐色(2.5Y3/1) 細粒砂混じりシルト	SD2を切る。

調査区	遺構名	断面形	幅	検出長	深さ	グリッド	埋土	備考
I A区	SD5	逆台形	1.0	50	0.3	E35-21-13他	黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘土・ 黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂混じり粘土	SD2を切る。
〃	SD6	レンズ状	1.5	47	0.2	〃	黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘土	SD2を切る。
I C区	SD7	〃	1.0	54	0.2	E34-19-11他	淡黄色(2.5Y8/4)・明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂混じりシルト他	SD3に切られる。
〃	SD8	皿状	0.8	26	0.1	E34-18-15他	黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD9	〃	0.4	11	0.1	E34-14-16他	灰黄褐色(10YR6/2)細粒砂混じりシルトと 明黄褐色(10YR7/6)細粒砂混じりシルトが混じる。	
I B区	SD10	〃	0.4	9	0.1	E34-20-1他	灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂混じりシルト	
〃	SD11	〃	0.4	9	0.1	E34-24-14他	暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂混じりシルト	
II D区	SD16	〃	0.8	13	0.1	E35-23-5他	褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD17	〃	1.7	5	0.1	F35-8-3他	〃	
II C区	SD18	レンズ状	1.5	24	0.2	F35-4-7他	黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD19	〃	0.9	12	0.2	F35-9-1他	褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD20	皿状	0.8	8	0.2	F35-4-22他	黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘土	
〃	SD21	レンズ状	(1.0)	14	0.2	F35-4-1他	黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト	
II A・B区	SD22	「U」字状	0.4	32	0.2	F35-5-24他	〃	SD32に切られる。
〃	SD23	皿状	0.4	23	0.1	F35-10-5他	黒褐色(10YR3/3)細粒砂混じりシルト	
II B区	SD24	〃	(3.7)	36	0.2	F35-5-1他	灰黄褐色(10YR6/2)細粒砂混じりシルト	
〃	SD25	レンズ状	-	50	0.4	F35-4-5他	黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD26	〃	1.9	50	0.4	F35-4-15他	黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じり粘土他	
〃	SD27	〃	0.5	41	0.3	F35-4-5他	褐灰色(7.5YR4/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD28	逆台形	0.4	36	0.1	E35-25-17他	褐灰色(10YR4/1)細粒砂混じりシルト	
〃	SD29	皿状	0.4	14	0.1	E35-25-16他	灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂混じりシルト	SX2を構成。
〃	SD30	逆台形	0.6	6	0.3	E35-25-13他	黒褐色(10YR3/1)細粒砂混じりシルト	〃
〃	SD31	皿状	0.6	1	0.1	E35-25-13	-	
II G①区	SD32	「U」字状	0.7	12	0.3	E35-25-13他	黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂混じりシルト	SX2を構成。SD22 を切る。
II G②区	SD33	レンズ状	1.4	3	0.2	E35-24-3他	-	〃

調査区	遺構名	断面形	幅	検出長	深さ	グリッド	埋土	備考
II G②区	SD34	レンズ状	(1.5)	2	0.4	E35-24-4	-	SD26の延長か。
〃	SD35	〃	0.6	2	0.3	〃	-	
II B区	SD36	〃	0.6	2	0.2	E35-24-15	-	

調査区	遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	グリッド	埋土	備考
II A区	P1	楕円形	0.5	0.2	0.06	E35-16-12	オリーブ褐色(2.5Y4/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	P2	円形	0.3	0.3	0.10	〃	黄灰色(2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト	
〃	P3	〃	0.4	0.3	0.10	E35-16-7	灰色(N4/0) 細粒砂混じりシルト	
〃	P4	〃	0.4	0.4	0.20	E35-21-1	灰褐色(7.5YR4/2) 中粒砂混じりシルト	
〃	P5	楕円形	0.4	0.3	0.10	〃	〃	
〃	P6	〃	0.3	0.2	0.30	E35-21-2	〃	
II E区	P29	円形	0.3	0.3	0.29	E35-22-10	黒褐色(10YR3/1) 細粒砂混じりシルト	
〃	P30	〃	0.3	0.2	0.19	E35-22-15	〃	
〃	P31	〃	0.3	0.3	0.25	〃	〃	
II C区	P33	〃	0.5	0.4	0.08	F35-4-2	〃	
II A区	P34	〃	0.2	0.2	0.09	F35-10-10	〃	
II F区	P35	楕円形	0.6	0.5	0.29	E35-22-17	にぶい黄橙色(10YR6/3) 細粒砂混じりシルト	
II B区	P36	〃	0.9	0.5	0.24	E35-25-21	褐灰色(10YR5/1) 細粒砂	SX2を構成, SD29内ビット。
〃	P37	円形	0.3	0.3	0.12	E35-25-16 他	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じり粘土	
〃	P38	楕円形	0.6	0.4	0.17	E35-25-16	〃	
〃	P39	円形	0.3	0.3	0.15	E35-25-17	〃	
〃	P40	楕円形	0.7	0.4	0.17	〃	〃	
〃	P41	〃	0.9	0.4	0.11	〃	〃	
〃	P42	〃	0.4	0.3	0.10	〃	〃	
〃	P43	〃	0.4	0.2	0.15	E35-25-12	〃	

調査区	遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	グリッド	埋土	備考
II B区	P44	円形	0.3	0.2	0.12	E35-25-12	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じり粘土	
〃	P45	〃	0.2	0.2	0.02	〃	〃	
〃	P46	〃	0.4	0.3	0.15	〃	〃	
〃	P47	〃	0.2	0.2	0.20	〃	-	SX2を構成、SD30内ビット。
〃	P48	楕円形	0.5	0.3	0.08	E35-25-21	褐灰色(10YR5/1)細粒砂	SX2を構成、SD29内ビット。
〃	P49	〃	0.8	0.6	0.23	E35-25-16	〃	〃
〃	P50	不整形	1.2	0.3	0.19	〃	〃	〃
〃	P51	楕円形	0.5	0.2	0.14	E35-25-11他	〃	〃
〃	P52	〃	0.7	0.5	0.29	E35-25-11	〃	〃
〃	P53	〃	0.7	0.4	0.14	〃	〃	〃
〃	P54	〃	0.8	0.5	0.24	〃	〃	〃
〃	P55	〃	1.2	0.7	0.06	E35-25-6他	〃	〃
〃	P56	〃	1.5	0.6	0.12	〃	〃	〃
〃	P57	方形	0.6	0.5	0.19	E35-25-16	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じり粘土	
〃	P58	楕円形	0.7	0.4	0.18	E35-25-13	〃	SX2を構成、SD30内ビット。
〃	P59	円形	0.4	0.3	0.07	E35-25-18	〃	〃
〃	P60	楕円形	0.3	0.1	0.43	E35-25-12	〃	〃
〃	P61	円形	0.2	0.2	0.37	〃	黒色(10YR2/1)粘土	〃
〃	P62	〃	0.5	0.4	0.16	F35-5-7	-	
〃	P63	楕円形	0.7	0.6	0.15	F35-5-2他	-	
〃	P64	〃	0.7	0.5	0.19	E35-24-25	黒褐色(10YR3/2) 細粒砂混じりシルト	
〃	P65	円形	0.4	0.3	0.09	F35-5-2	-	
〃	P66	〃	0.3	0.3	0.11	E35-25-17	-	
II G㊦区	P67	〃	0.3	0.3	0.14	E35-17-22	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	P68	〃	0.2	0.2	0.10	E35-17-23	〃	

調査区	遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	グリッド	埋土	備考
II G⑤区	P69	円形	0.2	0.2	0.07	E35-17-17	褐色(7.5YR4/3) 細粒砂混じりシルト	
〃	P70	〃	0.2	0.2	0.07	E35-17-18	〃	
〃	P71	〃	0.3	0.3	0.16	〃	〃	
II G②区	P72	長楕円形	0.7	0.3	0.07	E35-24-3	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じり粘土	SX2を構成, SD33内ピット。
〃	P73	楕円形	0.8	0.5	0.14	〃	〃	〃
II G①区	P74	〃	0.5	0.4	0.12	E35-25-8	〃	
〃	P75	〃	0.4	0.3	0.15	E35-25-13	褐灰色(10YR5/1)細粒砂	SX2を構成, SD33内ピット。
〃	P76	不整形	0.5	0.4	0.19	E35-25-14	〃	〃
〃	P77	楕円形か	(0.5)	0.4	0.25	E35-25-12	〃	〃
〃	P78	不整形	0.5	0.5	0.15	E35-25-13	〃	〃
〃	P79	楕円形	0.5	0.3	0.17	〃	〃	〃
〃	P80	楕円形か	0.5	(0.3)	0.11	〃	〃	〃
〃	P81	〃	(6.4)	(0.9)	0.45	E35-25-14	〃	〃
〃	P82	不整形	0.6	0.6	0.34	E35-25-13	〃	〃
〃	P83	楕円形	0.4	0.4	0.11	E35-25-12	〃	〃
〃	P84	円形	0.3	0.3	0.14	E35-25-13	〃	〃
〃	P85	不整形	0.3	0.2	0.04	E35-25-7	〃	
〃	P86	〃	0.4	0.3	0.16	〃	褐灰色(7.5YR4/1) 細粒砂混じり粘土	
II G②区	P87	楕円形	1.0	0.6	0.22	E35-24-3	〃	SX2を構成, SD33内ピット。
〃	P88	長楕円形	1.0	0.4	0.19	〃	〃	〃
〃	P89	楕円形	0.9	0.5	0.17	〃	〃	〃
〃	P90	〃	0.9	0.4	0.19	E35-24-3他	〃	〃
〃	P91	長楕円形	0.9	0.3	0.13	E35-24-4	褐灰色(10YR5/1)細粒砂	〃
〃	P92	不整形	0.6	0.5	0.24	〃	-	〃
〃	P93	長楕円形	1.3	0.5	0.22	〃	-	〃

調査区	遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	グリッド	埋土	備考
II G②区	P94	長楕円形	1.0	0.4	0.26	E35-24-4	褐灰色(10YR5/1)細粒砂	SX2を構成、SD33ビット。
〃	P95	〃	1.6	0.7	0.10	〃	〃	〃
〃	P96	楕円形か	(0.6)	(0.3)	0.12	〃	〃	〃

調査区	遺構名	平面形	長軸	短軸	深さ	グリッド	埋土	備考
I A区	SX1	不整形	3.2	0.6	0.03	E35-16-7他	黄灰色(2.5Y5/1) 細粒砂混じりシルト	
II B・C区・ II G①・②区	SX2	〃	30.0	17.0	0.48	E35-25-11他	暗灰色(N3/0)粘土他	
II C区	SX3	溝状	6.4	4.0	0.40	F35-4-16他	褐灰色(10YR4/1) 細粒砂混じりシルト	
II G③区	SX4	〃	(1.0)	0.4	0.05	E35-18-25	-	
II G④区	SX5	不整形	1.8	(0.9)	0.14	E35-25-8	-	

凡例

器種：以下のように略記した。

弥生	弥生土器
ミニ	ミニチュア土器
土師	土師器
土質	土師質土器
須恵	須恵器
庄内	庄内式土器
東四国系	東四国系土器
手づくね	手づくね土器

器形：以下のように略記した。

複合	複合口縁壺
口縁	口縁部

法量：単位はcm, gである。

()内は復元値

色調：標準土色帖を使用した。

胎土：最大粒径(mm)と砂粒の含有量で表し、

以下のように略記した。

角	角閃石
雲	雲母片

調整：ハケ ハケメ調整を施す。

特徴：黒斑

被熱	黒斑有り。 被熱変色有り。
キレツ	器面に亀裂が認められる。
スス	ススが付着している。
おこげ	おこげが付着している。
赤色顔料	赤色顔料が付着している。
自然釉	自然釉が付着している。
ヘラ	ヘラ切り
赤彩	赤色塗彩

文様名の文は省略した。

スタンプ文
押捺突帯文
突帯文
刻目文
櫛描文
波状文
斜格子文

「/」で併記した。

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図9	1	ST1・2	E35-23-2・7 検出面	弥生	壺	-	-	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	褐灰色 10YR5/1	2/少	ナデ	ナデ	波状/円形 浮文
〃	2	ST1-P7	E35-23-1	〃	〃	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	褐灰色 10YR5/1	3/少	ハケ	ナデ	刻目
〃	3	ST1-P14	〃	〃	甕	(11.2)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	淡赤橙色 2.5YR7/4	黄灰色 2.5Y4/1	5/ やや多	叩き	ナデ	被熱
〃	4	ST1・2	E35-23-2・7 上面	〃	底部	-	-	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	3/少	ナデか	ナデ	摩耗
〃	5	ST2- 中央P	上層	〃	鉢	-	-	-	にぶい黄色 2.5Y6/3	にぶい黄橙色 10YR7/4	灰色 7.5Y4/1	3/少	不明	不明	〃
図10	7	ST3	-	〃	甕	(14.0)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	にぶい橙色 7.5YR6/4	褐灰色 10YR4/1	4/ やや多	叩き	ナデ	
〃	8	ST3-P1	E35-22-15・P1 ・上層/最下層	〃	底部	-	-	-	灰黄褐色 10YR4/2	灰黄褐色 10YR6/2	灰白色 2.5Y7/1	4/少	叩き後 ナデ	ミガキ・ ナデ	スス
〃	9	ST3-P10	-	ミニ	-	1.8	1.7	-	黄灰色 2.5Y6/1	灰黄色 2.5Y7/2	-	2/少	手づくね	手づくね	完形
図13	11	ST4- 中央P1	No.10/ E35-23-25	弥生	壺	(17.8)	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	橙色 7.5YR7/6	灰色 5Y4/1	5/ やや多	不明	不明	摩耗
〃	12	ST4	下層	〃	〃	(15.0)	-	-	灰白色 10YR8/2	浅黄色 2.5Y7/3	灰色 5Y4/1	5/ やや多	ハケ	ナデ・ ハケ	
〃	13	ST4/SD18	F35-4-2/E35- 23-25・下層	〃	複合	(19.8)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰色 N4/0	2/少	ミガキ	ナデ・ ハケ	スス
〃	14	ST4	No.4/E35-23- 25・最下層	〃	甕	(16.2)	-	-	褐灰色 10YR6/1	灰黄褐色 10YR6/2	褐灰色 10YR4/1	3/少	叩き	ナデ	〃
〃	15	〃	No.1/No.2/E35- 23-25・下層	〃	〃	(12.6)	26.3	3.0	淡黄色 2.5Y8/3	浅黄色 2.5Y7/4	灰白色 2.5Y7/1	5/少	叩き後 ハケ	ハケ・ ナデ	キレット/ス ス/おこげ
〃	16	〃	E35-23-25・ 下層	〃	〃	-	-	-	黒色 10YR2/1	にぶい黄橙色 10YR7/4	黒色 10YR2/1	5/少	ハケ	ハケ	被熱/スス
〃	17	〃	E35-23-25/No.6	〃	壺	-	-	(10.5)	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	灰色 N5/0	3/少	ハケ	ナデ	
〃	18	ST4- 中央P1	No.5/ E35-23-25	〃	鉢	13.6	6.4	3.8	浅黄色 2.5Y7/4	浅黄色 2.5Y7/4	浅黄色 2.5Y7/4	3/少	叩き後 ナデ	ハケ・ ナデ	スス
〃	19	ST4	E35-23-25・ 下層	〃	〃	(12.2)	7.1	(3.2)	灰黄褐色 10YR6/2	暗灰黄色 2.5Y5/2	にぶい黄褐色 10YR7/3	5/ やや多	ナデ	ハケ	〃
〃	20	〃	No.3/E35-23- 20・最下層	〃	〃	(14.1)	6.5	-	にぶい黄褐色 10YR7/2	浅黄褐色 10YR8/3	暗灰色 N3/0	3/少	ナデ	ナデ・ ハケ	黒斑
〃	21	〃	E35-23-25・ 下層	〃	〃	(14.0)	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	3/少	叩き後 ナデ	ハケ	スス/赤色 顔料
〃	22	ST4- 中央P1	No.11	〃	〃	11.6	5.7	-	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	褐灰色 10YR4/1	4/少	ハケ後 ナデ	ハケ	スス
〃	23	〃	E35-23-25	〃	〃	11.6	8.4	3.9	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	灰黄色 2.5Y6/2	5/ やや多	ハケ・ ナデ	ナデ・ ハケ	歪む/スス
〃	24	ST4	No.1/E35-23- 25・下層	〃	〃	9.5	7.6	-	橙色 7.5YR6/6	褐灰色 7.5YR4/1	にぶい黄褐色 10YR7/4	5/少	ナデ・ ミガキ	ナデ・ ミガキ	スス 赤色顔料
〃	25	〃	F35-3-5・ 中層	〃	〃	(11.1)	-	-	にぶい褐色 7.5YR7/4	褐灰色 7.5YR4/1	明黄褐色 10YR6/6	3/少	ミガキ	ミガキ	〃
図14	29	SK1	-	陶磁 器	碗	(8.0)	-	-	灰白色 10Y7/1	灰白色 10Y7/1	灰白色 10Y8/1	精良	-	-	雨降り文
図15	30	SK8	F35-4-2	弥生	鉢	17.3	6.1	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	黒褐色 2.5Y3/1	4/ やや多	叩き後 ナデ	ハケ	黒斑

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図16	31	SK9	-	弥生	甕	19.2	-	-	褐灰色 10YR5/1	にぶい黄橙色 10YR6/3	褐灰色 10YR5/1	2/多	ナデ	ナデ	刻目/櫛描/ 浮文/スス
図17	32	SD1	E35-21-13・ 上層	瓦器	椀	-	-	-	灰色 7.5Y4/1	灰色 7.5Y4/1	灰黄色 2.5Y7/2	1/極少	ナデ	不明	摩耗
〃	33	〃	F35-1-3	土師	杯	-	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	精良	回転ナデ	回転ナデ	
〃	34	〃	E35-21-23	須恵	口縁 (9.7)	-	-	-	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	精良	回転ナデ	回転ナデ	
〃	35	SD1/SD6	E35-21-4・上層	〃	杯	-	-	(9.0)	灰色 N6/0	灰色 N5/0	赤灰色 7.5R6/1	2/極少	回転ナデ	回転ナデ	
〃	38	SD5	F35-1-3	土師	〃	-	-	-	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	精良	不明	不明	摩耗
〃	39	〃	E35-21-4	土質	皿	-	-	(8.0)	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	黄灰色 2.5Y6/1	精良	不明	不明	〃
〃	40	〃	F35-1-7	土師	杯	-	-	(7.5)	浅黄橙色 10YR8/3	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	1/極少	不明	不明	〃
〃	41	〃	E35-16-14	須恵	〃	13.2	3.5	(7.9)	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	3/極少	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ/やや 歪む
〃	42	〃	No1	〃	〃	(13.2)	4.4	8.4	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	にぶい黄橙色 10YR6/3	2/極少	回転ナデ	回転ナデ	焼成不良
〃	43	〃	E35-21-18/ E35-16-19	弥生	甕	(14.8)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	3/少	叩き	ハケ・ ナデ	
〃	45	SD6	F35-1-12	土質	杯	(14.0)	3.4	(7.2)	橙色 7.5YR7/6	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	精良	回転ナデ	回転ナデ	
図19	46	SD2	E35-16-20	弥生	壺	(17.0)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	浅黄色 2.5Y7/3	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	ナデ・ ハケ	ナデ・ ハケ	
〃	47	〃	-	〃	〃	(13.6)	-	-	浅黄橙色 7.5YR8/4	浅黄橙色 10YR8/4	灰色 N4/0	4/少	叩き後 ハケ	ハケ・ ナデ	
〃	48	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	〃	(14.5)	-	-	橙色 5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	灰色 N4/0	3/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	
〃	49	〃	E35-16-19	〃	〃	(13.0)	-	-	灰黄色 2.5Y6/2	にぶい黄橙色 10YR7/3	黄灰色 2.5Y4/1	4/少	叩き後ハ ケ・ナデ	ハケ・ ナデ	黒斑
〃	50	〃	E35-16-23・ 上層	〃	〃	(15.6)	-	-	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	5/ やや多	ハケ	ナデ	
〃	51	〃	E35-16-19	〃	〃	(16.7)	-	-	灰白色 2.5Y8/2	灰黄色 2.5Y7/2	灰色 N6/0	4/少	ハケ	ナデ	
〃	52	〃	No7/最下層	〃	〃	(17.3)	-	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	暗灰色 N3/0	3/少	叩き後ナ デ・ハケ	ナデ	
〃	53	〃	E34-25-10	〃	〃	(16.7)	-	-	にぶい褐色 7.5YR5/3	橙色 5YR6/6	灰色 N6/0	4/ やや多	ナデ・ ハケ	ナデ	
〃	54	〃	F34-4-9	〃	〃	(17.8)	-	-	黒色 5Y2/1	浅黄橙色 10YR8/4	黒色 5Y2/1	4/少	叩き後 ハケ	ナデ	やや摩耗
〃	55	〃	E35-16-23	〃	〃	(17.0)	-	-	黄褐色 2.5Y5/3	黄褐色 2.5Y5/3	黒褐色 2.5Y3/1	3/少	ナデ	ナデ・ ハケ	摩耗
〃	56	〃	E35-16-20・ 最下層	〃	〃	(19.4)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	3/少	ハケ	ナデ	
〃	57	〃	最下層	〃	〃	(18.4)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	ナデ・ ミガキ	ナデ・ ミガキ	浮文/波状/ 突帯/刻目
〃	58	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	〃	-	-	-	橙色 2.5YR6/8	橙色 5YR7/8	灰色 5Y4/1	4/ やや多	ナデ	ナデ	波状

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図19	59	SD2	E35-16-19/ E35-16-20	弥生	壺	(26.0)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	褐灰色 10YR4/1	3/少	ハケ	ハケ	斜格子
〃	60	〃	E35-16-23・ 上層	〃	〃	(24.0)	-	-	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	褐灰色 7.5YR5/1	3/少	ミガキ	ミガキ	波状
〃	61	〃	E35-16-19	〃	〃	(16.0)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	3/少	ナデ	ナデ	
〃	62	〃	-	〃	〃	(11.6)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	3/ やや多	ハケ	ナデ	
〃	63	〃	中層	〃	複合	(15.8)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y5/1	4/少	ナデ・ ハケ	ナデ	被熱
〃	64	〃	E34-25-10	〃	〃	(16.0)	-	-	黄灰色 2.5Y5/1	にぶい黄橙色 10YR7/3	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	ナデ	ナデ・ ハケ	
〃	65	〃	上層	〃	〃	(14.4)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	灰色 5Y5/1	2/少	ナデ	ナデ	
〃	66	〃	-	〃	〃	(14.2)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	灰黄色 2.5Y6/2	4/少	ハケ・ ナデか	ナデ	
〃	67	〃	最下層	〃	〃	(14.0)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	灰色 N5/0	4/少	叩き後ハ ケ・ナデ	ハケ・ ナデ	押捺突帯
〃	68	〃	F34-4-5・ 最下層	〃	〃	(16.0)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	ハケ・ ナデ	ハケ・ ナデ	
〃	69	〃	F34-4-9・ 最下層	〃	〃	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	黒褐色 2.5Y3/1	5/ やや少	叩き後 ハケ	ハケ	
〃	70	〃	E35-21-1・2/ I B区上層 他	〃	〃	(17.0)	-	(13.0)	灰色 5Y6/1	明赤褐色 2.5YR5/6	黄灰色 2.5Y6/1	6/少	叩き後ハ ケ・ミガキ	ナデ	黒斑/剥離/ 摩耗
〃	71	〃	E35-21-1・2・ 最下層 他	〃	〃	(18.4)	-	-	灰白色 10YR8/2	にぶい黄橙色 10YR7/4	灰色 5Y4/1	6/ やや多	ハケ	ハケ	突帯/竹管 文
図20	72	〃	E35-16-18・23 No.19	〃	甕	(12.9)	16.6	2.5	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄橙色 10YR8/6	灰色 5Y6/1	5/多	叩き	ハケ・ ナデ	摩耗
〃	73	〃	最下層 No.10/ E35-16-19	〃	〃	(13.1)	(19.7)	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	3/少	叩き	ナデ	黒斑
〃	74	〃	E35-16-19	〃	〃	(14.7)	24.7	-	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	黄灰色 2.5Y4/1	8/少	叩き後 ハケ	ハケ・ ナデ	〃
〃	75	〃	E35-16-20	〃	〃	(13.4)	-	-	灰黄色 2.5Y6/2	浅黄色 2.5Y7/4	灰黄色 2.5Y6/2	4/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	スス
〃	76	〃	F34-4-5・ 最下層	〃	〃	(14.0)	-	-	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい橙色 10YR7/3	黒褐色 10YR3/1	4/ やや多	叩き後 ナデ	ハケ	黒斑
〃	77	〃	-	〃	〃	(12.5)	-	-	橙色 5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR5/3	褐灰色 10YR5/1	4/少	叩き	ハケ・ ナデ	スス
〃	78	〃	E35-16-20	〃	〃	(13.3)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	橙色 7.5YR6/6	3/少	叩き後 ハケ	ハケ	〃
〃	79	〃	-	〃	〃	(19.2)	-	-	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/2	3/ やや多	叩き	ハケ・ ナデ	
〃	80	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	〃	(13.9)	-	-	橙色 5YR6/6	にぶい橙色 5YR6/4	黄灰色 2.5Y5/1	2/少	叩き	ナデ・ ハケ	
〃	81	〃	中層	〃	〃	(14.6)	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	黄灰色 2.5Y4/1	4/少	叩き後 ナデ	ハケ・ ナデ	スス
〃	82	〃	最下層	〃	〃	(14.0)	-	-	灰黄褐色 10YR5/2	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	3/ やや多・ 少	ナデ	ナデ	
〃	83	〃	E35-16-19・最 下層 他	〃	〃	(26.0)	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	黄灰色 2.5Y5/1	3/少	叩き後 ハケ	ハケ・ ナデ	

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図20	84	SD2	E35-21-1・2・ 最下層	弥生	甕	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y4/1	3/ やや多	叩き後 ハケ	ナデ・ ハケ	黒斑
〃	85	〃	E35-21-1・2・ 最下層 他	〃	〃	-	-	(9.2)	浅黄橙色 7.5YR8/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	褐灰色 7.5YR4/1	4/ 少	叩き後 ハケ	ハケ・ ナデ	
図21	86	〃	No.6/ 最下層	〃	〃	(10.6)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	3/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	87	〃	E35-16-19	〃	〃	(11.2)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	灰色 5Y4/1	3/ 少	叩き後 ナデ	ハケ・ ナデ	黒斑
〃	88	〃	-	〃	〃	(11.0)	-	-	赤色 10R5/6	赤橙色 10R6/8	赤色 10R5/6	3/ 少	叩き後 ナデ	ナデ	被熱/黒斑
〃	89	〃	E34-25-10	庄内	〃	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/3	灰黄褐色 10YR5/2	浅黄褐色 10YR8/3	2/ 少・ 雲/少	ナデ	ナデ	スス/搬入 品
〃	90	〃	-	弥生	〃	-	-	-	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	1/ 少	ナデ	ハケ・ ナデ	〃
〃	91	〃	E35-16-23・ 中層	庄内	〃	-	-	-	暗灰黄色 2.5Y5/2	暗灰黄色 2.5Y5/2	暗灰黄色 2.5Y5/2	2/ 多・ 角/多	ナデ	ハケ	搬入品
〃	92	〃	E35-21-1・2・ 最下層	弥生	〃	-	-	-	橙色 2.5YR6/6	浅黄褐色 10YR8/3	橙色 2.5YR6/6	3/ 少	ナデ	ナデ	庄内式甕, 模倣
〃	93	〃	F34-4-9・ 最下層	庄内	〃	(15.8)	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	黒褐色 10YR3/1	にぶい黄褐色 10YR5/3	2/ 多・ 角/多	ナデ	ナデ	搬入品
〃	94	〃	E35-16-23・ 中層	土師	〃	13.3	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	黒褐色 10YR3/1	にぶい黄褐色 10YR7/4	1/ 少	ナデ	ナデ・ ハケ	スス 搬入品
〃	95	〃	-	庄内	〃	(13.4)	-	-	黒褐色 7.5YR3/2	黒色 7.5YR2/1	にぶい黄褐色 10YR6/4	6/ 少	ナデ	ナデ	搬入品
〃	96	〃	-	〃	〃	(16.0)	-	-	オリーブ黒色 5Y3/1	黒褐色 10YR3/1	灰オリーブ色 5Y6/2	2/ 多・ 角/少	ナデ・ 叩き	ナデ・ ケズリ	〃
〃	97	〃	F34-4-10・ 最下層	〃	〃	(15.0)	-	-	にぶい黄褐色 10YR4/3	にぶい黄褐色 10YR4/3	にぶい黄褐色 10YR6/4	3/ 多・ 角/多	ナデ・ 叩き	ナデ・ ケズリ	〃
〃	98	〃	-	〃	〃	(18.3)	-	-	灰黄褐色 10YR4/2	灰黄褐色 10YR4/2	灰黄褐色 10YR4/2	3/ 多・ 角/多	ナデ・ 叩き	ナデ・ ケズリ	〃
〃	99	〃	E35-16-18	〃	〃	(16.2)	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	黒褐色 10YR3/2	黒褐色 10YR3/2	5/ 少・ 角/少	ナデ	ナデ	〃
〃	100	〃	E35-21-1・下層	弥生	〃	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR5/3	黄灰色 2.5Y4/1	2/ 少・角 /極少	ナデ・ 叩き	ナデ・ ケズリ	スス/ 搬入品
〃	101	〃	中層	庄内	〃	-	-	-	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	3/ 多・ 角/多	叩き・ ナデ	ナデ・ ケズリ	搬入品
〃	102	〃	I A区最下層 / I B区中層他	〃	〃	-	-	-	灰黄褐色 10YR5/2	黒褐色 10YR3/1	灰黄褐色 10YR5/2	5/ 多・ 角/多	叩き後 ハケ	ケズリ	〃
〃	103	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	〃	-	-	-	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/2	灰黄褐色 10YR4/2	5/ 少・ 角/少	ハケ	ケズリ	〃
〃	104	〃	中層	東四 国系	〃	(11.8)	-	-	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	3/ 少	ナデ	ナデ	〃
〃	105	〃	E35-21-2 /E35- 21-1	〃	〃	(14.8)	-	-	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR6/4	黄灰色 2.5Y6/1	5/ 少	ナデ・ ハケ	ナデ	〃
図22	106	〃	E35-21-1・2・ 最下層 他	弥生	鉢	9.2	2.5	-	橙色 2.5YR6/6	オリーブ黒色 7.5Y3/1	オリーブ黒色 7.5Y3/1	4/ 少	手づくね	手づくね	黒斑
〃	107	〃	最下層	〃	〃	(13.0)	7.5	3.8	淡黄色 2.5Y7/4	淡黄色 2.5Y7/4	淡黄色 2.5Y7/4	4/ 少	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	108	〃	No.17/ E35-21-2	〃	〃	13.0	6.1	2.8	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	黄灰色 2.5Y4/1	4/ 少	叩き後 ナデ	ハケ	スス

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図22	109	SD2	E34-25-23・最下層 /E34-25-21	弥生	鉢	12.5	7.0	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	黒褐色 2.5Y3/1	4/少	叩き後 ナデ	ハケ・ ナデ	黒斑
〃	110	〃	E35-16-18 No.20	〃	〃	(14.4)	7.5	2.6	橙色 5YR6/6	浅黄橙色 7.5YR8/6	橙色 5YR7/6	5/少	叩き後 ナデ	不明	摩耗
〃	111	〃	-	〃	〃	(15.2)	-	5.8	橙色 7.5YR7/6	にぶい黄橙色 10YR7/3	浅黄橙色 10YR8/3	4/少	叩き後 ナデ	ハケ・ ナデ	歪む
〃	112	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	〃	(16.2)	6.9	-	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/8	橙色 5YR7/6	4/少	叩き後 ナデ	ナデか	摩耗
〃	113	〃	最下層	〃	〃	(14.0)	-	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	2/少	ナデ	ハケ	
〃	114	〃	〃	〃	〃	(18.0)	-	-	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	暗灰色 N3/0	2/少	ナデ	ハケ・ ナデ	摩耗
〃	115	〃	E34-25-10/E34-25- 23・最下層 他	〃	〃	(19.8)	7.1	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	暗灰色 N3/0	5/ やや多	ナデ	ハケ	黒斑
〃	116	〃	E35-16-15	〃	〃	(18.7)	7.3	3.0	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	褐灰色 10YR4/1	3/少	叩き後 ナデ	ハケ	
〃	117	〃	No.12/最下層	〃	〃	(18.0)	9.1	4.8	にぶい黄橙色 10YR7/4	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄橙色 10YR8/3	3/少	叩き後 ナデ	ミガキ	
〃	118	〃	E35-21-1・2・最下層/ E34-25-10・下層	〃	〃	(21.0)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	黄灰色 2.5Y6/1	4/少	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	119	〃	E35-16-19	〃	〃	(26.0)	-	-	浅黄橙色 10YR8/4	橙色 7.5YR7/6	にぶい黄橙色 10YR7/2	3/少	ナデ	ハケ	黒斑
図23	120	〃	1A区・E35-16-23・上 層/1B区最下層	〃	甑	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR6/4	明赤褐色 5YR5/6	黒色 5Y2/1	4/少	叩き後 ナデ	ハケ	焼成前穿孔
〃	121	〃	-	〃	〃	-	-	3.9	淡黄色 2.5Y8/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	暗灰色 N3/0	3/少	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	〃
〃	122	〃	-	〃	〃	-	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	オリーブ黒色 7.5Y3/1	4/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ	焼成前穿孔/ 黒斑
〃	123	〃	最下層	〃	高杯	-	-	-	淡黄色 2.5Y8/3	淡黄色 2.5Y8/3	黄灰色 2.5Y5/1	2/少	ミガキ	ナデ	焼成前穿孔
〃	124	〃	-	〃	脚部	-	-	(8.6)	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	不明	不明	摩耗
〃	125	〃	No.8/最下層	〃	〃	-	-	6.8	にぶい橙色 7.5YR7/4	灰色 5Y4/1	浅黄橙色 10YR8/3	6/少	ナデ	ナデ	〃
〃	126	〃	-	〃	〃	-	-	(8.3)	灰白色 10YR8/2	橙色 5YR6/6	灰色 N5/0	3/少	ナデ	ナデ・ ハケ	〃
〃	127	〃	最下層	手づ くね	-	(7.0)	2.7	-	灰白色 5Y7/2	灰白色 5Y7/2	灰色 5Y4/1	5/少	手づくね	手づくね	
〃	128	〃	中層	〃	-	5.2	4.3	-	灰白色 10YR8/1	灰白色 10YR8/1	-	7/少	叩き後 ナデ	ナデ	黒斑
〃	129	〃	E35-16-15	〃	-	(6.4)	-	-	黄灰色 2.5Y6/1	黄灰色 2.5Y6/1	灰色 5Y4/1	3/少	手づくね	手づくね	
〃	130	〃	F344-13・ 最下層	〃	-	(5.5)	4.6	-	橙色 7.5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	3/少	手づくね	手づくね	黒斑
〃	131	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	-	-	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	淡黄色 2.5Y8/3	黄灰色 2.5Y5/1	5/少	叩き後 ナデ	ナデ	〃
〃	132	〃	E35-16-19No.24	ミニ	-	3.8	2.7	-	灰黄色 2.5Y6/2	灰黄色 2.5Y6/2	-	3/少	手づくね	手づくね	完形
図24	133	〃	中層	弥生	支脚	-	16.8	(7.8)	暗灰色 N3/0	橙色 7.5YR7/6	黄灰色 2.5Y6/1	4/少	手づくね	手づくね	被熱/スス

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図24	134	SD2	E35-21-1・2・ 最下層/中層	弥生	支脚	-	13.9	-	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい黄橙色 10YR7/2	灰色 N4/0	6/少	手づくね	手づくね	被熱/スス
〃	135	〃	No.23/ E35-16-18	〃	〃	-	14.4	(8.0)	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰色 N4/0	4/ やや多	手づくね	手づくね	被熱
〃	136	〃	E35-21-1・2・最下 層/E34-25-18 他	〃	〃	-	13.4	8.7	にぶい黄橙色 10YR7/3	橙色 2.5YR6/6	黄灰色 2.5Y6/1	3/少	手づくね	手づくね	摩耗
〃	137	〃	E34-25-21・ 最下層	〃	〃	-	-	(7.1)	淡黄色 2.5Y7/3	にぶい黄橙色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y5/1	4/少	手づくね	手づくね	黒斑/スス
〃	138	〃	E35-16-19 No.22	〃	〃	-	-	6.6	にぶい黄褐色 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/3	灰色 N4/0	4/少	手づくね	手づくね	スス
〃	139	〃	F34-4-10・下層	〃	〃	-	-	-	橙色 5YR6/6	浅黄褐色 10YR8/4	灰色 N5/0	3/少	手づくね	手づくね	
〃	140	〃	最下層	〃	〃	-	-	(8.4)	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	4/少	手づくね	手づくね	被熱
〃	141	〃	E35-21-1・2・ 最下層	〃	〃	-	-	7.1	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰白色 10YR7/1	灰色 N5/0	5/少	手づくね	手づくね	黒斑
〃	142	〃	F34-4-8・下層	〃	〃	-	-	7.7	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	暗灰色 N3/0	3/少	叩き・ ナデ	手づくね	摩耗
〃	143	〃	No.4/最下層	〃	〃	5.2	7.7	(7.4)	橙色 7.5YR6/6	にぶい黄褐色 10YR7/2	橙色 5YR7/6	4/ やや多	手づくね	手づくね	被熱
〃	144	〃	最下層	〃	〃	(8.2)	5.5	(7.4)	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y6/1	4/少	ナデ	-	〃
〃	145	〃	〃	〃	〃	-	-	(7.7)	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	黄灰色 2.5Y6/1	3/ やや多	ナデ	-	摩耗
図28	155	〃	F34-4-3・上層	須恵	杯身	(9.1)	3.2	(7.0)	灰色 5Y6/1	灰色 5Y6/1	赤灰色 2.5YR6/1	3/少	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ
〃	156	〃	〃	土師	杯か 椀	-	-	-	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/4	1/極少	不明	不明	摩耗
図30	157	SD7	E34-23-19/ E34-23-24	〃	小皿	(6.6)	0.7	(5.3)	橙色 5YR6/6	明赤褐色 2.5YR5/6	橙色 5YR6/6	精良	-	-	ヘラ/赤彩
図32	158	SD14	F35-2-25	青磁	碗	-	-	-	オリーブ灰色 10Y5/2	オリーブ灰色 10Y5/2	灰色 10Y6/1	3/極少	-	-	鍋蓮弁文
図33	159	SD16	E35-23-10	弥生	壺	(16.4)	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	灰黄褐色 10YR5/2	褐灰色 10YR6/1	6/少	ハケ	ナデ	
〃	160	〃	E35-23-5	〃	〃	(23.6)	-	-	浅黄褐色 10YR8/3	浅黄褐色 10YR8/3	灰色 5Y5/1	4/少	ハケ	ハケ	
〃	161	〃	E35-23-10	〃	〃	(22.2)	-	-	橙色 5YR7/6	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰色 5Y4/1	2/少	ハケ	ハケ	斜格子
〃	162	〃	〃	〃	甕	(11.3)	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/4	灰色 7.5Y4/1	4/少	叩き後 ハケ	ナデ・ ハケ	スス
〃	163	〃	E35-23-9	庄内	〃	(15.7)	-	-	褐灰色 7.5YR4/1	黒褐色 10YR3/1	にぶい黄褐色 10YR6/4	5/少・ 角/少	叩き・ ナデ	ナデ・ ケズリ	スス/搬入 品
〃	164	〃	E35-23-10	弥生	甕	(14.4)	12.7	(2.8)	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	3/少	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	黒斑
図34	165	SD17	F35-8-3・上層	〃	支脚	-	-	(8.0)	灰白色 2.5Y8/2	淡黄色 2.5Y8/3	灰色 N4/0	3/少	手づくね	手づくね	〃
図36	166	SD18	F35-4-2	〃	壺	(15.4)	-	-	橙色 7.5YR7/6	橙色 5YR7/6	浅黄褐色 7.5YR8/6	2/少	ハケ	不明	摩耗
〃	167	〃	E35-24-22	〃	〃	(20.4)	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	黄灰色 2.5Y4/1	6/少	ナデ・ ハケ	ナデ・ ハケ	

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図36	168	SD18	F35-4-2	弥生	壺	-	-	-	灰白色 10YR8/2	浅黄橙色 10YR8/3	褐灰色 10YR5/1	4/少	ハケ	ナデ	
〃	169	〃	E35-24-22	〃	〃	-	-	-	灰色 N4/0	にぶい橙色 7.5YR7/4	灰色 N4/0	3/少	ナデ	ナデ	
〃	170	〃	〃	〃	〃	-	-	-	灰白色 7.5YR8/2	浅黄橙色 7.5YR8/4	褐灰色 7.5YR5/1	2/少	ナデ	ナデ	刻目/摩耗
〃	171	〃	F35-4-12	〃	甕	12.1	20.9	3.3	黒色 7.5Y2/1	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/4	5/多	叩き後 ハケ	ハケ	黒斑/摩耗
〃	172	〃	F35-4-12 No.2	〃	〃	13.7	22.4	-	にぶい黄橙色 10YR6/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	褐灰色 10YR4/1	4/ やや多	叩き後 ハケ	ナデ・ ハケ	被熱/スス
〃	173	〃	F35-4-12	〃	〃	-	-	-	暗灰色 N3/0	にぶい橙色 7.5YR6/4	暗灰色 N3/0	4/ やや多	叩き後 ハケ	ナデ	〃
〃	174	〃	〃	〃	〃	-	-	3.4	浅黄色 2.5Y8/3	浅黄色 2.5Y8/3	灰白色 2.5Y7/1	3/少	叩き後 ハケ	ナデ	黒斑/スス
〃	175	〃	F35-4-2	庄内	〃	-	-	-	灰黄褐色 10YR4/2	黒色 10YR2/1	黒褐色 10YR3/1	1/少・角 /やや多	ナデ	ナデ	搬入品
〃	176	〃	E35-24-22	東四 国系	〃	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい黄橙色 10YR6/4	2/極少	ナデ	ナデ	〃
〃	177	〃	F35-4-7	弥生	〃	-	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	黄灰色 2.5Y6/1	灰白色 5Y7/1	1/少	不明	不明	摩耗
〃	178	〃	E35-24-17	〃	鉢	9.2	3.6	2.0	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰黄色 2.5Y7/2	黒褐色 2.5Y3/1	5/少	叩き後 ナデ	ハケ	
〃	179	〃	E35-24-22	〃	〃	(10.2)	3.6	(5.2)	にぶい黄橙色 10YR7/2	にぶい黄橙色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	ナデ	ナデ	キレット
〃	180	〃	〃	〃	〃	9.6	3.5	3.8	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	-	4/少	手づくね	手づくね	黒斑/やや 歪む
〃	181	〃	〃	〃	〃	(13.8)	6.3	3.8	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄橙色 10YR8/3	黄灰色 2.5Y6/1	3/ やや多	叩き後 ナデ	ハケ	黒斑
〃	182	SD18/ 検出面	〃	〃	〃	(10.4)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰色 5Y4/1	3/少	ナデ	ナデ・ ハケ	〃
〃	183	SD18	〃	〃	〃	14.1	5.4	-	浅黄褐色 7.5YR8/4	浅黄褐色 10YR8/3	-	4/少	ナデ	ナデ・ ハケ	キレット 摩耗
〃	184	〃	F35-4-2	〃	〃	(14.9)	-	(3.8)	灰黄褐色 10YR6/2	にぶい橙色 5YR6/4	灰色 5Y5/1	5/ やや多	ナデ	ナデ・ ハケ	被熱/摩耗
〃	185	〃	F35-4-7	〃	〃	(15.0)	7.3	-	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	3/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	186	〃	〃	〃	高杯	(21.8)	-	-	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	褐灰色 7.5YR5/1	3/ やや多	ハケ	不明	被熱/摩耗
〃	187	〃	F35-4-12 No.6	〃	〃	(19.8)	-	-	灰黄色 2.5Y6/2	灰黄色 2.5Y6/2	黄灰色 2.5Y5/1	5/多	ナデ・ ハケ	ハケ	摩耗
〃	188	〃	F35-4-7	〃	〃	-	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	3/少	ハケ	ナデ・ ハケ	
〃	189	〃	〃	〃	〃	(29.7)	-	-	褐灰色 7.5YR5/1	浅黄褐色 7.5YR8/4	褐灰色 7.5YR4/1	3/少	ハケ	ハケ・ ナデ	穿孔
〃	190	〃	〃	〃	〃	-	-	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR7/6	褐灰色 5YR4/1	5/ やや多	不明	不明	〃
〃	191	〃	〃	〃	〃	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	褐灰色 10YR4/1	4/ やや多	不明	不明	穿孔/摩耗
〃	192	〃	E35-24-22	〃	〃	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	褐灰色 10YR4/1	4/ やや多	不明	不明	〃

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図37	193	SD18	-	弥生	支脚	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y6/1	灰色 N4/0	4/ やや多	叩き後 ナデ	ハケ・ ナデ	スス
〃	194	〃	F35-4-2	〃	〃	-	-	(16.5)	にぶい黄橙色 10YR7/2	浅黄色 2.5Y7/3	灰色 10Y4/1	4/少	手づくね	手づくね	
〃	195	〃	E35-24-22	〃	〃	-	-	(7.0)	灰白色 5Y7/2	灰白色 5Y7/2	灰色 5Y4/1	4/少	手づくね	手づくね	被熱/スス
〃	196	〃	F35-4-7	ミニ	-	(4.2)	5.3	1.3	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/4	黄灰色 2.5Y7/2	2/少	手づくね	手づくね	
図39	199	SD19	F35-9-6	弥生	甕	(14.8)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	にぶい黄橙色 10YR7/2	黒褐色 10YR3/1	3/少	叩き	ナデ	スス/摩耗
〃	200	〃	F35-4-16・21	〃	〃	(14.4)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	黄灰色 2.5Y4/1	2/少	叩き	ハケ	
〃	201	〃	F35-4-21	〃	鉢	(21.4)	-	-	灰黄色 2.5Y6/2	浅黄色 2.5Y7/3	黄灰色 2.5Y4/1	3/ やや多	叩き	ミガキ	
図40	202	SD21	F35-4-2	〃	壺	(15.0)	-	-	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	3/少	不明	不明	摩耗
図41	203	SD22	F35-10-14	〃	〃	-	-	8.8	灰色 5Y4/1	浅黄色 2.5Y7/3	灰色 5Y4/1	4/少	ナデ	ナデ	〃
〃	204	〃	F35-5-24	〃	甕	-	-	6.3	明赤褐色 5YR5/6	赤褐色 5YR4/6	赤褐色 5YR4/6	5/少	ハケ	ハケ	スス
図44	206	SD24	F35-10-11	土師	杯	-	-	(8.0)	淡黄色 2.5Y8/4	淡黄色 2.5Y8/4	淡黄色 2.5Y8/4	5/極少	ロクロナ デ	ロクロナ デ	
〃	207	〃	F35-4-10	須恵	杯身	-	-	-	オリーブ黒色 5Y3/1	オリーブ黒色 5Y3/1	灰色 5Y6/1	精良	ヨコナデ	ヨコナデ	自然釉
〃	208	〃	F35-4-15	〃	脚部	-	-	(9.1)	灰色 N6/0	灰白色 N7/0	灰白色 N7/0	1/極少	ヨコナデ	ヨコナデ	
図45	212	SD25	F35-5-11	弥生	壺	(14.0)	-	-	橙色 5YR7/6	橙色 2.5YR6/6	黄灰色 2.5Y4/1	5/少	叩き	ナデ	摩耗
〃	213	〃	E35-24-19・20	〃	〃	(27.0)	-	-	橙色 5YR6/6	橙色 5YR7/6	灰色 N5/0	4/少	ナデ・ ハケ	ナデ・ ハケ	斜格子
〃	214	〃	F35-4-15	〃	複合	(13.8)	-	-	灰白色 2.5Y7/1	浅黄色 2.5Y7/3	灰色 5Y6/1	3/少	ナデ	ナデ・ ハケ	
〃	215	〃	F35-4-5No.7	〃	甕	(11.3)	18.5	-	浅黄橙色 10YR8/4	橙色 5YR7/6	黄灰色 2.5Y6/1	6/少	叩き後 ハケ	ナデ	スス
〃	216	〃	F35-4-5	〃	〃	(14.7)	23.4	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR6/3	褐灰色 10YR4/1	6/少	叩き後 ハケ	ナデ・ ハケ	〃
〃	217	〃	F35-4-10No.2	〃	〃	16.0	29.7	3.4	赤灰色 2.5YR5/1	橙色 7.5YR7/6	褐灰色 7.5YR4/1	3/少	叩き後 ハケ	ナデ・ ケズリ	黒斑
〃	218	〃	F35-4-5	〃	〃	(12.8)	-	-	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	3/少	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	219	〃	F35-4-15・ 最下層	〃	〃	(17.0)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	にぶい黄橙色 10YR6/3	灰色 5Y4/1	4/少	叩き後 ハケ	ナデ・ ハケ	スス
〃	220	〃	F35-4-10・ 最下層	〃	〃	(15.4)	-	-	橙色 5YR6/6	にぶい橙色 7.5YR6/4	黄灰色 2.5Y5/1	5/少	叩き後 ハケ	ハケ・ ナデ	スス/おこ げ
〃	221	〃	F35-4-10No.1	〃	〃	-	-	3.0	にぶい橙色 2.5YR6/3	淡赤橙色 2.5YR7/3	赤黒色 2.5YR2/1	8/ やや多	叩き後 ハケ	ナデ	被熱/スス
〃	222	〃	F35-4-5・ 最下層	〃	〃	(16.0)	-	-	橙色 7.5YR6/6	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	2/少	ナデ	ナデ	搬入品
〃	223	〃	F35-4-10・ 最下層	庄内	〃	(16.0)	-	-	褐灰色 10YR4/1	黒褐色 2.5Y3/1	にぶい黄色 2.5Y6/4	3/少・ 角/少	叩き・ ナデ	ケズリ・ ナデ	スス/搬入 品

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図46	224	SD25	E35-24-14・15	弥生	鉢	11.2	5.8	-	淡赤橙色 2.5YR7/4	浅黄橙色 7.5YR8/4	-	6/少	叩き後 ナデ	ハケ	
〃	225	〃	E35-24-15	〃	〃	10.3	5.8	-	橙色 5YR6/8	橙色 5YR7/8	橙色 7.5YR7/6	4/少	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	
〃	226	〃	F35-4-5	〃	〃	(14.0)	5.7	(5.0)	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	灰色 N4/0	4/少	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	227	〃	F35-4-10・ 最下層	〃	〃	14.9	6.4	3.5	橙色 5YR7/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	4/ やや多	叩き後 ナデ	ハケ	
〃	228	〃	F35-5-11・ 最下層	〃	〃	(12.1)	6.3	3.0	にぶい黄橙色 10YR7/4	灰黄色 2.5Y7/3	灰色 N4/0	3/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	229	〃	F35-4-10・ 最下層	〃	〃	(15.4)	8.8	3.2	にぶい黄橙色 10YR7/3	橙色 7.5YR6/6	黄灰色 2.5Y6/1	3/少	叩き後 ナデ	ハケ	
〃	230	〃	F35-4-15・ 最下層	〃	〃	(17.7)	9.0	(5.0)	橙色 2.5YR6/8	橙色 2.5YR6/8	橙色 2.5YR6/8	3/少	叩き	不明	摩耗
〃	231	〃	サブトレンチ	〃	〃	(9.8)	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	3/少	手づくね	手づくね	
〃	232	〃	F35-5-11・ 最下層	〃	〃	(9.2)	5.3	(3.6)	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	4/少	ナデ	ナデ	黒斑/摩耗
〃	233	〃	F35-4-5	〃	〃	(13.1)	6.3	-	浅黄橙色 10YR8/3	浅黄橙色 10YR8/3	-	5/ やや多	ナデ	ナデ	
〃	234	〃	F35-4-15	〃	高杯	(15.2)	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/3	褐灰色 10YR6/1	3/少	ナデ・ ハケ	ナデ	
〃	235	〃	F35-4-10	〃	〃	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい黄橙色 10YR6/4	黄灰色 2.5Y4/1	4/少	ナデ	ナデ	
〃	236	〃	F35-4-10・ 最下層	〃	〃	-	-	-	橙色 7.5YR7/6	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y6/1	2/少	ナデ	ナデ	
〃	237	〃	E35-24-25	〃	〃	-	-	-	灰白色 2.5Y8/2	灰白色 2.5Y8/2	暗灰色 N3/0	4/ やや多	ハケ	ナデ	
〃	238	〃	F35-4-10・ 最下層	〃	〃	-	-	(12.2)	明黄褐色 10YR7/6	明黄褐色 10YR7/6	明黄褐色 10YR7/6	3/少	ミガキ	ナデ・ ハケ	穿孔
〃	239	〃	E35-24-24・25	〃	脚部	-	-	(8.5)	明赤褐色 5YR5/8	明赤褐色 5YR5/8	明赤褐色 5YR5/8	5/少	ナデ	ナデ・ ハケ	摩耗
〃	240	〃	F35-5-11・ F35-5-16	〃	支脚	-	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	にぶい黄橙色 10YR7/3	暗灰色 N3/0	5/少	手づくね	手づくね	穿孔
〃	241	〃	F35-4-10・最下層 /F35-4-15・最下層	〃	〃	-	15.1	(8.4)	にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい黄橙色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y6/1	5/少	手づくね	手づくね	
〃	242	〃	F35-4-4・ E35-24-24	〃	〃	-	-	(9.6)	にぶい黄橙色 10YR7/4	灰黄褐色 10YR6/2	褐灰色 10YR6/1	3/少	手づくね	手づくね	スス
〃	243	〃	F35-4-15	〃	〃	-	-	(9.0)	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	暗灰色 N3/0	4/少	手づくね	手づくね	
〃	244	〃	E35-24-19・20/ E35-24-15・20	〃	〃	-	-	10.2	灰黄色 2.5Y6/2	灰黄色 2.5Y6/2	灰色 5Y6/1	4/少	手づくね	手づくね	被熱
〃	245	〃	F35-4-5	〃	〃	-	-	(10.4)	にぶい黄橙色 10YR7/2	灰黄色 2.5Y6/2	暗灰色 N3/0	3/少	手づくね	手づくね	スス
〃	246	〃	E35-24-24・25	〃	〃	-	-	(10.4)	浅黄褐色 10YR8/3	にぶい黄褐色 10YR7/4	暗灰色 N3/0	3/少	手づくね	手づくね	
〃	247	〃	F35-4-5	〃	〃	-	-	(10.2)	にぶい黄褐色 10YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰色 5Y4/1	6/少	手づくね	手づくね	
〃	248	〃	F35-4-15	〃	〃	-	-	(10.6)	灰黄褐色 10YR6/2	褐灰色 10YR6/1	褐灰色 10YR6/1	5/少	手づくね	手づくね	スス

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法 量			色 調			胎 土	調 整		特 徴
						口 径	器 高	底 径	内 面	外 面	断 面		外 面	内 面	
図46	249	SD25	F35-4-5	ミニ	-	-	-	(3.8)	にぶい黄橙色 10YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	灰色 5Y4/1	2/極少	手づくね	手づくね	
図49	254	SD26	F35-4-10	須恵	蓋	(15.0)	-	-	灰色 N4/0	灰白色 2.5GY8/1	灰白色 2.5GY8/1	1/極少	回転ナデ	回転ナデ	歪む/焼成 不良
〃	255	〃	F35-4-15・上層	〃	〃	-	-	-	灰白色 N7/0	灰色 N5/0	灰白色 N7/0	精良	ヨコナデ	ヨコナデ	
〃	256	〃	F35-5-16	〃	〃	-	-	-	灰白色 7.5Y7/1	灰白色 7.5Y7/1	灰白色 7.5Y7/1	精良	ナデ	ナデ	
〃	257	〃	F35-10-1	弥生	壺	(19.6)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	3/少	ナデ・ ハケ	ナデ	
〃	258	〃	F35-5-21・ 最下層	〃	〃	-	-	-	にぶい橙色 5YR7/4	橙色 5YR7/6	褐灰色 5YR6/1	3/少	ナデ	ナデ	波状
〃	259	〃	E35-24-15/ E35-24-20	〃	無頸 壺	(8.0)	-	-	黒褐色 7.5YR3/1	灰黄色 2.5Y7/2	黒褐色 7.5YR3/1	3/少	ナデか	ナデ	被熱
〃	260	〃	F35-4-5	庄内	甕	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR4/3	暗褐色 10YR3/3	にぶい黄褐色 10YR5/3	3/多・ 角/少	ナデ	ナデ	搬入品
〃	261	〃	F35-5-21・ 最下層	弥生	鉢	(17.4)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 7.5YR6/4	黒色 5Y2/1	5/ やや多	叩き	ナデ	
〃	262	〃	F35-10-11	〃	高杯	-	-	-	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	黄灰色 2.5Y4/1	5/少	ナデ	ナデ	
〃	263	〃	F35-9-5/ F35-10-1	〃	支脚	-	-	(8.6)	灰色 5Y4/1	浅黄色 2.5Y7/3	灰色 5Y4/1	4/少	手づくね	手づくね	被熱/スス
〃	264	〃	F35-10-1	〃	〃	-	-	(8.8)	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/3	褐灰色 7.5YR5/1	3/少	手づくね	手づくね	被熱
〃	265	〃	E35-24-14・E35-24-19/ E35-24-15・E35-24-20	〃	〃	-	-	(7.0)	灰白色 5Y7/1	灰白色 5Y7/1	灰色 5Y4/1	3/ やや多	叩き	ナデ	
図50	271	SD25・26	F35-5-16	〃	甕	-	-	-	浅黄褐色 10YR8/4	浅黄色 2.5Y7/3	灰色 N5/0	3/少	叩き	ナデ	スス
〃	272	〃	SD25・F35-4-5/ SD26・E35-24-25	〃	甕	(12.8)	12.5	2.8	灰黄色 2.5Y7/2	橙色 7.5YR7/6	灰色 N4/0	5/少	叩き	ナデ・ ハケ	被熱/スス
〃	273	〃	E35-24-24・25	〃	支脚	-	-	-	にぶい黄褐色 10YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y5/1	3/ やや多	手づくね	手づくね	被熱
図51	274	SD27	E35-24-25	〃	壺	-	-	-	灰白色 5Y7/2	灰白色 5Y7/2	灰白色 5Y7/2	2/少	ナデ	ナデ	刻目
図53	276	SD34	E35-24-4	〃	甕	(14.0)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	橙色 7.5YR7/6	黒褐色 7.5YR3/1	5/少	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	スス
〃	277	〃	〃	〃	底部	-	-	4.0	浅黄褐色 7.5YR8/4	にぶい褐色 7.5YR6/3	黒色 7.5YR2/1	3/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ	
〃	278	〃	〃	〃	鉢	(17.0)	-	-	にぶい赤褐色 5YR5/3	橙色 5YR7/6	褐灰色 5YR4/1	3/少	叩き・ ナデ	ナデ	摩耗
〃	279	〃	〃	〃	脚部	-	-	(9.0)	橙色 5YR7/6	橙色 5YR7/6	褐灰色 5YR4/1	3/極少	ナデ	ナデ	
図58	280	SX2	-	磁器	小碗	-	-	-	灰白色 7.5Y8/1	灰白色 10Y8/1	灰白色 5Y7/1	精良	ロクロ成 形	ロクロ成 形	圏線文・花 文
〃	281	〃	-	陶磁 器	蓋	-	-	-	灰白色 7.5Y8/1	灰白色7.5Y7/1 明青灰色10BG7/1	灰白色 7.5Y8/1	精良	ロクロ成 形	ロクロ成 形	
〃	282	〃	-	弥生	甕	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/3	オリーブ黒色 5Y3/1	3/少	叩き	ナデ	焼成前穿孔/ 孔径0.5cm
図59	283	SD33	-	〃	支脚	-	-	(5.6)	灰黄色 2.5Y7/2	にぶい褐色 5YR7/4	暗灰色 N3/0	3/ やや多	手づくね	手づくね	黒斑/被熱

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	器形	法量			色調			胎土	調整		特徴
						口径	器高	底径	内面	外面	断面		外面	内面	
図60	284	SX3	F35-4-16	弥生	甕	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/3	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	2/少	ナデ	ナデ	スス
〃	285	〃	〃	〃	底部	-	-	3.3	灰白色 2.5Y8/2	灰黄色 2.5Y7/2	オリーブ黒色 10Y3/1	4/少	叩き	ナデ	
〃	286	〃	〃	〃	甕	-	-	3.8	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/4	灰黄色 2.5Y6/2	3/少	叩き後 ナデ	ハケ	黒斑
〃	287	〃	〃	〃	鉢	(16.6)	-	-	灰白色 2.5Y8/2	浅黄橙色 10YR8/3	黄灰色 2.5Y4/1	3/少	ナデ	ハケ	
図61	289	P29	E35-22-10	〃	壺	-	-	-	明黄褐色 10YR6/6	明黄褐色 10YR6/6	灰色 5Y4/1	3/少	ナデ	ナデ	円形浮文/ 摩耗
〃	290	P30	E35-22-15	〃	甕	(14.2)	-	-	にぶい黄橙色 10YR6/4	にぶい黄橙色 10YR7/4	黄灰色 2.5Y4/1	4/ やや多	叩き後 ナデ	ナデ・ ハケ	スス
〃	291	P31	〃	〃	壺	(14.4)	-	-	にぶい黄褐色 10YR5/4	黄橙色 7.5YR7/8	暗灰色 N3/0	3/少	不明	不明	摩耗
図62	292	検出面	-	青磁	碗	-	-	(5.2)	灰オリーブ色 7.5Y5/2	灰白色 N7/0	灰白色 N7/0	精良	-	-	
〃	293	包含層	-	備前 焼	片口 鉢か	-	-	-	灰白色 7.5Y7/1	灰色 N4/0	にぶい赤色 7.5R4/4	精良	ナデ	ナデ	
〃	294	〃	-	緑釉 陶器	椀	-	-	-	灰白色 7.5Y7/1	浅黄色 5Y7/4	浅黄色 5Y7/4	精良	回転ナデ	回転ナデ	
〃	295	検出面	-	弥生	壺	(22.6)	-	-	灰黄色 2.5Y7/2	灰黄色 2.5Y7/2	灰色 5Y5/1	10/少	不明	不明	摩耗
〃	296	トレンチ	E35-22-15	〃	甕	(14.5)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	橙色 5YR6/6	にぶい橙色 7.5YR7/4	3/少	ナデ	ハケ	
〃	297	-	-	〃	鉢	(13.0)	-	-	にぶい橙色 7.5YR7/4	浅黄色 2.5Y7/3	にぶい橙色 7.5YR7/4	3/少	ナデ	ナデ	
〃	298	トレンチ	-	〃	支脚	-	-	-	にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR5/3	黄灰色 2.5Y4/1	8/ やや多	手づくね	手づくね	
〃	299	〃	-	〃	〃	-	-	-	-	にぶい黄橙色 10YR7/2	黄灰色 2.5Y6/1	3/少	手づくね	手づくね	

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	石材	法量				特徴
						全長	全幅	全厚	重量	
図9	6	ST1・2	E35-23-2・7 上面	叩石	砂岩	(8.8)	(7.6)	(3.2)	(331.5)	側面・中央部に敲打痕跡有り。
図10	10	ST3-P10	-	〃	〃	6.8	6.2	2.9	171.3	側縁・中央部に敲打痕跡有り。
図13	26	ST4	床直	砥石	〃	(30.2)	(15.4)	(4.1)	(2,832.1)	薄く剥離していくため、使用面はほとんど残存していない。
〃	27	〃	E35-23-25	台石	〃	30.7	28.0	14.2	17,400	赤色顔料, 付着。
図17	36	SD1	上層	打製石鏃	サマカイト	(1.5)	(1.4)	0.3	(0.4)	欠損。凹基式。側縁, 調整剥離。
〃	37	〃	E35-21-23・ 上層	〃	〃	(1.9)	(1.3)	0.4	(0.8)	欠損。平基式。側縁, 調整剥離。
〃	44	SD5	F35-1-12	〃	〃	(1.1)	1.5	0.3	(0.4)	〃
図25	146	SD2	F34-4-8・ 最下層	打製石包丁	頁岩	(7.5)	4.9	1.5	(55.0)	欠損。片刃。挟り有り。

挿 図 番 号	遺 物 番 号	出土遺構等	グリッド等	器 種	石 材	法 量				特 徴
						全長	全幅	全厚	重量	
図25	147	SD2	F34-4-13・上層	打製石包丁	砂岩	7.5	5.4	1.5	81.5	片刃。両端に挟り。自然面を残す。
〃	148	〃	-	〃	〃	8.4	4.9	1.1	63.4	〃
〃	149	〃	F34-4-5・最下層	〃	頁岩	9.4	5.6	1.2	79.7	〃
〃	150	〃	E35-16-23・中層	〃	砂岩	9.3	4.9	1.3	67.6	未成品か。
図26	151	〃	E35-16-23・最下層	〃	〃	12.6	8.2	2.3	311.0	片刃。自然面を残す。
〃	152	〃	-	叩石	〃	8.4	6.1	3.0	221.8	側縁・中央部に敲打痕跡有り。
〃	153	〃	E35-16-20	〃	〃	12.7	11.5	3.2	751.0	側縁・中央部に敲打痕跡有り。被熱/スス
図38	197	SD18	F35-4-7	打製石包丁	〃	8.4	4.5	1.6	76.2	片刃。両端に挟り。自然面を残す。
〃	198	〃	〃	叩石	〃	14.5	6.2	6.0	728.1	上下端に敲打痕跡有り。
図41	205	SD22	-	打製石包丁	〃	16.1	11.6	3.3	779.7	片刃。両端に挟り。自然面を残す。
図44	209	SD24	-	打製石鏃	サヌカイト	2.0	1.2	0.4	0.8	凹基式。側縁、調整剥離。
〃	210	〃	-	〃	〃	1.8	1.2	0.2	0.2	〃
〃	211	〃	E35-25-18	〃	赤色チャート	2.0	1.4	0.2	0.7	〃
図46	250	SD25	F35-4-5・最下層	磨製石包丁	粘板岩	(4.5)	(4.9)	0.8	(27.3)	片刃。両面から穿孔。
図47	251	〃	F35-4-10・最下層	叩石	砂岩	13.7	7.0	4.0	503.7	側縁・中央部に敲打痕跡有り。
〃	252	〃	F35-5-16・最下層	〃	〃	15.1	9.9	4.2	902.8	〃
図48	253	〃	F35-4-5・最下層	台石	〃	32.7	21.5	8.7	8,000	敲打による凹み有り。
図49	266	SD26	F35-4-20・F35-5-16	打製石包丁	〃	7.8	5.6	2.3	105.4	片刃。両端に挟り。
〃	267	〃	E35-24-24・25	叩石	〃	9.3	6.5	2.5	222.3	側縁に敲打痕跡有り。
〃	268	〃	E35-24-19・20	〃	〃	9.7	7.8	3.0	354.8	〃
〃	269	〃	F35-10-6	砥石	〃	9.5	4.6	4.3	(224.6)	欠損。
〃	270	〃	-	叩石	〃	10.7	7.1	2.9	(380.5)	欠損。側縁・中央部に敲打痕跡有り。
図52	275	SD28	F35-5-22	打製石鏃	サヌカイト	(2.1)	1.0	0.3	(0.8)	側縁、調整剥離。
図60	288	SX3	F35-4-16	台石	砂岩	29.5	36.0	9.5	12,000	敲打痕跡有り。
図62	300	トレンチ	E35-16-14	扁平片刃石斧	蛇紋岩	(3.8)	4.7	1.0	(37.2)	欠損。片刃。一側面、やや膨らむ。

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	石材	法量				特徴
						全長	全幅	全厚	重量	
図62	301	包含層	F35-9-4	打製石鏃	サヌカイト	1.3	1.4	0.4	0.7	側縁、調整剥離。
〃	302	表採	-	打製石包丁	砂岩	7.0	8.1	2.3	151.2	片刃。両端に抉り。自然面を残す。
〃	303	〃	-	叩石	〃	9.9	7.1	2.4	253.3	側縁・中央部に敲打痕跡有り。
〃	304	包含層	E35-16-19	〃	〃	8.3	6.7	2.1	174.2	側縁に敲打痕跡有り。

挿図 番号	遺物 番号	出土遺構等	グリッド等	器種	材質	法量				特徴
						全長	全幅	全厚	重量	
図13	28	ST4	E35-23-25	鈍	鉄	2.8	1.4	0.3	(2.2)	欠損。
図27	154	SD2	最下層	鉄鏃	〃	4.5	1.3	0.3	(4.2)	〃
図62	305	検出面	-	煙管	青銅	8.0	0.9	吸口径 0.7	10.3	
〃	306	〃	-	〃	〃	(5.0)	(1.0)	-	(4.5)	欠損。

写 真 图 版



空中写真 西方向から



空中写真 北方向から

図版 2



調査前風景



I A区東 完掘状況



I A区西 完掘状況



I C区 完掘状況

図版 4



II A区 完掘状況



II B区 完掘状況



Ⅱ C 区 完掘状況



Ⅱ E 区 完掘状況

图版 6



I A区西 北壁



II C区 東壁



II G①区 西壁



II G③区 北壁

图版 8



II E区 ST1・2完掘状況



II E区 ST1_中央P1・ST1_P22断面



II E区 ST1_中央P2断面



II E区 ST2_中央P1断面



II E区 ST2_中央P1炭化物検出



II E 区 ST1_SD1 断面



II E 区 ST1_SD2 · ST2_SD6 断面



II E 区 ST1_SD3 断面



II E 区 ST1_SD5 断面



II E 区 ST2_SD1 断面



II E 区 ST2_SD3 断面



II E 区 ST2_SD4 断面



II E 区 ST2_SD5 断面



II E 区 ST3 完掘状况



II F 区 ST3 東西断面



II E 区 ST3 東西断面



II E 区 ST3_P1·3 断面



II E 区 ST3_P5 断面



Ⅱ D区 ST4完掘状况



Ⅱ D区 ST4炭化材出土状况



II D区 ST4炭化材出土状况



II D区 ST4炭化材出土状况



II D区 ST4炭化材出土状况



II D区 ST4炭化材出土状况



II D区 ST4炭化材出土状况



II D区 ST4炭化材出土状況



II D区 ST4炭化材出土状況



II D区 ST4炭化材出土状況



II D区 ST4_P4炭化物検出



II D区 ST4断面



II D区 ST4断面



II D区 ST4断面



II D区 ST4断面

图版 14



II D区 ST4_中央P1断面



II D区 ST4_中央P2断面



II D区 ST4_中央P1 遺物出土狀況



II D区 ST4_SD3断面



II F区 SK9 遺物出土狀況



I A区 SD1・4～6バンク (E35-21-13)



I A区 SD1・4～6バンク (F35-1-3他)

図版 16



I A区 SD2バンク1断面 (E34-25-10)



I A区 SD2バンク2断面 (E35-21-1)



I B区 SD2完掘状況



I A区 SD2遺物出土状況



I A·B 区間 SD2 遺物出土狀況



I A 区 SD2 遺物出土狀況



I B 区 SD2 遺物出土狀況



I A 区 SD2 遺物出土狀況



I A 区 SD3 断面 (E35-16-11)



I B 区 SD3 断面 (E34-20-6)



I C 区 SD3 断面 (E34-18-10)



I C 区 SD3 断面 (E34-19-1)



I C区 SD3・7断面 (E34-23-10)



I C区 SD7断面 (E34-14-22)



I C区 SD7完掘状況



I C区 SD9完掘状況



II D区 SD16遺物出土状況



II D区 SD16断面 (E35-23-10)



II D区 SD16断面 (E35-23-9)



II D区 SD17断面 (F35-8-4)



II C区 SD18 遺物出土狀況 (F35-4-12)



II C区 SD18·21 断面 (E35-24-22)



II C区 SD18·21 断面 (E35-24-22)



II C区 SD19 断面 (F35-4-21)



II C区 SD20 断面 (F35-4-17)



II B 区 SD22 完掘状况



II A 区 SD22 完掘状况 (F35-10-9)



II A 区 SD22 断面 (F35-10-9)



II B 区 SD22 断面 (E35-25-20)



II A 区 SD22 遺物出土状况



II B・C区間 SD24～26 (E35-24-19・E35-24-20)



II B区 SD25・26完掘状況



Ⅱ B・C区間 SD25 遺物出土状況



Ⅱ B・C区間 SD25・26 完掘状況

图版 24



II B区 SD27 完掘状况



II B区 SD27 断面 (F35-4-5)



II B区 SD28 完掘状况



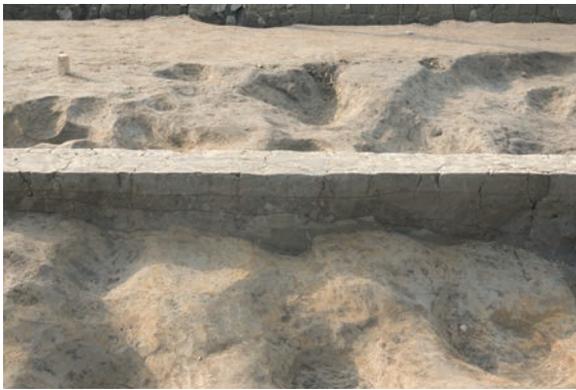
II B区 SD28 断面 (F35-5-1)



II B区 SX2 完掘状况



II B区 SX2完掘状况



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II B区 SX2断面 (E35-25-16)



II G①区 SD32断面 (E35-25-14)



II E区 P29~31



II E区 P31 遺物出土狀況



II F区 P35完掘狀況



II F区 P35断面







图版 30





图版 32





图版 34





图版 36





图版 38



252



255

256



266



266



267



267



268



269



270



270



图版 40

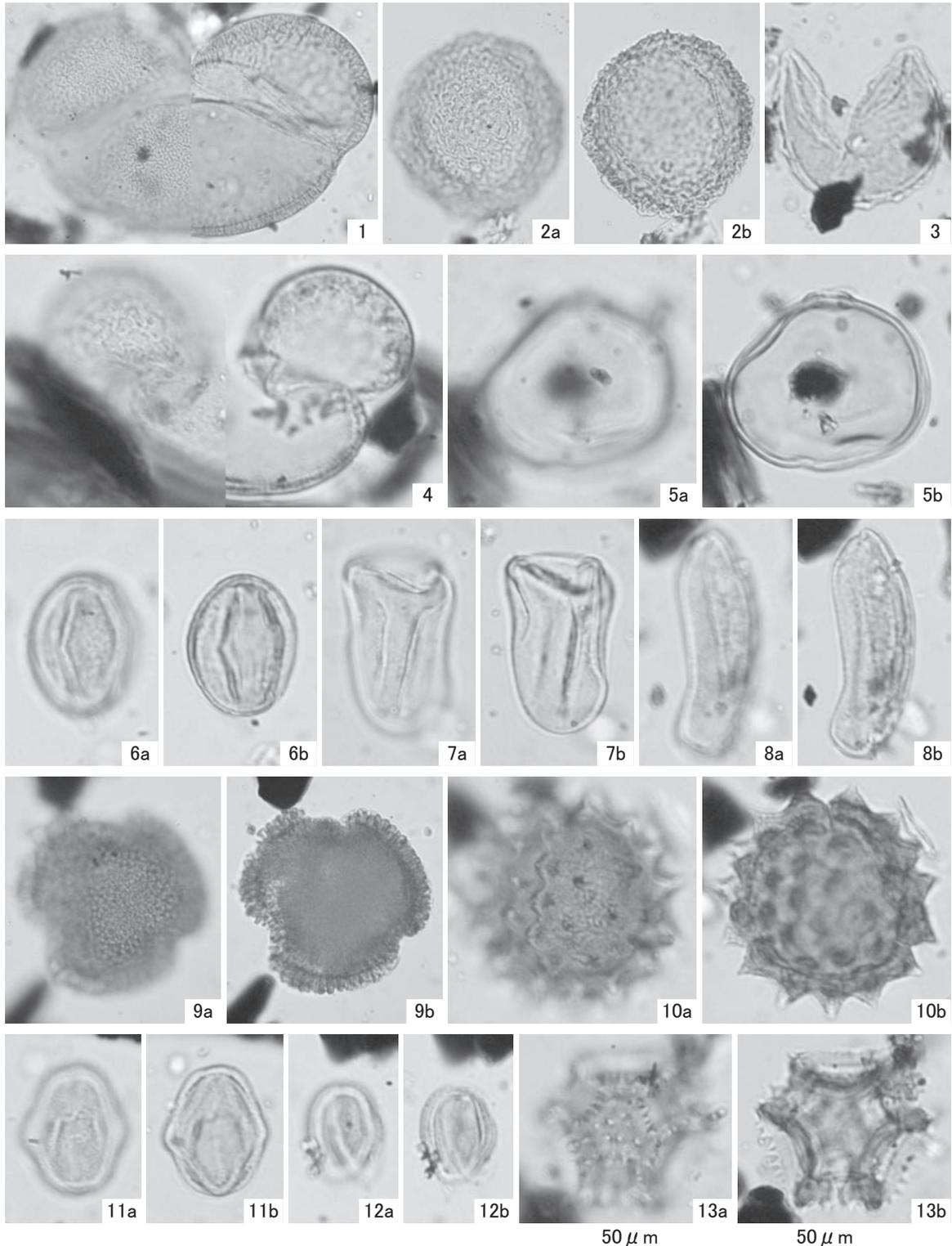


庄内式土器集合



打製石鏃集合

花粉化石

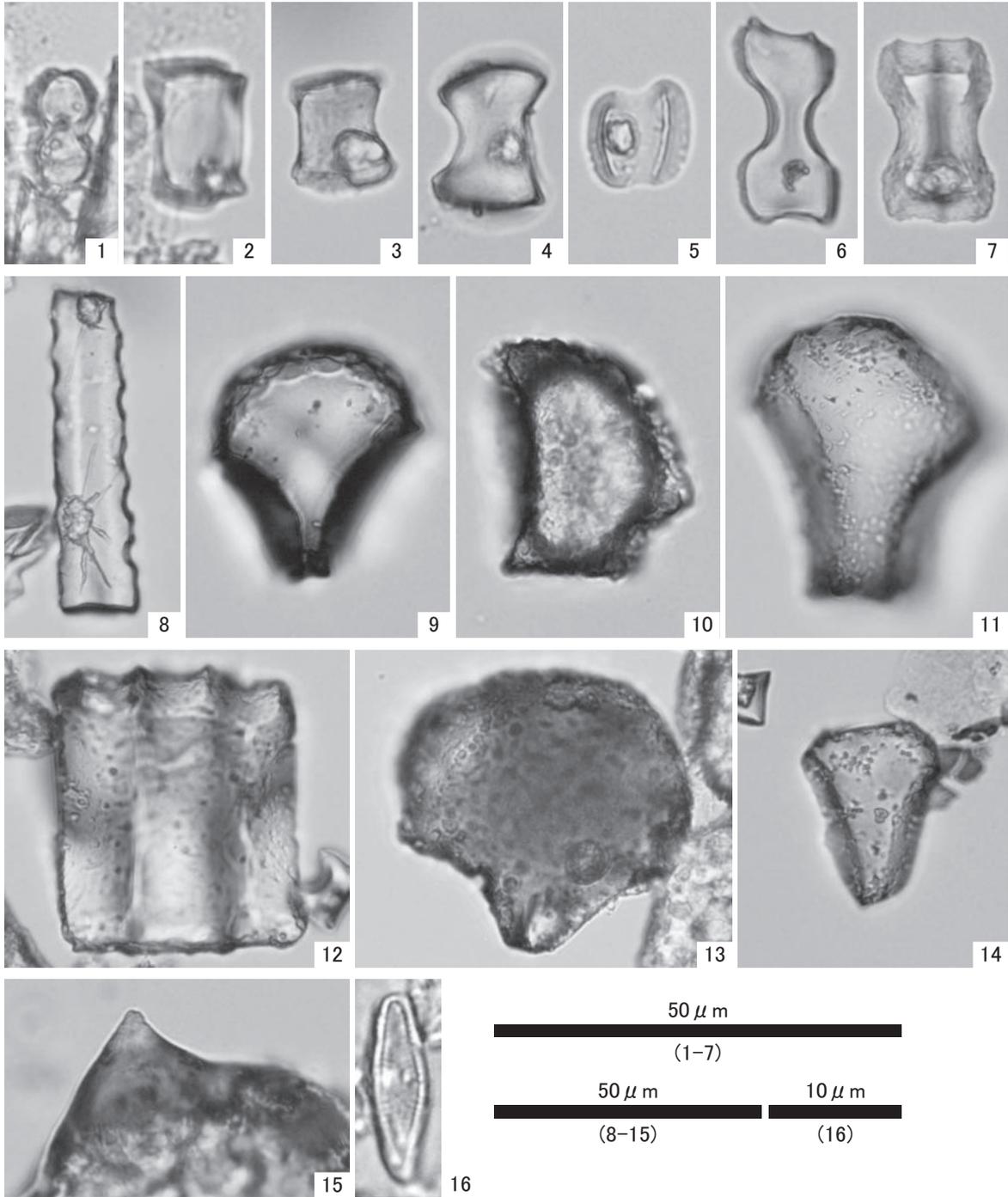


- | | | |
|---------------------|--------------------|------------------------|
| 1 : モミ属(SD26;3) | 2 : ツガ属(SD26;1) | 3 : スギ属(SD26;2) |
| 4 : マツ属(SD26;1) | 5 : イネ科(SD26;2) | 6 : コナラ属アカガン亜属(SD26;1) |
| 7 : カヤツリグサ科(SD26;1) | 8 : ミズアオイ属(SD26;3) | 9 : フウソウ属(SD26;4) |
| 10 : キク亜科(SD26;2) | 11 : セリ科(SD26;2) | 12 : ヨモギ属(SD26;4) |
| 13 : タンポポ科(SD26;2) | | |

(1,2,9)

(3-8,10-13)

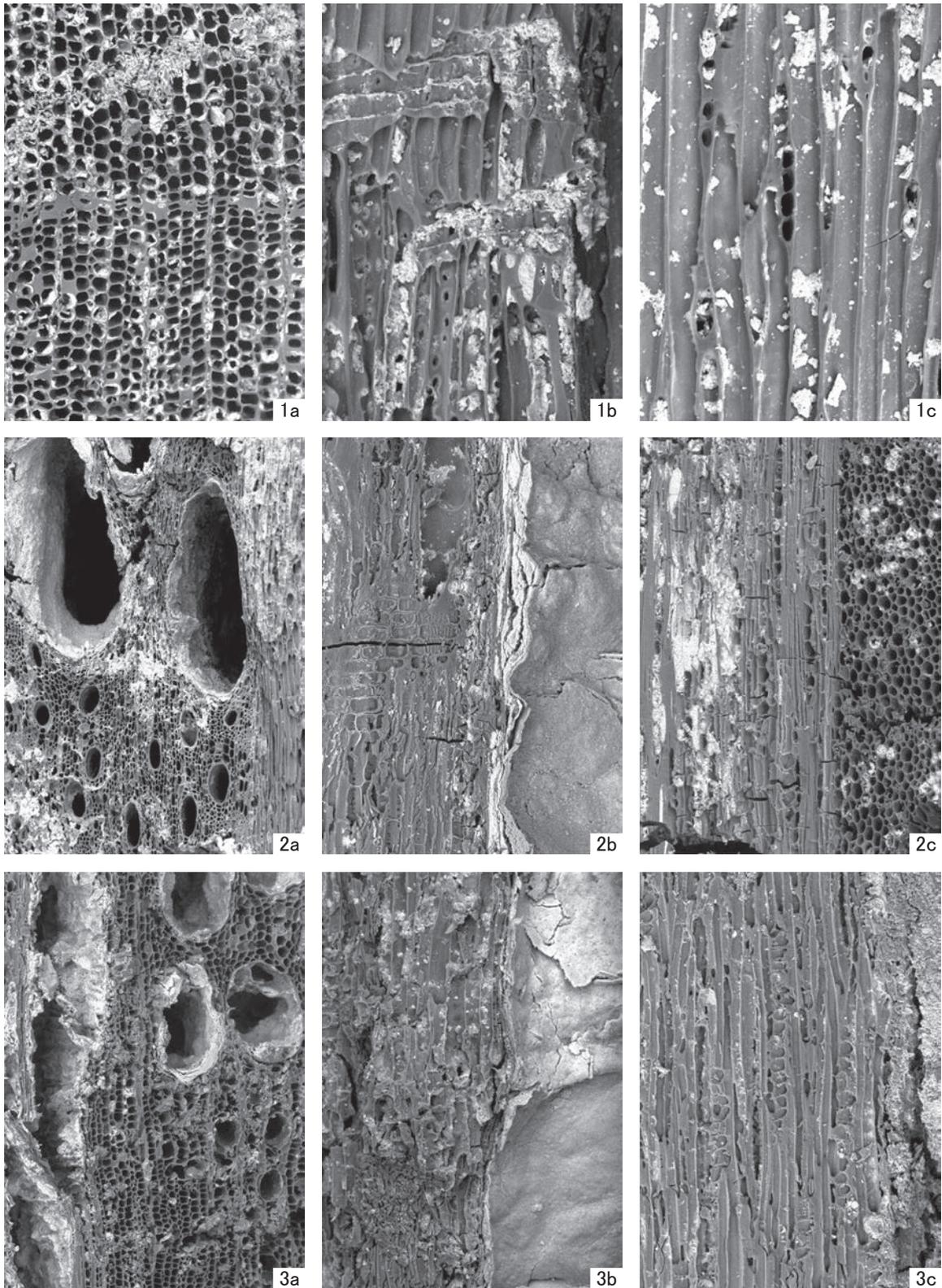
植物珪酸体・珪藻化石



- 1 : イネ属短細胞珪酸体(SD2;3)
- 2 : クマザサ属短細胞珪酸体(SD2;3)
- 3 : メダケ節短細胞珪酸体(SD26;2)
- 4 : ネザサ節短細胞珪酸体(SD26;2)
- 5 : ヨシ属短細胞珪酸体(SD2;3)
- 6 : ススキ属短細胞珪酸体(SD2;1)
- 7 : コブナグサ属短細胞珪酸体(SD2;1)
- 8 : イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(SD26;2)
- 9 : イネ属機動細胞珪酸体(SD2;2)
- 10 : クマザサ属機動細胞珪酸体(SD2;1)
- 11 : メダケ節機動細胞珪酸体(SD26;2)
- 12 : ネザサ節機動細胞珪酸体(SD26;2)
- 13 : ヨシ属機動細胞珪酸体(SD2;3)
- 14 : ウシクサ族機動細胞珪酸体(SD2;1)
- 15 : イネ属穎珪酸体(SD26;2)

- 2 : クマザサ属短細胞珪酸体(SD2;3)
- 4 : ネザサ節短細胞珪酸体(SD26;2)
- 6 : ススキ属短細胞珪酸体(SD2;1)
- 8 : イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(SD26;2)
- 10 : クマザサ属機動細胞珪酸体(SD2;1)
- 12 : ネザサ節機動細胞珪酸体(SD26;2)
- 14 : ウシクサ族機動細胞珪酸体(SD2;1)
- 16 : *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(SD2;2)

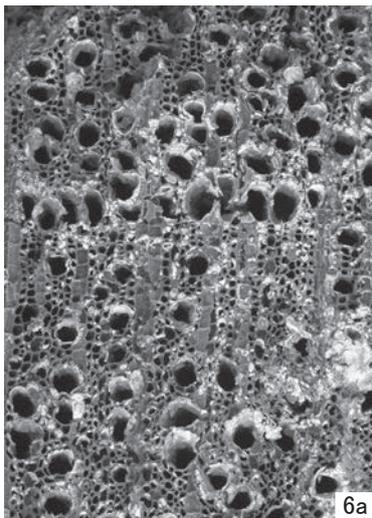
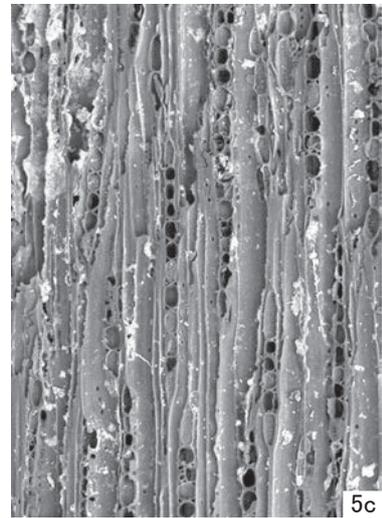
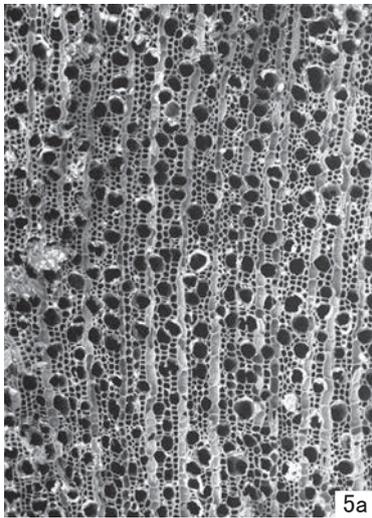
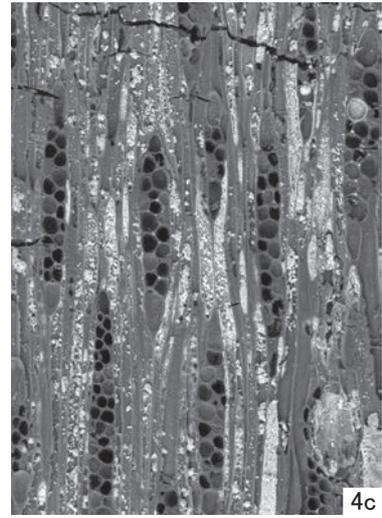
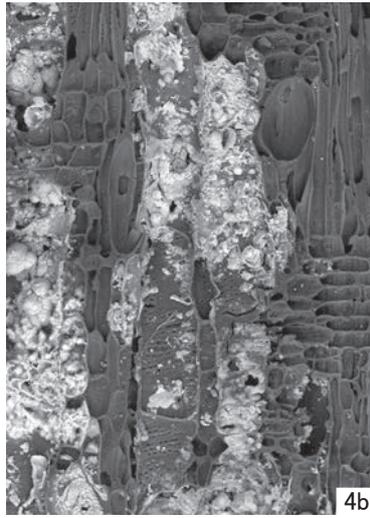
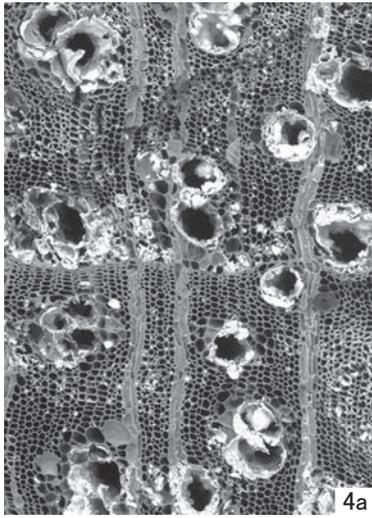
炭化材(1)



1: ヒノキ科またはマキ属(ST4;5)
 2: コナラ属コナラ亜属クヌギ節(ST4;9)
 3: ツブラジイ(ST4;12)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: 2a-3a
 200 μ m: 1a, 2b, c-3b, c
 100 μ m: 1b, c

炭化材(2)



4:クスノキ科(ST4;11)

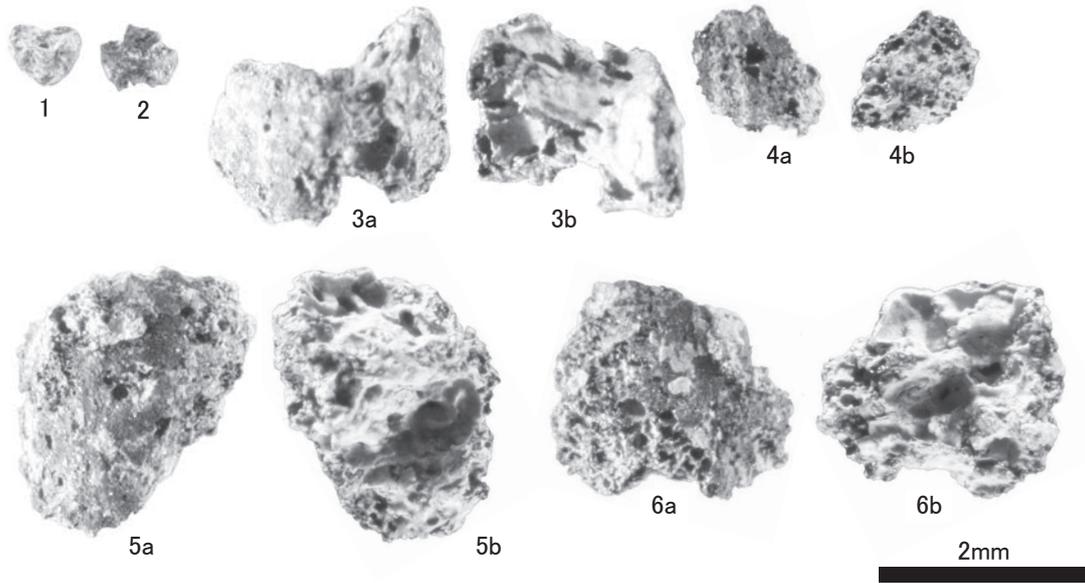
5:サカキ(ST4;5)

6:モチノキ属(ST4;1)

a:木口, b:柁目, c:板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

種実遺体



- 1 : イネ 穎(基部)(ⅡD区;ST4_中央P1)
- 2 : イネ 穎(基部)(ⅡE区;ST2_中央P1)
- 3 : イネ 胚乳(ⅡD区;ST4_中央P1)
- 4 : イネ 胚乳(ⅡD区;ST4_中央P1)
- 5 : イネ 胚乳(ⅡE区;ST1_中央P2)
- 6 : イネ 胚乳(ⅡE区;ST1_中央P2)

田村西遺跡出土ヒビノキ式土器の胎土観察写真

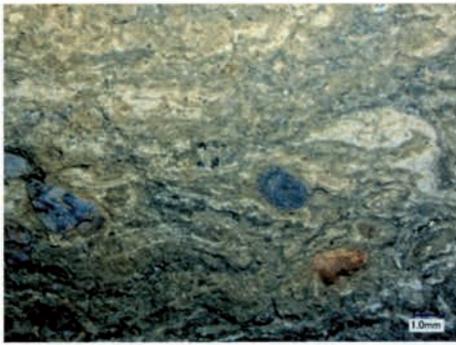


写真1. 試料番号8



写真2. 試料番号25

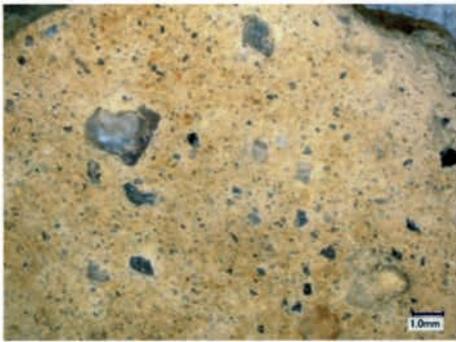


写真3. 試料番号33

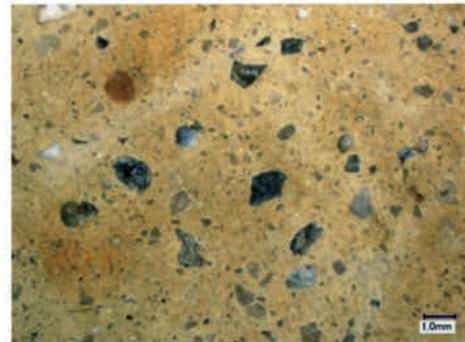


写真4. 試料番号34



写真5. 試料番号19

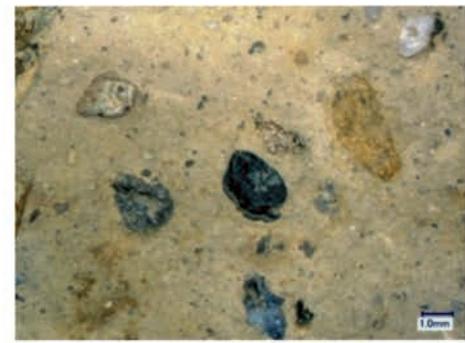


写真6. 試料番号22



写真7. 試料番号26



写真8. 試料番号100

報告書抄録

ふりがな	たむらにしいせき							
書名	田村西遺跡							
副書名	高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書V							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第135集							
編著者名	久家隆芳, 白石純, パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2013年3月12日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらにしいせき 田村西遺跡	〒783-0005 高知県 南国市 おおぞねおつ 大埔乙	39204	040241	33° 33' 32"	133° 39' 23"	2010.5.26) 2011.1.28	8,700㎡	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田村西遺跡	集落跡	弥生時代 古 中 近	竪穴建物跡 6軒 土坑 6基 溝跡 32条 性格不明遺構 5基 ピット・柱穴 73基	弥生土器 石器 鉄器 土師器 須恵器 緑釉陶器 陶磁器	弥生時代, 古代, 中世, 近世の遺構・遺物を検出した。			
要約	弥生時代中期中葉, 弥生時代中期末～後期初頭, 弥生時代後期末～古墳時代初頭, 古代～中世, 近世の遺構・遺物を検出した。弥生時代中期中葉では土坑を1基, 弥生時代中期末～後期初頭では溝跡1条を検出した。弥生時代後期末～古墳時代初頭では竪穴建物跡を6軒, 溝跡等を検出し, 田村遺跡群に後続する集落跡であることが明らかとなった。竪穴建物跡の平面形は多角形, 隅丸方形である。溝跡から庄内式土器や, 弥生土器が出土した。古代～中世にかけては, 香長条理と同じ方向であり, また, 長岡郡と香美郡の郡境から約1町の位置にあり, 条理地割と関連が深い溝跡である。詳細な時期は不明であるが, 波板状遺構(SX2)を検出した。							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第135集

田村西遺跡

高知南国道路建設工事に伴う発掘調査報告書V

(高知東部自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書X)

2013年3月12日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社



付図 田村西遺跡遺構平面図 (S=1/300)